

- 1 ツクツクボウシがないている 2004. 08. 12
- 2 偶然行き着くブログがある 2004. 08. 13
- 3 読書系 巻頭言 2004. 08. 29
- 4 銀マド>立冬の過ぎて木枯らし待つばかり 【立冬篇】 2004. 11. 11
- 5 銀マド>時雨の冬近く…か (小雪篇) 2004. 11. 22
- 6 侘助 2004. 11. 26
- 7 初冬の風 2004. 12. 08
- 8 銀マド>3年目の冬 年末篇 2004. 12. 16
- 9 銀マド 冬至篇 2004. 12. 22
- 10 御用始 2005. 01. 04
- 11 銀マド>小寒号 小寒の星も夜空で震えたり 2005. 01. 05
- 12 塵埃秘帖・大寒号 メジロ 2005. 01. 22
- 13 サクラサク@早稲田 [銀マド・節分号] 2005. 02. 03
- 14 銀のマドラー／塵埃秘帖 立春篇 2005. 02. 06
- 15 銀マド>もうひとりの私 <雨水篇> 2005. 02. 18
- 16 銀マド>空を見上げる [穀雨篇] 2005. 04. 20
- 17 父の形見 2005. 05. 11
- 18 空を見上げる 2005. 05. 18
- 19 空を見上げる(2) 2005. 05. 26
- 20 銀マド>焦る 2005. 06. 01
- 21 銀マド>黄色い麦わら帽子 2005. 06. 26
- 22 こっそりと見上げるひとりの一夜かな 2005. 07. 12
- 23 みちのくに別れ告げるや月見草 2005. 07. 21
- 24 ある夏の土曜の午後 2005. 07. 31
- 25 ひとりでに、消えるように 2005. 08. 08
- 26 あらし去り白露がきゅんとすまし顔 2005. 09. 07
- 27 コーヒーをホットにかえる寒露かな 2005. 10. 09
- 28 空が悲しい<霜降篇> 2005. 10. 22
- 29 真如堂のこと 2005. 10. 29
- 30 むけがら…(続・JR飯田線) 2005. 11. 18
- 31 誰が・誰を・襲うのか 2005. 12. 26
- 32 年の初めに考える一痛み(2)― 2006. 01. 01
- 33 脳内出血 2006. 01. 07
- 34 枯野 2006. 01. 21
- 35 こうなご 2006. 02. 01
- 36 春に想う ― 塵埃秘帖 彼岸篇 2006. 03. 19
- 37 水ぬるむ春分に ― 塵埃秘帖 春分篇 2006. 03. 21
- 38 漂う 2006. 04. 08
- 39 泣き言を聞いて叶わぬ春の雨 2006. 04. 13
- 40 連休余話 2006. 05. 03
- 41 前年・同月、、、 (子どもの日篇) 2006. 05. 06
- 42 近づくところ 2006. 05. 17
- 43 ブックバンド 2006. 05. 20
- 44 1974年の5月31日のこと 2006. 05. 31
- 45 澆刺と雑草伸びろや梅雨の入り 2006. 06. 11
- 46 やがては消えゆくため息を残す 2006. 07. 02
- 47 疲れる・棄てる・減びる 2006. 08. 05
- 48 サンマ 2006. 08. 23
- 49 秋味にサンマを添える 2006. 09. 02
- 50 晩秋に思う 2006. 10. 08
- 51 一度だけ本当の 2006. 10. 30
- 52 立冬に思う 2006. 11. 07
- 53 サンタのブーツ 2006. 11. 15
- 54 山あれば山を観る/雨の日は雨を聴く [山頭火] 2006. 11. 19
- 55 西本智実さんのこと 2006. 11. 25
- 56 楽しく、面白く。損しなくて、人に嫌われない 2007. 01. 24
- 57 「寒」 2007. 01. 31

58 逃れる 2007. 02. 04  
59 ひなまつり 2007. 03. 03  
60 果たして昔からこんなに重かったのだろうか 2007. 03. 03  
61 折々のうた 最終回 2007. 03. 31  
62 夢を追い幸せを食べる虫 2007. 04. 11  
63 痛み 5月中旬号 2007. 05. 15  
64 月のはじめにゴミを出す(血液型、好き嫌い) 2007. 06. 03  
65 やがて消えてゆくもの 2007. 06. 06  
66 目指すところ 2007. 07. 01  
67 アジサイ 2007. 07. 04  
68 違い、から考える 2007. 08. 06  
69 秋味 2007. 08. 27  
70 秋を楽しむ 2007. 09. 02  
71 枯れ落ちる 2007. 10. 01  
72 木枯らしの一日吹いておりにけり 2007. 11. 19  
73 「森嘉」の豆腐 2007. 11. 25  
74 味わう ―「森嘉」の豆腐 続編― 2007. 11. 30  
75 振り返る 2007. 12. 02  
76 温いと温い 2007. 12. 05  
77 ひとり旅 . . . . を続けよう 2007. 12. 08  
78 忘れる 2007. 12. 18  
79 ぼたん雪きらりと光る指きった 2008. 02. 06  
80 父の匂い 2008. 02. 14  
81 ジンクスが風上へ誘う沈丁花 2008. 03. 07  
82 ゆびきりの指が落ちて春の空 坪内稔典 2008. 03. 09  
83 レジ袋考 2008. 03. 16  
84 ヘビイチゴ 2008. 05. 10  
85 やまぶき 2008. 05. 18  
86 やまぶき その2 2008. 05. 20  
87 ホトトギス 2008. 05. 28  
88 さよならと梅雨の車窓に指で書く 長谷川素逝 2008. 06. 03  
89 苦い思い出 2008. 06. 28  
90 夏。黄色い花 2008. 07. 04  
91 休日の朝に茄子を和えて食う 2008. 07. 11  
92 マツタケの話 2008. 09. 17  
93 続・マツタケの話 2008. 09. 21  
94 秋の蚊よやがて甘みが夢になり 2008. 09. 22  
95 手紙 から 2008. 10. 07  
96 巻き戻す 2008. 10. 10  
97 絡む、絡まる、纏れる、纏う 2008. 10. 18  
98 秋深き隣は何をする人ぞ 2008. 11. 08  
99 ケータイはいらないみたい、私たち 2008. 11. 29  
100 葱買うて枯木の中を帰りけり 蕪村 2008. 12. 07  
101 局所的に最大利益を求めることをしても、決して全体の利益にならない  
2008. 12. 08  
102 年末恒例：ゴミは早めに (ぼやき節) 2008. 12. 13  
103 蒟蒻を落して跼む年の市 飴山實 2008. 12. 30  
104 百年後だって、人間はきっと変わらない 2009. 01. 03  
105 さようなら、雪が来ると空をみる [塵埃秘帖篇] 2009. 01. 21  
106 3月14日 啓蟄から春分まで 2009. 03. 14  
107 訳あって、いや訳もなく一人飲む 2009. 04. 21  
108 足踏み 2009. 04. 28  
109 長靴履いて、水溜りに足をずっと入れてみる 2009. 05. 05  
110 伝言 2009. 05. 05  
111 雨降りを恨む素振りで傘の下 2009. 05. 16  
112 好きだよと言えずに開く裏表紙 2009. 05. 19  
113 卯の花の満ちたり月は二十日頃 絵森月居 2009. 06. 17  
114 井戸水で冷麺を洗って考える 2009. 07. 09



115 読書部 解散! @mixi 2009. 07. 09  
116 読書部 解散! (その2) 2009. 07. 09  
117 読書部 解散! (その3) 2009. 07. 09  
118 秋味やうたかたの苦味ひかえめ 2009. 08. 26  
119 ノラや と 草の花 2009. 10. 18  
120 GREEの変化 ―デザインが変わるそう 2009. 10. 27  
121 GREEの変化 その2 ―人々 2009. 10. 27  
122 円楽さん、逝く 2009. 10. 31  
123 耳を傾ける 2009. 10. 31  
124 絞る縄、縋うという言葉のゆくところ 2009. 11. 08  
125 師走の始まりに考える 2009. 12. 01  
126 逝く人 2009. 12. 06  
127 坂の上の雲 (司馬遼太郎) 2009. 12. 20  
128 静かさや泣いて笑って大晦日 2009. 12. 31  
129 どん底から 2010. 01. 01  
130 ニセモノのなかを歩んでゆく 2010. 01. 03  
131 挨拶を果たす 2010. 01. 06  
132 起立をして礼をする 2010. 01. 09  
133 ブルーブラックの… 2010. 01. 20  
134 着々と四月の別れの支度する 2010. 02. 07  
135 ひこうき雲、春夕焼けが包み込む 2010. 02. 21  
136 卒業の旅行で留守のひな祭り 2010. 03. 03  
137 ほんとうはあなたが好きです、メロンパン 2010. 03. 06  
138 悔む 2010. 03. 28  
139 動かす 2010. 04. 09  
140 苛立ちも今なら許せる穀雨かな 2010. 04. 21  
141 私の四月の物語 2010. 04. 28  
142 6月号 祝・梅雨入り 2010. 06. 17  
143 陽がさしてきた 2010. 07. 04  
144 塵埃秘帖(二十世紀篇) 2010. 07. 14  
145 塵埃秘帖2nd 2010. 07. 16  
146 やがてすべては遺言に 2010. 07. 16  
147 廊下 2010. 07. 19  
148 きょうの夕焼け悲しいほどに綺麗で 2010. 07. 21  
149 白露も過ぎて 2010. 09. 10  
150 信頼というもの 2010. 09. 13  
151 信頼というもの その2 2010. 09. 14  
152 美性を失う 2010. 09. 14  
153 飛行機雲 2010. 09. 15  
154 音楽篇 (1)–(6) 2010. 09. 15  
155 2005年 夏 日記系 2010. 09. 15  
156 東北 2010. 09. 15  
157 銀マド(日記系セレクションから) 2006年 下旬日記篇 2010. 09. 15  
158 信頼というもの を考える 2010. 09. 17  
159 私を導く舟 2010. 09. 22  
160 古い手紙の下書きから 2010. 09. 23  
161 過去は大事なんやで 2010. 10. 09  
162 またまた、にっこりな話 2010. 10. 20  
163 心に旗をたてる 2010. 11. 27  
164 背中合わせ 2010. 12. 14  
165 言葉の断片から 2010. 12. 18  
166 飛鳥 ― を歩きながら考える 2010. 12. 20  
167 断捨離 2010. 12. 25  
168 斧入れて香におどろくや冬木立 (蕪村) 2010. 12. 25  
169 年の終わりに考える 2010. 12. 26  
170 春先はもぞもぞする。 2011. 02. 12  
171 生存証明という日記があった 2011. 02. 16  
172 ゼロに近づく。 2011. 02. 26

173 有事斬然 無事澄然 失意泰然 2011.03.20  
174 地球と人類が交わした約束 2011.04.13  
175 負けたの、悔しいけど 2011.04.15  
176 怒りを発する 2011.04.16  
177 長い歴史 2011.04.17  
178 将来を考えるととき…… 2011.05.21  
179 愉しむ 2011.06.12  
180 お前ら、近くに住んでみろ！ 2011.06.20  
181 赤い花アナタの心に突き刺して — 九月彼岸篇 2011.09.25  
182 月丸く、さらに木星へと近く 2011.10.15  
183 叶わぬもの その2 2011.10.29  
184 赤、鮮やかに、慎ましく 2011.11.04  
185 足元に霜柱あり容赦なく踏む 2011.11.23  
186 遠慮がちに 2011.11.27  
187 引き戻るところ 2011.11.30  
188 去年の今ごろ 2011.12.10  
189 ごみ—最近の言葉メモから 2011.12.31  
190 またまたエネルギーの話 2012.01.01  
191 成人の日、昔を辿ることは、ヒトの宿命だ 2012.01.09  
192 秒読みは生まれたときから 2012.01.18  
193 感謝とか恩義とか仇とか憎しみとか。 2012.01.25  
194 錯覚に陥る 2012.02.01  
195 詰まらなくしているもの 2012.02.04  
196 昨日のままなら 2012.02.25  
197 貨物列車のゆくところ 2012.02.25  
198 幸せとは、を考え続けて 2012.02.29  
199 弱虫も啓蟄過ぎて顔を出す — 三月お水取りのころ 2012.03.14  
200 「プラ」ごみを考えてみる 2012.03.22  
201 ヌカガジュンコ写真展「音が伝わる温度」 2012.04.08  
202 花筏見送る人も無言なり 2012.04.21  
203 キツツキと雨 2012.05.05  
204 風を感じる 2012.05.11  
205 ひきだし 2012.06.02  
206 おびき寄せる 2012.08.14  
207 台風のなかで考える 2012.09.30  
208 ほんとうは、何かを待っているのだ 2012.10.28  
209 消えてゆくもの 2012.11.13  
210 「のほほん」と「ゆるゆる」 2013.01.19  
211 あのころは逃げ道が用意されていた 2013.01.21  
212 暮れゆく1月に昔を思う 2013.01.29  
213 節分に思う 2013.02.03  
214 蒼茫とか茫茫とか 2013.02.17  
215 花の雨お百度石をよごしけり 飴山實 2013.02.24  
216 あの夜は垂氷の道を手をひかれ 砂女 2013.03.01  
217 うそ 2013.03.02  
218 官女ひとり帰らぬままに雛しまふ 砂女 2013.03.18  
219 いさぎよく 2013.03.31  
220 時計 2.13.04.07  
221 おゆうはん (豆ごはん) 2013.528  
222 おかえり 2013.6.2  
223 本気でもないのに 2013.6.2  
224 ぎゅっと 2013.06.26  
225 逃げる 2013.06.29  
216 温度差 のことを考え続けている 2013.07.12  
217 稲の花咲いてお父うと畦をゆく 2013.07.30

## ツクツクボウシがないている

---

お盆が近いので、お墓参りに行った。  
ツクツクボウシがないている。

母にそのことを話したら、「今年はいつもより早くなきだした、秋も早く来るんだろう」という。

こうして毎年、ひとつずつ歳を重ねてゆくことを、ふと考える。

父が死んで6年半が過ぎた。  
今頃になって、私は親不孝な奴だったな、としみじみ思う。

親不孝は遺伝するかもしれない、とも思う。

ツクツクボウシの声を辿りながらお墓の裏山の藪の中に入ってみた。

久しぶりに来た。  
娘を誘ったらついて来たので、私の子供のころの遊び場の話をしてやった。

湧き水が染み出ている。あところは、そんなことで感動したりはしなかった。

きっと、死んだ親父も子供のころにこの山を駆け回ったのだろう。

そんな話は1度もしてくれたこともなかったが、それがわかる歳に、私はなった。

---

2004年8月12日（木曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 偶然行き着くブログがある

---

不思議なもので何の意識もしていないのに偶然見つけてしまうブログがある。風花さんという方が書いてらっしゃるのですが、メールを差し上げるのも恥ずかしいし、コメントも特に気のきいたモノができるわけでもない。トラックバックって何なのかちっとも分かっていないので、コレは論外。

偶然の行き当たりばったりで見つけてしまったブログなのにもかかわらず、読み出すとぐいぐいと読んでしまう。不思議な波動が伝わってくる。もしかしたら、同じような視点を持っているのかとも思ってみた。でも、そんなわけは無いらしい。同じであつたとして、やっぱり私は違ったほうが面白いようにも思うので、せっかく見つけたんだから、違っていてもかまわないとも思いながら時々読ませてもらっている。

どうして、このブログに安らぎを感じるのだろうと、やけに気に掛かって考え込んでいる自分が、子どものようで可愛い。そう自分で褒めてみても、答えは出ない。

ところが、頬が落ちるほどニヤケてしまったことがあつた。このかたのブログと私のブログのタイトル背景色が同じような色だったので。なんだ、それだけのこと…と言われそうですけど。変に嬉しい。

---

2004年8月13日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 読書系 巻頭言

---

こんな巻頭言を考えてみた。発表は9月1日です。

-----

いつもそばに本が…読書系。何よ、それ？

- ・毎週の新聞記事の読書欄が楽しみな人
- ・今月の新刊…っていう新聞広告が待ち遠しい人
- ・私は読書の虫よ。。

そんな人ばかりを待っているわけではないのです。

国語の試験で出題された文章に感動してしまって、涙が止まらなくて試験問題が解けなかった…  
って人の話を耳にしたとき、ああ今の世の中でも棄てたもんじゃないな、って思いました。

試験ができることも大事だけど、感動することも大事でしょ？

それが漢詩だったのか、俳句だったのか、小説だったのか、わかりませんが  
私たちの心には、活字を読んで何かを感じるという素晴らしいチカラがあります。

喜・怒・哀・楽、を表す言葉、例えば、「楽しむ」とか「感動する」っていう言葉には、  
命令形が存在しないんですよ。

そりゃあ文法上は存在しますが、「感動しろ」って命令されて感動できますか？

どれだけ科学技術が進化しても、人の心は動かせない。

あなたの「言葉」が、別のあなたの「心」を刺激するところから始まります。

そこには、共感や感動があるのでしょうか。

読書系の会議室？ちょっと堅苦しい名前だったかな。

私たちのまわりにある様々な読書から受ける喜怒哀楽をここで綴ってみようと思います。

会議室というよりは、談話室。

だから

いつもそばに本がある。

やすらぎの時間を共に過ごすのです。

お気軽に、何でもお書きください。

(不精な私は、いつもレスを書くとは限りませんが…)

-----

### 第2稿目

はじめまして。ねこさん、と申します。

このたび、県民発・読書系会議室を始めました。

お気軽に書き込みをお願いしますね。

一体何をするの？

↓ こんな人、そうじゃない人に、喜怒哀楽、意見、感想など、何でも書いて欲しいな、と思ってます。  
(挙げればキリがないのですが、思いつくまま…)

- ・新聞の読書欄、新刊広告欄が待ち遠しい人
- ・本屋さんをぶらぶらして一日中過ごせる人
- ・古本屋さんをこよなく愛する人
- ・図書館に久し振りに行くと読みたい本がたくさんあり過ぎて困ってしまう人
- ・必ず3冊以上借りてしまう人
- ・電車に乗ると、カバンの中に本が無いと落ち着かない人
- ・ケータイを忘れても大丈夫。本を忘れると大丈夫じゃない人。(注: 私はケータイを持ってません)

- ・しばらく無人島に行くとしたら、この本を持っていくんだ！と書名を即答できる人
- ・旅に出るとき、必ず本を持って行く人
- ・テレビはなくてもいい。本が無いとソワソワする人
- ・愛読書がある人。それを10回以上読んだことのある人
- ・国語の授業は嫌いだった人
- ・漢字の苦手な人、でも、漢詩の好きな人
- ・詩や俳句もいいなと思う人
- ・小説を読むと必ず泣く人
- ・小説の舞台に必ず旅に出る人
- ・文筆業になりたい人、既に文筆業の人
- ・近頃、ペンを持つことが少なくなったなと思う人、特に万年筆
- ・観る映画は原作も必ず読む人
- ・ベストセラーは読まないぞ、と意地を張る人。でもこっそり読むこともある人
- ・読書感想文を書くのは苦手だった人
- ・アツクなって語ってしまう人
- ・好きな作家が何人もいる人。会いに行ったことのある人
- ・積読(つんどく)という言葉が好きな人
- ・ちくま文庫を最良にする人
- ・夜更かしをして本を読み切って感動して眠れなくなってそのまま会社(学校)に出かけたことのある人
- ・とろけるような恋がしてみたい人
- ・苦い恋の思い出がある人
- ・短気なくせに、遅れてくる待ち合わせ人を1時間でも2時間でも待てる人
- ・砂浜を駆けると青春してしまう人
- ・ここまで熱心に読んでくれた人
- ・該当する項目がほとんど(まったく)無かった人
- ・読書のキライな人

## 銀マド＞立冬の過ぎて木枯らし待つばかり【立冬篇】

---

霜降を最後に「監視室の裏窓」を書くのをやめたら、からだの中の骨が一本なくなったような錯覚に陥るほど自分がだらしなくなっている。

決まった日に決まっただけのノルマを自分で定めてこなしてゆくということは、どれほど大変であるかを知らされた反面、質の如何に関わらず、自分で決めて書き続けたということは価値ある側面でもあったといえる。

24節季ごとに自分を見つめてみる。何もネタがなければ考える。考えること自体に発見があったろうし、考えても何も出なければ、出してやろうと時間を工夫することに意義があった。

問題意識もないまま波間を漂うと生きる意欲を失ってしまう。もちろん、遭難者にはそんな人は1人もいないだろうが、幸せ者にはたくさん生きる目標を失った人がいる。一度遭難者になってみればいい。

私は一度失業者を味わった。何度も書くけど、社会全体が一度失業者を味わえば、環境問題だって教育問題だって真剣に考えるようになること間違いなし。

今の世の中、「食る」ことが抜けてるんじゃないか、というか消えてしまった。

貪らざるを以って宝となす 菜根譚

セーフモードの暮らしに入って3回目の冬を迎える。期限は短い……。

---

2004年11月11日（木曜日）[【随想帖 I】](#)

---

## 銀マド＞時雨の冬近く…か（小雪篇）

---

きょうは小雪。

早や夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く

福永武彦の「忘却の河」を読んだのはもう二十数年前のことだが、私にあの物語をどこまで理解できたのだろうか。ノートに、この一節を書き写したことだけが記憶に深い。

もう一度、昔の本を引っ張り出して読んでみてもいいなと思う一方で、今の私にあの小説の心が理解できるだろうかという不安がある。今、あのときほどに心は純粹ではない。

先日、長崎に行った。遠藤周作文学館に立ち寄りたかったが時間もなくて残念であった。またいつか来れることを期待しているが、帰ってきてから福永武彦の本を手にとってぱらぱらと見ると、遠藤周作や福永武彦に夢中になっていた二十歳のころがやけに懐かしくなってくる。

城君という友人が居る。今は年賀しかよこさないが、彼は私よりも1年先に卒業してのちに上智大学に転学して九州のある大学で助教授になりながら、今は牧師になってしまっていて横浜に住んでいる。そんな彼と二十歳のころ、キリスト教について深くはないものの、話したことが度々あった。彼の言葉ひとつひとつが私の純粋な感覚を刺激してくれたからこそ、私は忘却の河も草の花も、じっくりと、熱く読めたのだと思う。

長い年月は、私をすっかりすさんだものに変化させてしまって、いまさら、こんな話を彼にしかけて、思い出を引き出せるものでもなくなってしまった。

きょうは小雪。いつもの年よりも紅葉が早くやってきた割には、寒さが厳しくないように思う。コタツもファンヒーターもまだ出していない。

日差しが優しくて穏やかだった日の午後、神田川の橋の欄干にもたれて、1時間でも2時間でも話していた学生時代が懐かしい。

---

2004年11月22日（月曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 詫助

---

この「詫助」という言葉の余韻がとてつもなく気に入ってしまって  
もうひとりの自分を作り出すなら「詫助」という名前にしようか、などと考えている。

世の中、自分の考えているように  
筋書きが出来ているわけでもない。

でも、なんだか、  
この人の繊細さと、思い切りの良さが  
わたしを惹きつけてね。

それでも、  
鈍感なりに  
田舎のセンスのない落ちぶれなりに  
刺激を受けているから  
ちゃんちゃらオカシイ。

そうそう  
僕が居間で本を読んでいるのを無視して  
母と娘は  
「お父さん、田舎もののくせに、都会に行ったんや、あんたも行くか  
あの人は、全然垢抜けしなかったけどな・・・」

わたしは読書に夢中になったふりをしながら  
「僕の時代、高田馬場で、下駄を履いて、肩までの長髪で  
ぶらぶらしてるのが垢抜けの象徴や！」  
と叫んでいる。心の中で。

## 初冬の風

---

〈福田みどりさんの産経新聞連載中(2004.11.28)の記事 風の記憶 「司馬さんは夢の中」(24) の書き出しから〉

私は、子供の頃から初冬の風が好きだった。空気が凍ったように張り詰めていて、そうね、指で弾くと、びん、びん、鋭い音が響いてくるように思えるの。日々、時々、さまざまに変わってゆく空の雰囲気も複雑でやがて暮れようとしているその年への感慨をこもこも語りかけているようで眺めていると、胸がふるえてくる。

この記事のこの部分を読んでからわたしは初恋の人を思うあまり沈み込んでしまっているかのような眼差しになっているに違いない。かといって暗くなっているのではない。

しみじみと司馬さんを思い出し、わたしの中にある司馬さんの作品の記憶とみどりさんのこの文章がひとつになって、あぁなんと素晴らしいご夫婦なんだろうと思うのです。この綴りを読むだけでみどりさんがそこはかとなく司馬さんの影響を受けておられると感じます。

「初冬の風」…か。  
憎んでみたくなることもあれば、かばってみたくなることもある。

忘年会に出かけた昨晚、年に一度しか袖を通さなくなったコートを羽織って出かけた。  
もう二十年年以上も着続けていることになる。

許してやってもいいこともあれば、許せないこともあったなあ。  
-----

〈銀のマドラー・塵埃秘帖〉

---

2004年12月 8日（水曜日）[【随想帖 I】](#)

---

## 銀マド＞3年目の冬 年末篇

---

おはよう。

久々に塵埃秘帖を書きましたが、書いていて面白みがないなあと感じる。

天性・ジョークの塊と自称している私が、深夜の自画像を描くような暗さでは、イケナイ、イケナイ。

明るい話題が少なくなったのか、自分の行動が活性化されていないからなのか。

最近のヒット。

(職場のミキさんという子がジャージを着ていたので)

私 : あら、それ、ジャージやね？

ミキ: そうよ

私 : なんや一、きょうは、ゆうべ寝てたままで来たの？

ミキ: 違うー

しょぼかったなー。オヤジ・ジョーク。反省モード。

今、再びジャージが流行だそうです、私が学生の頃はジャージと言えばパジャマであり普段着であったのです。1週間も2週間も洗濯をしないのはさほど恥でもなく、洗濯カゴに入れてある汚れ物を洗わず日光干して、再び着たりしていた。

---

さて、

邂逅の森は、少しずつ読み進んでいる。

こんなモノ書いてないで、もう少しを読みいこうかな。

(仕事探せよという自戒もある)

-----

穏やかで静かな年の瀬を迎えている。気候に大きな変化がないというだけではなく身の回りにもこれといって凸凹もない。いわゆる平和な状態なのだ。しかし、私にとってははいよいよ3年目の冬である。

いったいアナタは何をしたいの？何になりたいのよ？ そう親友に詰め寄られることもあれば、日常の飲む席でも同じように問われる。

うちのんは私のことを諦めているのか知り尽くしているのか、「言うても無駄やろうけど」と前置きをしながら、「あと10年余りは何処か安心できる所で働いて欲しい」と言う。「だいたいが怠け者なんと違うの、世間はそんなに甘くない、それに甘えたらアカン」と手厳しい。「家族がなければ悠々自適なもんやし、社会的にもよろしおすなあ、で済むけどな、そうもいかんのが現実や」と言う。

霞を食って生きてゆけるものでもあるまい。しかし、天性のわがままはそう簡単に治癒できず、あれは嫌やこれも嫌やと小言を吐きながら、他人様の半分以下のお給料でもノホホンと生きている道を選んでいる。お給料もサラリーマン時代の3割以下(7割減)の低空飛行である。ある一瞬を見てみれば安定して見えるから上昇気流に乗れずにいる。イカンイカン、コンナコトデハ。

しかし、3年間でいろいろと勉強になりました。残念ながら人間の醜いところやいい加減な面に出会ったことのほうが多かったけど、こういうふう到低空飛行に入ったことで出会った人や知りあえた環境もあったので、このご時世のことだし、生き延びられたのだからヨシとしたいと思っている。

しかし(その2)・・・そう、なかなか書き出せないでいるのだ。5年は掛かると言って会社から逃げ出す口実にした翻訳業はどうするのよ。売上高ゼロ(つまり実績ゼロ)、技術向上指数はマイナスなんだから、思い切って低空飛行をやめて地上から獲物を見たほうがいいんじゃないの？ってうちのんは思っているに違いない。

1週間に60枚の仕事の引き合いを知らせてもらった今年の夏、週の半分だけ仕事があるので出来ませんと返事をした。あの時は仕方がないか…と諦めたが、すべてを置き去りにしてそちらに挑む勇気がなかった。私のチカラでは1時間に1枚、1日10枚程度。入試の試験問題に食らいつくような血相で挑み続けてもこの速さだろうと冷静に分析しているので、別に仕事を持っていればやはり1週間に30枚が限界なのだ。だが、そんな言い訳を並べても仕方がないし、後悔が募るばかり

りろうって。

スズメはどうして電線から落ちないのですか？ 答えは簡単で、落ちそうになったら飛べばいいから。それは私の哲学のひとつでもあるのだが、今の私は落ちそうになったら羽ばたける翼も持たずに居る。そのくせ、「(人間味のない奴らのあふれているような)メーカーは嫌や、僕のチカラを生かして社会に恩返しを出来るところを探させてくれ」とうちのんには言えないが、期限は後2年程度が限界だろう。夢は「死ぬまでできる文筆業」と口が裂けても言えない。「アホ」の一喝が待っているだけだろうし。

---

2004年12月16日(木曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 銀マド 冬至篇

---

冬至のころの南中高度は真夏の太陽に置き換えると夕刻おそらく3時か4時頃の太陽の高さに相当すると思う。もしも真夏に突如として太陽が地平線近くの空あたりまでしか昇らなくなったりしたら、もちろんそれは天地異変ですけど、大変な驚きとなるでしょう。こうして夏至のころから数ヶ月という刻々とした日が過ぎての後に地平線を僅かばかりしか昇らない太陽を見ても私たちはさほど驚くこともなく、冬という季節を許容している。

昨晚、酔いながら眠ってしまったので朝早く目が覚めた。5時半ころに布団から抜け出し、残してもらってある風呂の湯を追い焚きし朝風呂に浸かった。湯舟の中で朦朧としながら近所のご主人が出勤をしてゆく車の音を聞いていた。

私は寒くても平気で布団から飛び出せるという鈍感な性格なので冬という季節がまんざら嫌いではないが、うちのんは寒さに減法弱く「このまま朝が来なければいいのに」を口癖のようにしている。わからないでもないが、私は眠るときに「早く明日の朝が来ないかな」と思って眠るから大違いだ。

しかし…夏が嫌いな私は「早く夏が来ないかな」とは思わない。

-----

冬至の夜は芋の焼酎をお湯で割って戴いて「義経」(司馬遼太郎)を読みながら寝入ってしまった。

---

2004年12月22日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 御用始

御用始のきょう、何故家に居るのかって？  
わたしが、甘えっ子だからでしょうかね。  
よもやまな事情もあります。

-----  
うちのんが実家に帰ってしまったので三が日は一人暮らしをすることになった。過去にも幾度もあり決して珍しいことではないものの、昔と違う所は、私が料理をしなくなったことだろうか。

酒肴は自分の手で…という名目で台所に立ち、せっせと料理を作る休日とは違って、ひとりになってしまうと、てんで弱りきった病人のように変わり果ててしまった(苦笑)。冷蔵庫の残り物の肉や野菜をかき集め雑煮を作ってみる。それを喰いながらうちのんに「冷蔵庫に古くて傷んだ野菜や購入日不明のお肉があるぞ！」とメールを入れている。少し齧ってみて喰えそうだと判断したら鍋に放り込む。パリパリに乾ききった冷ご飯を温め、実家に行って貰ってきたおせちをつつく。三日続けてへんてこな料理を食べたら少し飽きてきたなあ。

(注:私の実家は雲出川右岸中域ですが、おふくろとあまりウマが合わないためお互いが居心地悪く、実家に行っても2,3時間でそそくさと帰ってきます。元日に少し顔を出して泊まらずに帰ってきました。)

御用始のきょう、何故家に居るのかって？  
わたしが、甘えっ子だからでしょうかね。そんな理由など深くも考えなかったのですけど

### 夫婦の不思議

を読んでいて、色々なことが思い浮かんできて、私は甘えっ子だと改めて思うのですわ。何やら新婚さんのような甘い眩きにも思えてくるブログの一部を引用すると

| お互いが足りないところを補い合って、家庭がうまくいくように、  
なっているのだと、おっしゃいます。我が家でもそうなのかなと考えると、私の足りない所はうちのんも足りないな。(ガクッ)  
台所や部屋の掃除を年末になっても一切しなかったら、普通は旦那がし始めるのだろうけど、旦那さん(私)は自室でグウタラしてましたからね。

| 相手を尊敬も尊重もしているんだけど、同じ時間や空間を共有し続けると、辛くなってくるんだわあ。  
お互いが空気みたいでありながらも、もう一緒に暮らすのは嫌だと役所への届け(離婚届とも言う)を何度持ってこられたことか。代わりに娘に書かせるぞ、と脅されたこともあるくらい。いえいえ、でもね、仲が悪いわけではなく、どんなに烈しくやっても――我が家ではバケツで水の掛け合いや茶碗の放り投げあいもやったことがあります。大事な皿が割れて、どうでもいいのは割れないという法則を確認できたのですが――寝るときは一緒に寝るし、湯冷めした自分たちの身体を温めるために娘と母が、布団の中で温まってまどろんでいる私を奪い合い、私の体温を盗み取って行くのです。

だから、3日も居ないとそりゃあ平和で静かな夜を過ごしました。

実家から帰ってくる日を4日と決めたときにうちのんが私に言いました。  
「4日は仕事でしょ、休むの？」  
「なんでわかるの？」  
「そなん、当たり前やん、4日のお弁当誰が作るの？ 愛妻弁当なしで仕事になるの？」

12月のある日にそんな会話があったことは何処の誰もが知る由もないが、我が家では自明のこととして、御用始のきょう、仕事を非番にするように計らってあるのです。

京都からの電車を迎えに行く時刻を問い合わせるメールを出す際に  
「お正月、雑煮ばっかし食っていたので、あっさりしたモノが食いたいなー」  
と書き添えておきました。まもなく  
「じゃあ、今夜は焼肉にしようか」  
と返事が来ることでしょう。



## 銀マド＞小寒号 小寒の星も夜空で震えたり

---

流れ星を見つけようと空を見上げたのはつい先日のことだ。

小寒。

きょうも素晴らしい星空だった。

-----

小寒の星も夜空で震えたり （ねこさん作）

車が信号で止まったので窓の外を見上げたら名前を知らない星座がくっきりと見える。ああ、ココは山の中なんだなって感じました。滑走路のような国道が何キロも直線で続く。

ほんまに冬はよく瞬くわ、お星さま。古代の人はこんな神秘的なものを見上げて暮らしていたんだね。信仰もそれほど明確に無かったころ、人々は自分の心と対峙して暮らしていた。争いもなく闘いもなく軋轢もなく。

きょうは小寒。

ぶるっと寒い朝だった。でも凍らないから私の町は過ごしやすい。

明日はもっと寒いそうです。

三日間、PCの前で過ごしたので頭痛が引かなくなってしまった、ピップエレキ板を4つも貼っています。

で、その間にあれこれとブログを読んでいて、[素敵な人](#)に出会ったよ。ご迷惑かな。TBしちゃおう。

いつまでも転んでいるといつまでもそのまま転んで暮らしたくなる 山崎方代  
いいですね。

---

2005年1月 5日（水曜日）[【随想帖 I】](#)

---



大寒のあくる日はうっすらと積雪をする所もありました。

中勢区域を越えて北上すると田畑が白くなってまして、スポーツセンターの坂道を越えると道路も真っ白でした。

今朝、さざんかの垣根の中からスズメよりひとまわり小さい小鳥がキンモクセイの枝に飛び移ってチチチッと啼いている。メジロでしょう、きっと。

さざんかの垣根のねきを通ると甘い蜜の匂いがします。

日が差してきたらメジロはどっかに消えてしまいました。



塵埃秘帖・大寒号、書きました。

-----

あれよあれよと言う間に大寒が過ぎてしまった。

暦とは不思議なもので、今年も去年も、この大寒のあくる日に寒気団が襲ってきている。去年(2004年1月)の御在所岳は深夜から早朝にかけての気温はマイナス10℃を超えて、鈴鹿山麓リサーチパークにもたくさんの積雪があり、玄関には雪ダルマまで登場した。寒さに身の引き締まる思いを抱いておいでの方も多かろうと思う。寒さよりも暑さのほうがマシと仰る方々の話を聞くと、暑いのはエアコンで凌げるが、寒さは動こうという気になれないのだという。科学技術のお蔭で私たちは確実に快適な暮らしを手に入れてきた。これを文明の進化と呼んで満足に浸っている。しかし、一方で地球が温暖化現象は刻々と進んでゆく。

人類は、暖かい気候に慣れて幸せのように見えるが、実は少し寒い気候のほうが暮らしに適しているのではないか、いつものことながら思い、考え込んでしまう。昔、三内丸山遺跡を訪ねたときのことを思い出す。縄文遺跡で、相当大規模な発見があった。大きな不思議な建築物跡も発見されている。到着してひととおりを見学してもなお感動が引いてゆかず、後日になって予定を変更して再び訪れたとほど素晴らしい感動をもたらしてくれたあの遺跡だ。夏の旅だったので涼しかったが、今の季節はかなりの寒さで、積雪も1,2メートルに及ぶだろう。そんな地域での大昔の暮らしは厳しかっただろうが、寒ささえ辛抱すれば、栄養価の高い果実は春夏秋冬の大部分で収穫でき、魚介類も豊富だったし、疫病も少なかったはずだ。

寒さは大敵のように思われている。朝起きるのが辛いし、雪が降り積もれば交通が麻痺し、電車が遅れ、センター試験に遅刻者が出る。まあ、どれをとっても文明が進化したことによって感じるようになった不都合でしょといいたい。それを科学技術で克服して満足をしているだけで、新しい課題が次々と発生してくる。それを大きくひとからげにしたのが「地球温暖化」だから。

積極的な活動家のみなさんは、車に乗るな、電気を消せ…様々な提案・発案をして、こんな簡単なこともできないのか目くじらをたてる。目くじらを立てるほどに活動が新興宗教色のようなものを帯びてくる。仕方がないか。

答えなどない。じっくりと見直すことが大事なんだと思う。トントントンと進んできたテンポで見直しちゃあダメなんだろう。じわじわじわっと環境が変化してきたテンポでじっくりと見直す。自分たちの腐りきった(科学技術に侵されてしまった)文明生活を、縄文時代のところまで引き戻して考えてみる必要があるんじゃないか。情報科学のもたらした利便性は、いまや常識なんだけど、思い切って削ぎ取るほうがいいんじゃないか。

2002年の冬に

火遊びとわからず燃える落ち葉かな 〔ねこ〕

なんていうことを書いている私が居る。そんなに深い意味で書いたわけではないが、もしかしたら、文明は今、大きな「火遊び」をしているのかもしれない。

さざんかの花と落ち葉を掻き集めようと庭に出たら、甘い甘い蜜の香りがした。メジロ(だと思う)が垣根から飛び出し大急ぎで屋根まで舞い上がってウグイス色の小さな身体をぴょんぴょんと動かしている。朝はそれなりに寒いほうがいい、と感じた。



## サクラサク@早稲田〔銀マド・節分号〕

---

毎日新聞の「理系白書ブログ」にサクラサクという電報の話を書いていた。更にちょうど「司馬遼太郎が考えたこと」という本に興味湧いていて、「あそこ」を私なりに思い出していた。

サクラサクという電報が生きていた時代、季節は立春を1ヶ月ほど過ぎた3月初旬だったと思う。記憶は曖昧でも間違いはない。何故ならその日は合格発表の日だったからです。

S君と私は南門から学内に入って、図書館の壁を横に見ながらどんどん中に入っていった。大隈公の後ろを過ぎてしばらく歩いた所でS君が、

「よかったね、やっと念願がかなっておめでとう。お祝いに車買ってもらうんだって？」

と大声で私に叫んだ。前から歩いてくる他の学生に聞こえるように言い、しきりに肩を叩いてくれた。

「ありがとう、ありがとう」

と私はただただうなづいて並んで歩いて、西門を出たあたりでふたりは嘖き出すように笑った。

楽しかったなあ、あそこ。

S君の芝居はナカナカのもので、4年も浪人したのに彼は文学部に7年ほど在学して演劇をやり通した。私のほうは、本命・第1希望の理工学部応用物理学科に見事に落ちて、後に、よその大学の電気通信工学科に進んだ。

もしも教育学部地学科に行っていたら、今頃、何してただろうか……。あそこ私は何を考えていたのだろう……と、司馬遼太郎さんの本を手にしながらかえる。

きっと、打算的だったんだな一。

「これからは工学の時代なんだ、訳のワカラナイ理学系の学部なんてクソ食らえよ。電気通信の時代よ。エンジニアになるのよ。」

そう言っていたかもしれないあそこの日記は残っていないが、きっとそう豪語して歩いていたに違いない。「工学の時代は終わったのよ、理学とか哲学がもっと頑張らねばならないのよ」とこのごろ口癖にしている私としては、歯がゆい思い出です。

あの時、理系なんかやめちまって、S君のあとを追って文学部に進んでいけば…。

まあ、所詮、二十歳前の小僧の考えていた夢だったのですわ

## 銀のマドラー／塵埃秘帖 立春篇

立春が過ぎても寒し猫だるま

「冬は猫柳さんじゃなくって猫だるまさんですね」  
と言ってくれたのは、いつも瀬戸内寂聴さんのように綺麗に仕上げているTさんだった。

彼女元気かな……  
こんな寒い日が続いても  
昔のように夜更かししてPC叩いて  
夜明け前に起きて勤行しているのかな……

私ですか？  
すっかり弱虫になりました。  
あなたのお話を聞きに行きたくなりました。

---

### 銀のマドラー／塵埃秘帖 立春篇

〈産経新聞の土曜の連載エッセイ「阿久悠 書く言う」(2月5日)〉  
を読む。  
産経新聞を読むのは久しぶりいー。(近頃、サボってたなー)

〔略〕

たとえば、「豊かさ」などもそうで、あれほど何百年も何千年もかけて貧から脱出を願っていながら、たかだか四世紀半  
少々、経済状態が良くなると、もう「豊かさが人間を蝕んだ」などといっている。

確かに私も「蝕んだ」という意味のことを叫んでいたな。

〔略〕

もっと具体的なことをいうと、鍵のかかる部屋を持つ夢というものがある。それぞれが自室を持ち、鍵でプライバシーが守れ  
たら、どんなにいいだろうということである。だが、鍵の部屋で個を守ったが、広間で公を学ぶことが不可欠だった、というこ  
とを知らなかった。そのため、家族が話し方を忘れてしまった。

ふむふむ、と読まされます。なるほど、そいいうわけね。確かにそうです！ その通り！ と相槌を打ちながら読みます。

つまり、「手に入れた宝を、宝と思わずに冒涇しているもの」がたくさんあって、「平和」や「自由」もそのひとつだというので  
す。

「絶対の権利としてもって生まれてきたと思っている」世代の人などは特に、

「自由」はかけがえのない宝だとは思っていない。大切に扱わないと壊れるとも、いい加減に使うと没収されるとも考えてい  
ない。

まあ、これは広義に考えてゆけば、たくさんの方に当てはまるわけで……。  
私たちは、自力で今の幸せを勝ち取ったんじゃないだし、  
自然環境や豊かな物質文化にだって畏敬の念を持たねばならない…というか、  
「…ねばならない」ではなく、そういう流れが失われていることを指摘しているのだと私は思う。

結局、「豊かさ」が原因で「蝕」んできたのだと私が言ってきたことを、阿久悠さんは別な形で表現してくれたってことかな。

〔略〕

「自由」とか「平和」とかいうものは、只で貰ってはいけないのかもしれない。戦って獲得するか、そうでなければ、自分のい

ちばん大切な精神と等価交換するかのどちらかである。これなら、粗末にしないだろう。

ぼくは歌謡曲の歌詞で「一生」とか「永遠」とか書くことがあるが、それは三年間のことだといっている。三年の間に意思確認をし、誠意を示さないと、「愛」も「幸福」も、「平和」も「自由」も、その人の手許からなくなってしまうといっている。〔後略〕

そうだ、eデモもそういう時期だったんだ…てここまで書いて思った。  
更に、私自身も、まさに3年目の冬を過ごしているのだ。

---

2005年2月 6日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 銀マド＞もうひとりの私　＜雨水篇＞

---

半月に1度、こうして様々ことを考えていると、  
このまま時間が泊まって欲しいという衝動が襲う一方、

「義経」で義仲がやられてしまう所あたりを読んでいると、  
時間をこのまま止めてはいけないのだという焦りのようなモノも湧いてくる。

仮想の時空で人物に触れる。

そこに、

現実の自分を睨みつけるもうひとりの私がいる。

-----

[堀江謙一](#)さん。元気だ。

>2月17日(木)

>日本時間　18時　現在

>南緯　43度37分

>東経　18度32分

>天候　曇り　南西の風　8m

>気温　11度

>3時間ほど前に前線が通過し、寒い南向きの風にかわりました。

もうすぐ、喜望峰だ。

でっかい海で、8メートルもの風にさらされながら居ることは、とても恐怖なことに思えるのですが、堀江さんにとったら恵みの風なのかもしれない。

寒冷前線が通過して、風向きが変わる。さり気なくそのように書いているけれども、気合や意気込みが伝わってくる。

本当の闘志というものは、大海原で静かに内に向かって燃やすものなのかもしれない。

淡々と進むことが偉大なのですね。淡々と……

-----

今日は雨水。

朝、6時に庭に出て新聞受けから朝刊を取ってくるのですが、空が明るくなっていることに驚きます。雨水だと知っていたし、お天気も下り坂だと予報が言っていたのに、予想がハズレて厚い雲が無かった成せいか、余計に明るく感じたのでしょうか。

天気予報どおりに夕刻から本降りです。今の季節に降る雨がざーざーと音を立てて降るのを見ていると「本降り」という言葉がとてもふさわしく思える。春を招く雨ですね。

---

2005年2月18日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 銀マド＞空を見上げる〔穀雨篇〕

---

きょうは穀雨だと娘に知らされた。雨は田畑をうるおし、穀物の成長を助ける。きょう、この日を二十四節季は穀雨としています。

限度を越える雨が降り続くことは、人にとっても自然にとっても困ることですけど、適度な雨は心を沈め地を潤し空気も洗い流してくれます。

光化学スモッグの緊急時監視体制というのが4月18日から始まりました。毎朝、10時過ぎになると四日市市の6時の気温とその日の最高気温、現在の天候、御在所岳の風向・風速などを総括して、北勢地区の光化学オキシダントの上昇を予想します。

風が緩やかで、お天気がよく、気温の日較差が大きい日。そこで海から風が吹くと光化学オキシダントの濃度が上昇します。

さあ、これから9月中旬までの毎日、県内の測定局からのデータを見つめ続け、空を眺めては一喜一憂の日々を送ります。

ときには雨降りを喜ぶこともあります、どうかご容赦くださいませ。

-----

皆さんのPCからも一部だけですがデータを見ることができます。[こちら](#)

---

2005年4月20日（水曜日）[【随想帖Ⅰ】](#)

---

## 父の形見

---

母の日が過ぎてしまった。実家に帰ることなく、電話を入れることも無かった。アイツは出来損ないのバカ息子だ、と母は思っているのだろうか。

生きて暮らしているのだし、恩を忘れたわけでもないのだから許されたい。そういう心は、得てして届かぬものだろうが、何はともあれ、自分の倅が何を考えどんな暮らしをしているかは推測がついているだろう。母とはそういう偉大なものなのだろうと思う。

父は逝ってしまっって七年余りになる。しかし、私は十八歳で家を出てしまったこともあり、死んでおらず今でも離れて暮らしているような錯覚が甦ることもある。

東京の下宿に荷物を送ってくれるときに、その箱の片隅に必ず手紙が添えてあった。それは鉛筆書きであることが多く、発送の際に思いつきでイソイソと書いたものだろう。

「若いうちは勉強をしておきなさい」「金の心配はしなくてよろしい」などということが記されていた。日常で些か追い込まれて一切の過去を棄て去るのだという暴挙を思いついたのが発端で、実は、その便箋を数年前に始末してしまった。今となっては仕方がなく後悔先に立たずであるが、思いは消えないのだし、もしも消えたとしても私が生きている間に私自身が憶えていればそれでいいじゃないか、と思うことにしている。

履歴書に書ける大学は二つしかないが、実は書けない大学もある。その大学のことで日々悶々と居るときにあの言葉「お金は心配しなくていい、勉強をきなさい」という言葉は厳しかった。勉強ちつともしないでグウタラな生活をしていた私を見透かすようであったのだから。しかし、あの一時期が私というものを作 り上げるもっとも大切な時期だったわけで、まさに青春時代のひとときであった。必ずしも履歴に正当な足跡を残したモノが自分の真の履歴ではないと思う強い 根拠は、私のこの時代の経験から来ている。卒業とか終了という言葉には縁が無かったが、第三の母校として都心が懐かしくなることがある。

父はあのことで私を咎めたりはしなかった。最終的に素晴らしい師匠に巡り会えて満足な学生時代を終えて京都に来た私を我が手元に帰ってきた と歓迎してくれた。ところが、私に天性の放浪癖があったことや社会に出て僅か二年で結婚をしてしまったことで、父とは多くを語り合うことはなく、過去 の苦しみを打ち明けあう機会も殆どなかった。

語り合うこともなければ実像を見せ合うこともなかった父の姿が、自分がこの歳になって、はっきりと見えてくる。あのときに父は何を考え、何を私に言いたかったのか。どんな気持ちでペンを持っていたのか。映画を見ていると涙を拭く場面で早々と自室に引きこもってしまったのは何故か。枕元に あった紙切れに走り書きがしてあったが、あそこには何が書いてあったのか。それは、今の自分を見つめることで鮮明になってくる。

父の形見は玄関にあるたった一枚の絵だけだが、私自身が形見であった。

---

【塵埃秘帖・5月中旬号】

---

2005年5月11日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 空を見上げる

---

どうして人は空を見上げるのだろう。

この空を飛べたら…どこかに飛んでいってしまえるかもしれない、そこには悲しみなどなく、幸せが溢れているのだろうか。空を飛ぼうなんてそんな悲しい話を夢見ても、誰も幸せを運んできてくれない。

でもね、ちょっと。自由に空を飛べる夢を見るのは、私も自由になりたいよってという想いの表れなんだから、せめて夢だけでも見せてよ。そう思うことも確かにある。

空を見上げる。雲を見る。雲が流れるのを眺める。  
茜の空を見上げる。いつまでもいつまでも見てる。

---

空を見上げるのが私の1日の仕事の始まりです。

空が晴れ渡っていて、上層の空気が淀んでいる日、そう、四日市市の石油コンビナートの煙がなびかない日。海から緩やかな風が吹く日、今日も暑くなるな一っという日。  
そういう日は忙しくなることが多い。

<http://www.eco.pref.mie.jp/data-syu/data-sokuhou/index.htm>  
に光化学スモッグや大気汚染のことを書いてます。(MENU参照)

こんなことを考えながら、PCを眺める日々を送っています。各地で計測した大気の状態を表す幾つも並んだ数字群が手元のPCに逐次送られてきて、綺麗な青空の清しい日にはこのPCの画面が色鮮やかな警告色と変わってゆく。(「毎時速報値」って箇所の詳細がみえるんです)

-----

いつか自由に空を飛べるようになるのなら、自分が飛び立つ空くらいは、綺麗なままにしておこうじゃないか。  
それは空だけじゃなくて地球にもいえるのですが、ね。

【塵埃秘帖 五月中旬号】

---

2005年5月18日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 空を見上げる(2)

---

夏休みにおこなう2時間程度の子供向けの講座で、「お天気」と「環境」をテーマにして誰かやってくれないかという話が出た。視線が私に集中したので受け持つことにした。テキストも筋書きもまだ無い。

さて、どんなことを話して子供たちに未来の設計を任せようか。

環境は時々刻々と変化している。それ以上に日々の技術進歩は激しいのだから、私たちの住む環境の悪化抑止など簡単なことであるはずなのに、不安は募るばかりだ。

地球温暖化の危機を叫ぶ際のバックデータの時間軸は50年後100年後という単位です。パソコンの技術革新を表現する時間軸は半年後、1年後というもの。人の命は70年、世代は30年、太陽は24時間。環境が変化して人類に影響を与えているのは、400万年前に人類が地球上に姿を現してから長い歴史のほんの数十年前からの話だ。そこでの影響度合いは指数関数的に増加するものの、自然現象の数字そのものは決して大きいものではなく、人間の生命という時間軸から考えても現代人が未来の環境に無関心で自分の欲だけを追及する心理的根拠は十分に理解できる。

しかし、それではいけないのだ、と科学技術をバックに立ち上がろうとする人々もいる。ところがこの科学技術ってものがまた麻薬に似たようなもので、思うように私たちの暮らしにプラスとなるわけでもない。もっと人間としてのなすべきことや哲学的な視野からの刺激が甦って欲しい。

様々なことを議論し、あらゆることに知恵を巡らせて、環境を守ろうと立ち上がる人々が少しずつ増えている。知識人が全世界で環境を叫ぶのであるが、個人のエゴや国家の利益に偏った思惑がチカラを持っていることに、まだまだ無力を感じるときもある。そんな理屈を幾つも並べ立てて、自動車の排出ガスが大気を汚染することや二酸化炭素などが温室効果を生むこと、エネルギーの無駄使いを抑止すること、リサイクルのことを話して、果たしてどれだけの人々の気持ちが動くのだろうか。(いえいえ、効果は大きいのですが)

先日、空を見上げる話を書いたら、予想以上にたくさんのコメントを戴いた。人はひとりになって、例えば深夜に日記をつけるときに、その日に見上げた空の色を思い出すのだろう。仕事を終えて家路を急ぐときに真っ赤な夕焼けが見えたら思わず立ち止まってしまうのだろう。事実、昔、ある夏の夕暮れに西武池袋線・江古田駅で、連絡通路に上がる階段がやけに混雑しており人を掻き分け昇ってみたら奥武蔵の方角に沈まんとする真っ赤な太陽を我も見ようとして立ち止まる人が溢れていた…ということがありました。

自然を大事にしなくてはならないなんて当然だが、タイムマシンに乗って石器時代の生活に逆戻りはできないのだから、大気汚染や環境変化の理屈を話ながらも地団駄が続く。

美しい空を、子供のときに眺めたことがあったからこそ真っ赤な夕焼けに感動できる。あのときにホンモノと出会えたことで、その後の変化に気づくことができる。つまりその「気づき」がすべての始まりであり基本なのだ。

そういうモノに心を動かすだけの純粋さや熱情、子供心を失くさないで…と、自然を見つめる心を育てる教育とはどんなものだ…という方向へと想いは脱線してゆく。どうしたら、もっともっとホンモノを伝えられるのか。

---

2005年5月26日(木曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## 銀マド＞焦る

---

焦り。

ある人の日記を拝読していて、この言葉がやけに記憶に残った。これまでの自分の人生で私はそれほど焦ることがなかった。(いやいや、受験時代は結構、焦っていましたよね＞自分)

人気の学部学科から筋書き通りのように企業に入り、ずっと研究開発設計畑を歩いてきた。仕事では不満と満足を交錯させながらも、自由に長期の休暇を取り妻子など持たないような旅を繰り返したりしてきた。けど、数年前、時代に乗ってスピンした。

年収は3分の1以下に落ち込み、15年も早く年金生活者になったような暮らしに入った。「生きているよりも死んだほうが家族のためになんるんだ」と毎日思いながら暮らしていた。もしかしたら、そのときが一番、焦ったときだったかもしれない。

もう一度花を咲かせたい。そう思うけど、不思議と焦らない。これはいけないことなんだなと思いながらも、一度は死んでしまえばいいと思ったんだから、浮き草のようなものよ、と開き直れる。切れているともいえるか。

現状に爆発しそうなほどに不満を持っているが故に、自分の手に依ってそこを脱出するのだ、と強く思う。そこで、新しい道を切り開くために戦略を考え、あらゆる手を尽くす。

「満たされてしまったら緩んでしまう。」そのことを知っているのは、満たされた人――つまり緩んでしまって落ちぶれてしまった人――だけである、という摂理を知るのは、自分が落ちぶれたときだった。

「殻の外へ出よう、新しいことに挑もう」という欲望と、適度の焦りが無くなったら、人間には魅力が無くなってくるのだ、と今更ながら思う。

しかし「焦る」に命令形は存在しない。

次の一手は、常に冷静沈着のうえで打たれるのではなく、迷いと焦りで混乱した自分とホンモノの自分が格闘する感性のなかで投じるものだと思う。

その感性をいつどんなふうに磨くのか。夜が更けるにしたがって焦りの波がやってくる。

【銀のマドラー・塵埃秘帖・5月末号】

---

2005年6月 1日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 銀マド＞黄色い麦わら帽子

---

銀のマドラー〔回想篇〕

十 十 十 十 十

あれは いつのことだったのか  
小麦色の肌の  
クラスメイトの女の子と  
バスの乗り場で手を振って別れた

夏休みが終わるころ  
教室の席がとなりの彼女に  
電話を入れた  
遊びに行っていいいかい？

電車とバスを乗り継いで  
灯台のある  
小さな漁村に私は着いた  
バスの停留所で迎えた彼女は  
黄色い麦わら帽子だった

強烈な印象  
16才の夏

バス停から灯台まで歩いた  
真っ青な海と水平線を見おろした  
町の一点を指さし  
―― 青い屋根が見えるでしょあれが私の家よ  
と教えてくれた

真夏の日差しを気にせずに  
小さな漁村の狭い路地を  
歩き回った帰りに  
バス停まで見送ってくれた

それから数年して  
彼女に手紙を書いた  
名古屋の或る銀行に  
彼女は勤めているという  
涙が出るほど嬉しかったです  
と書いた返事をくれた

東京の下宿に戻る時に  
駅で待ち合わせた

でも 彼女は来なかった

-----  
別れの風景＞夏の終り(黄色い麦わら帽子)

99/09/15 22:04



## こっそりと見上げるひとりの一夜かな

---

こっそりと見上げるひとりの一夜(いちや)かな

思わせぶり…が好きなので、あいまいなようすを書いてしまう。

句を思いついたのは、ひとりで庭に出てただ夜空を見上げたときという、極めて単純な状況であつたのですが、この空の下で同じように同じところを見上げている人がたくさん居るのだと思うと、なかなかのロマンです。

星も見えない都会の夜空の下であっても構わない。

二人は喧嘩中かもしれない。

でも、心は仲直りをしたいと思っている……。

いえいえ、恋人など傍に居なくても、遠く離れたところに住んでいて、同じ時刻に見上げていればいいか。

「ねえ、五年後、十年後の今月の今夜にまた私たちここで出会えるかしら」……そう言ったオンナを思い出しているのかも知れない。

様々な過去と、----- それは棄てたもの或いは棄て切れない過去であるかもしれないのですが -----、いつものように自分でドラマに仕立ててしまった絶対にありえない夢を、どうしてもひとことにしてオマジナイのようにゴクリと呑み込んでしまいたかったんでしょう。

-----

私は「一夜」を「いちや」と読みたい。

〈ボツ群〉

- ・こっそりと見上げるひとりの夜空かな
- ・こっそりとひとりで見上げる一夜かな
- ・こっそりとひとりで見上げる夜空かな

---

2005年7月12日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## みちのくに別れ告げるや月見草

---

「待てど暮らせど来ぬ人を宵待草のやるせなさ」

その歌を口ずさみながら鄙びた山村道をトコトコと走ってゆく私がありました。数軒ほどが点在する集落と別れを告げ、遥か彼方に幾重にも折り連なる大きな峰を見て、旅が折り返し地点を回っていることを寂しく思いながら街道の国境を越えてゆきます。

1週間以上の旅をすると人恋しくなり、我が家も恋しくなる。その一方で、旅の本髄である好奇心とファイトも絶頂期に向かってゆく。気分は凸凹しながら、ときにはセンチに呟いてウソのない自分を愉しんでいる。

黄色い花が、美しい。

山仕事の爺さんを見つけたのでバイクを止めて

「この花はなんていう名前ですか？」

と尋ねた。

「決まってるべさあ、月見草だべえ」

と教えてくれた。

バイクの旅は見掛けより過酷で、焦げつく太陽光線と熱風が身体を襲う。早く峠道を走り抜けてしまいたい一心だが、この黄色い花の名前が気に掛かる。世界のブランド物を知ることや雑学知識を誇ることも、今は、この道をゆく自分がこの花の名前を知らないことが何よりも悔しいのだった。

きっと誰もが野山の雑草などを美しいと思わないだろう。しかし、私にとっては重要な花でした。あの山のあの場所で旅の途中で出会った可憐な黄色い花。

ほんとうは……

「大宵待草」(オオマツヨイグサ)というのが正しい名前です。爺さんが教えてくれたのは、みんながそう呼んでいるだけで本物の月見草は別にあります。

■ みちのくに別れ告げるや月見草

---

2005年7月21日（木曜日）[【随想帖 I】](#)

---

## ある夏の土曜の午後

---

それは随分と昔の、夏の日の土曜の午後のことです。

音楽室にはグランドピアノが置いてあります。期末テストが始まっているのに生徒がポツリポツリと現れて、普段の吹奏楽部の練習のときと同じように机を向かい合わせにしてお弁当を食べたり、ピアノをスタンドバーのカウンターのようにして肘を着いて昔の合宿のアルバム写真を見たり、お菓子やおにぎりをつまんだりしています。

私はこの常連で、吹奏楽団の一員です。土曜の午後には、生徒たちの練習に混じって音を出している仲間なのですが、期末テストが始まっていて練習が休み中でも、いつものように音楽室に来て、ピアノの前に座ったり、お菓子をちょっと失敬したり、生徒たちの他愛無い話に首を突っ込んで楽しんでます。

テスト期間には練習がないのを知っていながらこの部屋にやってくる子たち。「おい、試験はどうなんや」と尋ねると、「まあまあかな」とどうでもいい返事をしてくれる。「帰って勉強せんのか？」と聞くと「そうなんよ、お母さんがウルサイの。もう3年生やから、練習に行くなって言うのん」とやや愚痴り気味です。

グランドピアノの前に腰掛けて、彼女は久石譲の譜面を置いて弾き始めます。ひとつの音楽として聴かせてもらおうと技術的にも未熟な演奏ではあるものの、演奏中の顔は最高にリラックスしていて、にこやかさと真剣な眼差しが交互に入れ替わり、音楽のテンポよく、まるで生き物のように弾んでいます。何よりも彼女の顔が大人びて美人に見える……。

「家ではピアノ、弾かせてもらええへんのよ、勉強しろって言うの」

そういいながら「天空の城ラピュタ」の譜面集を閉じて、近頃習った音楽などを弾き始める。たいしたもので暗譜しているらしく、順番に思い出しながら弾いてくれます。

「モーツァルトやベートーベンを聴かせてよ」と私がねだると、それも思い出しながら弾いてくれます。小学校になったところから習っているというだけあって、もしかしたら音楽の先生(声楽が専門だし)より上手かも知れない。

教室には数人の子どもたちがいます。弁当を食べ終わっておしゃべりを続ける子。楽器を出して吹き始める子。私のリクエストにこたえてピアノを弾いてくれる子。女の子が多くなりました。昔の吹奏楽部は男子がもっと多かったのに。

その部屋には生の音が溢れています。生のブラスの音ってのは録音では味わえない素晴らしさがあります。夏休み前ですので、1年生がまだまだ決して上手じゃないのですが、演奏する楽しさがちょうどわかり始めるころで、みんなは音楽室に息抜きにやって来るんです。自分たちで生の音を出し合って心の緊張をときほぐして帰ってゆく。

この音楽室にはもうひとつ素敵な所がありました。窓にもたれると街の向こうに海が見えるのです。そして大きな湾の出口あたりをゆっくりと進んで行く貨物船の姿なども見えるのです。彼女たちの演奏を聴きながら、ぼんやりしていると、ブラスの響きが身体の中に溜まった垢のようなものをすべて振るい落としてくれました。

いや、あまりにも暑い日が続いたので、昔の夏をちょっと思い出しただけです。夏休みの練習はお盆まで和気藹々とはあるものの、びっしりと続きます。そしてお盆があけて合宿。今度の休みには、久し振りに音楽室を訪ねてみようかな、なんて思っています。

-----  
銀のマドラー 7月末日号

---

2005年7月31日(日曜日)【[随想帖 I](#)】

---



## ひとりでに、消えるように

---

ひとりでに、消えるように ： 串田孫一さん

きょうの朝日の夕刊に串田孫一さんの惜別の記事があった。串田さんは7月8日に89歳で老衰で亡くなられた。

私はこの人のエッセイに大きく刺激を受けた一人だ。いわゆる、上手な字で板書をする先生が居てくれると自ずからノートも綺麗な字になり、乱雑な板書であればノートは乱れ眠気も襲うのと同様に、串田さんは私に作文の歓びを教えてくれたのかもしれない。味わいを持った温かみのある、ときには厳しいエッセイだった。

およそ40年ほどの年齢差があるので、私が二十歳ころに串田さんのエッセイに出会ったときには既に60歳に近かったことになる。ジジイの風格の中に若さを匂わせてくれる、知的で哲学的なエッセイに酔いしれることができた。

「私はひとりで山の夜みちを何度も歩いたことはあるが、これに似た記憶は、さっぱり残っていない。それは何故だろうか」書斎に残された原稿の結びの一節だという。詩的であり哲学的である。

家で転んで少し頭を打ち、近所の医者に行きCTをとった。その晩には風呂に入らず休み、あくる朝に息がなかった、という。

悲しい話ですけど、串田さんのエッセイを数多く読んだ人ならきっと頷けるに違いない。数々の作品のような結末だったといえると思いませんか。

---

2005年8月 8日（月曜日）【随想帖 I】

---

## あらし去り白露がきゅんとすまし顔

---

久々の塵埃秘帖を書いています。白露篇。

あらし去り白露がきゅんとすまし顔　ねこ作

こどものころは、台風が来ると必ず停電になり、夜通して蠟燭の灯を頼りにしたものだ。雨戸を閉めて、玄関には戸板を打ち付けて、大黒柱の脇の大きな居間で家族が眠った。

真っ暗闇の中を風が吹き荒れる。それが夢の中のことと区別がつかなくなって眠りに落ちて、あっという間に朝が来るのである。静かで穏やかなことにありがたみをあのときほどに感じる朝はない。

きょうは白露だ。しかし、台風が過ぎ去ってしばらくは暑さが押し戻ってくるのだろう。自然に嘆き、その裏で感謝をしながら季節が深まってゆく。

-----

どうぞあなたも孤独であってほしい雨　時実新子

べつに、あなたをずっと思い出しているわけではないものの、この広くて狭い列島が大きく荒れた夜に、遠くの人は何を思っ  
て夜を過ごしているのだろうか。

こんなふうに、低気圧が脳みそのエキスを吸い出してしまった朝は、悲しくもないのに涙が流れるうたに目が止まってしまう。

どうしても好きで涙が膝に落ち　時実新子

-----

(書きかけの手紙がありました。出す当あてのない流離いの手紙)

朝夕、ひんやりとする日々が戻ってきました。私は秋が好きです。この季節になると、ぴりりと冷たい空気が肌に触れるた  
びに、勇気をモリモリと付けて今から百年の恋の成就にゆく朝のようにからだじゅうがピンとなります。

とくに朝、夏のように白く色褪せたような太陽の光ではなく、薄く赤みがかかった光が住宅街の屋根の隙間から我が家のあ  
たりを照らし始めると、あれだけ嫌いだった太陽光線なのに、少しは浴びてもいいだろうという気になってしまいます。

(ここで断筆です。嵐のせいにしておこう・・・)

---

2005年9月 7日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## コーヒーをホットにかえる寒露かな

---

前略。

朝夕も時折りひんやりとする日があり、秋がやってくることを子供のよう喜んでおります。

高三の娘がまだ赤ん坊のころ、休日になるとその子をおぶって人影疎らな嵐山渡月橋のたもとへとしばしば散歩に出ました。憩いのひとときでした。

静かに秋を待ち続ける小倉山の峰に、霧のかかった朝もあったのが懐かしい。やがて一面をもみじに覆われる山々は、ひっそりとしていました。

きょうからモーニングコーヒー。ホットにかえました。

— — — — —

そんな書きかけの手紙を置いて、しばし考えにはまりゆく。

きょうは寒露。

昔を振り返って、あのころはよかった…と誰もが一度は口にすることがあろうかと思う。果たしてほんとうに昔は良かったのだろうか。

なかなか筋書き通りに行かない仕事。苛立ちを募らせながら、大いに愚痴を言い、投げやりにもなったこともあった。そんな日々がどうして今頃になって美化されてくるのだろうか。

端的に言えば、対岸まで急流を漕ぎ渡ったのは、あれは過去のことになったからだ。過去になったらもう二度と戻らない。急流に漕ぎ出すことはない。いや、今そんな勇氣はないというのが正しい。

一生懸命漕ぐ私のボートに、強くて重い抵抗成分となって襲い掛かる急流。私はこれに逆らい、激しく波しぶきを上げて自分に降りかかる些かの脅えも感じず必死だった。

理屈を書くのはよそうじゃないか。必死になることが少なくなったね、程度にしておこう。

— — — — —

それはそうと、旅の話はどうなったんだい。

ええ？

二週間延期だって。

ほんとに。

だって、二三日前から再読し始めた「道頓堀川」(宮本輝著)にどっぷりなんだ。

ひとりにしてくれ、読み終わるまでは。

---

【銀のマドラー・塵埃秘帖・寒露篇】

---

2005年10月 9日(日曜日)【[随想帖Ⅰ](#)】

---

## 空が悲しい〈霜降篇〉

---

あの旅の途中の青い空の下で、山の向こうの見詰めながら、目指す村に辿り着く夢を語った夏の日があった。道ばたに屈んで雑草を引き抜きながら、片寄せ合って二人で夢を考えていた。

そう、あの村のどこかで別れてきた女のことを、十年近くも前に棄ててきたオンナのことを、何を今更考えてみたころで始まらないじゃないか。悲しい素振りなんかやめてくれ。

あの旅を途中で切り上げて、二人でそこで暮らそうなんて、本気で考えていたんだけど、怖くなったのは、どっちだったんだろうね。

十年経ったらあの村で小さなペンションをやってるよ。美味しいキノコの料理をしよう。そんな会話を、今はもう誰も覚えていないだろう。

二人が目指した村にあれから一人で行ってみた。何もない寂れた村を確かめてみたかった。小さな神社の角を曲がって、ひっそりと山陰にある沼のほとりを通って急坂を降りると廃校があった。もう何年も誰も耕さなかった田んぼがあって、枯れた草が生い茂っていたよ。

ひとりじゃ旅に出られやしない。あいつがそこにいるようで。

鳥のようなオンナだったあいつを想うと、きょうの夕焼けは何故か悲しい色に思えてくる。

空が冷たくなるほどに、燃え尽きるように空が赤い。

鳥になれなかった俺を思うと、ああ、空が悲しい。

-----

【銀マドとは】

(※銀マドとは、銀のマドラーのことです)

---

2005年10月22日(土曜日)【随想帖 I】

---

## 真如堂のこと

---

結婚をする前の話でございます。休日になると市内散策に出掛けるのが私は好きでした。バイクのこともあります、多くはバスに乗って行きました。カメラを持って歩き回る格好でした。

マンションの上と下の間柄だったので、いつも私を追うようにうちのんがついて来ました。私は冷たいヤツでしたから、「興味があるなら付いて来てもいいよ」というような誘い方をしたんだろうな。ほんとうは一緒に行きたいくせに。

ちっとも優しくないので、お茶の一杯もご馳走したりしませんでした。バス代も割り勘だっただろうかね。うちのんに聞いてみないとわからない。

秋もすっかり深まったある日。その日は真如堂に行きました。といっても、真如堂というところを知っていたわけではなく、偶然にそこに行ってしまったというのが正しい。

京都大学の前に百万遍というところがあり、そこでバスを降りて最初は古本屋を探していたのです。でも、ちょっと入っていきたくなるようなところを見つけたんです。それが吉田神社でして、その中を通り抜けると、さらにどこかへと続く道があるのを発見してしまいます。

京都の路地は狭くて、家並みに風情があります。ちょっとしたものに生活の一面を垣間見ることができるので、すぐに寄り道をして、追いかけているとどこかに迷い込んでしまいます。簡単な市内地図を持っていますので照らし合わせながら、緩やかな坂道を登って行きました。

真如堂はひっそりと佇んでいました。もみじが綺麗だと、近頃のパンフには書かれていますが、私が見た風景は銀杏の落葉が石畳に敷き詰められた参道でした。

うちのんの写真を何枚か撮り同じアングルで私の写真も撮ってもらいました。あとでわかったのですが、うちのんはそのときの1枚を自分のお見合いの写真に使いながら、大きく引き伸ばした私の1枚も大事に持っていました。それを結婚する頃に宝物のように見せてくれました。

本当はお見合いなどしなくなかったのでしょうか。それとも、いい人がいたら行っちゃおうかな、と思っていたのでしょうか。いずれにしても、二人が一緒に1枚に収まっている写真ではなく、別々に同じ庭を背景に写っています。

今年、娘の受験があって京都に行くことになりました。だったらみんなで出かけようか、ということになりかけています。

それでふと、夫婦で顔を見合わせて思いついたのが真如堂の再訪です。本当は誰にも教えたくない素敵なスポットなんです、なかなか感動的な紅葉です。二十数年も前の景色しか記憶にないけど、今でも昔のように静かだろうか。

---

2005年10月29日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## ぬけがら…(続・JR飯田線)

---

疾走。重松清。

東京のホテルで読み終わりました  
そのときは、そうか、やっぱし…って感じだったのに  
明かりを消したらワンワンと泣けてきて  
明かりをつけてホテルの便箋に  
表裏一杯の感想を書いて

それが連日で  
仕事が終わって

JR飯田線に乗っても  
列車の行き違いなどの時間待ちとかでも  
もう一度、繰り返して読んで泣いて

登場する女性たちが3人とも私の人生にオーバーラップするような人がいて  
その子たちを思い出して、  
凹んで、  
泣いて

そんなことを繰り返しながら  
朝の8時から夕方までローカル線に揺られて

名古屋駅が近づく満員電車の中でも  
かまわず泣いて

----

そう、ベートーベンの第九のように  
その第四楽章に相当するところ(下巻 P259 あたりから)を何度も繰り返し読んで  
こんな読み方など今までどんな作品でもしなかったのに

----

「エリは『聖女』だったんですよね、遠藤さん、遠藤周作さん…」  
なんて、そんなことを呟いていました。

-----

JR飯田線。  
いい旅でした。  
思い出が多すぎて、  
疾走とのオーバーラップが強すぎて…

ただ今  
私は「ぬけがら」のようになっています。

## 誰が・誰を・襲うのか

---

大雪と風の被害のニュースが跡を絶たない。猛威をふるうという言葉のイメージのように、牙を開けて襲い掛かってくる姿を想像する。

「誰が」「誰に」襲い掛かるのか。

地球が或いは地球という大いなる自然が、あとからやってきて勝手放題の人類というモノに対し、怒っているのではないか。そう考えた人も少なくはなかろう。

二酸化炭素をまき散らし、地面を掘り起こし、水を濁らせ空気を汚しているのだから反論の余地は一切ないはずだ。

みんなの英知を絞って、私たちの地球のために…と声高々に叫ぶ人がいる。一見正しそうだが、ちょっと待って欲しい。もともと、「私たちの地球」じゃないのだ。地球に住まわせてもらっているのだという畏敬の念を忘れている。

全てはここから改めねばならない。

海水の温度が上がっている、局地的な豪雨が増えている、などの警鐘に混じって、豪雪、水不足、異常低温や異常高温のニュースも珍しくない。それを受けて、学術的なあらゆる人々の意見が飛び交う。科学技術者は、この百年で自信をつけた技術をさらに発展させて解決したいという。自然系の人々は、地球の本当の姿を取り戻すのだという。経済学者は、環境問題の解決と経済学の両立を叫び、哲学者はあるときに反論をする。

数々のイデオロギーがぶつかっても新しいものが見えて来ない。それは、全ての理論者たちが全てのプライドを懐にしまって、地球の怒りに耳を傾けることから始めるべきなのだ。

さらに言ってしまうと、長い歴史の果てに必ず人類は滅亡の危機にさらされるのだとすれば、いっそのこと、宇宙の中に悠然と存在する地球に大いなる自然を返してしまっただろうか。

大規模な停電が発生する。電気がないと困る事態が幾つも連鎖的に起こってゆく。自分たちの暮らしのために、自分たちが潤うために考え出したものばかりが、次々と静かに侵されてゆく。

自然が襲い掛かる姿には激怒する震撼もなく、俄かに人が築き上げたちっぽけな知恵に、静かに襲い掛かる姿には、哀しさをおぼえる。

人は考える能力を、他の動物たちよりも多く備えたための宿命なのかもしれない。

ただ、その暗闇の夜の中で(私の場合は行動に大きく制限がかかる時間を強いられながら)、静かに社会のあるべき姿を考え、もっと不自由な社会で暮らすという道を選択するしかないのではないかと、ひとつの確信に似たものを持ちました。地球と、人間以外の動植物たちが築き上げた自然系の輪の中から、はみだしてしまった人類。それがオマエたちのプライドを傷つけるのですか。ああ皮肉なことです。

停電の影響で不自由を強いられた方々、度重なる風雪の被害を被られた方々には、お見舞いを申し上げます。

---

【塵埃秘帖 平成17年・年末号】

---

2005年12月26日(月曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 年の初めに考えるー痛み(2)ー

---

痛み [〈2003年1月下旬号〉](#)に続いて追記をします。

ー 平成18年元旦

Y院長は後に県立病院を退職し、地元で内科医として個人医院を開院した。

私の母は大腸癌を切除をしたりしながらも生き永らえて、糖尿病や心臓疾患など老人病のデパートのような状態で生きている。

1キロ以上の道を歩いて駅まで行き、2時間半おきにやってくるJRに乗って病院に通うのは、肉体的にも精神的にも大きなストレスとなっていた。通院を怠ることは即ち自殺行為である。

そのときY医師の医院が近所に開院した。主治医をこちらに変更することを口外したのを聞きつけた次男(私の弟)は、Y医師に命を任せることに強く反対をしたという。

しかし、現実には感情論では済まされない。近くの医者が一番だといって母はありがたく診察を受けている模様だ。

何処に間違いがあって、何が正しく、あるべき姿とは何なんだろうか。

母の余命は決して残り多いものではない、と思う。

今、何が、できるのか。

-----

[父の形見](#)

---

2006年1月 1日(日曜日) [【随想帖 I】](#)

---



## 脳内出血

---

イスラエルのシャロン首相の重篤が続いている。一刻も早い快復を祈りたい。

私の父も脳内出血だった。逝くときは、心臓が相当に弱っていたし、喘息も出ていた。高血圧の治療も続けていたが、予想通りのときを迎えることになった。この病気のひとつの特徴だというのが、死ぬ間際には胃の内部からの出血も認められたという。死因は心不全。9年前の1月のことだ。

本態性高血圧のため若いときから血圧が高く、薬漬けだった。高齢になってからは鼻血が頻繁に出たという。鼻血が止まらず1キロほど離れた消防署まで自力で行き、救急車に乗せてもらって隣市の大きな病院まで搬送されたこともあったという。

私は血圧計測を専門とした時期もあり大勢の脈波を聞いてきたにもかかわらず、親父の脈波を聞くために聴診器を当てたことは一度もなかった。これも皮肉な話だ。

救急車を街で見かけると、搬送者を案じる。しかし、仕事などで急いでいるときに車の流れが止まればイライラを感じる。危篤人を心配するものの、一瞬、苛立ちを感じる。だから、大怪我(私もちよいと10針ほどの怪我で)でお世話になったことがある人でなければ、搬送者のことなど思わないのが普通だろうとさえ思う。

多くの人はそんなモノにご厄介になる必要はないだろうし、なりたくもない。まさか、自分にご厄介になるなど思ってもいないだろう。

そこで、乗っている人の気持ちを本当に理解できるのは、乗ったことのある人だけ、、、ではイケナイ。

何も救急車の話だけではない。全ての良いこと、悪いことについて、自分は関係ないんだから…と思っている人が多い。一般論として、そのような「突然」を経験して初めて、からでは遅すぎる。(地球温暖化は「突然」ではないのだが…)

「日本国民が全て、失業を経験すればいいんだ。」という私の暴言には根拠がある。

そしたら、社会保険も介護も社会道徳も教育も医療も、あらゆる問題の真髄に、人々は目を向けるようになれるから…。(だから、ほんとうに失業すればよいと思っているわけではない)

気持ちが伸び切って緩んでしまって、満足してしまっている社会を、「巻き戻してゆく」ことは辛いことなのですが、人々は自分だけの満足を棄て、余分な富を棄て、便利を諦め、さらに、私個人的には、科学技術の生んだITというものが撒き散らす便利さをほどほどにしなくてはならない、と強く思う。

今、現代社会は「脳内出血」をしている状態なんだけど、そいつを搬送する救急車を見て、国民は「イライラ」してるんですよ。最高に滑稽ですよ。

## 枯野

---

よく眠る夢の枯野が青むまで 金子兜太

私は夢をほとんど見ない。  
眠ったら朝までまっしぐらで、眠っているときの喜びはない。  
したがって、どんな寒い朝でも起きるのが嫌だと思ったことはない。  
目覚ましで起こされるのが嫌だ。  
自分で自然に起きます。  
時計もない暗がりの部屋を出て階段を下りていると、  
よめはんの枕もとで目覚ましがなっている・・・  
私の体内時計はいつもなかなか正確だ。

若いころは夢をよく見ました。  
寮時代、薄っぺら壁を隔てて競い合っている友が、おまえの寝言はやかましい・・・とよく言った。  
常に闘っていたのかもしれない。

同じ夢でも、あれになりたいとか、これになりたいという夢も盛んに見た。  
受験生の頃には、脳外科医になりたいと真剣に思っていたときもあった。

共通一次とかセンター試験とかいう時代ではなかった。  
3月3日に1期校。20日過ぎに2期校の試験があった。

でも、もうあのころのことなど忘れてしまったな。  
もしも、私が試験に受かっていたら私にはまた別の人生があったのだろうか。

今の私は、「私は私で、それ以外の何者でもない」、というような結論を抱いている。  
学歴でもない。資格でもない。世渡りでもない。  
私は私を欺くことはできず、また、他人も欺けない。

明日からセンター試験です。  
この一週間で私が家にいる時間にあの子が机に向かって勉強をしている姿を一度も見ない。余裕とはいえないと思うが。。。。

私より一枚も二枚も上なのかね。

アイツには、枯れ野が青む景色が見通せるのだろうか。

-----

塵埃秘帖【大寒篇】

## こうなご

---

子どもの頃、今の季節になると「こうなご」が食卓に並んだ。春を告げる味覚で近頃は有名になったものだが、昔は庶民の、普通の食べ物だった。

魚は朝、港にあがったモノを行商のオヤジさんが運んできた。いや、オヤジさんと、子どもの頃にはそう思ったが、働き盛りの三十代だったかもしれない。

夕刻になると風呂の薪を家の軒ウラから抱きかかえて風呂焚きをするのが子どもの仕事だ。釜を覗き込んでいるところに自転車のブレーキの音がキーとなって、行商の「ヒゲさん」はいつも現れたのだった。

きっと「今日は鯖の美味しいのがあるよ」とか「かますごがあるよ」などという会話が弾んでいたのだろう。

卵は小屋の鶏が産んでくれた。お乳はヤギから搾った。魚はヒゲさんから買った。肉は…、あのころは肉というモノをそれほど食べなかった。祭事があると小屋の鶏を猟って食べた。年に一二度のことだったと思う。

冷蔵庫がない家庭がまだポツリポツリとあった。しかし、そんな理由で、家庭に冷蔵庫は不要だった。

こうなごを食べたいなと、ふと思った。つい先日のことだ。

帰りの車の中だったか、休み時間だったか、定かではないが、しょうがをすって、醤油をかけて食べるあの味が脳裏を強襲したのだ。寒波が緩んだせいだったのだろうか。

これを食べると春が近いとしみじみと思う。「ああ、こうなごを食べたい」、そう無性に思い、家に帰ったら「明日にでも買っておいてくれ」と言わねば…と復唱していた。

しかし、

帰って食卓に着いたらうちのんがニコニコしながら「きょうイイモノを見つけてん」と言いながら、そいつを出してくれたときには驚いた。

子どもの頃に父がこの魚を美味そうに食っていたのを思い出す。子供心にこんな魚のどこが美味しいのか、と不思議だった。母は、美味そうに食う父をどんな眼差しで見っていたのだろうか。

そう思いながら、私はうちのんの視線を見つめ返して、確かめた。

【塵埃秘帖・2月上旬号】

▼ ちかごろ、仲間由紀恵さんに筒美京平さんが曲を書いたそうですね。

筒美京平の大ファンとしては、気になるのですが、ステレオの前にじっくり座ることが少なくなったのを、ちょっと嘆く。

▼ お彼岸ですね。どこかにも書いたけど、うちのんの母の命日が14日でした。その日は私の退院の日でもありました。29年前の、卒業式の前日に逝ってしまった母を思うと、娘があ那时的年齢にちょうど達したこともあって、想いは限りなし。

▼ お彼岸ですね、その2。あした、京都の実家へお墓参りに行ってきます。もう8年も過ぎるんだなあ、父よ。あなたの誕生日は3月20日でしたね。18歳で家を出てしまった僕だから、ほとんど一緒に暮らさなかったのに、どうしてこんなに似てるんだろうか。枕元にあった日記に、あれこれと書いていたのを見つけたことがあった。今の私の日記みたいだった。それを今になって思い出しています。私が形見だ。

▼ 義母の命日が終わると、今度は私たち夫婦のお祝い。16日の日記に少し触れましたが、この日は結婚記念日でした。みなさんの日記を拝読しているときに、夫が（または妻が）家族の誕生日や結婚記念日などを忘れている…と書いてらっしゃることがありますね。結構不思議です。我が家では、22年間で、誕生日と結婚記念日、命日を忘れていたことは、誰にも、一度もなかった。

▼ よめはんは結婚前は暗い子だったらしい。数年後に女子大の同窓生で集まったときに「結婚して明るくなった」と言われたらしい。これは、私が、明るくて、エロくて、デブで、大声で、グウタラで、酒飲みで、頭に毛がないのに髭を生やしてて、70年代の歌謡曲を熱く語れるなどに起因するのか。

▼ 鼻血事件のそのあとで。退院してきて、ちょっとそのときの様子をmixiなどに書いたら、なんだか白い視線が飛んできているようで、気にかかります。このまま私は深海に沈んでしまうのではないだろうか。

▼ メルマガ、20日発行します。

## 水ぬるむ春分に ― 塵埃秘帖 春分篇

▼ 耕した真っ黒の土の上にみるみるうちに粉雪が積もってゆくのを何度も見た冬だった。海拔100メートル。伊勢湾が一望できる高台の中をゆく農道の周りは緑の麦畑に変わっている。その数センチの芽がそよそよと、名残惜しく吹く北風にゆれている。自然は遅いと思う。ひばりが天高く鳴き、うぐいすが下手ながらさえずり始めている。

▼ ちょうど24年前の今ごろ、私は京都で働くために京都・嵯峨に住まいを決めた。あのころ、御室にあったちっぽけな本社の建物が現在は京都駅前にそびえる高層ビルに変わった。自らの名前の由来するところである御室の地を離れることに対するある種の苦悩も推察できるが、常に新しいモノを追い求めようとし、技術者を大事にする社風をも鑑みしてみるなら、それは素晴らしい判断だったと思う。移転のころに、私は別の会社に籍を置いていた。

▼ その会社は大阪の門真市に本社を置いていた。京都で9年お世話になったあと、こちらで12年ほど勤めるのだが、社風は雲泥の差であったので、そのころのことは技術者として思い出したくない。世の中にはモノやコトの真髓が決して立派でなくて、人の心が腐っていて、もはや死んでいるに等しいと思わざるを得ない企業であっても、社会は「誤って」立派な会社だと判断することを知った。同時に、息をさせたまま人間を殺してしまうことが可能なのだということも知った。

▼ 一生懸命に誠意を持って世の中に尽くそうと思う人に、少しでもこのような歪んだ社会構造の事実を伝えたいと思うが、それは私のような無力の小人には不可能だ。

▼ ねえ、先生。こんなとき、先生は私にどう進言してくださるのでしょうか。「自分で考える、それがキミの使命だよ」と仰るのでしょうか。私が京都に来るとき、先生はポンコツのアルファロメオに私たち研究生を乗せて駅まで送りながら、もうすぐ(子どもが)生まれるからこんなクッションの悪い車ではなく家ではセドリックに乗ってるですよと仰ってられた。息子さんが娘さんかさえ知らないほどご無沙汰してますが、その子も今はきっとマスターあたりにいるのじゃないでしょうか。先生、白髪が増えましたね。

▼ 嵯峨の住まいを決めたときに私はうちのんと出会いました。嵐電の通る音が部屋にガタンゴトンと響いてくる6畳2間の部屋でした。電車の音にはすぐに慣れてしまいました。遠くの友人と電話で話すときに電車が通り、その音が相手に聞こえて「今電車が通ったね」と言われても「そうだったかな」と気がつかないほどになっていた。愛着の深い部屋でした。大文字の鳥居だけでなく東山の犬の字まで見通せた。

▼ 娘を連れて嵐山へ散歩に出かけたときに、竹やぶの中で人影が動くので踏み込んでみると映画のロケをしていた。2歳ほどだった娘はときどき「キヤー」とか「ガアー」とか叫ぶのですが、スタッフの向こうから髷を結った役者さんが近づいてきて「お嬢ちゃん、ちょっとの間だけ静かにしててね」と言う。千葉真一さんだったのです。私たちの世代ではキーハンターの主演の千葉さん。娘にその話をしても通じないのは仕方がない。私たちが住んだマンションに、この4月から娘も住みます。中古の文学をしたいという。私のように古刹をたずねて嵐山を歩きまわる日も近いのだろう。

▼ この子の通う大学が五条坂を下がったあたりにあります。私が才社に居たころに、この女子大を卒業して新採としてやってきた子がいました。「春眠暁を覚えず」、この先を思い出せず苦心していた私に「春眠不覚暁/処処聞啼鳥/夜来風雨声/花落知多少」とすらすらと暗誦してくれたのが強烈な記憶にあります。花は散るのだ。新しい芽を出すために自らを棄てるのだろうか。人間は、自然という奥深いものの、ひとかけらにも満たない小さなものだ。なのに自分が一番だという錯覚に陥っている。





---

2006年3月21日（火曜日）[【随想帖 I】](#)

---

## 漂う

---

サクラの花は、それ自身が滅びるために生まれてきたのではないかと思うほどに儚い。  
春という陽気に浮き足立った人々を引き立てて、気づかれぬ間に散ってゆく。

秋の落ち葉が、そっと音を立てずに老木の枝から離れ、数秒というスローな時間をかけて地面に辿り着き土に還るのと違って、サクラは風に吹かれてゆき、自らの幹のたもとでは土になれないのかもしれない。

それも自然の摂理なのだと思うと、なおさら、哀しい。

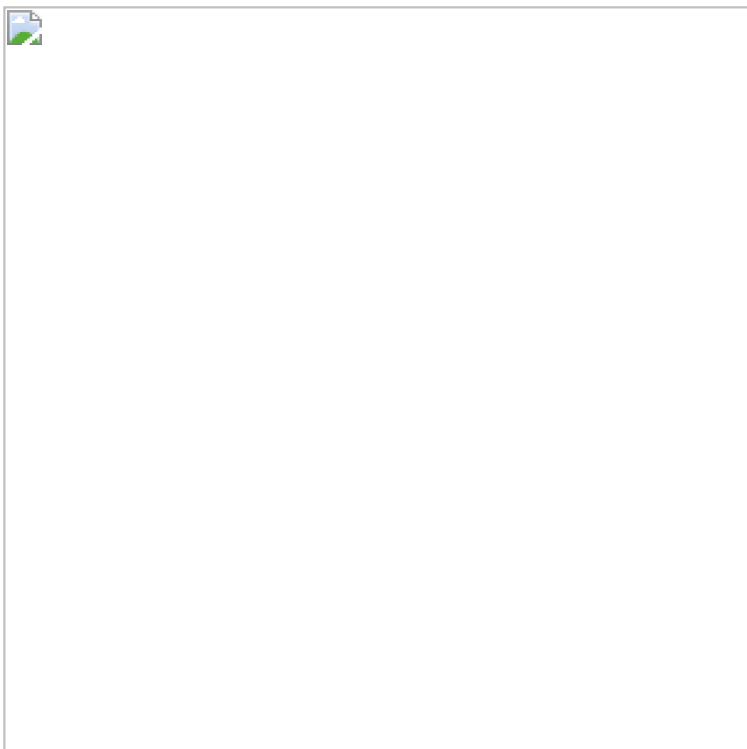
生ぬるい空気とピリッと冷たい空気が混在して漂っているような春の気配の中に、誰にも見つめられることなく咲く山あいのサクラを見つけると、長い1年を労ってあげたくなる。ささやかな自己主張をわかってもらうことでサクラは満足するのだろうか。

どこからも力を作用されないで自在に漂うには、春風に吹かれるのが気持ちよい。恋をしたくなる。

散歩中



サクラ



【参照先】

---

2006年4月 8日（土曜日）【随想帖 I】

---



## 泣き言を聞いて叶わぬ春の雨

---

大雨が降りました。(11日)

国道が危険回避のために通行規制をしたり通行止めをしているニュースが車のラジオから流れてくるのを聞きながら家路を目指します。

いつも通りの時刻にいつもの河口あたりで海に一番近い橋を渡る。晴れていればまん丸の月が出ている夜だから、潮が今から満ちてくるはずだ。

道路は冠水しても海は決して溢れることがない、という当たり前のことが妙に新鮮で驚くべきことに思えて、それに気づいている自分がエライと思えてくる。

だから、この激しい雨に車ごと流されてしまうのではないかという不安が襲ってきても、海にすがってれば流されることはないのだという安心感が湧く。

いつもならば、暗闇の向こうに広がる海原に満月が映し出されるところだろう。でも、今夜はお預けだ。(この夜は十三夜あたりだったかな)

信号待ちでも、フロントガラスが雨に打たれているのを何も考えずにぼんやり見たりしている。

「どしゃ降り」が昔を思い出せる出来事ってのは、どうして、悲しく、寂しく、人に言えず、聞いてもらえず、不倫で汚く、しかしながら熱くて燃えるようなモノばかりなんだろうか。心がチクチクする…。

泣き言を聞いてもらうのは今度の満月の夜にしよう。

(4月11日の夜のこと)

---

2006年4月13日(木曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 連休余話

---

▼「花も嵐も」は、まだまだこの先は長く、34話まで書き終わるにはしばらく時間がかかる。のんびり行こう。でも、どこかに残しておこうと思って、書き写しています。

▼GWはいい天気ですね。ど真ん中の5日に仕事が入っています。皆さんを相手にヤクザな公務なもので…。

▼そうそう、もうすぐ、あと数ページで「胸の香り」(宮本輝)を読み終わります。窓を開けて爽やかな風の吹き込む初夏に、この作品を読み終わることが、清清しくて嬉しい。

▼いいしんじ「麦ふみクーツェ」をどうしても読み進めない私は、多くの読書人のオススメもあってどうしても読みきりたいと悩んでいたのですが、心が揺さぶられることを望んでいたのでしょうか、宮本輝と熊谷達也に戻ってきてしまったのです。

▼そもそも、この短編集に手を伸ばしたキッカケは、マイミクのみほこさんが[ブックレビュー](#)を書いていたからでした。短編集ということで少し躊躇いを私は持っていました。短い故のインパクトの薄さを好きになれず、重松清の短編を読んで少し先入観を変更しつつあったものの、どっしりと重たい宮本輝の作品もってして、短編はどんなものなのかが想像できなかった。

▼怖いものを触るように、、、という感じで、みほこさんのオススメの胸の香りを読み始めたのです。しかし、何も心配することはありません。宮本輝は私を裏切ることなく、むしろ細かいところまで行き届くように気を使って作品は書かれています。一字一句に作品への想いが感じられる。

▼ついつい、熱く語ってしまう癖があって、多くの宮本ファンのかたとマイミクにして戴いてきました。

本が好きなかたで、宮本輝がまだというかたは、ぜひ読んでいただきたい。

また、宮本輝ファンでありながら私のマイミクでない人がいらしたら、ぜひともマイミクになってやってください。

▼そんなことを書きながら、娘にはまだ宮本輝を薦めたりしていないんです。理由は特に無いのですが、まだ子どもだろうと思っている点もあるし、この人の書く物語をしっかりと捉えることができるようになってから自分の中に生まれるインセンティブで読み始めて欲しいとも思っているのでしょう。

先日も、「mixi、検索ランクでTOPやろ…」と言って私のPCを覗き込んでいましたから、ここにやって来る日もそう遠くないのでしょうかねえ。

---

2006年5月 3日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 前年・同月、、、（子どもの日篇）

---

はたして、わたしは、どれだけ進歩したのだろうか。（[あの日から](#)）

mixiにも、ブログにも書き続けて、自問を時時刻刻と繰り返しながらも、着陸場所を見つけられずに浮遊するグライダーのようだ。

そんな自分に、  
カツを入れるのは、紛れもなく、逝ってしまっている父と、まもなくそこに行く母の小言だ。

何を小癪な…と言われるのだろうか、私の意地で母の日には、杖を買ってゆこうと思っている。

何と礼を言ってくれるかは想定していない。その一言に  
「まあ、僕への形見が欲しかったのよ」  
とでも応じようか、と考えている。

子ども日は、「おとなの日」でもある、と5日の読売新聞(編集手帳)は書いている。  
母は私の母であり、私はいつまでも母の「子ども」である。

「オマエは船乗りになりたいというのが口癖だったな」と昔を回顧するのが口癖の母に、  
「泳げなかったのでも簡単に諦めたが、空が飛べない人だってパイロットになるんだから、諦めることも無かったのになあ」  
と返事をする。

近頃の私の口癖は  
「私は鳥だから空を飛べるんよ」  
である。それを聞いた家族が  
「猫やから魚が好きなん」  
の間違いでしょ。。

「いいえ、私は鳥です。ほら・・・」  
と言って、部屋の中を羽ばたいてみせる。  
「ニワトリは飛べません」  
と反撃を食らう。

その娘も京都に帰ってしまったので、おとなどうしで仲良くしました。  
だから「おとなの日」だったのだろうか。  
前年同月と比べても、精神年齢には余り変化が無い。

## 近づくところ

---

母の日に、母を訪ねた。

弟が杖を買ったというので、私はこれというものもなく、ケーキを買って行った。

弟が

「おばあさんにソックリになったなあ」

と大きく息をつき込み込みというほど、自分の母に似てきた。

ひとつの物があるところに収束するとき、その時系列パラメーターを  $n$  として、 $n \rightarrow \infty$  という表現をする。世の中のすべてのものが、この  $\infty$  (無限大) に収束するか、または、 $0$  (零、empty) に収束することが多い。

母は、限りなく、あるところに近づいているのだ。

人はそのときストンと終わりたいと願う。

この日に、実家の台所で、母から話を聞いた。

「なあ、うちのお父さんが逝くときには、どんなふうやった？」

「そうやなあー」

と、母は目を細めて話し始めた。

高血圧で、脳みその中のあちらこちらで血が滲んでいたのだろうか。

「その日の二三日前には既に意識がぼーっとしてたなあ。ビールが飲みたいと言うので、こんな状態で飲ましてはならんと思い、お茶をやったら、『ビールと違うやないか、まずいなあ』、と言うてやったわ」

「どこかが痛かったとか、そういうことはなかったのか」

と尋ねると

「そんなに苦しがることはなかったな。布団に入ってスースーと眠っていて、(父の実姉と三人で布団に入って)、向こうから姉さんが身体を暖めて、わたしがこちらから暖めていたんやけど……、姉さんが『なあ、仁(じん: 父の名前)、冷たくなっていくな。あかん、もう』、と言うて……。あれが最期や」

1998年に父が逝ってから、身近な人々の通夜を幾度も私は経験してきた。

次はお袋の順番なのかもしれない。

母の日に、私の母から父の最期話を聞いたことは、ひとつのメモリアルだったのかもしれない。

この日の夜に、「母の日やし、何かせなあかんのかな」と、娘からメールがあった。

「何もいらんやろう、電話だけでええ」

私はそう答えて、それで良かったのだと納得しておいた。

一步一步、大人になる。

人は、無限大にある場所に向かってゆくのだ。

しかしそれは、関数論では語れない。

## ブックバンド

---

懐かしい響きだ。そう思いのかたも少なからずおられましょう。私のよめはんも女子大時代にはときどき使ったという。想像してみるだけでその当時の電車の中の学生の様子が甦ってきます。今ではちょっと珍しい光景だ。

娘のPCをセッティングするために京都に滞在して、私たちが学生だったころの話に花が咲いた。

- ・GWが過ぎたら出席する学生数が激減すること
- ・梅雨に入るとさらに減ること。
- ・私なんぞはその減った方の側で、久しぶりに大学に顔を出すと

「よー久しぶり！試験のできはどうだった？」

と学友から声を掛けられ、

「試験があったんか…」

と肩を落としたことが数え切れぬほどあった話。

そのころ、講義のテキストを男子学生は、Madison Square Garden のスポーツバックに入れて持ち歩くか、または、ブックバンドで十文字に縛って持ちあるいていた。解析学概論、電磁気学演習、なんていう本を見えるように持ちあるくのは、ブランドかぶれの今の若者よりも颯爽感が高かったともいえるかもしれない。

しかしながら、私自身は時代の流行りには無頓着な奴で、一年中同じ服を着て二枚羽の下駄を履いて街へ出たような奴だったので、ちっとも格好良かったわけではなかったのです、決して颯爽とはしてなかった。汚い髪を肩まで伸ばし、1年ほどたつと手におえなくなるので自分で散髪をする(友人に頼むこともあった)ビンボーな学生でした。

PCをセッティングしながら机の上に置いてあった本 — それは図書館で借りてきた「潮騒」(三島由紀夫)だったのだ — をちょっと拝借して読み始めたら止まらなくなった。面白いというか、若者の心の普遍性をうまく書いているのが小気味よい。三島のことをこんなに深みのある美しい文章を書く人なのだと、若き時代には考えたりしなかった。つまり、文学作品の品揃えのひとつとしてしか捉えず、義務のようにして読んだのだが、私が大人になったのだろう、これを味わうことができるように変化しました。

三島の話から映画の話へ。そして、映画の主演であった吉永小百合、山口百恵と話に移り、三浦友和の話にまで及ぶ。(余談だが、)若きそのころ、わたしも(目の細いところが)三浦友和似ということで、実はそれほど似てないのだろうが、よめはんもその話に乗ってくれて「お父さん、、まあまあ似てたかな」なんて話をあわせた。

すみません。ブックバンドの話は出てなくて……。その話が展開して、いよいよです。

ただただ、懐かしき学生時代。

あのころの若者は、大学生という身分にある種の特権を感じていて、しかもそれを裏切らないように生きていた。ある意味で一途だったとも言えようか。

学内にはベトナム戦争反対集会の爪痕が残り、団結などというペンキの落書きのような文字も残っていた。

もちろん、パソコン、ケータイはおろか、電話も無い。風呂付きの下宿に住んでいるような奴は、親の甘い汁を吸って生きている軟弱者だった。就活なんていう言葉もない。

(語ればキリがないので書けないけど、そんな時代背景の中で)

ブックバンドは、若さの象徴であり、子どもらしさの表現でもあった。

もしも復刻したとしても、持ち主を外からしか表せない薄っぺらなモノにしかならないだろう。

いや、「今の若者自体が薄っぺらい…」と書いたらジジイになったのだと指摘を受けることになるのだろうか。

…というわけで、「娘よ、厚みのある人間を目指しなさい」、というような話をしたかったのだが。

PC買ったし、娘の mixi 参入も間近かね。

-----  
3日間、京都でまったりしていました。  
雨でした。

---

2006年5月20日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 1974年の5月31日のこと

---

大雨の日でした。

文化祭か何かの準備で帰りの電車が一本遅かったかもしれない。(1本=1時間です) だから、駅からの道を急いだんだと思う。

集落から集落へと小さな山を越える小さな切通しの峠道で、道路脇から飛び出した車と接触して転倒し大怪我をしました。高校2年でした。

雨が激しかったので、目に入ると痛い。だから、うつむき加減で坂道を下ったんでしょうか。脇から出てきた車に気づくのが遅れ、右ひざから足首まで40針ほどを縫う怪我をしました。

事故の状況のことは、機会があったらどこかで書きたいと思いますが、今日は、あの出来事にまつわる読書の話をする。

大雨。

事故。

そういう、ありふれたハプニングが、幾つもあった、私の人生の筋書きをねじ曲げてきたのかもしれないな、とつくづく思います。

元々は、遠藤周作さんの「どっこいしょ」という本の出会いを書いたのですが、5月31日のことが絡まっていますし、自分のために今日の日記にアップしておこうかなと思ったのです。

「どっこいしょ」のレビューにしてもいいかなとも考えましたが、そちらには既に別のことを載せていましたので。

-----

あのころの私は国語が嫌いで、決して活字というものを好んで読みませんでした。ところが、おかしい勘違いをしている友だちがクラスに一人おりまして、彼のおかげで人生が変わってゆくのです。

彼の名前は宮崎といいました。毎朝、電車の中で一緒にバイクや車、タベのテレビの話をする仲間でした。休日には近所をバイクで走り回る親友だったのですが、私が読書好きだと思いこみ、さらに遠藤周作のファンだと思っていたらしいのです。

高校二年の五月三十一日の夕方、下校途中に私は車と接触事故を起こしてしまいました。バイクは破損し右足の脛を四十針ほど縫う大怪我を負い、六月と七月は入院生活となりました。

一週間ほどして宮崎が見舞いに来て単行本を一冊差し出し、「オマエは本が好きやろう、遠藤周作が好きやろう」と言うのです。そして「どっこいしょ」という分厚い本を私にくれたのです。遠藤周作という作家はこのときに初めて知りました。そして、宮崎が勘違いをしていることにも気づきました。

その本は、病院へ来る途中で買ったらしく安っぽい袋に入れられ、彼はそのまま私の枕元に置きました。何でも言える仲だったので「俺はお前が思っているほどに本が好きじゃないのだ」と白状したかもしれない。傷口の縫合直後で、あと一ヶ月は安静だったので「まあ、そのうち読むわ」と返事をしたかもしれない。

そういうわけで「どっこいしょ」は、枕元に置かれて幾日も過ぎ、退院してからも読まれずに棚に積み上げられたままとなり、やがて、宮崎からの見舞品であることさえも忘れられてしまうのです。

私は二学期から学校に復帰しました。宮崎にとって、私は読書好きな友人のままです。そして毎朝、彼と一緒に電車で通学し、バイクや車の話をする。だから、二人の間にはそのおかしい勘違いが続いたままとなっていました。

それから一年後の秋、十一月十四日の夜の事です。彼は取りたての免許でドライブ中に運転操作を誤り海へ転落してしまい、あっけなく命を落としてしまいます。きっとそのときもまだ、「どっこいしょ」は読まれぬまま本棚にそのまま置かれていたと思います。

私は受験生でした。葬儀が終わり、秋が過ぎて時雨の冬がやってきて試験の時期が近づくにつれて、見舞いにもらった本のことも宮崎自身のことも次第に頭の片隅に追いやってしまいました。

受験は失敗でした。故郷を離れて上京し一年間の浪人時代を始める私は、めまぐるしく変化する時間に埋もれて、親友を慕うことや読書のことなどは、あとまわしの生活を送り始めます。

一年が過ぎて大学生になる時期が来ました。新しい下宿に引っ越した日、荷物の山の中から色褪せた「どっこいショ」を発見します。宮崎との思い出を呼び起こし遠藤周作と再び向き合うことになった一瞬でした。「どっこいショ」が私の手元に贈られてから二年と数ヶ月が過ぎていました。

遠藤周作と高二で出会いながら作品に触れるのはこのときが最初です。つまり、私の読書人生はこのときに第一歩を踏み出したことになります。

ちょうど偶然にも一般教養科目で文学を履修します。先生は斎藤末弘さんというかたで、先生のことにはさして興味を抱かずに履修しました。斎藤先生は、キリスト教文学などの作品群をピックアップし、太宰治を始め椎名麟三、遠藤周作の講義をしてくださいました。

「きょう、これから遠藤と一杯飲みに行くんだよ」などと、ちょっと自慢めいた話もしてくれました。

「ホラ吹き遠藤って言われるけど、ほんとうでねえ」

電気通信工学科でしたので、一般教養の文学は卒業のためのどうでもいい授業で、少なくとも大多数の学生にとっても簡単に単位をもらえるお得な講義でした。

しかし私は、専門の講義をサボることはあっても先生の文学講義は熱心に聴いてしまうようになってゆきます。それは斎藤先生の熱意の溢れる話と椎名麟三や遠藤周作がもたらすテーマに魅力があったからでしょう。文学作品を探して母校周辺の古本屋を散策する習慣もこのころ定着しました。

そのころの遠藤周作には「沈黙」や「イエスの生涯」という代表作があり、「おバカさん」「ユーモア小説集」という馴染みやすい作品も人気でした。

私がこれまで幾度となく読み返し、そのたびごとに涙を誘われる「わたしが・棄てた・女」との出会いもこの時期です。

「なあ、君たち、『棄てる』という漢字はこう書くんだよ。この漢字はなあ、紙くずを丸めて屑籠に棄てるときに使うんだ。」

斎藤先生がそう話していらっしゃるとき、熱烈な遠藤周作ファンになってしまう今の私の姿などは想像もできませんでした。

読書人生を振り返れば「どっこいショ」だけが特別ではない。けれども、見舞いに宮崎がくれた「どっこいショ」の意味が理解できる年齢になって、斎藤先生や遠藤周作との出会いからすべては始まったのだという深い感慨が滾々と湧いてくるのです。



## 澆刺と雑草伸びろや梅雨の入り

---

× 澆刺と雑草伸びる梅雨の入り  
○ 澆刺と雑草伸びろや梅雨の入り  
と改めました。どうでしょうかねえ。

梅雨入りをして数日が過ぎた。  
晴れる日もあれば、じめじめとした日もある。  
人にはそれぞれのなりわいがあって、雨を喜ぶ人もあれば恨めしい人もありましよう。

晴れの週間予報が出ていたので、きょうこそはと期待していたのですが、朝から渋々と雨が降っています。

いかにも梅雨らしい。

そう言えば、子どものころの梅雨といえばこんな日ばかりだったような記憶があります。でも、きっと、事実はそうではなく、子どもは外で遊びたい一心だったからマイナスのイメージが強く残っているのだらうと思います。

少しの時間でも雲が切れて雨がやんだら外に出かけたころと違って、このごろは部屋で横になって本を読んだりすることが多いかな。

— — — — —

あと、

■ 「山頭火句集」(ちくま文庫)をよむ 銀マドへ続く

---

2006年6月11日(日曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## やがては消えゆくため息を残す

- 寒風が眠れぬ夜の窓揺する
- 弁当で背中も温し初雪や
- 手鏡にうつろう紅や夜寒かな
- 燃え尽きて裂けても石榴の赤さなり
- 砂浜を駆けて青春ごっこする

— — — — — — — —  
— — — — — — — —

きままに俳句ingのコミュが閉鎖ということで、自分の名前を検索して辿ったら5つの作品が出てきた。

ゴミのようなものであっても、自分の、自分らしさを表しているのが手にとるように分かる。

私の作品に優劣は無い。

優劣と言えば……

そんな言葉の概念が存在しなかった大昔、人々はホンモノのゆとりと持ち合わせて、本当の意味の「ロハス」な暮らしをしていたのでは無かったのか、と思った。

どんどん馬鹿になる地球人たちよ。一度は減びなさい。

— — — — — — — —  
— — — — — — — —

(2005年12月06日18:04)

11月下旬に京都に行って、  
そのあと一度、家の近くの海を見に出かけたくらいで、  
硝子越しに陽光を浴びてぼんやりしているのがいいです。

- 寒風が眠れぬ夜の窓揺する

先日、すごい風が吹きましたね。

— — — — — — — —

(2005年12月15日22:33)

- ◆ 弁当で背中も温し初雪や          ねこさん

明日は一年で一回だけ、  
車を置いて汽車で仕事に行く日。

一年に一回だけ着るコートが暖かい。

背中の中も暖かい。

— — — — — — — —

(2005年11月03日09:21)

- ◆ 手鏡にうつろう紅や夜寒かな      ねこさん
- ◆ 燃え尽きて裂けても石榴の赤さなり      ねこさん

ちょっと言葉の遊び感覚で…

— — — — —  
(2005年06月24日09:01)

◆ 砂浜を駆けて青春ごっこする (ねこ作)

---

2006年7月 2日 (日曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## 疲れる・棄てる・減じる

「mixi疲れ」のような話を、やはり「マイmixiな人」が書いていたので思わずコメントを書いた。そのことをベースにあれこれと考えた…。

私にも退会してしまったマイミクさんが何名かある。「いろいろ事情があつて辞めます」という連絡がメッセージで届く。事の真相はなんだろうかと思ひ慌ててメールの返信をしようとすると既に連絡が取れない。

最近では立て続けに2件そのような事例があり、このケースでは、連絡先、検索の手掛りなど一切が残っていなかった。楽しいときはそれなりに盛り上がりワイワイガヤガヤとやるのだが、消えてゆくときはアッサリと消える。忍者はドロンと消える。まさにそのモノだった。

何も急に消えなくても、名前や連絡手段くらい教えておいてくれればいいのにと思うのは私くらいのものなのか。寂しいともいえるし、現代のネット文化の特徴を表す重大要素であるともいえようか。

やっぱし、名前を知り、顔も知り、話もして、、、という付き合いのある友は、10年便りが途絶えても、どっしりと友だちだと思う。まさに、音信のないのが元気の証拠なのだ。その点で、ネットの友は軽くて薄い。上辺だけで友達になったような錯覚を味わえ、賑やかに活動しているとそのひとときは相当に楽しい。

本心を慎重に隠しながら最大利益を追求するような社会の様々なモノの姿を思い浮かべる。それはまさに現代社会の人間関係、企業と個人の関係であるのではないか。

このような「関係」がネットまで浸透来たまでの順序は逆で、社会が現物主義、実利主義を押し通し、合理的な経済が大手を振って歩くようになって、それに便乗するようにネット社会や情報至上観念が生まれてきたと考えてよい。携帯電話の普及もあたかも自然の成りゆきのようでありながら、何処かの誰かに嵌められたという感が強い。

グーグルで検索していとも簡単に情報を入手できる。グーグルやヤフーなどを使用した検索によって私たちが得る情報というのは、指数関数的に増加する閲覧数の上層20%程度である場合が多いことは容易に想像できながらも、その入手した情報をそのときに完璧なものとしてデジタル化してして頭にインプットする人たちが溢れるのには少し首を傾げたい。

そういう人を情報を上手に活用する人と称し、そこにはマイナスイメージは無い。情報を調べ出すことがあたかも必須のようになり、そこに散らばった知識を連結させて雑学のような知識を持ち合わせることで現代社会を生き抜くリテラシーだとまで言おうとする人が居るのも事実だ。

(TVのクイズ番組も少しずつ様変わりして、このようなどうでもいいような知識の順番をクイズのステージにあらわにするようになってきているみたいです。)

しかし、その人たちが社会を動かしてゆく可能性もありうるわけだし、社会の意見はこれらの情報で大きな波の底流の方向だって変えることもありえる。デジタル化情報を入手する時点で事の本質が持ちあわせるノイズ的な要素、つまりそこには結果だけではなく、発祥の起源であるとか課程の段階での様々な苦心など、取るに足らないが着想に重要な影響を与えたヒントなど、後になって誰も語らないものの決して削ぎとって済ましてしまつてはいけな内容も多い。

(身近なところでは、選挙動向のメディア報道、ベストセラーの情報、流行りモノ情報、価格、などなど)

ネットの友だちと称される人たちがそのときだけの一過性の愉楽を味わつたとしても、それをいまさら責めるつもりはない。しかし、ネットを彷徨って、あるときにはまったくとミクシーで時間を過ごしていると、自分の貴重な時間を盗み取られたような錯覚に陥ることがある。いや、これは錯覚ではなく、確実に紛失しているのかもしれないのだが、そのことを形としてではなく、何となくではあるものの気づき始める人が現れ始め、それが「mixi 疲れ」となって表出するのだ。

遁走をする人がどんな気持ちで去ってゆくのかは計り知れない。

楽になりたい、気疲れしたので新しいことを始めたい。そう考えているのだろうか。だったら、何処まで行っても疲れは取れないし、一時的に取れたとしても疲れの発生源は除去できていない。

友だちの友だちは友だちになれるかもしれない…という着想は面白かったし、それを言葉(カタチ)にして注目を集めた点でも素晴らしい。最初に群がって残留し続けている人たちの意気も感じる。そこには、ネットで出会って、厚くて深くなれた友だちが何人もできたことは確かだ。

しかし、群がったことによる自滅の感も拭えない。人々の潜在意識にある不信感、被害感、危険度が相応に人々の心理を蝕んでいる。(社会にあふれる社会の犯罪情報なども後押ししているのだろうか。それを伝えている一翼もネットが担っているという事実も大きい。)

性悪説的なものまでに発展はしていないものの、現代のネット文化は重厚で親密なモノを決して歓迎していない…ということでもあろうか。商業主義から派生する使い捨て文化意識が、ここまで影響を及ぼしているのだろうか。

だからといって、「パソコンを棄てて印刷した活字を読もう。ケータイを棄てて手紙を書こう。万年筆を買おうじゃないか」と私が幾ら言っても虚しいだけだが。

---

2006年8月 5日(土曜日)【随想帖 I】

---

## サンマ

---

昨日、サンマを食べた。いっきに秋が近づいてきたような感じがする。

サンマはちょっと痩せてたけど、全部戴きました。美味しかった。

食べながら、よめさんが(娘は)「サンマを食べているかなあー、大好物だから食べさせてあげたい」と何度も言う。

そこで…私にも学生時代があったのを思い出しておりました。

江古田の、早稲田人たちの下宿に居たときは、賄付きだったので美味しいものを食べさせて戴けた。短い間だったが、あれも学生時代のいい思い出だ。

(詳しくは、塵埃秘帖のバックナンバーにあります「江古田(1)～(5)」)

下宿代は2万5千円。風呂なし。部屋にはカギもない。木戸をガラガラと開ける方式です。電気は裸電球。後にオバサンが見るに見かねて蛍光灯を買ってくださいましたが、夕食付き。トイレ、洗面所は共同。

何よりも凄かったのは、友人と部屋で飲んでいたときにコップを倒したら、中のビールが部屋のはじからはじまで一直線に筋になって流れました。つまり部屋は緩やかに傾いていたのですよ。もちろん知っていました。下宿とはそんなものですね。

夏目漱石の小説に出てくるような下宿で、玄関を入れて式台を上がり脇の下駄箱に靴をしまい、正面の階段をのぼります。2階は「コの字」構造になっていて、真ん中が庭。下宿人の棟と家主さんの棟が向かい合わせになる。奥から法学部の林さん(広大福山高校)、瓜生さん(山口高校)、大塚さん(蕪崎高校)、辻さん(札幌南高校)、商学部の黒金さん(米沢興譲館高)。名門でなかったのは僕だけでしたが、楽しい下宿生活でした。アタシだけ理系だったこともあって、ちょっと特別扱いだったけど、朝寝をしていると早く起きなさいといわんばかりに廊下を箒でガサガサと掃かれたなあ。青春時代と呼べるのはこのころなのかもしれない。

窓を開けると、小さな路地を隔てて、南国屋さんという暖簾だけを出してる食堂の2階と向かい合わせでした。(南国屋さんは7匹も猫を飼っていましたが)、そこには、若いオネエサンが下宿していて、いろんな色の刺激的なパンツなどを窓にぶら下げてくれるばかりではなく、部屋の中を下着姿で歩き回ってくれました。困るような嬉しいような。(勉強に気が散るからな。)

サンマの話だった。

この下宿に居たころは、ときどき、サンマを食べることができました。下宿のオバサンの作ってくださる夕食は、ここの家族の食事とまったく同じだったから、— 12人ほどが座れる長いテーブルで食べます — すき焼きもあったし、焼き肉もあったし、納豆も、天ぷらも、ウナギも、サンマもありました。

娘は、おじいちゃんちに下宿をしています、サンマを食べているだろうかねえ。

学生時代は、ちょっとくらいはハングリーなほうがいいたろうと個人的に思っています。

願い事は叶えるために僕たちは努力をする。叶いそうになるとそのころには自分が成長して、願い事も成長している。だから、また願い事を叶えるために努力する。いつまでたっても叶わなかったとしても、それほど不幸せだと思わない…のではないか。願い事を簡単に叶えて、幸せになって(心が太ってしまつて)、夢をなくしてしまつたらオシマイなのだし。

秋になる。

サンマを食うと、思い出す。

あこのころの食生活はヒモジカッタヨナー。

夏が終わってゆこうとしてます。

ツーリングに出かけた人のレポートもボチボチ出てきています。

私のバイクはただ今車検に行ってます。

帰ってきたらどっかに行きたいな。

処暑。

暑い日もありますが、度々やってくる夕立のおかげで大気は割と綺麗です。

日没が少しずつ早まり、太陽光線の入射角度が低くなってきたこと、そして空気が綺麗なことも手伝って、夕焼けが随分と赤みを帯びてきました。

稲穂の黄金色を少し混ぜたような少し黄色味のある赤い夕焼け。

秋が深まると、黄色味がとれて、ホンモノの真っ赤になります。

PS

「生物多様性」「絶滅危惧種」の特集記事を書かねばならないので、マジメにそっちに没頭します。でも、たまに來ます。

---

2006年8月23日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 秋味にサンマを添える

ゆく夏を惜しむかのように夕焼けを見あげている。過ぎ去ってゆくものが放つ余韻というものはときに憎悪になり、時には許してやってもよいぞというようなセンチでもある。

憎悪と書いては消し、また書いて…を繰り返す。

人は人をそんなに簡単に憎めるものでもないし、憎まねばならぬほどの悪人もそれほど多くないと思うものの、この歳になると許しがたいものを憎んでもそれは罪悪ではないのではなかろうかと思うこともある。

▼大手の財界のあたかも日本経済を先導しているかのような語録を読むと、やはり株の騒動ともあわせて、日本は果たしてこのような政策でよいのか、と思わざるを得ない。

腹が立つのは、何も総理大臣や次期候補だけではない。声を大にして言いたいのは、それに靡いている大バカ国民の態度だ。何度も書いてきたが、この国の国民は本当に真剣に考えて今の政治や政策に誤りがないと思っていて、信じて投票をしているのだろうか。まあいいや、とか、みんながそうだから、とか、テレビやネットにそう書いてあるから、とか、そんな程度の当てにならない言葉で自分の考えを決めていないだろうか。海外で起こる戦争、国内で起こる社会事件、大バカ総理の発言、靖国、(都民ならオリンピック…)。書いてて嫌になってくるな。

私は、もうやがて死んでいく人だから、そんな大臣や国民に憎悪を向けても仕方がない。

娘よ、そんなバカな国であっても、影響も受けたくないようなクラゲのような行き方を選ぶか、国を動かすような意見をしっかりと言い続けるような人になるか、どちらかでないと今後の50年を生き抜くのは(辛いとは言わない)馬鹿馬鹿しいばかりだぞ。というわけで、こんなことを書くと詰まらなくなるのでメールや日記にはこの程度にして、あとは酒の肴に困ったときにでも話すことにしよう。

さて、怒ってばかりいても仕方ない。話題を変えます。

▼きのう、メールが届いた。

「今日は、少し歩いて天満橋の夕景を眺めます」

大阪の街から見る夕日は、きっと山には沈まないのだろうけど、天満のあたりからであれば高層ビル群が夕闇に染まってさぞかし綺麗だろう。この日も夕日が見えただろうか。

東京にいた学生時代には、母校の屋上や通学途上で武蔵の山々に沈む夕日を眺めることができた。山を赤く染めて沈む夕日に足を止める人が、駅のホームの連絡橋を渋滞させている風景もあった。

人は、静かに暮れゆくモノに吸い込まれてゆく。しかも、それが黄色や青でなく、赤色であることも大きな要因だと思う。炎が燃えるのも赤色だし、落ち葉が枯れる直前には燃えるように赤く染まる。

ここにわかる人はいないと思うが

♪赤い夕日が校舎を染めて

とか

♪秋の日の図書館のノートとインクの匂い

などという歌を口ずさんだ日々があった。

木の机が赤く染まって二人の影が教室の奥に映るほどになっても話をしていた秋の夕暮れ。

▼「生物多様性」の原稿が着々と進んでいます。

というか、書いては消して、切り貼りして、また書き直しての繰り返しで4000字を越えてしまった。2000字くらいにしなきゃならないのに。

もう少し書けたら皆さんにも読んでもらいたいと思います。情報誌は10月中旬ごろに発行しますが、4月発行した「地球温暖化特集」もまだHPでは公表されていないレベルでして(役所はこれだからネ)、私の原稿レベルで日記として放出してしまおうかなと考えてます。そのうち。

▼そうそう、娘が教習所の予約をスッポかして寝坊していた、という事件が家庭の中に轟きました。

早い話が、眠くて仕方なかったのでちよいと寝たら予約の時間が過ぎていたという話です。



3500円のキャンセル料を払って事態は終了ですが、お金の重みは痛かったに違いない。  
大学生のバイトの時給が800円程度であるとする5時間近く働いて得る金額だ。  
おっと、私の学生時代？ 久しぶりに大学に行ったらレポート提出も試験も「終了」という掲示があったなあ。今でも夢に出て、魘されていることがあるらしい。  
まあ、しっかり、気合いを入れて、メリハリのある日々を送りなさい。

▼秋味にサンマを添える夕餉かな    ねこ作

日暮れの時刻がトントンと早くなるに連れて、窓をあけて車を走らせることが増えてきた。稲刈りのあとの田んぼの匂いは格別に秋らしさを漂わせる。

二人でとる夕食も6ヶ月目を迎えることになった。

別段、何の工夫をして欲しいわけではないのだが、「旬のものを食べる」と「一日一魚」を守りたいと思っている。

夕食。先日、再びサンマが出た。それだけならまあ普通だが、秋味(キリン)があったのだ。

ダイエットという大きな目標をあげているわけではないものの、健康のためにお酒を控えようとして、大好きなビールはほとんど飲まなくなったのですが、たまに出てくると嬉しい、美味しいものです。

柔道をしていた高校時代…58キロ、少林寺の大学初期…63キロ。社会人になって…65キロ、結婚して…70キロ、それから、73キロ、75キロ…。最近では体重計が壊れてしまって買い替えていませんから。

---

2006年9月 2日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 晩秋に思う

久々に塵埃秘帖を書きます。【寒露篇】

▽ 10月8日は寒露。

この日を過ぎて立冬までを晩秋と呼ぶそうで、まだ少し早いのではないかな、と思いながらも日々それが馴染んでゆくことを思うと、昔の人のそのセンスの良さは現代人では到底叶わないものだと思いつく。寒露の夜に影を引くほどの明るい月を見上げてその年の豊作に感謝をし、嵐や豪雨などの災害を振り返り幸運悲運を喜びまた悲しみ、人々はいつそう遅くなってきたのだろう。それと同時に自然の恵みにことのほか深く感謝をし、神として崇めてきているという歴史もある。現代人には、そのような謙虚で敬虔な気持ちが薄れ、自分たちの知力がすべてを支配してきたような錯覚に陥っていないか。(その裏で地球温暖化などの大きな波が押し寄せているのに、無表情であるのだから不思議だ)

▽ 嵐のような低気圧が太平洋岸を北上し、西日本では中秋の名月を見ることができたが、東の地方では事故がいくつか起こっている。サンマ漁船の転覆。北アルプスの滑落事故。

事故や事件に限らず、モノの発生には根拠がありその理由や誘発事象がある。この事故に遭遇した人々はお気の毒で、ささやかながらお見舞いを申し上げますが、そういうことの起こる社会を見つめる限り、何かが緩んできているし、締めるべきところとそうでないところがアンバランスになっているのではないかと思います。おれにはおれない。

▽ 極論かもしれないが、行き着くところはすべて「裕福ボケ」「贅沢ボケ」「満足ボケ」だと私は思っている。もっと不自由に…とまでは言わないが、生活の基準を巻き戻してもいいのではないか。その最たるものが「情報」であり「便利な贅沢品」であるのだが。(その情報を扱う技術者として30年来、開発に携わってきたのも事実ですが…)

▽ 科学技術という言葉があって、これは「科学」と「技術」の合成された言葉だといえる。科学は即ち理学だし、技術は工学の大成だ。私は工学の出身となってしまったけど、若きころにはサイエンス(科学・理学)を夢見ていた人間で、数々のテクノロジー(技術)をネタに飯を食わせてもらっていたながら、(今もなお未練があるつもりはないものの)、現代人はサイエンスを軽視気味だと嘆いている。

▼ つまらない話はやめよう。さて。

夕食に水炊きをしました。秋になって初めての「お鍋料理」だった。先日、おでんを食べた。そういう季節なのだ。大勢の人が夏バテをするのに私は食欲旺盛で「夏太り」をしますし、秋には食欲が増進して馬肥ゆる秋と言われるように私も肥えます。さらに、冬には「お鍋」という強敵があったのだ。

▽ 一日一魚を実践していますが、サンマの刺身、脂の乗ったハマチなどが店に並ぶと、間違いなく買ってしまいます。寒露が過ぎて立冬になり、木枯らしが吹きすさぶ季節を迎えようとも私は寒さが決して嫌いではないとまで言い切れるは、脂の乗ったブリとコタツで食べるミカンを思い浮かべるだけで幸せを感じるからでしょう。

◇ 近況。

3連休は信州でキャンプの予定でしたが、思わぬ強風が吹き寒かったのと、出かけ前に1年ぶりに道具をゴソゴソと整備していたら、ガスストーブ(コンロ)のプリムスのガスがほぼ空っぽになったままでして、いとも簡単に家に居ることになりました。

▽ 部屋の掃除をしていたら、父の死亡診断書(平成10年)が出てきましてね。

▽ 高血圧、脳梗塞、胃部潰瘍による出血…などとかかれた紙切れを見ながら、あと「その時」まで17,8年となることを想像し、様々なことを思い浮かべたのでした。

お若いみなさんにはわからんことでしょうが、20年くらいしたらわかるでしょうよ。

## 一度だけ本当の

---

通勤途上で真っ赤な実を見つけた。

一度だけ本当の恋がありまして

南天の実が知っております 山崎方代

そんな季節になりました。

---

「(あなたが)恋しいなあ」なんてそう簡単に書くものじゃない。

そんなふうにあなたなら、私を叱るのでしょうね。

お姉さんみたいに、ね。

でも、恋しい。

東北の物語。

月が大きくなってきたし、

続きを書こうかな。

---

2006年10月30日（月曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 立冬に思う

---

▼世界史、日本史、地理、政治経済、倫理社会。物理、化学、生物、地学。漢文、古文、数Ⅰ、数Ⅱ、数Ⅲ  
何でも学びました。

今でも昔でも同じだと思うけど、たくさん学んでこそ高校生でしょう。

受験のためにやりくりするなんて、悲しいよ。たくさん学ぼうよ。それがゆとりでしょ。

僕はたくさん学んでよかったと思ってます。学んでなかったら、アホなままやった。

それで、さらに受験勉強もしましたよ。誰もがそうでした。

▼のだめ。ベートーベン7番。最高やなあ。

ベートーベンのエキスですよ。

ドラマの中の演奏も最高ですね。

▼冬至の朝。時雨れてた。いよいよ、寒い冬がやってくる。

でも、虹が出ててね。福虹。二重の虹は意味深だったなー。

▼南禅寺。三門。

ここのど真ん中に腰を下ろし法堂の方角を眺める。後で知ったのですが、かの石川五右衛門も唸ったというこの景色。ぜひ、皆さんもどうぞ。

▼－ Walk Don't Run －

夕焼けの向こうまで ― 枯れ葉の舞う道をあなたと二人で ―

これは私のブログ。

いよいよ、枯葉の舞う季節になってきました。

落ち葉の落下速度は毎秒あたり50センチから100センチがもっとも美しいという。

しかし誰がそんな味気ない数字を言い出したのだろう。いかにも科学的な。

いや、そういうところが少しは気に入っているけど。

ゆらりゆらりと

決して本心を見せないように揺れながら

浮遊するのが美しい。

それを目で追う…、いや追わずに嘯く横顔も憎らしい。

ゆらゆら。

ふわふら。

▼今日は木枯らし一番。

## サンタのブーツ

---

日が暮れきってしまった時刻に、スーパーの駐車場に車を止めようとしたら、ちょうど時雨に見舞われた。しゃあない、走るか。ということで少し走った。

知らない間にすっかり風が冷たくなったなあ、と走りながら思う。髪が濡れるのを避けて、頭に手をかざして息を止めて走っている。

放射能の雨が降って、髪が抜けることもない。平和な時代だけど、「うつくしいくに」＝（逆さまから読んで）「憎いし苦痛」な時代やで、と考えたりしている。

たかが、駆け出しただけの短い時間のなかで、様々なことを思っている。明るい店先に飛び込んだら、ぱっと忘れてしまう。

真っ赤なサンタのブーツが山のように積まれている。誰に贈るわけでもないのに買いたくなってくる。

-----

人並みな会社人をしていたころは、こんなお祭りなどには目もくれず、社会の流れの外で黙々と働いていた。今でもそういう人は多だろう。

どこの家庭もが寝静まったころに駅をおり、冷たい闇夜の道を急ぐのだろう。瞼の裏に描いているのは明るい玄関と暖かい夕食なのだろうか。

サンタのブーツが店先に並んだことも知らないで働く人。きっと、そんな人はmixiなんて世界も知らないでいるのかもしれない。

-----

ちょっと仕事が忙しくなって、ぼんやりする時間がなくなると、夕暮れの路地を急いで帰ったことがあった昔を思い出す。明かりの漏れる団欒の部屋から声が聞こえてきて、すき焼きの匂いが漂ってくることもあった。

サンタのブーツ。

仕事が忙しくなっているのでスーパーへも行く暇がないから、しばらくお目にかかれないな。でも、何故か、思い出すだけでも嬉しくなる。

## 山あれば山を観る/雨の日は雨を聴く〔山頭火〕

---

11月15日に発行したメルマガには、先日の日記でも触れた虹の話を書きました。ちょうど、その日の朝に御在所岳には雪が積もって、翌日の新聞でも積雪が紹介されていました。

メルマガの中で紹介していますが、木のぼりの講座をします。今の子どもたち。木登りの愉しさを知っているのだろうか。勉強に追われているのだろうか。ふと、そんなことを思いました。

-----

高校の履修問題でざわついていましたが、みんなゆとりがないんだなと感じます。

高校時代にする勉強ってのは、押し付けられる教科だけでは不満だと感じて欲しいな。

政治経済も、哲学も、地理も、日本の歴史も。数学なら、微分積分も三角関数も、確率も統計も、幾何学も微分方程式も...

そういうものを18歳までにたくさん学びたいという欲のある子どもたちは少ないのだろうか。

アリストテレスを知り、宮本常一にも出会い、太宰治を読み、エジプト文明に関心を抱き、シルクロードに夢を馳せる。星野道夫にも出会いアラスカに行きたいと思う。物理学に憧れ、アインシュタインを熱く語ってもいいだろう。

そういうチャンスを受験が奪っているのだろうか。

誰のために学ぶのか。

何のために学ぶのか。

学生時代に学ぶものは、社会に出てから役に立つものばかりでなくともいい。糞の役に立たないことをもっと真剣に学んで欲しい。

巻頭&あとがき から (11月15日配信) -----

11月12日の早朝は、鈴鹿山麓でも晴れ間と時雨が交互にやってくるような空模様でした。

時雨の合間にきれいな虹が出ていました。その虹をカメラに収めようとして外に出たら、冷たい風が小雨混じりに吹き付けてきます。「早夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く」、そんな季節の到来です。

そのころ、御在所岳頂上の気温はマイナス1℃。夜明け前には初雪が舞っていました。例年より6日早い記録だそうです。(津地方气象台発表)

もう1ヶ月あまりで今年も終わりです。暮れる年の後片付けや新しい年の準備に忙しい季節となりました。何事にも気を引きしめていきたいものですね。

--

いよいよ冷たい木枯らしの吹く季節となります。そのことに憂いを感じている方も多いのではないのでしょうか。

三重県にもゆかりの深い俳人、山口誓子の句にも

- ・海に出て木枯帰るところなし
- ・切り通し多羅尾寒風押し通る
- ・雪嶺の大三角を鎌と呼ぶ

など、厳しい冬を詠んだものがあります。

-----

バックナンバー : <http://www.eco.pref.mie.jp/mmag/backnumber/index.htm>

## 西本智実さんのこと

---

第九を聴いたのは、数年前に、指揮者、西本智実さんの演奏会に行ったのが最後だと思う。

今年、久々に第九の演奏会に出かけてみようと思う。(ソルツアンドシュガーズの面々で三重フィルに参加している人がいくらかいらっしやるので、ぜひ行こうと思ったのだ)

さて、その西本さん。

彼女がだデビューしたてのころ。いや、デビュー前だったかもしれない。  
(京都市交響楽団で振ってられるとパンフに書いてあったような記憶がある。)

私は彼女の演奏を聴いていたのだ。伊勢市観光文化会館で、第九を振ってくださった。もう、おおかた、8、9年ほど昔ではなからうか。

髪を三つ編みにして、後ろでひとつに束ねてらした。その精悍な後ろ姿に惚れ惚れしたのだが、まだ、大人というより娘さんという感じだった。

演奏が終わって、宇治山田駅のホームで特急を待っておられたので、  
「すばらしい演奏でした。ありがとう」  
と声を掛けてしまった。  
美人だったし、女性の指揮者は初めてだったので、興奮が収まらなかったのかもしれない。

「ありがとうございます」、とおっしゃって深々とお辞儀をなさった。

彼女の周りには誰もいなかったし、もしかしたら一人で京都からお越しだったのかもしれない。

(サインをお願いすればよかったな)

-----

ふとしたことで最近、名前を耳にして、もしかしたらと思い、あの人は今…ふうに少し調べてみた。

立派になられていたのだ。

情熱を漲らせて、ひとつの目標に生きる人の姿が、美しいと思ったこと。

何年ぶりにか、彼女を思い出して、その後ろ姿が蘇ってきた。

「後ろ姿」は自分には見えないのだけれど、  
しかし、その人自身を表すのだ。

## 楽しく、面白く。損しなくて、人に嫌われない

---

▼瞬時にお笑いをとる芸人が目立つようになって、30分話して1,2度うふふと笑うような落語を愛する人が減ったような気がする。

▼ネットワークが進化して情報が簡単に行きかうようになって、得体の知れない軽薄なレポートを書く人も増えた。

「このレポートを作成するに当たって、30%と70%との完成段階の途中経過を提出してください」  
とか  
「作品は手書きで出してください」  
と要求をするのは私くらいだろうか。

▼時々刻々と、疑問の多い文化が押し寄せてくる。

mixi や GREE の中でもケータイ文化がかなりの速さで浸透している。コミュニティーの中で対話が崩れてくる。自分のほうにしか向いていない日記が目立ち孤独なものとなっている。他人を寄せ付けない排他的なものにさえ見えるのに「どうぞお立ち寄りください」と書いているから究極の矛盾だ。

▼世の中、雑学ばやりで、問題と答えが薄っぺらく連結したような知識で満足している人が増えている。雑学の答えを知っている事が大事なのではなく、ましてや知識ではなく、過程が大事なのであろうに、そのことはどこかに消えている。知らないと不安なのだろう。知らなくても一向に構わないのに。

▼上辺だけの文化と言えいいのだろうか。結果だけを追求したあまり、過程を見なくなってしまったのか。

森を彷徨い目的の宝物を見つけようとするゲームがあるとしよう。宝物は早く見つかるのが一番だが、いつまでもどこまでも見つからずに、散々歩き回る人は能力がなくて落ちこぼれかというと決してそうではないはずだ。(地球の自然危機には最後まで生き残れるかもしれないぞ。)

▼あるある…という番組が納豆のデータを捏造したそうで、TVを見ない私はまったくどうでもいい報道なのですが、多くの人がこのような情報に踊らされている姿を想像すると最高に滑稽で仕方がなかった。

今の社会はこの騒ぎを典型として、政治の世界でも可笑しく馬鹿馬鹿しい茶番劇が続いている。いい加減で気づいてほしいものだ。ここでも情報に左右されて、ややもすると政治勢力までもがこの情報で潜在的に捻じ曲げられているのかもしれない。

▼バイクと読書のコミュニティーを開設してるが、こちらでも、現代風な現象があることは否めない。簡単に手が届くものには簡単に手を出すが、面倒であったりよくわからないことにはまったく無反応なのだ。そして、すべてのデジジョンテーブルは自分に都合のよい論理でできていて、それを正当化している…人が多いようだ。(断定ではない)

▼楽しく、面白く。損しなくて、人に嫌われない。そういうことを最優先にして生きている人が多い。(当たり前と言え当たり前だ。)

そんなみんなの夢をかなえるような社会を実現できれば、果たしてそこはユートピアなのですかねえ。

▼情報という科学(サイエンス)の生んだ技術(テクノロジー)が、人の心を、麻薬が人体を蝕むのと同じように破滅に追いやってしまう……とまでは言わないが、テクノロジーの暴走といっても過言ではない。哲学と理学のみなさん、頑張ってください。



## 「寒」

---

▼日の出、日の入りに変化が見える。

▼毎朝、6時に起きて新聞受けまでゆく。

この時刻に朝やけが見えるようになったのだ。隣の家とその隣の間から、真っ赤な空が見え始める。

一年で一番朝焼けが美しい季節だと思う。そのことをディスクジョッキーの女性が朝の番組で話しているのを聞くと、二度目の嬉しさが込み上げる。

朝日を見て美しいと思った。ただそれだけのことなのだが。

▼夕暮れが私を待ってくれている、、、そんな筈はない。

帰る時刻に空に明るさが残っている。

夕焼けがきれいだ。少し寒いので、ぶるっとした分だけ、美しさが身体に染み込む。

日暮れも少し遅くなった。

▼1月28日の夕方、県境の山中をゆく京都行きJRの窓から、赤紫に空を染める夕焼けと出会えた。少し不良な、いや、少し過去のある大人の心を握り潰したような赤色だ。

否応なく、自分の踏んだ過去を思いながら、列車の窓からその景色を眺めた。あるときは、北の大地に沈む夕日であり、さっきまで大騒ぎだった女子高生までもが話をやめて見とれるほどの美しさだった。また、あるときは、行きずりの人と、イケナイ予感を抱きながらの落日だった。

▼列車から楽しむドラマは瞬く間に終わって、京都に着いたら即座に待ち合わせの場所へ向かった。そこで、娘と待ち合わせて、知る人ぞ知る「串八」(西院店)で久しぶりにたつぷりと飲みました。ちょうど、娘も自動車教習の卒業検定に受かったというので、美味しい酒でした。

---

▼そんなわけで、日記は放置してました。

その間に、日記にはコメントを下された方々があり、一通のメールも戴きました。

お返事を書こうと思って、今の季節なら「寒いですね」といきたいが寒くない。「温いですね」じゃサマにならない。

▼そういえば「寒」という題で俳句を募集していたなー(NHK中部)。集まっただろうか。

▼私の場合、「寒」といえば九年前の父の葬式の日でして、雪がちらちらと舞う寒い日だったのを思い出します。篝火に次々と薪を放り込んでも、炎は音を立てず燃え続けるだけでした。風は凍てつくように冷たく、凶器のように私に突き刺さりました。

▼今年の命日は暖かい日でした。気管支が強くなかったので最期までいろいろと苦しみがらだったことを思うと、もしも暖冬だったら春の誕生日まで生き永らえることができていたのかもしれない。だからどうだというわけではないのですが、ふとそんなことを思いますね。

▼葬儀の日の我が家の庭には咲く花など殆どなく、猫柳が逞しく天に向かって伸びていたのを思い出します。

もしも今なら、梅が咲き始めましたよ、と言うてやれるのに。

## 逃れる

---

立春が過ぎて安堵の朝寝かな

立春に母を訪ねておかき食う

2004年の立春のねこ作・2題です。

塵埃秘帖に書き残しているのを見つけました。

作品のできは褒められたものでもないと思いますが、「いかにも」私らしくて自分で喜んでいます。

春という言葉を目にして、ほっとするのですね。

寒さをこらえることから逃れることができる。

その寒さの中で、火鉢に炭火を起こして、おかきを焼いてる母が居た。

赤々と怒る炭が頬に照る。

スローな時間を、愉しむひとときですね。

頭の中はスローじゃないです。

めまぐるしく、思いが動く。

そのことは書かないし、書けない。

人は、何かから「逃れる」ことを宿命として人生を突っ走ります。

寒さから逃れることもそのひとつだ。

---

しかし、縄文時代の人々は、この寒さを「辛い」と思ったのだろうか。

先日から頭の中にあるひとつの疑問なんです。(この話はまたの機会に。)

---

2007年2月 4日(日曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## ひなまつり

---

私には姉があったというが一年余りで逝ってしまったというし、弟があるだけで女兄弟はいない。したがって、私の母は生涯お雛様を飾ることはない。

母は生まれてまもなく父親に死なれて、貧乏な家だったことや終戦ということもあり女学校を中退している。

だから、炬燵に、といっても昔だから炭を囲炉裏の中に入れて使う炬燵だが、足を入れながら夜なべに編み物をする母が「あかりをつけましょ、ぼんぼりに」と歌ったのを、私は一度も聞いたことがない。

だが、母は歌が好きで、よく、どこか遠くを見るようなしみじみとした目で歌った。

・こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

・春は名のみ風の寒さや谷の鶯歌は思えど時にあらずと声も立てず

母は花が好きで、花壇にはいつもたくさんの花が咲いていて、学校へ行く折にもそれを切って私に持たせてくれました。生け花もできたので、少し私も教わりました。

そんなことが遠因なのか、私は花の名前をこれといって知るわけでもないのに、京都を離れるときに仲のよかった人に「将来は家に帰って花屋をしたい」と言ったことがある。

そしたら、別れ際にその人に「素敵な花屋さんになれるとええね」と見送られた。

なかなか夢は叶わない。

----

よめさんの母の三十三回忌で京都にいる。

彼女の母は、中学校の卒業式の前日に逝ってしまった。月日の過ぎることの速さを思い起こし、彼女は何を思っているのだろうか。

今年、娘は大学生となって家には居ない。だから、我が家のお雛様は仕舞ったままだ。

もう出す機会はないかもしれない、、、とふと思った。

## 果たして昔からこんなに重かったのだろうか

▼人はだらだらというものを好むのかもしれない。私もその一人で、京都・嵯峨野の枯野と愛宕山をその向こうに仰ぐこの別宅で、春のひとときを過ごしている。

日記も必然的にだらだらと書くことになる。しかし、読む人(読まされる人)はそんな面白くないものに付き合う気合などなく、このあたりで別のページへクリックしてしまうことだろう。

▼書きたいことがある。しかし、あんまし人には読ませたくない。そう思うものの、やはり私の日記など面白くもないので誰も読まないだろう。それで、いい。

今、おおかた書き終わったのですが、面白くないわ。

「ここで、さようなら」

まるで映画の題名のように、ここで読むのをおやめになることをお勧めします。  
(棄てるのもったいないからアップするだけです)

-----  
息抜きに、

<http://yamaguchijiro.com/>

— ぜんぜん息抜きじゃないだろうという声もあろうが — 山口二郎のブログ読む。週刊金曜日のカテゴリーが痛快だ。膝を叩いて嬉しがる。

▼さて、近頃、「足跡帖」がやたらと目に付く。特にGREEでは日記を書く人が100人あれば、100冊の足跡帖があるという事態になっている。足跡帖を作って、新しい友だちが来るのを待っている。

コミュニティー(略してコミュ)を3つ作っている私としては、そういうものを通じて、友だちの繋がりを広げようという人が予想以上に少ないのでちよいと驚いています。

ちょっと面白そうなので、その足跡帖に一筆書いてみたりしたことがあった。しかし、それで終わりで、どうやら日記を通じてメールを交わす友達になろうとか、日記の中でコメントを交し合う間柄を絵描いているようで、私が構想したコミュを通しての広がりに参加をしてみようという動きは見られなかった。

▼そこで、1:1の対話、多対多の対話、というものを必然的に考えることになる。

ボヤキでも非難でもない。

しばらく、徘徊して見つめていると、結構多くの人が、コミュよりも個人の日記をベースにネットワークの中で浮遊しようと考えているのだということが、多かれ少なかれわかってきた。

1対1の繋がりを好むようだ。つまり、日記の中にコメントを書く人と自分との繋がりが。コミュだと、書き込んだ人とコメントを返した人との繋がりが(1対多)が一番だということだ。

さらに、補足をすると、1対1の繋がりが以外の人の介入を嫌う傾向がある、ということもわかった。

そして、コメントを返した人と自分との二人の世界(1対1の対話関係)が重要で、それ以外の人(部外者)が割り込んでコメントをしたり、その二人を抜きにして(部外者同士が)話題を進行させたり盛り上げたりすること(多対多の対話)を極端に嫌う傾向があるということも明らかになってきた。

これは、勇気を持って第三者として横レスを書いても邪魔者が来たという感覚もあらわしているのだ。

▼ケータイ電話の普及に見られるように、人間の感情コントロールに異変が起こっているといえようか。

異変という言葉は病的だから改めねばならないか。個性とか個人の多様性を尊重することによって、社会の中で磨き上げられるべき非個性の部分が失われてゆくのである。

人の潔癖性が病原菌に犯されやすくなって免疫力を失い、近代科学の生んだ食生活の未解明な要素が原因でアトピーなどのアレルギーを増産しているのと同じように、社会の中にも非個性を失った人が増えているということだ。

ある知人の子どもさんは、イエデン(家庭にある電話のことをいうらしい)の友人宅へは電話をかけないそうだ。当人以外が電話に出たら困るから、というのが理由だそうである。別の知人が言うには、電話に家の人が出たら黙って電話を切る子がある、という話もしていた。

このような特徴や、このことから連想できる現代社会の人々の行動の特徴を鑑みながら、GREEやmixi上のコミュや日記 — この日記のことをブログと呼んでいる子もいたが — を読んでみると、その集団にまみれて時間を過ごしている私もやはり少し異変を纏っていることになるが。

▼コミュの話を書いたので、マイミク(GREEなら友だちリンク)についても、ちょこっと書こう。  
(長い日記なのでここまで読み進んでいないことを願う)

入会当初にだったら、(メールをもらっても)インスピレーションでこの人ならマイミクOKだとか、この人にはマイミクお願いしてもかまわないだろうなとかいうような人が割とたくさんいたし、そういうことで悩むことなく友だちOK!みたいなノリだったが、たった1年ちょいとが過ぎただけで、あのころと同じような感じの人であってもしまだにマイミク(My GREE)になっていなかったり、なりそびれてしまって、足跡も途切れ途切れになってやがて見えなくなってしまう人もある。そういう人だって本当はマイミク希望として一声かけて欲しかった(掛けなかった私もいけなかったのだが)ということが結構多い。

▼これにもやはり理由がある。それは、プロフィールに個人情報を書かない人が増えた傾向がいつそう強まったことが大きい。

個人情報から職業や住まいを割り出す事は簡単であるから、不適切な発言があればひとつ取り上げて公表すると社会的に強烈な攻撃になる。名前がわかれば顔付きで1発、コンニチハ、の時代ですから。確かに仕方がない側面もあろうが。

▼しかし、寂しいじゃない、とも思う。

私が誰かを知ってても、「どこの誰かは知らないけれど」ってことにして放置しておいて欲しいじゃないか。

月光仮面だってスーパーマンだって、仮面の忍者赤影だって、バットマンだって、「どこの誰かは知らないけれど」(TVを見る人は知っていたんだ)という人だったわけなのだから。

で、ねこさん。って誰でしょう、、、って知りたい人などいないと思いますが。

▼いやー、そーいうわけで、この人がマイミクじゃないなんておかしいね(マイミクになってていいんじゃない?)、って思う人がポツポツと増えてきたので、小さな悩みになってます。

「マイミクに追加」@mixi  
「リンクを申し込む」@GREE

このボタンって、果たして昔からこんなに重かったのだろうか。

## 折々のうた 最終回

---

1979年1月25日に連載が開始されたという。つまりそのころに大岡信さんと出会ったことになる。

当時学生だった私は、電磁気学や解析学などと格闘していたはずだ。新聞記事の一角にあったこのコラムを何故に読もうという気になったのかはまったく不明であるが、無機質な数式よりも、歴史に残された詩歌や文学を、私にでもわかる言葉で短く解説し紹介しているもので私は感動の味わいを愉しみたかったのだろう。

ここで閑吟集や梁塵秘帖というものを知り、山頭火の句にも出会った。数々の俳句や短歌、詩歌が私の日常の中にいつも届けられてきて、少なからず人生の道標のような役割も果たして来た。「ふるさとの沼のにほいや蛇莓」(水原秋桜子)が紹介された朝には遠き父母を思った。

何度かの休載期間、充電期間を経ながらもいよいよ本日が最終回だ。いつかはやってくると思っていたが、寂しいという言葉がもっとも相応しいだろうか。惜しむ声を紹介する記事に掲載された大岡さんの写真が、1979年当時に初めて拝見した記憶と重なり、なお一層の重みを感じる。

桜の花が咲く季節にお終いにするとは、まさに有終の美。大岡さん、ご苦労様でした。ありがとうございました。

---

2007年3月31日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 夢を追い幸せを食べる虫

新年度は、あれこれと昔を掘り起こしてみたりして、喚起を促す言葉に再会すること多い。

1983年の新年の日記に

未知なるものに好奇心を向けて、様々な方法によってこの欲求を満たそうとしてきた。そんな気持ちを殆どの人は、もともと持っているのではないだろうか。

山の向こうには何があるのかと、日没になると母親に尋ねた子どもの頃の方が、今よりも遥かに私は、学者だったようだ。

子ども心を棄てきれずに「夢を追い幸せを食べる虫」(自称)である私は、前にある未知なるものを見つめられるよくきく眼と、それを輝かせるに足るだけの涙を、今年もまた追いつづけることになるだろう。

と書き残している。

今の私よりも、あのころのほうが冷静でありながら、夢も大きく新鮮味に満ちていたことが伺える。

この中で、「よくきく眼」と書いているのは、まさしく大岡信さんのパクリだ。

波動というはるかなもの (大岡信)

よくきく眼は必要だ  
さらに必要なのは  
からだのすべてで  
はるかなものと内部の波に  
同時に感応することだ  
ころろといふはるかなもの  
まなこといふはるかなもの  
舌といふ波であるもの  
手足といふ波であるもの  
ひとはみづから  
はるかなものを載せてうごく波であり  
波動するはるかなものだ

これが頭の中にあっただろう。

私は、ほかに[新島襄先生座右の句、丹羽先生の講義録から]と注記し

自然毅然 処人靄然  
無事澄然 有事旗然  
得意冷然 失意泰然

ということもメモに書き出している。

これは、崔後渠の「六然」から拝借してきたものらしく、どうやら間違っているようで、正しくは

自處超然 人處藹然  
有事斬然 無事澄然  
得意澹然 失意泰然

であるらしい。

その意味を解釈すると

じしょちょうぜん : 自分自身には超然とあれ

じんしょあいぜん : 人と接する祭には藹然とあれ

ゆうじざんぜん : 有事には斬然たれ

ぶじちょうぜん : 無事には澄然たること

とくいたんぜん : 得意であつても澹然とし

しついたいぜん : 失意におちても泰然たること

というようになる。

今の私の目標は

- ・ 一日一回、ダジャレを言う
- ・ 一日一回、楽しく嬉しかったことを振り返る
- ・ 一日一魚を喰う

であるが、この

- ・ 「六然」を唱和する、
- も追加しようか。

三日坊主かな。

---

2007年4月11日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---



▼バイオエタノールに騒ぐ社会を見て愚かさを思う。

切り札の如く登場した夢のような燃料だが、植物がCO<sub>2</sub>を吸収して大きくなってきたのだから、それを元に戻しても即ち燃やして大気のCO<sub>2</sub>増減の差し引きに変わりがないということで、地球温暖化ガス排出抑制に非常に有効とされている。

ちょっと、違うだろ。そんなマヤカシ言っていないで、もっと本質を考えろよ！と言いたい。

▼国民は、というより、世界中のヒトはそのことで食べ物が燃料に変化し、食材の高騰が始まっていることに何を思っているのだろうか。

しまった。と思って、何か手を打とうと思ったか。

- ・自分だけでも出来ること
- ・自分も参加してみんなと出来ること

この2つ程度のアクションでは、手遅れが必至であることに気づいているのだろうか。

▼持続可能な社会を実現する。なんじゃそれ。

減びてしまわない社会システムを構築して次世代に引き継ぐ。  
そう言い換えたほうがいいんじゃないの？と言いたい。

(減ぼしてしまって、知らん顔をして死んでゆく…とも言えそうだ)

2007年5月に公表されたIPCC第4次報告では、過去何十年で地球の温度は上昇していると断定している。  
地球温暖化が始まっていることには多くの人が気づいている。各地で発生する集中豪雨、洪水、渇水、大型台風、強風、海水面の上昇。

IPCCの報告を受けて、新聞や雑誌が騒がしい。  
オマケに、光化学スモッグについての記事まで顔を出していたから、二重の驚き。

▼「痛みをともなう」改革と言う言葉を流行り言葉にしたのは今の総理ですね。

今や、痛みをともなう生活を嫌でもやらなくてはならない状態だということをどれだけの人が気づいているか、またそのことをすべての人(行政に限らず国民一人一人)が意識しているか。

経済が好調だから、バイオエタノールがチヤホヤされて、食材が値上がりしても、金さえ払えば済むのだろうか。  
(買い溜めなんて愚か過ぎて論外)

▼深夜12時になったらテレビ放送が終わっていた時代があった。

かつて国民はそういう生活を強いられても素直に従ったことがあったのに。

- ・社会からレジ袋や割り箸が消え、ペットボトルは激減する。
- ・惣菜のパック詰めは遠い過去のこととなり、誰もが「マイ皿」「マイたっば」を持ち歩く。
- ・深夜番組が中止になる。
- ・複数台のテレビがある家は、税金が課せられる。
- ・1500CC以上の車は製造中止となり、通勤に車を利用してはいけない。
- ・お洒落や贅沢は、ヒトが生き延びる上で必要不可欠とされないので禁止。
- ・情報機器はお蔵に入れて、原始人のようにみんなが暮らす。

▼痛みとは、こういうものだと思うし、マジでこれを実現しようとアクションを起こさない国の行政は「経済」という言葉に神経を侵されたとは思えない。

- 休日はパジャマで過ごそう。
- お風呂は仕事に行く前日だけとし、家族みんなで入ろう。
- 暗くなったら、早々に夕食をとって、夫婦仲良く寝ましょう。

---

2007年5月15日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 月のはじめにゴミを出す(血液型、好き嫌い)

---

月のはじめに考える…を書きたいのだが、考えが纏まらないので、ゴミでも出すか。

▼血液型。リボビタミンDと血液型占いは、日本人の呪い心理をくすぐったもので、面白い。一種の迷信のようなものだろうが、話題には事欠かない。

私は「A型」ですが、先日所属のHさんが、「絶対にB型と思うわ」と譲らないくらい私は「B型」人らしい。職場はO型社会。

B型。代表的に、ひとことで、どんな性格なんだ！

じゃあ、A型は？ O型は？

娘はO型です。典型的なO型だって。

確かに私と性格違うけど、似たところもあるわな、親子だから。

▼好き嫌い。あまり嫌いな人やモノを書くと、私という人物の印象が寂れるので、、、と思いながら、一面を表すには端的かも。

好き…渡辺満里奈。優香。米倉涼子(NHKの大河ドラマでちょいちょい見たけど、ヨカッタ)、小泉今日子(風花は最高でした。シビレタ)、昔の人で、原日出子とか。最も好きなのが榎山文江かもしれない…。

嫌い…うーん、基本的にはそんなにいないと思いますが、たとえば、(映画やドラマに出てる分には見ますけど)TVを消すことが多いのは、

武田鉄也、みのもんだ、和田あきこ、西田としゆき、川島なお美などの皆さんが出てると、自然にTVのチャンネルを変えろとか、よめはんも変えてくれるみたいです。

(追加するかも知れませんが)

あんまりたくさん書くとやらしいでしょ。好きな人も居てはと思いますし。

▼映画のこと。最近、映画を見なくなりました。博士の愛した数式も原作は絶賛してみたんですが、借りてきたDVDは最後まで見なかったもん。もうええわ、って感じ。ほんと、最後に見たのは、「風花」(相米慎二監督)かな。

▼好きな食べ物。お肉とビール、だった時代はもう昔のことで、最近はビールなしでも生きてゆけます。代わりに美味しいウイスキー(ニッカ系が好き)と日本酒を少々。機嫌のいいときには、ビールと併せて3種の酒をテーブルに置いて交互に飲みます。

牛肉については、美味しいモノをひと口だけ食べる。豚のヒレはもう少し食べます。

お魚は、毎日食べます。ハマチ、ブリ、カンパチ、アジ、サンマ、カツオ、シビ、タイ、ヒラメ、タコ、イカ(アオリイカが好き)を、刺身にさせていただき好んで食べます。エビとか貝は回転寿司でも見向きもしないみたい。

あつ！それから酢の物大好き。蕎麦が大好き。パスタ大好き。お好み焼とたこ焼きも好き。丼ものが好きです。何でも丼にしよう傾向あり。

炊き込みご飯も好きです。和風の煮込みも好きですね。

まあ、何でも好きなのか……。

▼苦手。自分は良く喋るくせに、よく喋る女の人には苦手みたい。知的な人が好きなんだそうです。

他には、両生類とか爬虫類とか。つまり、カエルとかヘビとか。冷たい感覚やヌルリとしたものは苦手みたい。

あつ！それから、無差別に吠えるという理由で、犬はおおよそ嫌いです。

(これを書くと犬好きな人に嫌われるからなあ)

▼よくする料理は、焼き鳥、豚の角煮、トマトの入ったパスタ、ホタテとブロッコリーのパスタ、カレー。他には、しょうゆ＋みりん＋酒、にんにく、しょうが、砂糖、塩、片栗粉、唐辛子、などを使うだけで出来るような簡単な一品料理が好きです。自分の酒肴にします。

▼今日のお昼は？

たぶん

シマダヤの稲庭冷やしうどん

▼今夜は？

美味しそうなお魚が見つかったら買います。(必ず自分で見つけに行きます)

---

2007年6月 3日 (日曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## やがて消えてゆくもの

---

初恋の日を あなたの胸は  
甘い涙に 感じるけれど  
それもきれいな夢  
枯葉が舞う頃  
恋人たちの森に  
思い出を捨てましょう  
初恋の日は 枯葉のように  
やがて色あせ 消えていくよ

北山修は、ピアノの唄でこうよんだ。

初恋であろうと、なんであろうと、思い出というものはやがて色褪せていってしまうものだということを、誰もが知っていながら、誰もが口に出さないでいるのに。

さり気なくそれを唄にしてしまった。

「紅の豚」で見事なシャンソンを聴かせてくれた加藤登紀子さんが巻末で「彼の詩は、どこにでもあるような、安っぽい言葉で構成されている。無意識のうちに、しゃべっているような、そんな、気安さで、それは体の中に入りこんでくる。」と書いている。

あの痺れるような声で、小首を傾げながら加藤さんが北山修をこのように語っている姿を想像すると、こんな豪華で、しかしながら甘く切ないひとときを想像させていただいて、私は嬉しくて仕方がない。

私のブログのタイトルはパクリだ。

そしてそのことを、多くの人が簡単に気づいていると思うが、

－ Walk Don't Run －

夕焼けの向こうまで ― 枯れ葉の舞う道をあなたと二人で ―

英語のタイトルは音楽から、二行目(サブタイトル)は北山修のこの詩集からヒントを戴いたのです。  
あるときに閃きで決めてしまって、移り気な奴なのに一向に変更しようとしないう私が居る。

きょうは、「大人の恋」の話を書こうと思っていた。

熱く、少し艶のある物語のような恋をしてみたいという夢を書こうと思っていたのに、「やがて消えていく」ものを、否、「やがて消えてい」ったものを思い出してそこで足踏みをしてしまった。

足踏みをしているので、あの人への手紙も書き出せない。

## 目指すところ

---

### ◎ 目指すところ

それは、  
夕日の沈むあの山の向こう。  
あるいは日の出る地平線のさらにその向こう。  
どんな街があるのだろう。  
どんな景色があるのだろう。  
そう思うので行きたくなりますね。

----

コミュで、「目指すならどんなところ」と聞かれて。

---

2007年7月 1日（日曜日）【[随想帖 1](#)】

---

## アジサイ

---

雨が降り続くと、真っ白の光がノートをカラカラに乾かしてくれるようなサッパリ感が遠のいてしまう。

はじめめとするのを嫌がる人も確かにいるけれど、雨降りに窓を開けてザーザーという音を聞きながらソファーに腰掛けて本棚を眺めていると、時間は惜しみなく過ぎてゆきながらも、それは身体に心地よい快感で、ときどき本を手にとってパラパラとめくって部分的に読んでみては元に戻し、次を取り出しては再び元に戻すという単純なことを、私は繰り返している。

でも、書棚の本たちはどことなくざわめいているような気がしてならない。梅雨とはそういう季節なのだ。

ザーザーというホワイトノイズは、数学物理的な解析をすれば、バイオリンの音が可聴帯域を超えて広がってゆくのとじょうに、非常に周波数帯域の広い音なのだろう。

人の脳みそはそういう聞こえない音にも動物的に反応ができるのかどうかかわからないが、極めて自然的で人の手の加わらない、なだらかで無重力に広がるような周波数曲線が、体の隅々までほぐしてくれるのではないかと思う。

つかこうへいとか井上ひさしなんて人の本が妙に新鮮で、手に取り上げたまま庭を見下ろしていると、雨足が一段と強くなってきた。

アジサイの紫色は、色彩としても、やはり不安定な色で、この不安定感が、人の脳みその中にあらかじめ仕切ったように作られた様々な色見本にも当てはまらないことで、落ち着く場所を探しながら心の中の隙間を彷徨うのかもしれない。

紫色が雨に打たれて揺れている。  
たかが、雨粒なのに、揺れている。

アジサイの葉から雫が飛び散るのを、イジワルな面持ちで私はじっと見ていたのだろう。その葉蔭から青ガエルがぴょんと飛び出した。

雨降りが嫌だなどと考えるようになったのは、きっと大人になってからのことで、純粹で何の欲もない子どもの頃は、どれほど雨が降ろうと長靴を履いて傘を差し校庭から田んぼの畦道へと、そして庭から庭へと遊び回ってはしゃぎ回った。あのとき雨は嫌いだと感じたこともなく苦痛なども無かった。

大人になって大人の知恵がついて、計算が出来るようになったころから、すべてが狂い始めたんじゃないのか。

あの頃なら書けたラブレターが、今はもう、書けない。

## 秋味

---

週末の土日あたりから稲刈りが本格的に始まった。

きのう、仕事に出かける途上ではまだ黄金色だった田んぼだが、休日でお天気も良かったので刈り取られたことだろう。帰宅時は日が暮れているので、苧田を見渡せないが、刈り株から発散するあの独特の甘い匂いでわかるのだ。

例年ならばお盆が明けたらすぐに始まる稲刈りだが、今年は気候変動のせいか、1週間ほど遅かったかもしれない。黄金色が枯野に変化し、里山が少しずつ黄色くなってゆく。まだまだ残暑が厳しいといいながらも、秋の気配は漂い始める。

空が秋の雲に変わっている。

夜中、窓を開けて虫の声にハッとする。

真っ白な月が、空のてっぺんまで昇って来るようになっている。

もうすぐ満月だ。

このごろは、ビールをめっきり飲まなくなった私ですが、「秋味」という名のビールがこの季節になると店頭に並ぶので買ってきます。

昔、麒麟・ラガーを好んで飲んだ私ですから、懐かしむようにゴクゴクとビールをいただきました。ゆうべは、サンマも食卓に並びまして大満足でした。

久し振りに本を買いました。

長谷川權著 ; 「奥の細道」をよむ(ちくま新書)

バイク、読書と忙しい秋になってくれますように。(祈)

---

2007年8月27日(月曜日) [【随想帖 I】](#)

---



## 違い、から考える

---

今さっき、「黒い雨」井伏鱒二、の作品を【読書部】の「学生時代に読んでおこう」に紹介しておくために、皆様のレビューを拝見しに行ってみた。私の書いたレビューは2006/07/15のものですっかり奥に行ってしまった。

レビューの件数を見て、ふむふむ、なるほど、と頷いた。

投稿件数が、

- mixi: 100件
- GREE: 7件

この数字の差が二つのネットワークの一面を特徴付けているといっても大きな間違いではないだろう。

しかし、それも次第に近似化し、mixiはその良さを失いつつあることは疑いない。

----

ケータイ電話(や近代化したIT基盤)が、人々の思考力や洞察力を確実に蝕む。

裸の王様のように、賢くなって愉しんでいるかのような悦楽気分に入るなかで、人は限りなく、人として一番大事なモノを瓦解してゆくのを見て、平然としている…。

---

2007年8月 6日(月曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## 秋を楽しむ

---

秋の気配が漂い始めているのが嬉しい。

昨日の7時過ぎ、快適に国道をバイクで飛ばして県内移動中に、サーキットの方角に熱気球が見えた。毎年の光景なのだが、そうだこれも秋のイベントだったなあと改めて思う。

日記のタイトルには「ツーリング日和」と書いておこう。そう決めながら山麓の丘陵地帯を走り抜けて職場に着く。ツーリング日和であるけれど仕事です。みんなはどこかに出かけたのだろうか。(でも、夕方には厚い雲が出て、少し雨がパラパラしましたが)

夕刻、職場を出るとすっかり日が暮れかかっている。涼しさと共に、様々な変化がやってきているのだ。日が落ちるのが早くなり、蟬がいつの間にか鳴かなくなって、月が真っ直ぐに空に昇るようになってくる。そして、千切れている雲が目立つようになり、この千切れた破片が赤く染まる。だから、秋の夕焼けは美しく見えるのだろう。

デスクのPCが表示する県内の大気汚染の数値が低い。お盆休みを始まりにして、オキシダント(Ox)値や窒素酸化物(NO,NO2,NOx)の値がガクンと落ちたまま、きれいな状態を保っている。上空を流れる風向や風速が秋のモノに変わってきた証だ。

研修室の窓越しの斜面にヤマユリが咲いている。夏の花は勢いよく燃えるように咲き、暑いさなかも平気で堂々としているように見えるが、秋の花は、そっと静かに咲くような気がする。

秋は静かに訪れて、いつの間にか冬になってゆく。きょうのように、ザーザーと降ってみたり、顔色を急変させて静かに降ってみたり、そして、日が変われば晴天だったりする。

今度の休みは晴れだろうか・・・と気をもむ日々を何度か経て、朝夕に寒さが染み入るようになる。暮れてゆくのを楽しむために秋はあるのだろうか、とつくづく思う。

----

みなさんの日記を拝読しながら、それぞれに秋の気配の驚きや喜びに触れ、花や季節ようすを写真に載せられるのを見かけると、あてもなく外へと出たくなる。

バイクは快調です。昨日も通勤で120余キロ走ってきました。

それだけでボロクなって行ってしまうですが、、、。

でもまだ4万キロを超えたところです。

オイル交換、いつからしてないんだろう...

ふと、気になってしまった。

(ETC欲しい)

## 枯れ落ちる

---

夏が終わってしまった。毎年、秋が深まり始めると、いったい、いつから秋になったのだろうか、と思う。

「ええ、そうね、あの事件をきっかけに秋になったわね」というように相槌を打ってくれる人もいない。秋の始まりを沁み沁みと語れる相手もなく、夏が衰えて消えてしまったことをひとりで私は寂しがっている。(満月の夜がそうだった。)

ああ、あれは、少しずつ少しずつ眠りに入ってゆくときのように……だったのだろうか。  
「いいえ、違うわよ。あなたの知らない間に、消えていったのよ」  
誰かがそう囁いてくれるといいのに。

蠟燭の炎が自分の本体を燃やし尽くすときのように、そして炎が消える間際には天に吸い込まれるようにひとたび大きくなるように、激しく夏も燃えたのだろうか。

---

「夏は嫌いだ」と口癖にしていながらも、ほんとうのところは夏が好きだったのかもしれないと気づき、私は苦笑している。意地のようなものを夏に対して感じていて、好きだと言わなかっただけなのかも知れない。

ジリジリと焼けるような西陽が、カーテンのない窓から差し込み、部屋じゅうが真っ赤に染め上げられてしまう。そこで仕方なく、部屋の奥にあるソファーに逃げ込んでいる私であるが、その手元には明度の低い黒味を帯びた赤い光で満ちていて、膝に乗せたノートの活字は霞んでいる。明暗の落差があるのだ。

首筋を汗が、時々、すーっと流れ落ちる。拭き取ることを面倒とも思わず、流れるままにして、私は真っ白の紙を睨んでみたり、目を閉じてみては「あの時」を脳裏に復活させようと試みていたのだった。

夏から秋への変わり目に、膨大な時間が無駄に過ぎていった。【鶴さん】を再び書き始めるには、気分がもう少し悲劇に満ちてこななくてはならないのか。

夏は終わり、月見草の花も枯れ落ちてしまった。

待てど暮らせど来ぬひとを  
宵待草のやるせなさ  
今宵は月も出ぬそうな

思わず歌を口ずさむ。

## 木枯らしの一日吹いておりにけり

---

木枯らしの一日吹いておりにけり 岩田涼菟

▼先日、金曜日。何気なしに仕事にでかけそうになってしまっ、おとときょうは休みだった、ってなわけで、ゆっくり過ごしていましたが、あの頃からどうやら寒くなってきたのかね。

▼金曜日が休みだったので、土日は仕事でした。そしてきょう、月曜日は休みです。ふしだらな部署に勤めるしがない公務員です。はあ。

▼しかし、今度の連休は、23日には仕事に行きますが、そのあとは休みますぜ。京都で、今度こそは、紅葉の写真を撮りたい。でも、寒いからバイクでいけないので、電車でいきます。

▼……といいながら、正月ツーリング計画を立てて見ようかと考えてみたりしてマス。キャンプも。でも、自分のテントが腐ってるかも。

▼最近、割とせつせと楽器を吹いています。いい楽器が欲しいなあ。バイクを始末して、車も1台処分して、楽器を買おうかな、ってマジで考えてしまってますが。

▼手元の本は、ずーっと「忘却の河」を持ち歩いていましたが、先日、松本清張の「火の路」を買ったのですよ。しばらくはそれでOK。

▼娘が欲しがっている司馬遼太郎の本(詳しくはコミュを参照して)ですが、何にしようか迷っています。風神の門、梟の城、のどちらかにしようかなと思っています。

▼娘のカメラが修理完了。私がカメラを受け取ってきたのですが、その中に入っていた写真に、私が昔に撮ったのと同じアングルの写真があったので驚いた。30年のブランクがあっても親子は同じ景色を撮るのですね。(私のフォトアルバムに同じアングルがあるかもね)

※一番上が娘の作品。同じ場所から、30年の時間差で。写真公開は一部の記事のみ。

---

2007年11月19日(月曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 「森嘉」の豆腐

---

京都の夜は、結構寒いです。

嵐山を2度も散策しました。

お昼は自転車。夕方は徒歩で。

真っ暗なのに、嵐山の竹やぶの道にはたくさんお人が歩いてます。

私も歩いてましたが。

帰りに、白菜買ってきました。

今日のお昼に嵯峨釈迦堂というところのそばの「森嘉」で豆腐を買ってあるので、今夜は湯豆腐。

イキのいいブリのアラを見つけた日は「ぶり大根」がいいですね。

男の料理だから、レシピはない。

湯豆腐のだしは、昆布。

ぶり大根のだしは、煮干です。

---

2007年11月25日（日曜日）【随想帖 I】

---

## 味わう ―「森嘉」の豆腐 続編―

---

たくさんの方々にレスをもらってしまったが、個々に書く時間が無かった。そこで、サボってまとめレスのようなものとなりつつある……。

しかし、昔、万年筆で手紙を書いていた時代なら、ポストに投函してから2,3日後に相手に届くから、返事が戻ってくるのはさらにその数日先だったはずだ。

タイトルに、「味わう」と書いた。

手紙を書いた私は、この待ちの時間も一種の「味わい」だった時期があったわけだ。

人々は味わいを、自らの手で失ってゆく。その愚かなことをひっそりと嘆いている。

---

さて、森嘉の豆腐は美味しく戴きました。

実は、豆腐が嫌いだった私が食べるようになったのは、森嘉のおかげだ。美味しいモノに出会うと、根底から覆されることがあるという事例です。

つまり、湯豆腐なんて家で食ってもそれだけじゃ美味くないしシンプルすぎる。だから、レスで書いて頂いたように寄せ鍋に変身させてしまうことが多い。それは正解だと思います。

でも、座敷に座り、時間を掛けて豆腐だけを戴くというのは、非常にもったいない気持ちもあるものの、お茶を戴くのと似たような気分になせられ、私に禅の心得はないが、想像するに、そんなものを感じながら豆腐を戴くと変に美味しいと思います。詰まるところ、「心身ともに落ち着いて、準備をして受け入れる心を持ちなさい」ということなのかもしれない。

豆腐の味わいとは、のど越しで満足するものではなく、舌がとろけるものでもない。京都の豆腐が特別に美味しいとまでは断言できないが、豆腐とはこうでなければならないという主張が感じられる。

(いつか、気の合う人とゆっくり豆腐を食べたいものです。大村益次郎みたいやね……)

-----

自他共に認めるウイスキー党の私ですが、先日、腸炎を煩い一日酒を欠かしてしまった。365日欠かすことの無い私が飲まないと、周囲もーというか、よめはんが一相当に私が不調だと察してくれる。

飲まない夜を過ごしながら、仕事やあれこれで怒りが収まらない（自棄酒は飲まない）とか、体調不良のときは無理には飲まない自分を振り返りながら、飲めるということは、幸せなことなのだと改めて感じている。

味わいの今宵も深し秋の暮れ ねこ作

明日から師走。

---

2007年11月30日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 振り返る

---

▼ふと思いついて去年の12月の日記を振り返ってみる。するとそこでは、写真を何枚か拾い出し、感傷に浸っていた。記憶の中で埋もれていた忘れかけている像が、1枚の写真で不思議なくらい鮮明に蘇える。

▼写真と言え、私は親父の写真を手元に1枚も持っていない。もう10年前の冬に逝ってしまったので、記憶から遠のくばかりだが、毎年冬になると、木枯らしに椿が揺れる庭で葬儀をしたことを思い出す。

▼いよいよ、師走。年が暮れ行くこの時期になると、親父を思い出し、さらにその親父が寒い農作業小屋で夜なべ仕事に注連縄を作っていたのを思い出す。

▼生きているときは、何も思わなかったというか、考えようとしなかった。「寒いのにやめてえおきい」と声を掛けることはあっても、手伝いもせずにはいた。だから、新年を迎えるときに注連縄が飾られることは、当たり前のことだった。

▼しかし、親父が逝ってからは、誰も注連縄を作る者がいなくなってしまった。餅を搗く者も居なくなってしまったし、年を送るために家の軒先を片付けたりすることも殆どなくなった。すっかり静かな師走になっている。

▼一年を振り返りながら縄を編む。禍福は糾える縄の如し。ひとつずつ丹念に縄を捻りながら1年を思い出し、それぞれに感謝をし、また反省をしながら親父は縄を編みこんでいたのだ。そう、後年になってから気付くのだから、後悔先に立たず。先人の言葉通りとなっている。

▼人は、皆様のおかげでここまで来れる。そのことに「感謝をしなければならない、などと言葉で説いてもアカンのや、黙って注連縄の作り方を覚えろ」、と親父は言いたかったに違いない。

▼月の中旬に満月を迎え、それが欠けてゆけばひと月が終わる。それを12回繰り返して師走を迎えた。

▼古代エジプト人は、遥か3千年もの昔にその月の満ち欠けを見て、ひと月を30日とし、これを12回と定め12ヶ月としたという。1年は365日、閏年は366日であるという概念も正確に把握していて、 $12 \times 30 = 360$ 。残りの5日をどの月にも属さない余分な日として感謝をしたという。

▼一体、私たちは何者に呪縛を受けているのだろうか。皆が皆、同じ方向へと歩み続け、同じような価値観で物事を判断し、多くの人間が自分は幸せだと思い、よその家族より我が家族を大事にし、弱者を切り捨て、それで間違っていないと信じている。

▼毎年同じようなことを考えている。人が溢れ雑音と化した音楽をきき、街を歩く。華やかな電飾を見るたびに、幸福という意識は麻薬なんだと思う。

---

2007年12月 2日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 温いと温い

---

ぬるいとぬくい。

----

▼お風呂は温めで、ビリがいい。近頃の風呂は温度制御が行き届いているので39度くらいのお湯に狙って入れます。温い風呂で20分以上浸かりつづけると身体もポカポカ。もう1度低いと、ちょっと寒気がきますが、夏なら38度くらいでも快適です。

▼寒波が襲ってきてます、温い格好でお出かけください、というときは温いと書いてぬくいと読む。伊勢平野の多くの人は、温いと言わずに温たいと言います。私は国語学者じゃないので勝手を言いますが、温たいという言葉は、温たしという言葉があったから今に残っているのでしょうね。でも、未然形はどうなるのかね。

▼オイラは猫舌、熱いものが苦手です。

ゴメンね、お茶が温くなってるので入れなおします、とか、味噌汁、温めますか？　なんて聞かれるのですが、慌てて断ります。

我が家では熱いものを食卓に出してはいけない。そういう厳しい不文律があります。味噌汁を温めるなんて概念は全く無い。ホカホカ御飯もほどほどに温いことが条件です。

▼お外は木枯らし。凧とも書きますが、寒々しい字ですね。窓越しに縁側は温いです。日差しが背中に当たるとシアワセ感が体中に溢れますね。猫の気分。

▼温い…。私は地球温暖化対策室というところの仕事をしていますが、ここにも温という字が入っていて、うーん、今やマイナスイメージやん。人間は(ヒトは)少々寒いところでも暮らせる動物なんです。縄文時代の文明は、寒冷地に多く発見されますしね。人間の心は温もりを求める。検察の捜査は温くならないように、くれぐれも。大臣逮捕はいつだろか、楽しみ。

▼お酒は温めの燗がいい…と唄にありますが、この歳になると、温いおでんに冷たいお酒という組み合わせを選ぶこともしばしば。

----

そうそう、昔、ちょうちんという映画があって、あれは名画ですから見てない人はぜひ。

ちょうちんの赤色温し年の暮れ　ねこ作



## ひとり旅・・・を続けよう

---

ひとり旅。バイクで走る旅のコミュを作っている。(mixi、GREE)

旅は、ひとりがいいとは限らないだろうし、長期の旅が褒められたものでもない。  
誰だって仕事があるし、家庭があるなかで様々な事情を背負って旅をする。

私も幸運なことに、黄金週間や夏休みなどの休暇を利用して、1週間から10日間あまりの旅を永年してきた。沖縄以外の都道府県で、数々の思い出ができた。

ひとり旅をするバイク好きの人は多い。彼ら彼女たちと話をすると、およそ同じような話になる。

駐車場にバイクを止めても何となく寂しいような感覚がある。  
しかしながら、何にも縛られない解放感もある。  
行く当ての無い不安感とこれから起こる未知なことへの期待が交錯する。

あの感覚は言葉にできない。  
だから、そんなコミュを作っても、言葉の交流は難しいことになる。  
でも、私たちは出会うと会話を交わす。コミュでも対話をする。  
何かを書いて、同じことを連想したり胸に蘇えらせながら、読んでいるのだろうと思う。

世の中が物騒になって、夢を語るには悲しすぎるような状態だが、それも我々のひとりひとりの成してきたことなのかという反省もしなくてはならない。

どんな時代になっても旅人はひとりで、野天の地で体を休め、あの山の向こうの景色はどうなっているのだろうという好奇心につられて峠を越えてゆく。

道ばたの小さな小屋の小さな屋根の下で雨宿りをしたこともある。  
ずぶ濡れになりながら同じようにバイクで駆け込んできた子が二十歳そこそこの娘さんで、空を見上げながら旅の話をしたこともある。

ひとり旅には、筋書きはなかったのだ。





## 忘れる

---

▼京都・高尾のもみぢ屋で豪華なボタン鍋を囲んだり、琵琶湖岸・雄琴温泉に繰り出しカモ鍋を堪能したこともあった。越前まで車を飛ばしてカニ三味の夜を過ごしたこともある。

長い過去を振り返ると、野球部だったころは華やかだった。  
1番センターねこさん。強肩で俊足。

12月になると1回の忘年会が1万円以上で、所属、同期、仲好し、野球部、音楽部、ハイキング部…などに行くのだから、ボーナスの大半は泡と消えた時代だ。

▼今年の忘年会は1回だけで、私は「お酒を飲まない組」のほうで参加する。ええ？大酒飲みなのに飲み会に参加して飲まないなんて有り得るのかい？とお思いの方もありましょう。でも、我が職場の忘年会は女ばっかしで(7割くらい)ペチャクチャとおしゃべりな会なので、別に飲まなくても楽しい。

そういうわけで、私の周りでもこの1年を振り返る雰囲気は少しずつ高まりつつあります。

▼半世紀を生きてこの年齢になると、これまでお世話になってきたみなさんに少しずつではあるものの、心から恩返しをしていかねばならない、と思う。

飲んだ暮れて歩き回った夜の街には未練は無いが、一度くらいは家族を連れて静かに飲んでみたい。私はカニをそれほど好まないの、ふぐがいいなあ。

ひれ酒や午前零時に襟を立て   ねこ作

---

2007年12月18日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## ぼたん雪きらりと光る指きった

---

パラパラと昔の日記を捲ってみると、随分と懐かしい。

近年は苦節の日々を送っていることもあるが、そういうときの方が自分流の感動が残っていて面白い。

----

平成19年

立春が過ぎて安堵の朝寝かな  
立春に母を訪ねておかき食う  
ぼたん雪きらりと光る指きった

平成18年

くちびるが今でも好きよとくちずさむ

平成17年

立春が過ぎても寒し猫だるま

-----

豆食えどオヤジの年に追いつけぬ （平成20年 ねこ作）

ハングリーという言葉がある。昔、よく上司が口にしていたのを思い出す。しかし、この言葉には一種の空しさのようなモノもあった。

貧しくなれ、苦しめ、痛がれ、悲しめ、泣け。

人は、このような言葉を浴びせられ、ときには命を受けて、艱難辛苦に立向かう。闘志を煮えたぎらせる必要もあるだろう。だが、「悲しむ」という言葉に文法的命令形は存在しても、その意味として命令形はあり得ない。「悲しめ」と命令されても、悲しむことは出来ない。

果たして、私たちはハングリーになれるのだろうか。

-----

本当の幸せを知る者は、本当の不幸を知ったことのある者だけである。決して有名人の残した言葉ではなく凡人のものだ。ごく普通に不幸な人が、不幸の中に居ながら自分は幸せだと感じたとき、本当の幸せが理解できるという。もしそうだとしたら、現代人が感じている幸せとは、偽りの幸せになってしまう。何故なら、多くの人は本当の不幸を知らないのだから。偽りの幸せを、ホンモノの幸せだと思っていることほど空しいものはない。

寒さの中でじわじわと蕾を膨らませ続けているものがある。花を見て、また、自分の寒さを省みて、本当の幸せを知った者の心には、計り知れない美があり勢いがある。

北野の梅は悲しい。しかし、どこからかしら、鼓動のようなモノが聞こえてくる……ような気がする。

東風吹かば匂ひをこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ。

そろそろ、ほころび始めるのだろうか。



---

2008年2月 6日（水曜日）[【随想帖 I】](#)

---

## 父の匂い

---

久々に塵埃秘帖を書こうと思う。

▼日々の暮らしに余裕があり過ぎても足りなさ過ぎても、いけない。人の心とは、何とも低能力であると思う。二本足で歩き、文字や言葉を使い、道具を考案して空も飛べる一方で、大自然の中で逞しく生きている動物たちと比べると、儚い。そんな些細な才能を誇れるだけで地球上で一番大きな顔をしている。地球まで滅ぼしてしまうかもしれない愚かな動物なのに、インフルエンザに怯え、心を病み、成り金でいい車に乗って走りまわり、実に滑稽だ。

▼京都での寝床は娘のベットだった。イタリア帰りで部屋が片付かず、布団が1枚しか敷けず、ベッドに私が入り母と娘が1枚の布団で寝ることになった。2晩ぐっすりと眠って

「やっぱりこの布団は娘の匂いがするな、何年経っても嗅げばわかるわ」

と私が言うと、娘は自分の布団を取り返すために2日振りに自分お布団に潜りこみ

「お父さんの匂いが着いたんと違うかな」

と言う。

(匂いながら)「やっぱり匂いがするわ」

柔らかい自分の布団で、自分の匂いに私の匂いが混じっているにもかかわらず、うっとりしている。

---

▼父の匂い。私にはそんな記憶は無い。18歳で家を出て下宿暮らしを始めたので、父やオフクロの布団に潜り込むなどということは、子供の頃でもない限りやった試しも無く、従って記憶は無い。

▼うちの娘は、大人なのか子供なのか、私の布団に気やすく潜り込み、追い出さなければ朝までも寝ているような子で、受験のころにも寒い夜などにはたびたび私のところに遊びに来たものだ。寂しいのか部屋に戻るのが億劫だったのか、そのあたりはわからない。

▼世間一般では、父の布団はクサくて汚いというのが通説だ。にもかかわらず、我が家の娘はクサイかもしれない布団にたびたび遊びに来た。だから、私が占拠しても、許してくれるのだろう。

▼私が、その記憶にも無いほど昔に、父の布団に潜り込んでいたとき、父の布団はどんな匂いを放っていたのだろうか…とふと思った。

どうしても思い出したい。しかし、思い出せない。

▼父の布団は、確かにクサかったはずだ。農作業で汗にまみれ、夜なべで疲れて、休まる場所はあの布団だった筈だから。そう思うと、意地でも思い出したくなってくる。

▼匂いというもの。記憶に無いものを思い出そうとすると、私の思考は段々とかすれてきて、夢の中を彷徨うような不思議な気分が襲われ始める。そう、母の胎内でプカプカと浮いていたときのようだ。

▼小雪が舞う大寒の頃に父が死んで10年が過ぎた。匂いは、今となっては確認できない。

我が家の娘は、私が死んでから10年後に、この布団の匂いを思い出してくれるだろうか。

## ジンクスが風上へ誘う沈丁花

成人式にも出る暇もなく日夜机に向かい臨んだ試験であったが、残念ながら満足な感触は無いまま三月を迎えていたと思う。

駅までの歩き慣れた道路のどこかで、沈丁花の花がぷんといいい匂いを放っているところがあった。進級発表の日に匂いを嗅ぐと期待が叶わないというジンクスがあるのだという話を聞いて、些か気に掛けていたものの、住宅街を歩いてこの花に遭遇しないで過ぎることは難しい。

当時は、今のように「留年」という言葉があったものの「落第」という呼び方もしっかりと使われていた。

正門を入り階段を駆け上がり教養棟の進級発表の掲示板を見たときに自分の名前が(というか番号だったはずだが)無かったときには、多かれ少なかれ予想はしていたものの、足が震えるような感覚と目の前が渦巻くような衝撃を受けた。

まあ、落第というお仕置きを食らったのだが、学友は二倍に増えたとし、肩の力も抜けた。思い切り古本屋通いもさせてもらったことだし。そう思うとそこで吹っ切れて、卒業までの後半戦は、結構自分でもアップレなほどに専門過程に打ち込んだものだ。

1970年代。

学生は、今の若者のように豊かで満足に満ちた暮らしをしてはおらず、勉強にも生活にも不満があった。送り出す方の家庭にもそんなに生活に余裕があったわけではない。「勉強をやりたくて進学した」大学であったが、ウツカリしていると「無理に勉強する必要も無いし遊びに大学に行くくらいなら早く就職しろ」という父の苦言が飛んだ。(実は今でも)寝言に驚されるほどであったのだが、それを押し切って東京にしがみついた。

――

その二年前、下宿を決めたあとで文学部のS君と昼間からビールを買って穴八幡付近を彷徨いながら合格の乾杯をしたのを思い出す。

S君は、仙台で四年浪人をして、七年ほどかかって卒業していった同僚だ。そういう青春もあったのだな、俺たち。

沈丁花の花が咲く季節になると、あの頃、愛用の下駄を引っ張り出して颯爽と街へ出かけるときの清々しさを思い出す。恋人なんてぜーんぜん欲しくなかったな。青春は輝かしいもので、夢は儚きもの、です。

穴八幡





## ゆびきりの指が落ちて春の空 坪内稔典

真っ青に澄み渡ることもない空を見上げていると、隣家の屋根の蔭から素早い動きの鳥が現れて窓の前を横切っていった。暖かい陽射しが差し込むものの、真冬のように部屋の奥まで届かなくなってきた。着々とエネルギーを貯めてゆく地球の本能のようなものを感じる。

三月も中旬を過ぎると、学生さんたちはソワソワとするのだろう。別れるということと出会うということ。今の季節に囁かれるこの言葉にはホロ苦い響きがある。指きりをして別れてゆく人たち。

」」

誰と指きりを交わした友がいたわけでもないが、何となく別れを惜しみつつ、永遠の別れでもないのだからと突っばってみたりしながら、未来の健闘を祈りあって祝杯をあげたのも三月の下旬のことだった。

悔しきかな、著名人になっている仲間も幾人かいる。ネットで名前を叩けば活躍ぶりが見えてくるのだが、自分の情けなさも見えてくるからちよつと寂しいものもある。しかし、よく考えてみれば私なんぞにそんな名声が得られるわけなく、田舎の蟄居で虫の如く暮らしてこれたのが似合いだな、とつくづく思う。

北の丸公園の桜はまだまだ固い蕾であったが、日本武道館での卒業式を終えた後、母校までの道のりを、そんな桜を見上げながら帰ったように記憶している。風は冷んやりとしていたものの、コートは着ていなかったと思う。卒業写真も残っていない。

」」

あこのころの私はムズムズしていた、というのが割と当たっているかもしれない。就職が決まって、これから何ができるだろうと闘志を燃やしていた。少なくとも24歳の春は結構、熱かったはずだ。

花粉のせいでもないのに、春の空を見上げて闘志を燃やしてムズムズしていたときがあったのだ。だからこそ「おい、初心を忘れるなよ」と自分を叱咤するためにも、春の空を見上げてみるのことも必要かもしれない。

こんな句もある。

がんばるわなんて言うなよ草の花 坪内稔典

もう、万歳！と叫ぶしかない。俳句。

」」

メモが残っている。

-----

夢を追い幸せを食べる虫

未知なるものに好奇心を向けて、様々な方法によってこの欲求を満たそうとしてきた。そんな気持ちを殆どの人は、もともと持っているのではないだろうか。

山の向こうには何があるのかと、日没になると母親に尋ねた子どもの頃の方が、今よりも遥かに私は、学者だったようだ。

子ども心を手を棄てきれずに「夢を追い幸せを食べる虫」(自称)である私は、前にある未知なるものを見つめられるよくきく眼と、それを輝かせるに足るだけの涙を、今年もまた追いつづけることになるだろう。



## レジ袋考

---

京都日記は、また別に書きますが、用事で別宅に行っておりました。

ジャスコでレジ袋を受け取る人は、皆無に等しくなりました。

エコバック政策としては一応の成功と言えましょうが、なんだか悶々としたものを感じざるを得ない。

確かに本を買ってもカバーをつけますか？(いいえ)

袋に入れますか？(いいえ)

ではレシートをお持ちくださいね、

と言う対話は今まで無かったことだから大いなる進展だ。しかし一方で、百貨店の空調は過剰だし、音楽や照明は営業のためとはいえ、顔をしかめたいほどのところもある。もっと、地味でもいいんじゃないか。これだけ地球温暖化でバカ騒ぎしているのに。

と、そんな、ジジイの小言のようなことを思いながら、若者の町OPAを散策していたりする。

以下、京都日記へ。

-----

### レジ袋考察

レジ袋の削減が、予想以上に速いスピードで定着しつつある。

その一方で、何故、レジ袋が目の敵になったのかが、大いに忘れ去られつつある。

レジ袋は、かつて、長い歴史を辿っても素晴らしい発明であったはずだ。人間(ヒト)の知恵の素晴らしさを称えることは必要だろう。しかし、限りある石油資源の枯渇が目に見えてきたこと、ヒトの暮らしの中で便利さを追求する副産物として、二酸化炭素の排出量が地球の温暖化に大きな影響を及ぼしていることなどから、目の敵になったわけですね。

ヒトは無駄なことをして二酸化炭素を排出する。しからば、その無駄をやめることが必要だという論理です。

-----

「辛い思いをしないで、または、さほど苦労しないで私たちの暮らしの中でちょっとした工夫を重ねれば、地球温暖化を防止するのに役立てるんだよ。」

そんな意味の宣伝や標語、キャッチコピーがあるが、明らかに生温い。

改訂版提案。

私たちの暮らしは、もはや、大きく地球温暖化に向かって加速するようなことたくさんしているんだよ。

自動車に乗ること、深夜にテレビを見たり、灯かりをつけたりしていること。

こういうことは、ヒトの本来の暮らしを考えたときに、レジ袋どころじゃないほどの無駄をしているんだ。

だから自動車に乗ることや乗らねばならないときは、排気ガスの少ない車に乗る工夫をしたほうがいいね。大きな車は快適なんだけど、快適さを辛抱したり少し不便をしても我慢をするべき時代だと言えると思うよ。

深夜までテレビを見たりして楽しい暮らしだってやりたい気持ちは分かるけど、見直さなきゃいけないの。

こういうことを、社会全体でやるのが、レジ袋を削減することよりも遥かに本質を見据えた大いなるアクションなんだ。

世の中を変えてゆくことは、私たちが痛みを我慢して、お互いが一丸となって暮らしを改善することなんだ。

レジ袋って…

行政指定のゴミ袋として使えるように設計しなおして、指定ゴミ袋価格で(環境税なども加算して)堂々と販売すればいいのに…

とふと思った。考察する価値はあるかも。

---



## ヘビイチゴ

---

通勤にJRを使うようになって、車窓からの景色を楽しむことが増えた。気候や天気のおかげで日々刻々と変化し、決して見飽きることがない。

人は、朝日を見て一日の始まりを引き締め、夕焼けを見て今日の自分を労わっている。ネクタイを緩めカバンの中の文庫を取り出すものの、ふと車窓から眺めたそこに、蓮華畑と麦畑が広がっていて思わず目を奪われてしまった。

この感動を丸ごと写真に納めたり絵にすることは難しい。やはり感動というものは、隣にいて同じ景色を黙って見つめることから始めねばならない。

効率化、簡素化などの波が押し寄せ、自由とい旗のもとマネー主義の嵐が吹き荒れ、人の心が荒廃してゆく。寂れるものを二人でじっと見つめることで、寂れさせてはいけないものを丁寧に拾い上げるという至って単純であり重要な手続きを社会は御座なりにしている。

何の変哲もない田舎の平野。その向こうには夕日が沈む山並があり、麓には脈々と流れ来る河川の水の恵みがある。

麦畑に隣接する水田に水が満たされ鏡のように光る。昔の人はこの水田に朧な月が姿を映す自然に感謝し、子どもは蓮華の花畑で戯れて遅くなった。思うまもなく田植えが始まり麦畑が緑から黄金色へと変化をしてゆく。

巡りゆく季節のなりわいのおかげで私たちは暮らしているのだということを忘れてはイケナイのだ。

---

景色ばかり眺めていて、一向に読み進まない司馬遼太郎さんですが、菜の花が好きだったといいます。黄色い花は、赤い花が情熱を発散するのとは対照的に、自然のなかに生存する逞しさのようなものを届けてくれるような気がします。

黄色い花の写真を知人(木村さん)が

[HP](#)

にあげていたのでちよいとお借りしてきました。

ヘビイチゴの花



ふるさとの沼のにほひや蛇莓（水原秋桜子）  
私の大好きな句です。

蛇莓の実



## やまぶき

---

七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだに無きぞ悲しき

ずぶ濡れになったままで聞かされたときに太田道灌は、果たしてどのような感情を抱いたのだろうか。

後になって兼明親王の歌と知るといふ伝説があるものの、この「みのひとつだに無きぞ悲しき」という言葉で表現される芸術作品の響きに、何を思ったのだろうかと気にかかる。

五月の田植えの合い間のシトシと雨が降る夜に、一日の疲れを風呂で癒した後に居間で母は、「七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだに無きぞ悲しき」という歌があって太田道灌が雨宿りを申し出てたときに断られたんや、という話をしてくれた。

何度その話を聞かされたのかさえ記憶に無いが、母は女学生時代にこの歌に感動したので息子に話したのだろう。

一度だけ聞いただけでも忘れない歌もあれば、何度聞いても憶えていない歌もある。この歌のどこを気に入ったのかは自分でも曖昧だが、悲しさに共鳴したのではないかと振り返っている。

山吹は恋の花である。古代の人は八重咲きの花を好んだのだろうか。薔薇にしてもそうだが、湧き上がるような熱情を花びらに感じるのだろうか。

黄色くて地味な花だと思う。一重咲きの山吹(ヤマブキ)は可憐な花で、庭にひっそりと咲かせておきたいような落ち着きさえある。

鼻を近づけると薔薇のような香りがする…はずだけど、その香りの記憶は無い。そう思うと嗅ぎに行きたくなくなる。

さて、

きょう、久しぶりに母を連れて買い物に出かけた。鰻が食べたくなったと言って私に町まで連れて行って欲しそうにしたのだが、そこにはまた別の理由があったようだ。

妻と私と3人でショッピングセンターの中を歩いた。後ろ姿を眺めながら、そういえば子どものころの我が家の庭にはバラ園ができるほどの薔薇が咲いていたなあ、と思い出した。

母は薔薇がきつと好きなのだ。だから、山吹も好きだったのだろう。

まあ、そんなことに今ごろ気づいた。

そして、もうひとつ気付いたことがあった。

京都を離れるときに同僚の女性が「田舎に帰ったら花屋さんをするんでしょ。それが夢やって入社の際に話してなあ」と言ってくれて、その「いつか、花屋になりたい」と私に言わしめたものは、この歌か、庭に咲き誇った薔薇の花にルーツがあったのかもしれない……ということだった。

## やまぶき その2

---

「塵埃秘帖」に山吹(ヤマブキ)のことを書いたのは、まず、母親のことを思い出したからでした。

母の日に顔を出さなかったこともあってか、電話があって呼びが掛かった形になりましたが、今の時期、真夏を思わせような土砂降りに見舞われることがあって、何の根拠も無く母が夜なべに太田道灌の山吹の伝説の話をしてくれたことを思い出したりしてましたから、まあ神様の呼びかと。

子どものころ、初春には菅原道真の歌を、夏には太田道灌を、ほとんど感情も表さずに淡々と母は説明をしてくれました。

そして、いつも、「親の小言と茄子の花は千に一度の無駄も無し」、昔からそういうものだと言い、「茄子の花は咲いたら必ず実を結ぶんや。親の小言と同じやというてな・・・」と、私から目をそらせていました。

私にはたくさんの小言を投げつけたかったのですが、コイツには言っても無駄な面があると早々に諦めたのかもしれない。そのくせ東京の大学にやってくれましたけどね。

ショッピングセンターの買い物カートに凭れかかりながら歩いている後ろ姿はすっかり腰も二つに折れてしまっていました。杖があればさぞかし楽だろうに。

しかし、なかなか杖を買わせてくれないから、私は少し困っているのだが。

そうそう、書棚に積み上げた本の整理をしていたら、ぼたりと封書が落ちて、中に紙切れが一枚入っていました。

父の死亡診断書です。死ぬまでの4日間の苦しさが伝わってきます。

人間、生きていなあかん。オームのサリン事件と阪神の地震のときに大腸癌を切って入院していた母です。6人部屋で同室に居た人たちは瞬く間に5人とも死んでしまったのに、どういうわけか生きています。

父の分も生きているのかな、とか思います。

折れ曲がった腰が辛そうにも見えますが、スイスイと歩いていたので、安心して帰ってきました。

そんなことを思いながらメルマガ書いておりました。[\(巻頭言と編集後記:5月号\)](#)

---

2008年5月20日(火曜日)【[随想帖 I](#)】

---



## ホトギス

去年の6月には、メルマガの巻頭言で私は次のように書いた。

—\*—

県議会議事堂(津市)の植栽の緑がいよいよ夏の趣を呈して、博物館への坂道を辿ると街路の銀杏も夏に備えて着々と装いを新たにしています。日差しは既に夏のもので、時には木陰が恋しいとさえ思うこの頃です。

センターでは、夕刻になると不如帰(ホトギス)の声が聞こえてきます。閉館のころ、裏山のほうから夕暮れのしじまを突き抜けるようにその声が届きます。

キョツキョツ キョキョキョ。

キョツキョツ キョキョキョ。

鈴鹿山麓の不如帰の初音は毎年、5月下旬です。山積の仕事にまみれているセンターの面々は、この風情に耳を傾けるゆとりなど無かったかもしれませんが…、今年も間違いなく5月20日ころから啼きはじめました。

不如帰。カナでホトギスと書くことが多いですね。「泣いて血を吐く」といわれたり、「泣かぬなら殺」されてしまうような悲劇な鳥ですが、連日、きれいな声をビルの谷間に響かせてくれています。

こだまして山ほととぎすほしいまま 杉田久女

—\*—

このように書けるのは、やはり自分が自然のなかに暮らし、当たり前のように鳥や花たちと暮らせたからだろうと思う。

山の中腹に向かう緩やかな上り坂へと車が交差点を曲がるころ、木の香りが漂い始めるのが肌身に沁みてわかり、駐車場に車を止めてドアを閉めれば、そこには機械が作り出した音が存在しない空間があった。鳥が鳴き花の香りが何処からともなく届いてきた。

しかし、年度が変わると同時に私は時空間をスリップするように新しい場所に異動して来た。

多かれ少なかれ人が寄り集まり、群れをなして駅という当たり前の建築物を行き交い、コンクリートの階段をコツコツと歩き、エレベーターに乗って職場に辿り着く。そんな生活を始めて2ヶ月が終わった。

幸運にも五月病にも悩まされることなく(笑)、美味しくお昼ご飯を食べ、加速度を増しながら仕事も順調に走り始めた。

心配していた通勤電車の苦難も予想以上に軽くて安心しています。

短いスカートの高校生が、BOX座席の通路側の手すりに腰掛けるのはいいのですが、下着で直に座っているのかと思うと、その後手すりに肘をついてゆっくりと読書ができないという予想外の神経的病いが発症した以外は、まずまず楽しく通勤時間も過ごせている。あの子どもたちの汚い太股を何とかして欲しいという怒りとも悲鳴ともいえる嘆きは、夕食の愚痴になっているが。

そんなこんなで、5月が終わり、6月を迎えようとしている。

昔、古里の家の片隅に小さな蜜柑の木があって、今ごろになると白い小さな花をぽつぽつとささやかに咲かせていた。傍を通り掛かると甘い匂いがする。年末には実をつけた。店に出回る蜜柑のような甘味はこれっぽちもなく、おもしろい酸っぱい実だったが、花の香りだけは何とも例えようの無い甘さがあった。

5月の花といえば「卯の花のにほふ垣根にほととぎす早も来鳴きて…」と歌われるように卯の花を想い浮かべる方々も多いことでしょう。こちら甘い香りを放ってくれますが、私は蜜柑の花のほうが思い出深い。

一方、ホトギスですが、お天気を心配する人にはあまり有り難い話はなく、「ホトギスが啼くと明日は雨」という諺もあるらしい。

前線が迫っている。

今夕あたり、奴らは騒々しいほどに啼いているのだろう。想いおこすと、研究所の建物にこだましていた余韻が蘇えってくる。

杉田久女の一句。この句は凄いな。

---

2008年5月28日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 休日の朝に茄子を和えて食う

---

お茄子が美味しい季節になってきました。

ねこ作を2首ほど

休日の朝に茄子を和えて食う

茄子(なすび)和えこれだけでもいい朝ご飯

なすびあえは、美味いね。

ホカホカご飯は、(猫舌なので)熱くない程度のモノが好きですが、それにらせていただきます。

----

なーんにもいい話なんかないから。

ちょっと、つまらない話を。

◆ お鍋は常に相手をよそい合う（自分のよそわない）[原則]

一見、何よ、それ？ って感じですが。

早い話が、どれだけ食べたくても自分では取らないで、他人に取って戴くことを原則とする理念が大事ではないか。

随分昔から、そう提案しているのですが、多くの人が私の言わんとすることがまったくワカランみたいです。

そうしなさい！と言っているのではないですが、勘違いしてそんなバカなことが通じるわけがないと腹を立てる人もありました。

理念は押し付けるものでもないし、勝手に怒っててもらっていいのですが、現代社会に大きく欠落しつつあるものが何か、を考えると時にこのような視点でモノを見つめることができるか、はその人の能力の一種と考えています。

補足：

お鍋を取るとき。すき焼きとします。

欲しいなあと思う肉は、自分では取らないで誰かにとって貰うの。

つまり、

自分に取って欲しけりゃ、どうぞどうぞと人に取ってやるしかない。

誰かが私のために取ってくれるには、他人に捧げるしかない。

---

2008年7月11日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## マツタケの話

---

キノコの先生である清田さんが、地球温暖化とマツタケのことを書いていたのが目にとまった。

----

近頃はマツタケを美味しい香りだと思わない人が(子どもたちが)増えているという。嗅覚を覆う骨格が欧米化し、嗅ぎ取る感覚までも似てきたという。

西洋の人たちは、腐った何かの匂いに思えるらしく、新しい時代の人たちはマツタケがいい匂いではないというのだ。

マツタケ農家の人たちも、やがて廃業となることになる日がくるのかもしれない。

---

2008年9月17日(水曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## さよならと梅雨の車窓に指で書く 長谷川素逝

---

梅雨になりました。

その初めての朝、大粒の雨が夜半から降り続いたままで、列車の中はずぶ濡れで窓はすっかり曇ってしまっていました。

さよならと梅雨の車窓に指で書く 長谷川素逝

この長谷川素逝は、阿漕(津市)にゆかりのある人です。この句は大好きな句のひとつで、梅雨に入るところになると、この句から想像するシーンに想いを巡らせている自分がいます。

梅雨も悪くない。

そんなふうにも思えてくる。

(すでに靴の中まで浸水しているのに…)

そんなことを考えていたら、計らずも列車が阿漕駅に止まりました。

いつも座っている高田高校の女子生徒四人が曇った窓ガラスに落書きをしています。

くもりガラスにハートを描いた子に隣の子が何か話し掛けたなと思ったら、その子はそそくさとその絵を消してしまった。そして、そのあとは訳の分からない絵をみんなで描き殴って、ガラスのキャンバスはぐちゃぐちゃになってしまった。

先週はテスト期間だったので黙ってノートに集中していた子どもたち。

まだまだ長谷川素逝の心には辿り着けないでしょうけれど、今朝こうして落書きをして遊びながら登校したことを大人になっても憶えているかね。

---

2008年6月 3日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 続・マツタケの話

---

前回のマツタケの話で私が本当に伝えなかったことは、日記に一行も引用せずにリンクだけを貼ったに留めたこともあってか、ほとんどの方はソチラまで読まなかったために、伝わらなかったと推測します。

これがネットワークの現実であると、私は冷静に捉えています。

(ある事柄へのアクションというのは、8割を有効として、それを大雑把に分類すると2種類に色分けできると考えていい。そしてその2つのどちらもが誤ってはいないと考えても良い。つまり、清田さんの話を読まなかった人は、それで間違いではなかったし、責めるものでもないと思います。ただし、私は用意したもうひとつの答えのほうで話を進めます。レスは書きませんが、ご勘弁を)

そこで、折角だからもう少し触れます。

清田さんの二つの考察のうちのひとつは次のようなものでした。

■松茸は生きた松に共存共生する。

昔から

人は松葉を集めて燃料にしていた

- 松林の地表にあった松の落葉は消費されて無くなってゆくものだった。
- 落ち葉が無くなると、堆積した落葉がマツの栄養分としてなりにくなる。
- また、堆積した落葉が雨水を保水することができにくい。

したがって、栄養や水分確保ができないと、枯れてしまう危険が出てくる。

■そこで、松は、考えた。

- 自らが生きていくに十分に栄養や水分を吸収するぞ。
- 細根を一生懸命張り巡らそう。

(ちょっと、植物学講座)

松茸は、張り巡らされた松の木の根っこ・細根にくっついて生きている。

■松葉を集めなくなった松の木の周辺は…

豊かな落葉で満たされています。

- ・松にとって十分な栄養と水分が確保できる自然環境ができた。
- ・楽して栄養や水分が取れば、わざわざ細根を出さなくても良い。

したがって、松茸が生きてゆくところが少なくなったということです

---

---

現代社会でも、全く同じ現象が起こっていると私は考えています。

「豊かな暮らし」が実現できて、本質を見失い、原点を忘れてゆく。

(↑は、既に記述済み)

地球温暖化に見られる気候の変動についても、生物多様性における数々の問題についても、人々の豊かさボケと個人的には断言してよいと考えています。

私が特集記事で解説した諸問題についても

(平成18年の夏・秋。冬。平成19年の春・夏号です)

はっきりと、何が悪いとか、こうすべきだということを書くわけには行かないので触れていませんが、物事には流れというものがある。遡ってゆけば原因は必ずある。

都市型の集中豪雨についても、もう30年ほど昔からヒートアイランド現象の指摘はあったわけで、しかしながら、環境変化に及ぼす影響を都市計画の学者たちは全く無視し、工学技術者たちは人々の見せ掛け上の快適さを表す数値の向上のみをその成果として掲げてきた、ということに大きく反省すべき点がある。

ポリシーを失った科学技術の暴走。哲学のないテクノロジー。裸の王様の技術進化。悦楽、愉楽に浸りきり麻薬の犯された家畜のように情報機器に溺れるヒト。

まあ、もちろん技術進化の片腕を担ってきた面が私にもあるのだが、そうならざるを得なかった社会の責任は大きい。

例えば、老後の医療、僻地の医療に、市場原理や経済理論を適用して、儲からないから病院撤退、という論理式が存在してよいのか。

ヒトは、行政組織ができるよりも先にこの地に住み始めたわけだし、ひとりの人間の命が利益の有無でその行方を左右されても困る。たった一人であっても守ってゆくのが国家の役割だと思うのだが。

これらのことは、医療を例にすると判り易いが、様々なところに存在する。最近であればガソリン高騰に起因する生活への影響なども挙げられる。

教育問題にも、同じような考えが適用できる。

---

あなたが昨日の夕食で食べたものの中から、高額だったものを2つピックアップして排除し、それを社会で困っている人に還元することができるような気持ちを育てること、そういう仕組みを作ること。そこまでしなければ、今の廃れた社会は元には戻らない。

(家庭に持っている耐久消費財、半耐久消費財にも同じようなことを当てはめてみるのもいいかも)

エコバック(レジ袋撲滅)、マイ箸なんていう子どもの遊びみたいなことで喜んでいる時代は一刻も早く終わるべきです。

本質的なところの改革にどうやって踏み出すのか。

松茸は、やがて、本州では収穫できなくなるでしょう。  
枯れ果てた心が残ることになります。

福田総理辞任の挨拶で環境問題への失策のお詫びが一言も無かったわけだし、もう、勝手にしてくれと言いたい。

誰か、行政力、という本を書いてくれ！  
と誰かといえば、儲かる本がゾロゾロ出るだろうな。  
やっぱし、アカンわな。

## 秋の蚊よやがて甘みが夢になり

---

蚊が飛んでいた。

朝の通勤列車はいつもと同じ込み具合で、つまりはスキスキで、ボックスにひとりか二人ずつかけている。

私の斜め前には、いつも乗ってるかわいいおねえさん。熟睡中。25歳くらい。

白と黒の模様があるように見えるデッカイ蚊がふわ——んと来て、私の腕にとまろうとするので追い払ったら、そのままふわ——んと向こうに行った。

前に座っているおねえさんの、半開きの太股の間にフラフラと入っていった。

キワドイところに止まって居るのが、私のちょっと覗き見気味の視線でわかる。

叩いてやるわけにもいかんし、ねえさんを起こすわけにもゆかない。

じっと、たぶん、たらふく血を吸ってやがる。

列車が次の駅に止まったところに、電車の揺れに投げ出されうように飛び出してフラフラとどこかに消えていった。

---

2008年9月22日（月曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 苦い思い出

---

2005年6月26日（日曜日）の日記に

銀のマドラー〔回想篇〕

として、「黄色い麦わら帽子」というのを書いた。

[http://bike-tourist.air-nifty.com/hiroka/2005/06/post\\_677e.html](http://bike-tourist.air-nifty.com/hiroka/2005/06/post_677e.html)

十 十 十 十 十

あれは いつのことだったのか

小麦色の肌の

クラスメイトの女の子と

バスの乗り場で手を振って別れた

夏休みが終わるころ

教室の席がとなりの彼女に

電話を入れた

遊びに行っていいいかい？

電車とバスを乗り継いで

灯台のある

小さな漁村に私は着いた

バスの停留所で迎えた彼女は

黄色い麦わら帽子だった

強烈な印象

16才の夏

バス停から灯台まで歩いた

真っ青な海と水平線を見おろした

町の一点を指さし

―― 青い屋根が見えるでしょあれが私の家よ

と教えてくれた

真夏の日差しを気にせずに

小さな漁村の狭い路地を

歩き回った帰りに

バス停まで見送ってくれた

それから数年して

彼女に手紙を書いた

名古屋の或る銀行に

彼女は勤めているという

涙が出るほど嬉しかったです

と書いた返事をくれた

東京の下宿に戻る時に

駅で待ち合わせた

でも 彼女は来なかった

十 十 十 十 十

初めて登場させたのは、「別れの風景」というシリーズを書いていたときで

99/09/15「夏の終り(黄色い麦わら帽子)」

というタイトルでどっかに書いたのです。

何故こんなことを思い出したのかというと、先月のメルマガ(6月号)の編集後記にも紹介した

〇ー

[編集後記]

先日、ふとしたことから30年ほど昔の下宿生活のことが夕食の話題になりました。

あのころは、そういえば「レジ袋」というものは流通し始めたばかりで、世の中には殆ど無く、スーパーで買ったものは四角い紙袋に詰めて持って帰ってきたものだった。だから、ゴミ出しの日にはその紙袋にゴミを入れたものだった。そんな話から始まりました。

それもそのはずよ、コンビニなんてものも、ポツリポツリとしか見かけなかったし、大体、夜中に町をふらふらと歩き回ったりもしなかったでしょう。明かりも今ほど夜中まで煌々と点けていなかったかも。

ゴミの量も少なかったような気がする。むやみやたらにプラスチックやアルミの容器なんて使われていませんでした。エアコンだって、大学生の下宿にはありませんでした。ビールだって瓶ビールが主流だったしね。

しみじみと話し始めれば次々と昔懐かしいものは出てきました。そんなものを掘り起こしながら、そのネタをツマミに缶ビールの栓を抜くのもいかなものかと自省しながら、もう一杯だけいただきました。ビールのおいしい季節になりました。

ー〇

という夕食の会話の中で、私は次々と苦い学生時代を思い出してゆくなかで、ひとつのシーンを思い出し、それがこの儚い出会い・別れであったのだ。

(まあ、それだけなんですけどね。麦藁帽子も無くなった物のひとつかな・・・なんて話題でしたが)

梅雨らしい天候が続いています。

そろそろ、大学もレポートや試験の季節で、娘の日記(ミクシー)を見ていても少しずつ切迫感が募っているのがわかります。

試験かー……。試験といえば、苦い思い出がいくつもある。

大学時代は、母校で最も歴史があり誇り高い電気通信工学科というところに居たにもかかわらず、サボリ魔で、ちっとも講義には顔を出さず、梅雨の合間にひょっこりと顔を出して掲示板を見ると、「レポートは締め切りました」とか「試験は最終講義で実施したため、前期は実施しません」と書いてあるのに何度も遭遇した。

七夕のころは、こういう事件のことばかりを思い出しては、昔を懐かしんでいる。娘にもその話を何度もした。幸いにも、娘にはサボリ魔は遺伝しなかったようです。

おバカな私ですが、こんな作品も残っています。

たなばたや浴衣のすその奥へ    ねこ作

さて、「火の一句」考えよう。

今年は載るぞ。



## 夏。黄色い花

---

▼日記は短いほうが美しい、と思うがなかなか頭の中が整理できないおバカす。くどい話ばかりがグルグル。

▼暑い。昨日、職場にエアコンが入りました。8階なので自然風のほうが涼しかったかも。

▼涼しい心になれる…。そう！職場にときどきおいでになるある報道機関の女性記者。綺麗です。遠くから見つめていたい。仕事しなさい。

NHKの朝の6時頃のニュースのアナさん。また昔の島津さんに戻りまして、彼女と少し似てるかも。キャリアで美人に弱い私。

▼麦とホップ。サッポロかな。発泡酒や第三のビールというのは時代を変えてゆける宿命と使命があり、チェンジできる特権がある。古来のビールは最初にできた味にしがみつき伝統を守る宿命があるが、第三のビールは過去の味を平然と廃棄し新しく作り上げることができるのだ。もはや、この味のほうが新しくなりつつある。味覚を捻じ曲げて大いに結構。

▼火の一句 <http://www.pref.mie.jp/l/haiku/fire.htm>

苦戦してます。燃え尽きてしまわぬうちに投句しよう。

▼レジ袋からコンビニ深夜営業へ。槍の矛先は転々としてゆく。原点に戻ろう。生活スタイルの見直し。酒、タバコ、遊び、贅沢。ビルゲイツさんに右へ習えで、みんなもそんな贅沢を社会に還元しませんか。

▼タ立。ときどきざっと降るようになりました。夏が近い証です。5月の末から6月にはたくさんの雨が降りました。雨を題材にした歌、いろいろありますね。どんな歌を思い出しますか？

▼花火。私はあまり好んでやらないな。

ぱっと燃え、やがて消えゆくやるせなさ　ねこ作

ねえ、鶴さん、あの黄色い花を思い出します。  
南東北の高原を走ったときに会った、黄色い花。

## 手紙 から

---

同窓生の友人たちに出した手紙。メモ

-----

各位、

さぞかし、呆れていることでしょう。

別に機嫌が悪かったわけでも不真面目であったわけでもない。

まあ、一番の信頼できる人たちということで、何も隠さず、嫌われるようなことを承知で、あのようなことを書いたのでしょうか。> 自分

何でも話せる人がなかなか居ませんね。

家族だけかもしれない。

社会では、仕事を失っても、そのことを妻にも言えず、公園で一日を過ごす人が居て、自殺者や犯罪報道のときにも、非常に興味本位に取り上げられている。

結局、そういう現象を始めとして、数々の社会の悩み

(これは病理学的にも、人間の疾患と似た特徴を表すもので  
心理学と社会学というものは、よく似た構造であり)

を放置してきた人間側の問題が、本質的に解決されてゆかない限り  
明るい未来は見えない。

私は全ての源流は「豊かさと満足度」に帰着するのではないかと考えたわけです。  
あまり、理屈を広げて書いた作文を見せたくないの、掲載箇所は非公開としますが

豊かさと満足度、だけでは大きな誤解を招くので少し補足すると…

- ・幸せ意識、中流意識にはじまった豊かさ
  - ・現状でかなり頂点を迎えて後戻りできない満足度。
- (それらの基軸のなかに、)
- ・お坊ちゃん政治家や
  - ・タレントの議員や
  - ・売れば何でも報道するマスコミや
  - ・儲かれれば環境問題でもしゃぶり尽くす業界や
  - ・奇麗事を前面に出していい格好をする企業や
  - ・経済やマネーだけを尺度にしか考えられない狭い視野の人々や
  - ・そういう妄想にいつまでもしがみついている人たちなどなど。

客観的にモノを見る姿勢の中心点が確実に傾いているのだなあと思うたびに、浮力の中心を失った船は一度解体するしかないか、と思うのです。

長い歴史を顧みても、人の知性とはそれほど大したものではなく、欲望とかカリスマに振り回されてきたわけで、たかが2000年にも満たない民主政治というものの流れをみても劇的な改革は厳しい。

物質文明やその文明を取り巻く環境が変わるにつれて思想も変遷するのでしょう。人は痛い思いをしなければ何もわからない。

「上から目線」という言葉が盛んに新聞などでも目に付きますが、本当にそのことをわかっている人はどれだけ居るのか。

今の私の目標は、年金をもらえるまで健康に行きぬくこと。これしかないのですわ。

-----  
↑の前に出したメール。

別に、読まんでエエです。  
生存としての返信ですから。

メールがこんので、メルアド変更してドロンしようかなと怒っておりました。  
日本の社会の縮図のようなリアクションだと感じてます。

田中康夫の質問は、ニュースと新聞でダイジェストに知っていますが、知っている程度です。

それを聞きながら、家でよめはんに言った感想は、

概略ですが  
-----

まともなことを考えている政治家もいるんやから、国民は真剣に考えなアカンのや。

しかし、全然、(国民は)自分のことしか考えてえへん。

社会を変えるためにどうあるべきかなど、考える気は無い。

その使命感もないわな。

自分が損したり、しんどい思いをしたりするのは嫌や。

(そう考えているだけや、ぼーっと)

それは正しい考えやけど、今の社会にはそぐわないんや。

自分たちが痛い思いをして、犠牲を出せとまでは言わんが、  
マイナスを出してプラスに導く発想がない限り、今の社会はアカン。

滅びるしかない。

国民全員が失業するか、戦争でも起こって、目茶目茶になることや。

要領のええ奴が生き残って、そいつらだけが幸せに暮らし始めたら、それが破滅への道やとそのときに気付けばええ。

ワシには、できることは何もない。

ボケな国民ばっかしやろ。

やれ、人気投票が高かったから、この人好きやわあ。

バナナの騒動。納豆の騒動と同じや。

そういうモノで価値が決まってゆくわけよ。

クイズ番組見て、ああ正解、やれ不正解。

こんな簡単な問題が出来た出来んで喜ぶなボケ。

賢くなった錯覚。

そういうのをボケというのや。

儲かるかどうか。

損失がないかどうか。

僻地の医療がそういうモノサシで決定付けられてええと思う？

住民のほうが先にその土地に住み始めたんや。

行政は、経済理論を盾に政治をしてええの？

戦争でひとりの人間が鉄砲で撃たれて犠牲になって死んで、大騒ぎするんやろ。

たった一人でも、僻地に人が居たら、医療行政は消滅したらあかんやろ。

経済理論の本やマネーを稼ぐ話。保険で損しない話など。

がめつい奴ばっかしの飛びつく話で、それが今の社会での、大手を振った正論。

技術優先で社会を良くしてきて、国民は豊かになった。

その甘い汁をいっしょになって吸ったわけやが、それは大きな間違いやった。

社会の中では、ほんとうはそんな技術よりも、人々の心のなかに絶対的に豊かに宿るものが、育てってゆくべきやったのよ。

哲学。何ですか。役に立たんやろ、そんなもん。  
理学部、物理学科。そんなとこでは就職できんやろ。  
(そういうふう)に目先の損得を考えるだけの社会が、  
人々の心や生活を豊かにしてきたように思っていたけど、間違いでした。

更なる大きな間違いは、「豊かさと満足度」ということを考察したときにも触れたが、そういう大変な状況なことになっているのに、私は大丈夫、と思っていることやね。  
言い換えれば、私がよければかまわないわ、ということすな。

そんなことを言うから、  
「昨日食べた夕食の中で高額なものを上から二つピックアップして、それを取り下げて、社会に役立てる何かに使ってみるなどの工夫をする精神を持ってよ」  
と言いたくなるわけや。

反論くるけど、将棋の盤なら、ここで180度回転させて勝負継続してみるのが面白い。  
頭に血を登らせている奴に限って、相手の言い分の論理を、大空から見下ろすように理解できてないん。

今の国民にはそういうレベルが掃いて棄てるように居る。  
少しばかり賢くなって、学歴を得て、社会的にも名誉も地位もお金も得た人もそういう中にはいますな。

バカ高い車が売れる社会。  
車が不必要に渋滞してても仕方ない。  
ガソリンが高いのに、暴動も不平も言わん。  
テレビは24時間。  
食い物も贅沢の限り。  
食糧管理問題なんか、出てきて当然の結果や。  
縄文時代に戻ることから始めなあかんのよ。

また、あほ言ってると思うやろ。  
けど、真剣に考えて欲しいなあ。  
と、愚痴りました。

やっぱし、ワシが立候補するしかないんやけど、大バカ国民は、ワシには投票せんしなあ。

どうぞ、好きにしてください。

-----

腹の内では、

- ・民主党に入れて、政治に楔を打つという戦略が必要。
- ・政治は自民党でないと出来ないかもしれない。
- ・楔を打つ必要は大いにあり、そのことで有能な自民党政治家は国民をもっと見る可能性も出るけど、出ない可能性もある。
- ・大バカ国民は、近所や知り合い、有名人、世間の動向調査結果などに敏感な反応を示し、真剣に考えてない(ノンポリ、体裁主義、美的自己中心な)んだから、だったらワシは真剣に考えることにしよう。
- ・ワシの一票は生きないことがわかっていても、民主党と自民党には絶対に投票しないと決めてます。
- ・生きないという結果は投票した人の人格を踏みにじる行為に等しく、哀しく寂しいのですが。
- ・だから、好きにしてください、といいたいかなのですよ。

行政のプロの人の中で仕事をしていますが、住民(県民)は、非常に無関心です。  
自分のことしか考えていない人が多い。  
世の中を改革するためにどうすればいいのかを考えている人は一部の人の人。

考えない人は、集まってどっかの島にでも移住してほしわ。

まあ、そんなことをブツブツいいながら毎晩、よめはんと飯食ってます。  
晩酌はウイスキー1杯にしました。

もう世の中で暴れたる気合いも無いし、金も無い。カリスマ性もない。

行政側の人、井のなかの蛙、ということもよく分かってきました。  
しかし、「行政人。しっかりしなさい、自信を持って。」とも言いたい。

---

2008年10月 7日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 巻き戻す

---

古代の人が残した文字には、未来に伝えようという当時の人々の意思が、どれほど込められているのだろうか。

人間の命は、血流が停止し、脳波が消えて、思考や記憶が不可能になった時点で終わる。そのことを科学という観念で捉えることが出来ない時代に、古代エジプト人たちはピラミッドの築造を手がけ、ミイラとなる埋葬を考案していた。

そのころの日本列島には、そのような歴史を残す文字という概念もなく、文字を書きとどめる墨さえもなかった。

縄文時代が平和で、人々は心豊かな暮らしをしていたのかどうかは、学術的な探求も進み様々な見解が出ている。何はともあれ時間は今以上に緩やかに進んでいたことは確かだろう。

情報通信を学ぶ人は波動という勉強を1年生になったら嫌というほどさせられるが、高校時代はいわゆる三角関数と呼ばれるものがこれらの基礎になっている。一定の周期を持って繰り返す現象というモノに私たちは囲まれて暮らしていて、乱数とか突然変異、ギャンプルでいう大穴というような現象の発生は稀であるといっている。

漠然とそういうことを周期という観念で考え、夢にも思っていたのであろうか。人の生命は蘇えり、次の世(後世)でもまた今のように生きてゆくのだと考えたのだろうか。

だから、文字というものは、コミュニケーションの必然として発生すると同時に、漠然と、形づくられていったのかもしれない。

しかし、文字が活字となって未来に受け継がれ、科学者や考古学者たちが解析をするということまでを想像しなかっただろうな。

---

ささやかであるが、私たちは日記というものを書く。この歳になると、私が死んだ後にこの日記はどのように処分されてしまうのか、がちよっと気に掛かる。

秋が深まる寒露の夜、窓の向こうには絹で覆ったような満ちかけの月があった…気がする。気がするというのは、しっかりと見上げたわけではなかったため、秋の月はそこに添えて置いて、私のほうの想いは忙しく巡っていることが多いから。

前略、秋も深まり…なんて月並みな手紙も書きだせない。

少しばかり余白がある紙切れに、断片的に手紙のようなものを覚え書きしてみたりするものの、それを纏めて便箋に書くこともない。柿が美味しい季節ですね。栗ご飯を炊いたよ。サンマも食べたよ。などなど、書いては丸めて棄ててしまう。従って、封書に詰められ送り届けられることもない。

「まあ、いいか」

日常の口癖になったこの言葉を「好きじゃない言葉だけど」と思いながら、呟いてみては、ほんとうの友だちってのは手紙を書いて丸めて棄てた紙に書いてあったことを、もしかしたらテレパシーのようなもので感じ取ってくれているような気もする。だから、手紙は、また今度、書こうか、で終わる。

些細な感動はある。

ホームで列車を待つときに、隣に並んだ女子高生がカバンからチョコボールの袋を携帯といっしょに取り出して、袋の封を切ったらチョコがポン！と1個飛び出してホームをコロコロ。思わず、悔しい！と思ったけど、口には出せなかった。

その話は夕飯のときに報告して、言葉を飲んだ私を、二人で悔やんだ。

巻き戻す。

すかさず「人生を巻き戻す」などという言葉が思い浮かんだが、今更そんなものを巻き戻すつもりも無い。二、三日前の夕飯が思い出せないかもしれないというのに。

うふふふ、と笑って過去を巻き戻す ねこ

日常を巻き戻して手紙に書くことすら、御座なりにして、寒露の夜は過ぎていったのです。

巻き戻す手紙を包む寒露かな ねこ

---

2008年10月10日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 絡む、絡まる、纏れる、纏う

絡むという言葉は、若者言葉で「交流を持つ」ということだそうだ。

やけにその言葉が、言葉として気に掛かっている。巷に氾濫している如く簡単に使ってホイ！と納得できるような感触ではなく、モヤッとしたものしか残らない。

日記サイトやブログで容易く「絡む」おこないが連想できるものの、私にはもっと深くて暗いところを流れる泥水を掬い取るような嫌な感触だ。

この言葉が気になりながらも……

月曜から金曜までは、余暇の時間をゆるゆると彷徨っている自分が居て、ゆっくりと考えられないことが多いので、ブログにもあまりあれこれと書かないようにしている。思い付きでポンと書き込みをしてシマッタ！と思うことも多く、やや強制的に押さえている。

…のだが、昨晚は何が私の何処を突付いたのか、ふらふらとおバカなことを書いている。普段の自分らしいと言ってオシマイにすることに。消してしまおうかと思ったらコメントがあったので、消しては申し訳ないし。

私のことなど知っても仕方が無いと思うが、実際に会った人が少し居るのでその方のコメントを大いに参考にされたい。飲み交わした人の言葉であれば、なおさら信憑性が高いだろう。

閑話休題。

さてさて、この言葉について書きたいと思い、何日も前から気につけ、紙切れがあれば余白に気の付くことをメモしたりしていたのだが、所詮自分のサラサラと書くメモ程度モノには書き留めなくても記憶しておけるようなものも多い。忘れてしまったものは些細なことであつたのだろうと諦めるとすると、大事なことは記憶にあるということか。忘れたとしてもそのうち、大事ならば再び思い出すだろう。

(つまり、メモはあまり当てにならないということです)

前置きが長くなったが、この「絡む」という言葉が、つまりは、簡単に出回っていることが私には「気に食わない」のだ。

Ｌ　Ｌ　Ｌ

意味は辞書に記されているとおり。PCにあった小学館国語大辞典(1988)を引いてみる。

### ◆絡む

自動詞として使うと

1. 細長いものなどが、まわりに巻きつく。
2. 言いがかりをつけてつきまとう。むり難題をしつこく言って困らせる。
3. 事態がわかりにくく入り組む。
4. (1の比喩的用法)(感情や欲望が)つきまとってくる。「欲がからむ」「情がからむ」
5. 登山で、山の中腹を回って進む。

他動詞としても使う。

1. 細長いものなどを、まわりに巻きつける。
2. 料理で、蜜、あんなど、ねばりけのあるものをまわりにつける。

### ◆絡める

他動詞として

1. つかまえてしばる。捕縛する。また、つかまえて監禁する。
2. なわ、ひもなど、細長いものを巻きつける。
3. (1の比喩的用法で、多く受け身の形で用いる)心を奪う。気持、感情をとらえる。
4. ある物事に、他の物事を関係づける。

5.登山で、障害物や通りにくい所をさけてまわり道をする。

#### ◆絡まる

自動詞として使う。

- 1.細長いものなどが、まわりに巻きつく。また、うるさく人などにまといつく。
- 2.同じ場所から離れようとしなくて、ぐずぐずしている。

Ｌ　　Ｌ　　Ｌ

#### ◆纏れる

- 1.からまって解けなくなる。まつわりつく。からまる。
- 2.からみ合って乱れる。
- 3.事柄が複雑に入り乱れて混乱し、秩序を失う。事件が乱れて解決がつかなくなる。
- 4.言語・動作などが、正常さを失って思うようにならなくなる。

#### ◆纏う、絡う

自動詞

- 1.まきつく。からみつく。からまる。まつわる。

他動詞

- 1.まきつくようにする。からみつさせる。また、絶えず側近くに置いて離さないようにする。
- 2.身につける。着用する。

-----

-----

「絡まる」1.の用例を広辞苑では以下のように引いている。

「道の辺の荊(うまら)の末(うれ)にはほ豆の可良麻流(カラマル)君を別(はか)れか行かむ」(万葉集)

他にもたくさん用例があるが省略します。

その用例が最高に素晴らしかったので、引いてみると面白い。

このように調べてみると、この言葉を使うことで、これまで生きてきた人生を綴れるのではないだろうか、と考えてしまう。

人生という物語では、

- ・女が
- ・仕事が
- ・事件が
- ・人間が
- ・社会が

複雑に、お互いに

- ・絡んで
- ・纏れて
- ・纏わりついて

そこには様々なドラマがあり似たようなことが繰り返されるものの、全く同じ出来事は起こらない。

辞書を読んでいると、妄想に陥るときと同じように自分が自分の世界に浸ってゆくのがわかる。

私の妄想の(記憶の?)物語には、愛があり、それがまた純愛であることもあれば、憎悪を伴ったり悪意を含んでいたりする。劇的な出会いがあり、別れがある。事件が絡む。不運が襲う。心が纏れて憎しみが生まれ、ベールに包まれたことも幾つか残る。

高校の日本史の先生が授業中に話していたのを思い出す。

「私たちは生きている間にひとつだけ立派な小説を書けるチャンスを持っているんだよ。それは自叙伝です。」

何と高貴なことか。

この日記も然りなのだろうか。

---

2008年10月18日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 秋深き隣は何をする人ぞ

---

秋深き隣は何をする人ぞ と芭蕉は詠んだ。

「奥の細道」をよむ (ちくま新書 661)

長谷川 權

筑摩書房

¥ 798

―― 月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。

誰もが知っている「奥の細道」の冒頭です。

まったくの専門外のことでありながら、芭蕉という人物や作品、またはこの紀行文に興味を持ち、浅学ながらも少しでも読んで味わってみたいと思うことが、これまでにしばしばありました。

著者の長谷川權さんのことは朝日俳壇(朝日新聞)の選者であるということしか知らなかったのですが、単に名前を知っているというだけのきっかけで、このちくま新書<「奥の細道」をよむ>に出会え、長谷川氏の人物像も少し見えてきて、「好き」がグーンと加速しそうです。

この著作は、決して生半可に読むようなものではなく、大学の教養講座で大いに利用してもいいだろうと思える、素晴らしい本でした。

数学や物理学の講座で使うテキストでよく見かける「薄っぺらいけど中味が満載」という…あのパターンの本です。物理のテキストではさり気なくひとつの方程式が書かれているのですが、実はそれを展開すると膨大なページの解説が必要で、読み手にもしっかりとした基盤を(暗に)要求している、というアレです。あの悪魔のようなテキストを思い出しました。

まず、第1章で「かるみの発見」の解説に入ります。「奥の細道」での芭蕉の旅日記をのほほんと読もうと考えていた私には、なかなか厚い壁でしたが、第3章までの導入講座が、実はどうでもいい本には書かれていない素晴らしいモノだったのです。芭蕉の心を第1章、第2章、第3章で学び、旅の日記へと続いてゆきます。

涙が出ることの連続ですね。

(この本の懐の深さをどこまで理解したかは、自信ないのですが)、

秋の夜はこういう本をじっくりと静かな部屋で読みたいです。

何度でも繰り返して読めます。

---

芭蕉のいう「かるみ」について、長谷川權さんは、この本の冒頭で書いている。(22頁あたり)  
読んだだけでは、理解できるような内容ではない。キツパリ。

シンと静まり返った秋。その深みの底に私の心は沈んでゆかねばならない。

---

2008年11月 8日(土曜日)【随想帖 I】

---

## ケータイはいらないみたい、私たち

---

日記は毎日か書かない。コメントも安易に書かない。そう決めてみたけど、どうだったか。

じっと溜めておく。

裏紙の上に、二三日したら読めなくなってしまうような、ミミズが這ったような字が並んでいる。

先日、家内とある駅で待ち合わせをした時のこと。

「7時半に」という連絡が夕方にあって、その返事に私は「6時半頃からドトールでも行ってのんびりしてるわ」とメールをいれた。

ケータイを持たないので、それで連絡手段はオシマイ。あとはテレパシーだけとなった。

仕事を終えて本屋をぶらついて（時計を持たない私ですが）そろそろ椅子に腰掛けたいなと思って、少し早めに改札横のドトールの前に来たら、家内がまさに10秒も変わらずにドアの前に立っていた。

約束は7時半なのに…。

ケータイはいらないみたい、私たち。ねこ作

-----

今週の落書き、はトラックバクで入れておきます。

---

2008年11月29日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 葱買うて枯木の中を帰りけり 蕪村

ねぶかこうて枯木のなかを帰りけり 蕪村

ほんま、寒いですね。

この人は、ねぶかを持ってどんなおうちへと帰るのだろう。

誰もいないひんやりとしたところだろうか。

家族がスキヤキの用意をして待っている温かい団欒のなかなのだろうか。

寒波がやってきてぐっと冷え込むと、この句の温かみが身に染みるなあ。

自分の日記を拾い集めて巻頭言と後記をまとめました。

メルマガは来週の水曜くらいに出せるかな。

### 【巻頭言】

「三重の自然楽校」のHPのリレーコラム第109話で鳥羽水族館の帝釈元さんが「山の神に出会ったら…」という記事を書いてらっしゃいまして、昔、飯南の山中でドライブをしているときに山の精霊や神というものに出会い「畏(おそ)れ」を感じた経験に触れておられました。

それを読みながら私は、1996年、カムチャッカ半島クリル湖畔で取材中にヒグマに襲われ急逝した星野道夫のことを思い出しました。星野氏は、高校時代にアラスカの村を写した1枚の写真と出会い、それをきっかけに、慶応義塾を卒業したあとアラスカ大学で動物学を学び、極北の地に永住します。大自然や野生動物を追いかけて、クマやカリブー、クジラ、オーロラなどの写真を撮りエッセイを発表し続けました。彼の作品には、感動的な風景や動物たちの生態など伝えたいたくさんのことが写真をまじえて綴られているのですが、その彼が「人間と自然とのかかわりに」について「畏敬の念を抱いている」と書いていた箇所があったことが鮮烈に蘇ってきたのです。

帝釈元さんは「畏怖の念というものの、自然と付き合う場合には必要なんじゃないかな」と思い、「自然に対して畏れ多い気持ち」を持って自然と付き合いたい、とこの記事で書いてられます。

地球上の一部の人々は、電気などのエネルギーをふんだんに使い、この上ない便利な生活をし、満足度を高めこれを「豊かで幸せ」な暮らしだと思っています。ところがその過程で、あらゆるものに対し「畏れ多き」の念を持ち感謝することを忘れてきてはいませんか、と釘を刺されたような感じです。

12月は地球温暖化防止月間・大気汚染防止推進月間です。「暖房は控えめに。エコドライブを推進しましょう」はもちろんのこと、自然への「畏れ」を見直すこともプラスしてみようと考えています。

### 【後記】

いよいよ十二月を迎えました。暮れ行く年の後片付けや冬支度にお忙しいことと思います。

街角に散らばっている落ち葉がモミジバフウ(アメリカフウ)からイチョウに変化して、いよいよ秋から冬へと足を踏み入れたのだなと感じます。最後まで頑張ったイチョウですが、二十四節気の大雪を過ぎるころには一様に葉を落としてしまします。

ふた昔ほど前でしたら、これらの落ち葉を拾い集めて街角で焚き火をする光景も決して珍しくありませんでした。しかし当節、焚き火はままならないこととなりまして、たなびく煙を見上げながら火に手をかざして、自然が放つ温もりを体感したり芋を焼くなどというチャンスがすっかり減ってしまいました。ちょっと寂しいです。

子どものころでしたら、冬を迎える前に済ませておかねばならないことが幾つかありました。山から切り出した薪を風呂焚き用に割ることや、北風を除けるための藁囲いを家の周りに組み上げるのを手伝うことなど、これらは子どもに与えられた年末の仕事でした。

障子張りを母と一緒にするのも冬支度のひとつでした。縁側には優しい光が降り注いでいまして、庭の花畑が冬枯色に変化しても、父の育てている菊は元気に咲いて、蜜柑の木には橙色の実が幾つもなっていました。



亡き人の亡きこと思う障子かな（宇多喜代子）

ちかごろ、こんな句をみつけました。「亡きこと思う障子かな」というところに人それぞれの情景があるのではないしょうか。環境にかかわる仕事をするようになってから、このように自然のなかにゆつくりと佇むモノや営み、目線が気にとまることが多くなったなと感じます。難しい言葉を連ねることなく、優しく「環境」に接していきたいです。

少し早いですが、みなさま、よい年をお迎えくださいませ。

---

2008年12月 7日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 局所的に最大利益を求めることをしても、決して全体の利益にならない

---

福岡伸一先生が、日経エコロジー12月号の巻頭「環環譚」のなかで

- | 生物が38億年で到達した平衡状態
- | 重要な原理は自分の分を守ること

というタイトルで書いておられますの。

局所的に最大利益を求めることをしても、決して全体の利益にならない。

(最初の「はらぺこあおむし」の話は省略)----

地球上に多くの生物が互いに繁栄して多様性を保つ。その最も重要な原理は、それぞれの生物が基本的に自分の分を守って生きること。つまり、食べ物を限定することです。しかし、人間は地球の裏側から運んでも、ありとあらゆるものを貪り食べ、すみ分けのできている生態系に傍若無人に入りこんできました。

私はBSE(牛海綿状脳症)を研究してきましたが、それは1985年以前は地球上に存在しない病気でした。もともと羊の非常に変わった風土病が、牛に乗り移った理由は、餌にしていた肉骨粉にあります。近くの農場から牛や羊の死体を集め、鍋で煮て、残った肉カスを水に溶かして子牛に与えていました。飼育を速めようとした近代畜産産業が、草食動物に栄養価の高い肉食を強要したわけです。

そうして、本来はうつるはずのない病原体が人へと乗り移ってしまった。そこから導かれた教訓は、局所的に最大利益を求めることをしても、決して全体の利益にならない、ということです。

生態系には復元力がありますから、乱れが起きても元に戻そうとします。しかし、結果的には何か別の安定状態に移行することで、生態系は動いてきました。生命ができてから38億年、地球の生態系はあっちに行ったりこっちに行ったりしながら、徐々に安定を求めて到達した平衡状態にあります。それはそう簡単に改良できるものではありません。だから、環境に対して、部分を何か工学的な発想に基づいて組み替えるアプローチはよくないと考えます。見えていなくても、全体の平衡状態にイマジネーションをはせる、それが環境問題解決の糸口ではないのでしょうか。

-----  
-----  
分子生物学者としての視点ですが、今の世界の経済学や社会学の学者にも耳が痛い話ですね。

私も前から書いていますが、科学技術の進歩は自己満足のようなもの。

人はもっと不自由や不便を受け入れ、ほんとうに相応しいものは何なのか、しっかり見極める必要がある。

これを「ホンモノを見抜く目」と私は言い続けていますが、その言葉の意味さえわからない人もあるほど荒廃した社会をどうして立て直すのか。マネーに眩んだ欲の塊は、BSEと同じような運命を辿るのか。警鐘を警鐘といまだに受け取れない愚かな・・・

この辺でやめとこ。

---

2008年12月 8日（月曜日）【随想帖 I】

---

## 年末恒例:ゴミは早めに（ぼやき節）

---

▼レジ袋撲滅運動、即ち、エコバックを活用しようという世の中の動きは、やや暴走という形容が相応しいほどで、「レジ袋有料化」が独り歩きしている。

ゴミ回収のための「ゴミ袋」を指定し、レジ袋を拒否したという行政判断は、レジ袋の行き場(いわゆる逃げ道)を奪ってしまい、トドメを刺した形になった。

果たして、奪う必要があったのか。

▼「レジ袋有料化」運動を推進した三重大大学の朴恵淑教授の実行力を称えるとともに、物事は必ずしも正しいと実証できなくても、ウソだとわかっていても、社会を無理やり動かさねばならないときには、カリスマ的に放言し続ける白々しい「間抜け力」が必要なのだ、ということを実証したとも言える。

朴先生のご活躍は、「三重大 朴恵淑教授 レジ袋」などで検索するとたくさんの記事が出てくるので、どうぞ、そちらを参照されたい。

▼元々は、費用のかかっているものを無償で提供し、それを平均寿命が30分程度と知りながら提供し続ける資源の無駄遣いを指摘したかったというものであった。

みすみすゴミになるモノを受け取ってゆく人々の意識や行動を見直し、スーパーや買い物市場、或いは家庭の中で不必要に発生するゴミをゼロに近づけたい。ここが大事なポイントであったのだが。

暴走した。ゴミを限りなくゼロにすることを忘れて、無駄遣いを減らしましょうの言葉も消えていった。

▼我が家にはレジ袋よりも重大で深刻な問題がある。それは、年末に向かって無差別攻撃で配られてくる「新聞のチラシ」だ。

毎日毎日、読まない広告を大量に含んで配達される。

これらの広告は、現代社会では非常に格安で効果が高い手段なのだろう。無駄とわかっていても、そこから生まれる有効性が一定の相関を持って高度な効率を生み出すということを確認したとき、その1点に営業の力点が集中する。

広告を織り込んだり配達して営業実績としている人々たちの市場を奪っても罪悪なので、頭から否定することは出来ないのだが、何とか見直さねばならない時期は確実に近づいている。

現代の行動 ― 情報の流れや報道の反応なども含めたモノ ― の典型で、この大バカさ加減がなくなる限り、みんなが右向いたら私も右に習えとなり、社会は一向によくない。

最たるものが、大ボケ・大バカ総理に一喜一憂して3連続以上も大失敗をした国民なのに、まだ懲りないのだから呆れてモノが言えない。

選挙をしても、深みに落ちてゆくだけだろう。

▼相変わらず街には電飾が溢れている。広告が営業収益を向上させ、最低投資で最高利益をと考える優良な企業は電飾に力を入れる。馬鹿みたいに個人も飾り始める。

今、ドブに小銭を投げ棄てる人が日本にいますか？

ドブに棄てるような行為をするなら、その小銭を街頭募金にでもお願いしたい。街の明かりは暗くなり、心が温まる。

▼NHKの放送をはじめとし民放各社もいっせいに放送を深夜12時で切り上げる。

テレビが無ければ部屋の電気を消してラジオを聞けばいい。娯楽はラジオへ。そして、スーパーやコンビニは深夜営業を中止しましょう。

そうすると家庭での消費電力は急降下間違いなしで、どんなCO2削減運動よりも遥かに高い効果が得られます。おまけに、家庭円満となり、お風呂に連続して(または一緒に)入る習慣が身に付く。

▼何もエエ格好をしてエコバックを持ち歩くことなど無い。ダサイ風呂敷きではいけないのだろうか。

何事も格好から入ってしまう人たち。そのスタイルを変化させねばならない。見かけが変だとダサイから嫌やだあーとなる。

▼今年の漢字は「変」だそうです、変化の変ではなく、ダサイの変ですかね。

変になろうではないか。

▼何度も書くが、痛みを感じて国民がみんな不自由をしなければ、必要とされるCO2削減量には達しません。

40年後に石油資源がなくなったときに遅かれ早かれ痛い思いをすると思うけど…

## 蒟蒻を落して跣む年の市 飴山實

---

冬至を過ぎた或る日、職場であるかたが

「飴山實ってご存知ですか？『柚子風呂に妻をりて音小止みなし』という句を詠んだ人です。私は多くを知らないのですが、この句が好きで……」

と話し掛けてくださいました。

「柚子のお風呂に入って奥さんがちゃぷちゃぷと湯舟に浸かっている様子が手に取るようにわかりまして。メルマガに俳句をよく書いてられるので、俳句が好きかと思って…」

私は、知りませんでしたので家に帰って調べてみると、ズバリ！私好みの俳句が多かったので、嬉しくなりました。（それより、メルマガを読んでもくださっているのが一番嬉しかった）

〔飴山實〕

南天の花にとびこむ雨やどり

蒟蒻を落して跣む年の市

昨日、実家で、蒟蒻を貰ってきました。丸っこい蒟蒻です。

マグロのトロより美味いぞ、と心の中で思いながら、酒の肴にしました。

いつもより少し早めの小鉢かな ねこ

---

2008年12月30日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 百年後だって、人間はきっと変わらない

---

元旦の朝刊にある新潮社のコピーからタイトルを戴いてみた。

▼私たちは百年も生きられない。

しかし、社会は進化しながら、また、きわめて哲学的な叡智という側面では進歩と後退を繰り返し、時は刻々と過ぎる。地球という惑星からすれば、人類など微塵のものでもなく、環境が破壊されようが星が粉々になろうが、それもひとつの宇宙の歴史に過ぎない。

私たちに、住まわせてもらっているという感謝の気持ちが無ければ、やがて私たちは宇宙に飲み込まれてしまうだけだ。

▼百年とは、不思議にも、人の生命のひとつの周期に似ているかも知れない。こういう小刻みな周期の定義において1割以下の誤差率で百年を言い当てている。次第に人の寿命は延び百年に近づく。しかし、私たちが百年を生きることはまだまだ難しい。

▼人間は変わらない。そう言ってみたい人間の強がり、今の暮らしに満たされた人間の驕りがもたらす油断のようなものが、人間は変わらないのだと思わせる。

生態系として眺めるのではなく、ハートで動くマシンとみなしたら、これほど短時間に目まぐるしく変化してきた動物はあるまい。

▼それでも、「百年後だって、人間はきっと変わらない」と思いたい。百年後の変わっていないヒトを確認するのは、必ず新しいヒトであることを考えると、これは希望を表したメッセージでもあるといえる。

▼250万年前にアフリカ大陸で人類が誕生して以来、滅びることも無くこれほどまでに変化した動物がいたのだろうか。百年という周期と2500年という周期と、5万年という周期と、250万年という周期。無数の時間が無数のリズムを持って過ぎてゆく不思議。そこには数学的にきつと解析できる規則があるような気がするものの、そんなものは不要とも思う。

▼250万年を無限大回数だけ切り刻んでいても、決してゼロにはならないことを考えると、目の前にどかん！と放り出された「百年」という数字が、そこはかとなく輝くように美しく見えてくる。

-----

▼大晦日。「おおつごもり」とも読む。

もちろん、そう呼ぶ人も多い。

「大つごもりの朝には、ぜんざいを食べたもんや」

そんな母の呟きを聞きに実家に出かけた。

▼すっかり母の腰も折れ曲がってしまっている。

さぞかし歩くのが苦しかろう。

近年は餅つきも機械でやってしまうので、人手もかからない。

ひとりで竈に火を起し、もち米を釜に掛け、

ひとりで、餅つき機械を支度して、餅をつき、

出来上がったら、そそくさと丸めてしまっって終わりとなった模様だ。

子どもや孫が手伝う間もなく餅つきは終わったという。

おそらく、後片付けも忙しそうにしたのだろう。

おせちの用意をして、小豆を茹で、掃除をして、畑に野菜を獲りに行ったのだろう。

せっかちに見えるのは、性分だから仕方あるまい。

▼私が家を訪ねたときには、

一服し終わって、居間で佇んでいた。

静かな大つごもりだ。

「長いこと忘れておったわ。大つごもりには、ぜんざいを食べるもんや。どうや、幾つ、餅、入れる？」

蕎麦を打つ父居ぬ土間や暮れる夜   ねこ

静かな静かな大晦日だった。

相変わらず、この土間は寒いなあ。

-----

▼私は実家に帰っても泊まらないので、この夕刻に、母はしばらくひとりで過ごし、しばらくして弟家族が来て、一緒に夜を越し、新年を迎えたのだろう。

元日の夕方に再び訪ねた。せっかちにすき焼きの鍋に肉を放り込み、灰色の雲がかかった山々を台所の窓から見ている。

もう何度も一緒に正月を迎えることは無いだろう。そんなことを想像している。

南天が揺れて凍える勝手口   ねこ

いつもどおりに、1年が始まった。

---

2009年1月 3日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## さようなら、雪が来ると空をみる〔塵埃秘帖篇〕

---

毎年、1月の日記には同じようなことを書きますが。

22日は親父の命日で、あれから何年という数字が必ず毎年ひとつずつ増えて、私の余命がまたひとつ減ってゆく。親父の死んだ年齢に近づく度に、親父の気持ちが少しだけわかる。

さようなら。

そんな洒落た別れはできなかった。

苦しみながら床に伏せる日々だったというけれど、私は冷たい人間なんだろう、ちっとも見舞いには行かなかった。

18歳で東京に行ってしまったし、京都に戻って来てからもゆっくりお酒を飲んだ覚えも無いし、話をしたこともなかった。

自由自在に人生を生きてきた人で、数多くの仲人をしたり、自分で愉しむだけの絵を描いてみたり、木を彫ってみたり…の日々だった。

今の私が似たようなことをやりたくて困ってしまう。

何も、人生論について話したことなど無かったのに、これほどまでに似るものか。

確かめたくても、聞いてみたくても、もう居ないし。

日本中が震え上がった真冬の1日だった。

誰もがそうだろうけど、私も例外なく、「さようなら」を言う準備はしていなかった。

傍にいて抱いて眠っていた母が

「朝になると体がすーっと冷たくなっていったんや」

と話してくれた。

静かに静かに冷たくなってゆく様子は全く想像できないけど、私もそのときはそうありたい。

---

2009年1月21日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 3月14日 啓蟄から春分まで

---

茶毘にふす、二日で伸びた髭を剃る ねこ

「死んでしまうときは、生きているみたいに、すーっと熱がひいていくんやって。  
抱いて寝ていたうちのオカンがそう言うてたわ」

私は、自分の熱が二晩で引いたことを喜んでそんな話をした。そして、頭の中はそのまま10年前のことへと跳んでいって、ちょうど納棺師の映画が話題になっていることもあって、棺に収まった父の顔が甦ってきたのだった。

「お棺に入ってなあ、二日もたつのに、人の髭は伸び続けるんやで」

そう。死んでから二晩が過ぎるのに髭は伸び続けるのだ。映画では綺麗にして送ってやるというような様式らしいが、私の家ではそのまま、生きているような姿で送った。

こんな木枯らしの日にたいそう寒かろうにと誰もが思ったはずだ。(1月24日でしたから)

(人は死んでいくときに)「すーすーっと息をしててな、それが止まると体中の温もりがすーっとなくなって、冷とうなっていくんや」

「ふうーん、うちのおかあちゃんは、死んでもても、いつまでも暖かかったわ…」

と妻は呟いて遠くを見るような目で

「せやけどな、あんまし、覚えてえへん」

とポツリと言って黙ってしまった。

---

1975年3月14日。

この日に、ひとつの小さな出来事があった。

京都は、暖かい朝を迎えた。

おかあちゃんは、頭が痛いと訴え続けていた。

もう一週間以上も頭痛が治まらないと言いつけ

「寒さのせいかなー、早よう暖たこうなってほしいわあ」

と弱音を吐きながら、暇があれば頭を抱きかかえるようにして横になっていた。

ぽかぽかの春がそこまで来ている。

まさに三寒四温というように、優しい日差しが縁側から注いでいたのだろう。

妻の母は、あまりの痛さに京大病院の脳外科で診てもらう決心をした。

病院での診察が終わると、着の身着のままで即座に入院となった。

それが3月10日のことであつた。

そして、翌々日の12日緊急手術となるのである。

「おかあちゃんの頭には金串のようなものがいくつも刺してあつたような気がする、痛そうやったわ」

「手術に運ばれていくときに眠っている姿を見たのが最期やってん。

あのときには、自分の運命みたいなものがわかっていたのかもしれへん、そんな気がする」

と、妻は言う。

3月14日。

母は眼を覚ますことはなかった。

3月15日。

高校の卒業式。



欠席。

---

脳には腫瘍ができていて、切除など不可能なほどに転移していたのではないか。  
そしてそれを、試しに切ってみたんやろ、京大の先生は。  
あの手術は間違いなく失敗やった。

ワシはそう思っとる。

「おかあちゃん、痛い痛いて泣いてたわ。  
手術の後は意識が戻ることはありませんでした…」

お父さんはそう言っていたのを何度も聞いたが、今となっては、どうしようもないことだ。

英国のEMI社で、コンピューター断層撮影装置(CT)と呼ばれる最新鋭の機械が発明されこの世に登場するのは1972年のことで、コンピューターによる断層撮影画像を扱う技術は、さまざまな学会でも取り上げられていたものの、身近にやってくるには、まだ数年の歳月を要した。

もしも、7,8年長生きしてくれていれば…と思うと悔しい限りです。

2009年。  
あれから34年。  
朝、嵐のように降っていた雨も上がりました。  
少し肌寒いけど、晴れてきています。

3月16日、結婚記念日です。  
(1984年のあの日の朝も雨、後晴れ)

そうそう、小中高と入学式は雨でした(私)

---

2009年3月14日(土曜日)【随想帖 I】

---

## 訳あって、いや訳もなく一人飲む

---

淡い色の花びらは雨に打たれて散っていった。そのあとには静かにゆれる新しい葉が芽を出していても、わたしの心はそう簡単には切り替えることなどできない。儚く消えた数々の思い出が蘇ってきては去ってゆく。痛みを伴うといえそうかもしれないが、もはや痛みとは呼べないほどにまで忘れかけてしまったものもある。それが、わたしの気持ちとして、悔しくて許せない。

花冷えを詰ってそっと腕を抱く

4月4日の夜にそんなメモを書いている。「なじって」と言葉では簡単に言うものの、漢字で書くのを少しためらった。自分を少し苛めてみようと思って漢字で書いた。そんなささやかな気持ちがそこにある。

花冷えをなじってみたい恋心

花が散るのを見上げていると、朧な春の公園を二人で歩いた懐かしい日々が戻ってくる。何にも言わない、好きだとも言わないで花びらを見上げるあなた。もういいわ、黙って見つめて。電車の走り行く音が小さな森の向こうからこだましてくるのが聞こえたわ。黙って見つめるあなたの優しさ。

ドラマは終わって、花も散った。  
風に舞う花びらを美しいなんて言いたくないの。わたしにはちっとも美しくも鮮やかにも見えなかった。  
あなたの手をいつまでも握っていたかった。

4月という月は、儚く朧な月なのですが、実はその影に激しいドラマがあった。その一部始終を、ほかの誰にも内緒にして…

訳あって、いや訳もなく一人飲む

そんな夜を過ごしてみるのもいいのではないかな。

---

2009年4月21日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 足踏み

---

黄金週間は仕事やという人に対して書いたコメントから……

ちよいと前に会社の名前を創業者名から横文字に変えてしまった会社で設計技師をしてましたが、あそこは連休といえれば必ず10日は確保して出かけていました。

今思うと、  
バカみたいに、  
そんなステータスを追っていたのは人生の足踏みだったかもしれないとさえ思います。

もっと、  
世の中に恩返しをする仕事をしなきゃ、と思っていますわ、最近。

人ごみに酔いしれているのは、精神の貧困さと麻薬のような喜びで、やはり本質を見失っているのが、現代社会の片面だなと、切実に思います。

GWは  
仕事をするか  
流されずに有意義に過ごしたい。

---

2009年4月28日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 長靴履いて、水溜りに足をすっとうれてみる

---

子どもの日、雨降り

小学校のころ、置き傘は番傘で、一番家が近いわたしの傘が誰よりもビリビリやった…。そんなことを思い出してありました。

番傘は見かけなくなりましたね。京都に住んでいたときに、嵐山まで歩いてゆく途中、鹿王院に一軒の傘屋さんがあって、そこで見かけたことがありました。あの傘屋さん、今でもやってるかなあ。

大粒の雨が無表情に降り続きます。まるで梅雨が一足先にやってきたかのように、したたかに降る雨は、真冬の冷たい雨とも真夏の非情な雨とも違って、憎くたらしくもなく只々ザーザーと空から落ちてくる。

あの傘なら、雨粒が紙に跳ね返ってバチバチと激しい音を立てることでしょう。

雨雨ふれふれ母さんが蛇の目でお迎え嬉しいな♪

わたしたちが子どもの頃に聞いた確かな音、雨粒が傘に弾かれる音が甦ってきます。

長靴履いて、水溜りに足をすっとうれてみる。

あなごころに持っていた小さな冒険心。

雨降りに想い描いたロマン。

数々の雨にまつわる記憶が、窓の向こうに降り続いている雨の音と共に、わたしの目の前に戻ってくる。

雨が降る子どもの日は、大人の日なのかもしれないな。



(写真はネットから拝借)

## 伝言

---

考えてみたら、「伝言」という言葉は、古くさいですね。

GREEには「伝言板」というものがあるらしいけど、PCのみの私にはまったく見えないから、何のことかワカランのですけど。

伝言ってのは、直接言う訳ではないから、もしも何かをそこに伝えるためにしたためたとしても、それが届いたと言う保証はどこにも無い。もちろん、メールだってそうですけど。

「鶴さん」の終楽章で、同窓会の幹事の方が快くメールの転送を引き受けてくださるんですけど、鶴さんからは何の連絡もなかった。

あの時も、私の気持ちは毎日ドキドキして、伝言が届いたかどうかを心配する日が続いた。

でも、そんなに上手く事が運ぶなんて、考えてはいけなかったんだな、と今になって思う。

伝言は、途中で消えて届かないことだってあるんだという、そんな儚いものだからこそ価値があるのかね。

---

2009年5月 5日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 雨降りを恨む素振りで傘の下

---

銀マド【自画像篇】のほうのブログに 雨降りを恨む素振りで傘の下 というのを載せている。2006年6月15日のことだ。そこで

---

「銀マド」……ってなんだろう、と思っていらっしゃる人があるかと思います。ブログや日記で私が書くゴミの雑記(塵埃秘帖)を「銀マド」と呼んできました。正式には「銀のマドラー」ですね。ウイスキーをかき混ぜる攪拌棒を「マドラー」と言いますが、銀メッキのマドラーだったら「銀のマドラー」です。なんとも心地よい響きだと思いませんか？ 私はウイスキー党ですから、このマドラーで水割りを作るときが幸せです。カランカランという音が好きです。

---

そんなことを書いている。永い間、私は、琥珀色のなかでうねるように彷徨い続ける自分の心を、氷の向こうに見出そうとしてきたのだろう。口癖のように、海はきれいだ、と呟きながらも、海の何かを愛し続けてきた。潮が満ち、潮が引く。太陽が昇り、また沈む。海と山に囲まれた小さな入り江に辿り着いたとき、今までの自分が嘘つきで、いっぱいの人たちに本心を隠してきたんだなと気づく。北山修が、海はきれいだ悲しくなる、とうたうけれど、確かに悲しくなるかもしれないけど、いいじゃないか、それで。そう思う。

---

2009年5月16日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 好きだよと言えずに開く裏表紙

---

♪大学ノートの裏表紙に  
さなえちゃんを書いたの  
一日中かかって一生懸命書いたの

.....

そう  
私だってさなえちゃんを描いたのだ。

私のさなえちゃんは、  
久美子ちゃんだったり  
香織ちゃんだったり  
祥子ちゃんだったり  
ひさみちゃんだったり  
ひろみちゃんだったりしたんだけど  
(今は〇〇ちゃんだけど)  
↑ ↑ さすがに秘密

電車の中で  
学校に行く高校生が隣に座っていて  
一生懸命に中間テストの勉強をしている。

数学なんか読んでる。

私があのこと必死になっていた数学は  
大学時代を経て就職してからも付き合うことになる数学と較べると

へっぽこ数学だが

アレはアレで、大事な勉強だった。

その無駄かもしれないステップが、必ず生きてくるんだからしっかり勉強しなさい、とは、よう言わなんだ。

それはそうと、私は、  
その子の持っている数学の読本の隅っこに、さなえちゃんらしき落書きが無いか探してしまった。

高校生さん。  
ひとつぐらいは、描いておきなさい。

## 卯の花の満ちたり月は二十日頃 絵森月居

---

夏至まで、後幾日かな。

水割りに氷を足して黙り込む

梅雨入りと日記に書いてペンを置く

などと戯言を言っている間に梅雨になり、日が過ぎてやがて「小満」となろうとしている。

立夏のころ、麦畑の麦たちは一斉に刈り取られ、夕刻の田園地帯にはあの甘い香りが漂っていた。麦わらの中の麦の成分であることは間違いないのだが、小麦であってもビールになる大麦の兄弟であることは紛れもなく、農家の人にその区別を尋ねても、見るだけで明確に判るものでもないというほどなのだから、田園地帯にビールを連想させてくれる香りは、たとえ期間限定であっても嬉しいものであったが、あっという間に過ぎてしまった。

+

卯の花の満ちたり月は二十日頃 絵森月居

坪内稔典さんのHPIによれば「月居は蕪村門の俳人」とある。それ以上詳しいことは今はわからないが、私はすごく気に入った。

+

五月雨にしては非情のつぶてなり

夕立や濡れればいいさ、君だって

そんな落書きもデスクのPCのメモにも書いている。ちょっとそのまま屑籠に入れてしまうのももったいないのでここに書いておく。

---

2009年6月17日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 井戸水で冷麺を洗って考える

---

きのう実家で、冷麺を作った。

湯がいたあとに麺を洗う。ハンカチを洗濯するように丁寧にゴシゴシと洗うほど、麺の表面がサラサラになって美味しい。

井戸水が冷たい。ここは、井戸水なのだ。こんなに冷たいものだったか。忘れていたなあと思いながら、やはり現代の贅沢と豊かさについて考えてしまう。(宿命なのだ)

大昔は、都心であっても井戸水であったはずだ。それが何段階かの変化の後に水道水のみになるのだ。

井戸水と水道と併用時代には、井戸水は冷たくてイイねえと言いながら、無限大に贅沢に使えて枯れることのない水道水も使った。

時には水道水の臭さに文句を言い、井戸水の不衛生に不安になりながら、人々の暮らしから井戸水が消えてゆく。

井戸水がふんだんに使える地方や地域でも、行政の政策で水道水が常識化される。下水が普及するとなおさらである。

井戸水のころは良かったねという人が激減してゆく。

今は、井戸水を知らない人が大部分になってきた。

便利で衛生的で安くてまずまず美味しい。不満はないし、無理して井戸水の暮らしに戻る必要もないと思うのが当然だろう。

井戸水を復活させようと叫んでいるのではない。

人の暮らしが便利になったその過程を、しっかりと分析すると、豊かさ意識の麻薬的なモノが付きまとう。快適さや便利さを求めて経済的なゆとりを実現するために、些細なことだからと切り捨ててきたモノが幾つかあった。その判断に間違いはなかったと思う。

しかし、自然の恵みをここまでズタズタにして、科学技術の生んだ便利が最上のものだという錯覚にとらわれ、今までの自分たちがここまで来れたことへの恩恵を踏みにじるかのような考えが横行する世紀なってしまったことを、もう少し真剣に考えて反省してもいいのではないか。

たかが、井戸水ごときであるが、こういうものと共に暮らせるゆっくりとした、安らかな社会を、どうして取り戻そうとしないのだろう。豊かさや贅沢満足にはそんなに魅力がいっぱいなのだろうか。

井戸水を汲み上げる井戸がなくなっていった20世紀から21世紀のひとつの風景と同じように、必ず街の中からガソリンスタンドが姿を消す日が来る。原油の枯渇と同じ時期にそれは必ずやって来る。人々は井戸のことを忘れてしまったように、石油のことも忘れるのだろう。あとは、想像も出来ない話となってしまう。

## 読書部 解散！ @mixi

---

読書部 解散！

2009年03月12日 16:10

-----

こんにちは。

もはや、読書部に魅力は無い。

魅力があった時期は非常に短かったともいえる。

元々、そんなコミュに魅力など持ち得る資質など無かったのではないかな。

本を読み終わったことや、たくさん読んだことを聞きたいわけではない。

どの作家が好きなのかという上辺を聞きたいわけでもない。

確かに、友だちなど人物を選択する際には共通の作家を探してみたり、好みの作家診断をするのも結構だが、そんなお遊びをしている年齢でもない。

その人がその本を読んで何を得たのか。

それはどのような過程を経て熟成されて、噛み砕かれていったのか。

感動とは何か。

あらゆる振動が書物を読んでいる最中や読後に、体中から発散されるだろう。

大げさなモノもあれば平然としたモノもあろう。

個性とはそもそもそういうもので、横一列に並べて凸凹具合で優劣やオススメ度を決められるものではない。

コミュニティーは、すべて自分のほうに向かっているモノを待っている人たちで構成されてきた。

言い換えれば、SNSやブログやホームページは、ほとんどが自分に向かって光が放たれているのだと思っている人たちが多く、その人たちで構成されているといってよい。

その傾向は、時々刻々と増加しつつある。もはや、飽和に近いかもしれない。

情報を求めて彷徨い来る人たち。

情報を簡単に入手できるようになってきたことで人間は、愚かになりバカになり浅はかになってきたと思うでしょ？

便利で合理的でお得な…(というような他にもいっぱいある能書きをかき集めて貼り付けてください)コミュニティーやネットワークというモノを、私は待ち望んでいるわけではないのです。

だから、つまり、情報を欲しいと思って来たり、名刺代わりにしようと思っている人が増えたりしては息苦しいです。

そういうわけで、コミュニティーというモノを継続しても、もはや私の考えているコミュニティーではなくなっている。

それが結論です。

----

実際には、質のいいレビューを書いている人も大勢いるし、興味深い読書をしている人も多い。そういう人を大事にしないで、廃止というのもつらいのだけど。

これから、少しずつ、トピックを削除してゆきます。

中味のある、価値の高い発言などは私自身のノートに書き写してからになりますので、そんなに即座には閉めませんけど。

読書部Ⅱを作ります。そのうち。

みなさん、どうもありがとう。

ひとりひとりの名前を覚えていられたところが一番よかった。  
いまは、みんなが見えなくなったから、ごめんね。

---

2009年7月 9日（木曜日）【随想帖 I】

---

## 読書部 解散！（その2）

---

その2

2008年12月13日 09:36

----

コミュをやっていて、入会する人が増えるのは嬉しいのですが、私のところに足跡も無く入会だけする人も多かったことが気になっていました。

コミュニケーションというのは、交流するという言葉の意味を持ち、動詞も名詞もあります。そのどちらもが、意味のとおり機能していないと感じて幾日もが過ぎていました。

所詮、ネットワークの遊びですが、飾りでコミュに入るのならやめて欲しい。

情報を受け取るだけなら、他所に行って欲しい。

読書を通じて自らが発散するものを、レベルはいかがにしろ、提供していただき、そこにコミュニケーションの出発点を置こうと考えていましたので、情報を差し上げたくないというのではなく、何も情報が無く探すだけなら探すだけなのだという事実情報を持ってコミュニケーション出発地点にいて欲しかったわけです。

ひとりひとりのプロフィールを拝見し、割ときちんと憶えていたのですが、途中で名前が変わったり、人数が急激に増えたりしてしまうと、その人の像が見えなくなります。

読書の価値なんて、所詮バラバラです。

何も、纏める必要も無い。

情報が欲しいならどこにでもある。

その辺で手に入れないようでは、今の時代、自転車車に乗れないよりも情けないとみなされるかもしれない。

そういうわけで

もう役目は終了。

ひとつの時代は終わったと判断したのです。

---

2009年7月 9日（木曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 読書部 解散！（その3）

---

その3

2009年07月07日 21:07

---

かなり危険な言い方なんですが

コミュニティとしてある読書系の

- ・読書数を誇るところ
- ・何を読んだかを主張しあうところ
- ・自分を出すだけで、人を受け入れようとしないところ
- ・読書の虫と言いたがること

などなど

私のような

読書の劣等性は

優劣とか序列とか

注目とか売れ筋とか

そういうのが好きになれなかったの。

またまた

危険な言い方だけど

福永武彦のわけのわからない一節とか

そこに潜んだ荒れ果てたと心とか

純粹で情熱的な物語とか

少し裏を知っている人と、人生の壁を共感しあうとか

宮本輝の作風とか

遠藤周作の純粹と純真、純心とか

数々ある人々のから伝わる勇気とか

それをもらって、震える皆さんの眩きとか。

そういうモノを

吐き出す

場所。

読書部Ⅱに

作りたいと思う。

看板だけの人には来て欲しくない。

走り書きですが

そういう気持ちでいます。

## 秋味やうたかたの苦味ひかえめ

---

▼秋味が出回り始めて、夏よりも秋のほうがビールが美味いと気づく。秋のほうが食いもの美味しい。

▼ビールは大好きだったけど、この頃は切れても大丈夫。昔は夏になるとビール漬けだったけど、大人になったのか。麦とホップのほうが美味い。ビールを超えて味を作る発酵食品開発者の気合を応援したい。

▼ウイスキー。昔からW党です。政治は何党？ 別になしですが。

▼ただし、政治にはモノ申したい。

▼高速道路の渋滞を発生させて知らん顔は無責任だ。業務の人々に迷惑をかけて、船舶業界に不公平感を与えて、さらに、自動車に乗らない人にも公平ではなかった。

▼業務の車を安くする方が先でしょ。渋滞発生を招いているのだし、その箇所を遊びで走る車からは割増料金をとってもいいんじゃない？ 遊んでる奴らや金持ちは、もう少し社会に恩返しすることを考えたほうがいいのではないかい？（恩返し精神は教育の問題か）

▼無料という言葉で騙すのはやめて欲しいが、騙される国民はノンポリそのもの。アホボケですわ。

▼20年後を見据えた交通機関を考える。、今のシステムにメスを入れる。公共交通機関を利用する人たちが、使いやすく便利で、緊急時にも役立ち、高齢者も使いやすい交通システムを構築する。そのためにお金を使って欲しい。

▼無料の高速よりも、公共交通機関利用促進の支援資金のほうがよかったように思うけどなあ。新幹線5割引とか。僻地からの通院者のバスなど申請により補助しますとか。

▼老人や高齢者を、もっと配慮するべき。社会は弱者を無視して踏みにじっているのだが。国民よ！ 一度みんなが失業しなさい。老人になってみなさい。病気になって3ヶ月ほど寝込みなさい。そう言いたい。

▼エアコンの買い替え、車の買い替えがブームかも。物質重視社会で合理性を追求した結果、電気料金の高い家電を廃止し新しいの買う。日本中が買い換えてしまったら、電気製品も車も、そうですが、総消費量が上がってしまうかもしれない。全然エコじゃないのですけど。

▼デジタル放送だってそうじゃない。テレビを買い換えましょうという風潮はいただけない。ほんとうに必要なのか、デジタル化！？ これを機会に私はテレビをやめます（…って今でも見ないけど）。ケータイも持ってませんしね。

▼モノを大事にする精神。今の恵に感謝をする気持ち。これを失くしている。国民は、自分だけが豊かであればいいという生活をする。目先だけ見る。自分だけ得する。社会は破滅する。

▼「豊かさ」を得て、心が貧しくなってきた。その警鐘さえも理解できない人だらけ。

▼生活そのものを見直す必要があると、どうして誰も言わないのだろう。不自由や不便をしなければいけない世紀なんだろうと思いますが、なぜ、それを受け入れようとしないのだろう。

▼愚かだな。選挙はもうすぐなんだが、呆れて、気力が出ないよ。

## ノラや と 草の花

---

少しずつ読み進んでいる。

通勤列車の中では「ノラや」  
寝床では、「草の花」

ふたつの全然違った味わいの作品のなかで  
内田百閒からは、猫を飼いたいなあ、と思わされ  
そしてまた、  
福永武彦からは、深夜の静寂に耳を澄ますような痺れを感じ取る。

今の人は、福永武彦など読まないだろうなあ。  
こういう作品はまったく望まれていないだろう。  
こんなふうに他人や自分を見つめたりすることもないだろう。

そう、加藤和彦さんが逝ってしまった。  
青春時代にたくさんたくさん刺激をくれた人。  
ありがとう。  
いつか私もそんな風にストンと逝きたい。  
ご冥福を祈ります。

---

2009年10月18日（日曜日）【随想帖 I】

---

## GREEの変化 ―デザインが変わるそう

---

ニーズにこたえる形となっているのでしょう。

今の人たちがこのようなモノを望んでいるのだということがよくわかります。  
(また、GREEがこのような形の遊びを目指しているのだというようにも言えます)

しかし

私の期待しているデザインではなく、インスピレーションで画面を探ると迷路を彷徨うようにわからなくなる。

メッセージは短く、  
人はたくさん集うほうがよく、  
それを一目で把握しやすいモノにする。  
記述されたものは著作ではなく、  
会話のように言葉感覚で消えてゆくものであり、  
過去は過去である。  
未来は人が集うための無限のステージ。

ということで

全面的に新しくなって、使いにくさが如実に表出するようなら、考え直すことにします。

今の世の中は全てがこのような流れですね。  
逆らって生きるのは辛いです。

結局、戻ってくるのは、自分でデザインして作ったホームページです。  
しかし、それも所詮、電子メディアです。

世の中に古典的書物として残されているモノが無数にありますが、ある時期から書物の数が急激に減るわけです。もしかしたら、地球温暖化の何かを表す指標と相関関係があると面白いかも。

---

2009年10月27日(火曜日)【[随想帖 I](#)】

---



## GREEの変化 その2 一人々

---

▼コミュを幾つか開設していて痛切に感じる事がいくつかある。

その最たるものが「新規加入のメンバーの足跡が私のところに残っていないことが多いこと」である。

コミュに加入するにあたり設立者をちらりとでも見たくはならないのだろうか。見る必要性を感じないのだろうか。そのあたりは感性の違いだろうが。

これもコミュが大きくなりすぎたことによるもので、私が目指すコミュ像が伝わらなくなってきたひとつの指標でもある。

解散して消滅は簡単だから急がない。しかし、意図に沿わない方々は(退会して)よそに行かれることを切実にオススメしたいのだが、なかなかそう上手くは行かない。

▼昔、ある方(グリ友)さんが、日記を非公開にしておきながら私に(その方の)日記にコメントを書きに来るのは卑怯だと書いておられた。

そういう事実は確かにあって、メールにおいても、片方からは出せるが受け取らない設定とすることが可能で、これも似たことといえよう。

これは、その人物を責める前に、GREEのシステム設計と哲学(ポリシー)を責めねばならない。責めると言っても悪いというわけではない。経営方針はGREEが決めることであるのだから。

そんななかで、設立当初のクリスタルな思想も薄れたような感じがしますねとも伝えたい。しかし、これも社会のニーズだからという答えが簡単に想像できる。

経済優先の社会を行く抜くためにバカな社会や消費者に振り回されて、社会構造そのものを破壊してしまわないことを切実に祈る。

▼面白い書き込みも見かけることがある。それは、「もしもこの書き込みの場所や内容が不適切でしたら削除してください」というような内容のものだ。

コミュニティーには同意をして参加いただくことを規約に明記しているのだから、規約を読まずに來ましたと白状しているようなもので、もしもこれが債権や物権にかかわる内容であって後で重大な損害でも出たらどうするのだろうか。もしも全てこのような調子で日常を生きている人が増えているとしたら、恐ろしい世の中だ。

まあ、そのような書き込みがあったら、コミュの流れと雰囲気合わないの、私は時期を見て削除しますが。(だいたいそういうメッセージは後に退会されているなどして削除しやすいことが多いような気がします)

▼そういうわけでGREEが次第に変貌しているのは、参加者の使用動向も少なからず変貌していることを如実に表している。

社会を垣間見るには、ここにしぶとく在籍して、キョロキョロと人の動きを見ているのが面白いのかもしれない。そんなことを、思う。

――

ある方に書いたコメントを付加して置きます。

今回の変更も、たまにしか日記を書かない人や、日記というモノを作文として大事に残すという明確な意思のある人をないがしろにする改革ですね。メールだって、今までの履歴を一覧で見れたのがなくなるようです。

過去を大事に残しておくという人やゆっくりじっくりと考えるつもりでいる人には、まったく不向きなようです。ネットのSNSやブログが twitter に振り回されている感じ。私はバカらしくさえなって來ました。

コミュを幾つかやっていますが、(やめてしまうかも知れないと思うと)ちょっと寂しい思いです。



## 円楽さん、逝く

---

まず最初に、合掌。お悔やみ申し上げます。

往年に活躍し、私に多大な影響を与えた人たちが、次々と逝く。

偉大で刺激的な人物というのは先輩方や自分の親世代あたりに多いこともあって、訃報で驚かされることが多くなるのは40歳をまわるところからで、その間に自分の父も逝き、また恩師の先生方もお亡くなりになった。

円楽。

私にとっての円楽さんは、落語の本髄を知らしめてくれた人だった。

「中村仲蔵」を、堪えようもなく滲む涙を拭きながら、カッコ良く演じる円楽さんは、これが落語なんだ、これが噺家の話なんだ、ということを身体で表現した。

落語を「きく」、という文化、即ち語りに耳を傾けるというおこないが大きく廃れてゆく昨今、そうさせている要因への怒りもあるものの、廃れさせてしまっただけでいいの？という心配も大きい。

(歴史的に見ても、文化とはそんなものなのだろうか。そう思いたくないのだが…)

----

※(ニュースから) 落語家の三遊亭円楽さんが10月29日午前8時15分、肺がんのため東京都中野区の自宅で死去。

---

2009年10月31日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 耳を傾ける

---

▼「読書部」を再生しようと思う。

コミュニティーのアイコンだけを名刺代わりにする人ばかりが増えて、ちっともコミュニティーとしての機能を成熟できないので、言ってみれば呆れてしまって読書部を解散したわけだが、世の中には、私がやりたいと言い続けている「コミュ」の理想像を多かれ少なかれ理解してくださっている方もたくさんあることがわかったので、もう一度「再生」という形でやり直してみようかと思う。

かつて、コミュで、コミュニケーションをしたいと私は言った。自分の欲しい情報を拾い出しに来るだけ、または話題が欲しいだけなら、来てくれるな、とまで明確には言っていないが、「自分の戴いた情報の恩返しは同じ形で皆様にお返しして欲しい」というようなことは書いてきた。

今の世の中、貰えるものは貰っておかねば損だからという風潮もある。スーパーやコンビニで無料の割り箸を必要以上に貰う人やレジの後の架台にある透明のパッキング用のラップをこれも必要以上に取り取る人の姿を見るたびに心は幾ばくも豊かにはなっていないことを実感する。

豊かさに満たされて、それを生かすか殺すかは、自分の姿勢と視点の持ち様で決まる。読書部にも素晴らしい感性をお持ちの方々が出入りくださるなら、その方々の英知をや視点をお裾分け願うためにも、(mixiがGREEみたいな考えを表明しない限りは)ここに読書部は再生されるべきなのではないか、と考えたのです。

▼「語りに耳を傾けるようなおこない」が、廃れていると、円楽さんのことに触れた前の日記で書いた。

役にも立たないかもしれない話をゆっくり、且つじっくりと聞くという姿勢を社会は失いつつある。速くなりすぎた時間の中に詰め込まれた膨大な情報を取りこぼすのが怖くて、redundancyの中にある最も重要なモノを切り捨ててしまった。その結果、何ごとにも「耳を傾ける」安定した姿が消えたわけだ。

▼読書部の再生にあたって。

この、「耳を傾ける」という姿勢を、「与える側」と「与えられる側」の双方によって、つくりあげたい。そしたらそこには、本と友だちになれた人たちのコミュニケーションが築かれているような気がする。

---

2009年10月31日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 絞る縄、絢うという言葉のゆくところ

---

絞る縄、絢うという言葉のゆくところ

先日、実家に顔を出したら弟が藁を丁寧に選り揃えているので、何をしてるのか、と尋ねたところ、しめ縄を作るのだという。

--- あんた、おじいさんにしめ縄の作り方、教えてもらたん？

と問い直すと、

--- いやなあ、何も教えてもらてないな、見よう見真似やという。

丁寧に一本一本つまみ出し、コツコツと藁を揃えている。そのうしろ姿が、父に似ているかな、と思いながら私は黙って見ていた。

綺麗に頭が揃ったところで、束にした藁の束を絢い始めた。ぎゅっぎゅっと力を入れるたびに汗が飛ぶ。

--- 見よう見真似で下手くそやなあ、きちんと教えてもらおうといたらよかったな。

その作業をする小屋には、子供の頃、縄絢器械があって、農家の収穫が終わった秋の暮れのころは夜なべ仕事に縄を絢う父や母の姿があった。

新聞に「おやじの背中」という連載があるが、我が家の場合、この姿というものは単に淋しそうな背中であつたというだけではない。その手先で何かの作業をし、決して大声にはならず言葉に力も込めず囁くように、それはまさしく呟くように語るおやじであり、取り巻く環境には明かりも乏しく、暖炉も無く、音も無かった。

縄絢器械のあつた小屋の半分は壊して新しく立て替えている。藁を格納しておくような棚や米を貯蔵する蔵は今の時代には不要であり、小屋のなかには自家用車を2,3台放り込めるようにしてある。

弟がしめ縄をぎゅっぎゅっと絞る手が、強く込めた力で震えている。縄を絢うという言葉、しめ縄を作るという作業、もっと広義に見て、藁を使う文化にどれほどの価値が残されているのかはわからないが、絶滅させていい文化とは思いたくない。

--- 下手やな

と呟いていた弟であつたが、それを備えてもらった神棚の神様が、そのようにお思いになったとは、私には思えない。

\*

環境を仕事にしているが、エコポイントなどの事業にかかわるたびに、逆に、モノを大事にする心が失われていることを、合理性と同じほどに見直さねばならないと感じる。人が、暮らしの中で無から有へと知恵を絞り築き上げて来た文化を忘れてはならない。人は、単なる「考える葦」であつた世紀を忘れてはいけない。そう思う。

---

2009年11月 8日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 師走の始まりに考える

▼日高敏隆先生が14日、肺がんのため京都市内の自宅で亡くなられた。11月29日の天声人語(朝日新聞)が日高先生を取り上げていた。先生は、動物行動学の第一人者で、初代の滋賀県立大学学長でもあった。

▼自然が私たちにもたらすものの重要さや貴重さを判り易く教えてくれた人だった。親しみやすいエッセイなどが文庫になっていて、「春の数えかた」というエッセイで知っている人も多いことでしょう。未読の人は、ぜひ読まれることをオススメしたい。環境を考える人たちのなかには大きく影響を受けた人も多かろう。専門である動物行動学の立場から「人間を万物のモノサシとして疑わない風潮に異をはさんで(天声人語)」おられた毅然とした学者だった。

▼「動物はときに自然を破壊するが自然を単純化はしない。しかし人間は手を加えて単純化する。単純化したもろい環境が世界に広がっている」と天声人語が書いているが、これはまさに今の我々にも当てはまり、更に環境だけではなく万物にもいえることだろう。

▼前に「生物多様性」についてここに書いたが、この言葉の生みの親でもあると言う。なるほど、知らなかった。「生物多様性」という言葉はメディアの中を環境用語として暴走している。環境問題のあらゆるところで「エコ」が連呼され、お祭りイベントになってしまい抜け出せないような状態なのが非常に心配だ。環境を考えるにあたって、本当に私たちが目指すべきことは、メディアが騒ぐような興味本位情報や企業がいい子ぶりっ子をしている姿を見ることではない。確かに視線を向けてもらうことはありがたいのであるが、そんなことよりももっと奥深いものだと思うが。

▼亡くなった方、二人目は川崎展宏さん。朝日俳壇の選者をしておられたときに展宏さんのことを知った。というより、新聞記事を読んでいれば嫌でも気にとまってしまう魅力に溢れた(私には驚くべき)俳人だった。こんな視線が俳句にあるのか、こんなのもアリなんだと驚くばかりで、その新鮮味は毎週刺激的であった。

▼病氣療養のためと知らされただけで、その事情はわからなかったのだが、11月29日、肺がんのため東京都内の病院で死去というニュースを読んで、嫌な予感が当たってしまった。

二人してしづかに泉よごしけり  
夕焼て指切の指のみ残り  
画用紙をはみだしたまま梅雨の月

などなど。

心に突き刺さるではないか。いかがかな、皆様は。

▼驚いたのは、斎藤耕一の死だった。

11月28日、肺炎のため東京都日野市の病院で死去、80歳。おお！もう80歳だったのですね。私の青春時代の感動的な映画は、あなたの作品を抜きにして語れません。

▼「約束」「旅の重さ」を今の若者に見て欲しい。1972年の映画はこれほどまでに情熱的だったのだ。とそんなことを書いて青春がひとつひとつ消滅してゆくを感じる。

▼個人的なことですが親友の奥様が月末に亡くなったという知らせが届いた。まだこれから人生を楽しむ時期なのに。

▼師走。

嫌いな人も多いようですね。

就職が決まった年には東京に立て篋り論文を書いていたなあ。

苦い思い出ではあるものの、あの時間があったから今の私がいるのだ。

頑張らねばならない人たち。

頑張るときは今しかないのだ。無心で打ち込みなさい。



## 逝く人

---

私のノートには、今年亡くなった人の項目がある。

---

2月2日:山内一弘 元プロ野球、外野手(1932年)  
2月25日:稲越功一 写真家(1941年)  
4月14日:上坂冬子 ノンフィクションライター(1930年)  
5月8日:藤沢秀行 囲碁棋士(1925年)  
5月11日:三木たかし 作曲家(1945年)  
5月17日:頼近美津子 元NHKアナウンサー(1955年)  
7月8日:川喜田二郎 文化人類学者 KJ法考案者(1920年)  
8月3日:大原麗子 女優(1946年)  
9月21日:庄野潤三 小説家(1921年)  
10月17日:加藤和彦 ミュージシャン ザ・フォーク・クルセダーズ(1947年)  
10月20日:原田康子 小説家(1928年)  
10月29日:五代目三遊亭円楽 落語家 (1933年)  
11月10日:森繁久彌 俳優 コメディアン(1913年)  
11月13日:田英夫 ジャーナリスト 政治家(1923年)  
11月14日:日高敏隆 京都大名誉教授(1930年)  
11月16日:水の江瀧子 女優(1915年)  
11月26日:四手井綱英 森林生態学者(1911年)  
11月28日:梶原武雄 囲碁棋士(1923年)  
11月28日:斎藤耕一 映画監督(1929年)  
11月29日:川崎展宏 俳人(1927年)  
12月2日:橋本昌二 囲碁棋士(1935年)  
12月2日:平山郁夫 日本画家(1930年)

みなさんが、どれほどまでに私に影響や刺激をくださったかは、私の胸のなかにしっかりと刻まれています。

[藤沢秀行]

学生時代に碁盤を覗くときに、私の周りで観戦する友人たちとの間で「秀行」さん話題が出なかったことは一度もなかった。

[川喜田二郎]

KJ法の新書を必死で読んだ。何が何だか全然わからなかったが、それは後に社会に出てから、なるほど！と響いた。その凄さに驚いた。

[加藤和彦]

フォークソングと出会うことは、即ち音楽と出会ったことで、自分を熟成させてゆく非常に重要な骨子になった。

[円楽]

私にとっては、演目「中村仲蔵」ですね。これも、人生を変えるほどの衝撃。

[日高敏隆]

自然とは何か。人間と動物とのかかわりあいとはどういうものか。私たちはどこまで動物なのか。大きな命題を与え、モノを見つめる視点を導く。

[斎藤耕一]

私の映画観は、この人の映像なくしてありえなかった。「約束」「旅の重さ」

[川崎展宏]

今、私が俳句というものを多かれ少なかれ楽しんでいるのは、てんこうさんとの出会いがなくしてありえなかった。俳句観を



戴きました。

---

11月末、京都を散策していた私が家に帰ったところに1通の便りが届く。

親友の奥さんが亡くなったという。まだ50歳くらいだ。

未成年の男の子が二人いる。

友よ、30年前に大崎の駅前の小さなスナックで、月に1,2度、いつも思う存分の酒を飲ませてくれた友よ。奥さんには二度ほどしか会わなかったな。

歳月、運命を流す川の如し。

合掌。

---

2009年12月 6日（日曜日）【随想帖 I】

---

## 坂の上の雲（司馬遼太郎）

---

坂の上の雲（司馬遼太郎）

NHKがドラマにしてくれていて  
たいそう人気の様子で  
私の家族も熱心に見ているようだが  
（「仁」というドラマも見ているようだが）

どうも  
私は、

（ドラマ好きであり、ドラマという雑誌までも講読していた過去がある人間でありながら）

このドラマに  
没頭できないのです。  
キラ伊じゃないのだが。

あの司馬の作品の  
どうしようもなくだらなくダラダラと書き続けるドラマと考察の錯綜が  
というか、迷走が彼の作品の魅力であるなら

やはりドラマは  
新聞のテレビ番組欄のあらすじを読んでもさほど代わり映えしないような気もするのだ。

あの途轍もなくツマラナイ、二百三高地の箇所をドラマはどうするのだろう。  
ツマラナイドラマにして欲しい、と密かに思う。  
それが、反対に面白いような気がする。

---

2009年12月20日（日曜日）【随想帖 I】

---

## 静かさや泣いて笑って大晦日

---

夜が明ける前に眼が覚めた。何となく静かな気がするのだ。大晦日というだけでそう感じてしまう。

新聞屋さんの配達バイクの音が少し早かったか。年を送る準備が万端なのを表しているのだろう。

泣いて笑って、と思い浮かべた。

人は泣かねばならないし、笑わねばならない。

そして、そういうことは決してひとりでは行わない、命令も受けない。

毎年、同じようなことをこの時期に思い、反省している。去年の日記を繰り一昨年の日記、さらにと繰り続けると自分というモノが少なからず見えてくる。

そしてそこには、必ず喜怒哀楽がある。

「起死回生」と書いた年があった。

ある年は、「失意泰然」

またある年は、「倜儻不羈」

と書いている。

去年のきょうは、「おおきに」とした。

初心忘るべからず。

世阿弥の言葉だ。

「忘却を恐れない…」

これは私の大学時代の日記ノートの表紙タイトルだ。

忘れるという字を見つめていると、新しいモノが次々と見えてくる。

ほら。

-----

みなさん、今年もおおきに、ありがとう。

ご挨拶にいけてませんが、足跡に代えて共に一年を感謝したいと思います。

---

2009年12月31日（木曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## どん底から

---

あけましておめでとう。

いろいろあるね。あなたのように免疫のない清い人は穢れた精神やおぞましい根性が浸透してくると意外と脆いのかも、と  
思ってみたりしています。かといって、何も心を穢れて寂れさせる必要もないのだろうけど。

そんなわけで少し落ち込むのはいい意味でワクチンみたいなものかもしれないですね。  
免疫を体内にうめこみ、更なる飛躍を期待したいです。

(一部略)

人間には燃えるような情熱と、砂漠に行っても枯れてしまわない様な冷めた心が必要なのだと思います。

自分の砦も必要だし、その砦を開放することも必要。

四方のうち、一方に逃げ道を用意しておくことも必要。

理屈も必要で夢も必要。

雑談も決して無駄ではない。

高い所から大きな心と眼力で自分を見下ろす視線も必要。

戦術力も政策力も欠かすことは出来ない。

まあ、そんななかで厳しい条件を要求されながら一生懸命に生きているのが現代人である種の健気さを感じるものの、馬鹿さ加減も昔以上といえるか。

\*

日記。GREEで書いていたのね。今はGREEにしてもmixiにしても、「読む」文化が欠乏していつているので、真面目に読んでいる人はそれほどいないね。総理大臣の悪口でも書いてみるとすぐわかる。無反応なんだよ。誰も読んでないのですわ。  
ブランドバックのお得な話を書くとすぐ釣れるけどね。

そんなところを自分が浮遊しているのだということ。それを認識することだ。次に考えるのは、そこを浮遊しながらそこで新しいモノを作りだせるか。新しい日記文化とかそういうモノを。

社会全体がtwitterだのGREEだ、mixi、ブログなどと、ケータイ小説を何ら非難できないほど軽薄ペラペラの時代ですからね。社会学者までもが便乗して銭儲けをしているんだから、呆れる。でもそこで暮らしているのは、紛れもなく私たち自身ですから、私もtwitterで遊ぶしmixiもやってるけどね。

失業者が増えて、やる気のない奴が職場にも増え続けて、社会には価値の薄いお得そうなモノが溢れて、人々の心は贅沢を追いつけて、心はどんどん貧困になる。

本当の実行力ってのは、アメリカ合州(衆)国の基地をグアムあたりに移転決定させて、私は大した実行力もないのですが何とかやれました、とさり気なく照れまくるような総理であって欲しかった。

落ち込んだんだってね。どん底の景色も見えておいで。そんなアドバイスはいけない人のすることかな。

では、真面目に、絶対に当たっていること1つだけ言わせてくれるかい。どん底で書く日記は、誰が書いても良くなるわけではないものの、それなりにポテンシャルのある人が書くといいモノになります。どん底で日記を書いてみなさい。よければ、まだまだパワーがある証拠だ。

そのときは、自信を持って浮き上がっていきなさい。

-----

(ある友達にあてたメールから、一部)



## ニセモノのなかを歩んでゆく

---

(友だち宛の便り)

今日でお正月も終わりです。  
早く仕事をしたいな。

(略)

でも、今の社会の二極化現象は至る所で表れていますね。  
それぞれぞれの原因に相関関係があるわけでもないけど、  
政治も二極化を叫ぶ人がいれば  
生活の豊かさや貧困層も二極化ですからね。  
思想体系も二極化かな。

つまり

何も考えないで、自分の損得だけと幸せ(満足度)の獲得を目指す人と  
しっかりと政治や社会のことを考えて、自分の考えを持っている人と  
この二つが明確になってきてますね。

そしていわゆる無関心層はどんどん肥大化しているように見えますが、  
人数として肥大化しているわけではなく  
IT関連やメディア関連でチャホヤされて勢いついているだけの様な気もするけど。

首相までもがtwitterの時代ですが、  
あんな軽薄なものは一刀両断すればいいのにとと思うのですけど。  
注目と人気欲しいのかな。  
自分が愉しみたいのかな。  
国民のためと思っているのかな。

まあ、あまりこんなことを理屈で考えていても仕方ないよ、という考えもあって、  
少しでも安いお肉やお魚や雑貨を買い求めて走り回って一日が終わってゆく人もある。  
そしてそれでも、暮らしは成り立つのですけどね。

(略)

幼稚でも構わないし  
上から目線でも構わないと思うな。  
そういうものに排他的になって勢いつく社会現象がおかしいのだと思うけど。

あんまし冷めてもいけないけど  
自分の知っている世界ってのは非常に限られた世界で  
もっと他にもたくさんの生き方が存在するということに  
少しずつ出会っていけるといいですね。  
そこには、ニセモノがうようよしていますし、気をつけながらいこうね。

(略)

## 挨拶を果たす

---

御無沙汰しています。

なかなか、一步が踏み出せないでとどまっています。頭にはいろいろと言葉が浮かんできます。

諦める  
とどまる  
凭れる  
仁義礼智、  
…忠信孝悌

一年が終わって、サラサラと過去を清算できるわけでもなく、然らば、それを糧に逞しいこうじゃないかと決意を固める日々でもあったのですが、仁義礼智、と呪文のように唱えていると、今までに怠ってきた数々の無礼が呪いのように甦ってくるのです。

そんなこんな年が暮れ新年が始まって、年賀が届き一枚一枚を拝読するのですが、その方々からの蓄積された枚数が私との出会いの年月なのだと、当たり前のように改めて気がつくのです。

卒業と入学を繰り返しながらその間に成人し、就職を果たしてきた。途中で結婚もし転職もした。遊んだこともあれば真面目に頑張った日もある。そんななかで、私という人物を諦めることなく手厚く見守ってくださった方々の集大成がこの年賀に込められているのだと思うのです。

みなさんは、洩れることなく着実に、例えば出世をし幸せを掴み、名誉を得て、地位を得て、スパイラルの階段を登るように高いところへと進んでいった。私は世間を斜めに見ている人間ですからそういう真面目な方々のように生きてゆけなかったもので、階段を上るのをやめてしまっていますが、そんな私にも暖かく年頭の葉書を送ってくださる方がいるのです。そのことを、あるときから途絶えてしまった人たちと対比して考えると、非常に意味が深いことだと気が付いたというわけです。

社会の片隅で、みすばらしく生きている奴に対して、みなさんは社会的にも家庭的にも立派な方々です。私など取るに足らない友人知人であろうに、途絶えることなく一枚の葉書を出し続けてくださる。その葉書が私に届いてくることで、共に切磋琢磨した日々、熱い薫陶を授けてくださった日々を回想するのです。

十年前、数年前、昨年、今年と、年月を経ながら、ちっぽけな私は年賀をサボることを考え、随分と出す数を整理してきました。それには理由があったともいえますが、果たしてその判断は如何なものだったかと深く反省をするのです。

ひとりひとりの顔ぶれを多い浮かべると、そういう仁義礼智に満ちた行いをしている、否、自然にできている人物の像が見えてくるのです。大物になるとか大金持ちになるとか豊かな暮らしを得て満足な暮らしが必ず達成されいるとも限らない方々もありますが、その一枚の葉書がその人物の信頼度を黙って語っている。

社会で生きてゆくということは、お互いが生かされていることでありますし、身であれ心であれ支え合ってお互いが感謝しながら歩んでいくわけですから、そういうたった一枚の挨拶状を如何なる理由があろうとも絶やさずに送り続ける心に、私が最も学ばねばならないモノが在ったのではないかと、そう思ったのです。

学ばねばならないことは山積です。

## 起立をして礼をする

---

年始の知事のお話のなかに、箱根駅伝の地元勢の活躍の話がありました。たくさんの学生さんが頑張ってくれたようで驚いています。

高校時代にはさほど頭角を現さなかった選手が大学になって今年のように大活躍をするのを応援しながら、私も県民性のことを少し連想しておりました。あまり人の前に出てゆくことのない作戦参謀的な人柄が目立ちます。南北に長い県ですから、幾分、気候的な影響や基盤産業の違いからくる社会との接し方にも違いがあると思います。元来、都であるとか天下の台所から一歩退いた国柄でもありますし、しっかりした考えを持ち、じわっと活躍するタイプが似合うのかもしれませんが。

とりわけスポーツに長けている人が育ちやすい土壌でもないのでしょうけれども、駅伝の選手たちが次々とゴールをするときに、倒れかかって動けなくなってしまう選手は無理ですが、その他の選手は自分が駆けて来た道に深々と礼をしている姿が美しかった。

伊勢や熊野という地を控え、人々は、信ずるものに礼をするという文化に支えられてきた県民性もある。「美(うま)し国」とは、まことに素晴らしい言葉だなと感動しております。

---

2010年1月 9日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---



## ブルーブラックの…

---

ねえ

ちっとも電話をかけようとしなくて  
手紙を書くんだといいながら  
ペンを持ってもぜんぜん便箋が埋まらないの。

あなたのことを想い続けている時間が長い分だけ  
電話よりも心がこもるのだっていくら言っても

ポストに入れなきゃ、届かないじゃないですか。

ねえ、自分よ。

----

今日は大寒なんですけど、暖かいの。  
暖房もつけずに、背中に陽を浴びて机に向かってしていると

ふっとため息をついているだけで  
万年筆のインクが枯れてしまうの。

乾いたペンの筆先をじっと見つめると  
昔が懐かしくなるな。

ブルーブラックのインクのにおい。

----

いつも思うのだけど  
不思議なことに  
昔の匂いって記憶しているの。

声とかにおいって  
顔よりも鮮明に覚えているかもしれない。

人の、というより、動物の避けられない本能なんだな。

## 着々と四月の別れの支度する

---

梅の開花の便りが届く。

私と同じ地域にお住まいの方々であれば、すかさず結城宗広のことを思い浮かべることでしょ。

どれほどの昔においても、人は体制に背き、新しきに挑み、しかしながらその安泰に驕りを棲ませてしまい、やがては新しい反体制に滅ぼされてゆく。

結城宗広の時代にみちのくがどれほどまでに遠方でどれほどまでに僻地であったのかは想像を絶するものがあるが、武将たちが栄光を追いながらもその途上で朽ち果てることの無念さは数多く歴史に存在してきた。

それらの事実を想像すると、梅の花が北風に負けじと咲く姿は途轍もなく美しく思える。

梅が咲く。

どうして、この寒い季節に春を予感することができるのだろうか。春など、いや季節など巡ってこないかもしれないのに、梅のDNAは春を予感する。

---

着々と四月の別れの支度する  
と書いてみたが、いや実はその姿は、

黙々と四月の別れの支度する  
のほうが良いかもしれない。黙々と…なんていうような、背中に美学を負ったようなものではなく、もっと悲愴的なのが私の現実なのだろうが、誰が考え出しのか、年度の始まりは四月なのであった。

梅の花が咲く枝で、その先に開花を待つ小さな蕾をメジロがついばむ。  
それでも、幾つもの梅はやがて花を咲かせる。

透き通る青空と凍えるような冷たい風がよく似合う不思議な花だなと思いながらそっと匂いを嗅いでみる。

道真もきっとそんなふうにしたに違いない。

---

2010年2月 7日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## ひこうき雲、春夕焼けが包み込む

---

めまぐるしく時間が過ぎてゆく。  
そう書いてみて、ふと立ち止まる。  
そうでもないかも、と思い直す。

春は確実に近づいている。  
雨が降り、晴れ間が戻り、また雨が降り、風が吹く。  
どれほど雨が冷たかろうとも、手が凍えそうになろうとも、時が来れば春になる。  
待ち遠しい、と思う人を裏切ることはない。

### ▼人恋し君恋しいと水割りで

そんな季節の移り変わりの日々のひとコマで、いやすべてのコマで私は水割りを飲んでいる。  
「人恋しい」という言葉は飾りだ。  
だれがそんな。恋しいものか。と強がってみる。

### ▼届かない今夜ひとりで泣いてても

そのくせ、「届かない」と書いてみる。素敵な言葉を見つけたね。  
いつまでも未完成なドラマのシーンに不満と満足が交錯する。

### ▼ショーウィンドウ、プチハネボブの君の影

木枯らしの吹く帰り道を駅まで歩く。その途中にショーウィンドウなどない。  
仕事帰りのグレーのコートを着たオヤジたちが帰ってゆく姿にまみれて坂道を降りる。  
議会が始まったからかな、みんな黒っぽい背広が目立つ。  
そんな裏通り。  
木枯らしが似合うかもしれない。

### ▼靴音を逃してしまう春の風

夕暮れどきが嬉しくなってきた。暮れなずむ時刻を楽しむ。  
長い髪の女の人が追い越してゆく。

### ▼狙っても打ち落とせなくて春の風

バキューン。  
ねえ、お茶でもしませんか。  
そんなことを今更、言う気もない。

### ▼バレンタインあの子の笑顔をちょっと妬く

早くいい人が見つかりますように。  
人気者のあの人。

### ▼坂道を凍えて濡らす春の雨

春の雨は冷たいねえ。  
天気予報ではもう少し夜半になってから振り出すって言ってたように思うけど。  
コートの裾が濡れる。  
水玉になって弾け飛ぶ。

### ▼少しでも落ち込んでました。蓑虫さん

そういつてみたくなる春の夜

### ▼そわそわと春めいてきてもペン重し

千夜一夜を書き倦ねている。

通勤列車の中ではスルスルと出てくるのに、ペンを持つと消えてしまっている。

眠れない夜が続くときは、深夜に対峙することもあります。布団に入ると1分以内で眠れる日々が続いている。

### ▼春夕焼けひこうき雲を焦がしてる

久しぶりにひこうき雲を見た。

春夕焼けの中にまっすぐに伸びて、遠く山の端に向かっている。

ひこうき雲がきれいですよ、と写真を添えてメールしてみたら、物語の続きを思い出せたかもしれない。

---

2010年2月21日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 卒業の旅行で留守のひな祭り

---

消えゆくごみの眩きから、救済してきましょう。

### ▼就職で髪を切るって、30センチ

これはうちの娘さんのお話です。ずいぶん長く伸びたなあ。どれくらい切るの、と聞いたら、30センチくらいやな、とさざりと言っていました。

4月になったら、新しい場所でひとり暮らしを始めることになります。

わたしたち夫婦は、そんな時間を2年ほどお互いが過ごしていた後に結婚しましたので、親のような人生ならば2年後にはまた新しいところへと旅立って行ってくれるのかね。

### ▼半月が見たいかあの人恋しいか

秋とか真冬とかですと満月が見たくなるのですけど、何故か、半月の月で満足なんです。

春だから、っていう理由で片付けてしまう。

### ▼追いついておはよう言いたい春の風

追いつきたい人がいるわけではありませんが、朝の通勤途上も春の温もりのおかげで、気持ち晴れ晴れ。

### ▼おやすみを言い出しかねてまた今宵

年度末で忙しい日が続くから、友だちともなかなかメールの投げ合いっこできないし。ストーブがなくとも冷え込まない部屋は、妙に静かで。人恋しいか。

### ▼恋をして星ふる夜に手紙書き

ほんとうは、異動で遠くに行ってしまう人がいますが、きつと、遠くに行ってしまう。恋をしているわけじゃないけど、遠くに行ったら手紙を書くかな、とか思ってみたり。

### ▼突然に引き潮の干潟を見たくて

海が見たい！

山里に生まれた人の癖のようなものですね。

### ▼別れ道、遮断機こえたらキミの家

### ▼髪切ったキミを追ってく坂の道

坂道と遮断機をそこに据えて、ドラマを考えてしまうのです。

シーンが時々刻々と変わるものではなく、緩い時間の中で、しつとりと考えて滅びてゆくような。結実しない物語。

### ▼袖の中、しまっておきたいキミの息

そういう人が、1人、いたっていいでしょ。

### ▼ジンクスが風上へ誘う沈丁花

進級発表のことを思い出しながら、毎年、此花が咲くときは思い出します。

別記事にも書きましたが、この花の香りは、二十歳のあのときに確実に時間を巻き戻してゆきます。

### ▼石畳容赦なく降るぬるい雨

あの日も沈丁花がいい匂いを漂わせていたなあ。「進級留置」の掲示を確かめるために出かけたんだな。三十数年前か

### ▼大好きと言っても消えてしまう恋

### ▼さみしいと曇る車窓に指で書く

朝の通勤列車には女子高生がいっぱい。おじさんたちは圧倒されています。

大勢が駅でおりて、座席に余裕ができたので、さっきまで立っていた子たちが座ってやっと4人で向かい合わせでお喋りができるわね、って感じです。

1人の子がガラス窓に「さみしい」なんて書いてまして、それをホームを歩いている私が見つけて。

そんなことを書いていた高校生。毎朝会うけど2年生かな。

透けたガラス窓の向こうでニッコリと笑っていました。

#### ▼ヤンキーな三毛猫のよう、女子高生

あの高校生の中に、三毛猫のような子がいるんですよ。

ぜんぜん美人じゃない。

いつもかわいい猫のような服を着て、女子高生に相應しいオシャレをしてる。

#### ▼さようなら、雨が上がって歩き出す

家まで歩く道で雨に降られるのはいややなあ、って思っていました。でも、駅を降りたら、雨雲が切れてくれました。

そういえば、あの人にさようならを言わなかったな。

メールしておこう。

そんな感じかな。

----

#### ▼僕の恋は、もう、そこで終わりにする

生け花は、はさみでチョキッと切りますからね。なんちゅーか、そこで止まるの。大きく息を吸って止めるみたいな。そんな緊張があると私は思う。

#### ▼春雨や泣いて別れた赤い傘

雨の鎌倉。鶴岡八幡宮。

私は卒業式のあくる日に二人で鎌倉散歩に出かけたのです。

3月下旬でした。

冷たい雨の降る日で、赤い傘をさして北鎌倉から歩いたのを覚えています。

#### ▼いいよ、と許されるから、また歩きだせる

いつもいつも、口癖のように言いますが、人は覚悟を決めていたときに許されると、また再び元気を取り戻すことができます。

春は人が苦しむ季節かもしれないけど(自殺者も1番多い月です)

挫けそうな人も、上手に生きてこうね。

#### ▼春雨や少し早めに薪くべる

ふと、「くべる」という言葉を思い出して、調べてみたら「焼べる」と書いてほぼ全国で使われているのかも。

#### ▼雨雲が切れてわたしの二月果つ

二月はそんな複雑な心境で終わってゆく。

いいのだ、それで。

#### ▼石畳容赦なく降るぬるい雨

さあ

私の絵描いた物語の続きを考えよう。

#### ▼卒業の旅行で留守のひな祭り

娘さん、母と一緒にパリ散策。ひな祭りの前の日に帰ってきました。

雛人形は押入れに入ったままです。



## ほんとうはあなたが好きです、メロンパン

---

▼春おぼろ、名前に似合わず激しくて

こう、ひとつ前で書きましたが

そうです。

私は啓蟄を待っていたのです。

そんな日に一日じゅう家に居て

雨降りの静けさを楽しんでいるのです。

きのうのことだったか、

▼はあとマーク贈りたくなる素敵なオレンジ

なんてメモに書いて、衝動的にその人に届けてしまった。

だって、鮮やかなオレンジ色の服がとても素敵でお似合いだったのだ。

しかし、どうやらこの人と私とはぜんぜん波長が違うようで、私の感動の喜びが上手にその人に伝えられなくて。

まあ、だから。

私はイジケテイルノダ。

\*

うふふとしょぼんが交互にやって来る。

春が好き

海が好き

君が好き

イジケテいても始まらない。

\*

そんなことを、銀マドに書いて

▼好きな人、ブルージーンで一度だけ

そういえば、好きだった人、一度もジーンズ姿を見なかったなあ。

いや

一回だけ、ブルージーンズで現れたことがあったか。

▼春風が揺する素敵な人の髪

私がお気に入りに入れてしまう女性たちはみんな髪の短い人たちばかり。

ウランちゃんのような髪型で。

▼パンプスを初めて履いたの、春おぼろ

まあ、私には関係のない話なんです、私はハイヒールが嫌いです。

▼ほんとうはあなたが好きです、メロンパン

おいしいコーヒーとメロンパン。

欲張りに、カレーパンもあつたらいいなあ。

ホットドッグも好きだから、そんなに食べたらあかんなあ。



▼ハナモモを切ってドラマは仕舞いなり

花桃を切って、一輪挿しに活けたいと思ったのだ。  
きょうは、別れの感情を活けてみました、なんて言ってみたいね。

最初、

▼ハナモモを切って別れて以来なり

としていたのですが  
そちらも捨てがたい。

でも、意味が伝わらないだろうけど。

---

2010年3月 6日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 悔む

---

歴史というもの。人の意思とは無関係に流れるままに築きあげられてゆく些細であり偉大なその刻印の中に、わたしたちは限りなく依り所や憩いを探し求めてしまうことがある。

それは迷路を彷徨うに似た行いにも明らかに似ているもので、ひとたびそこに共鳴となって響くものを感じてしまえば、人は魔に操られた媚薬に晒されるように自分を失ってゆき一旦は収縮していつてしまう。しかし、そのあとに人は逞しく甦ってくるのだ。そこに歴史が与えてくれた熱い呪いがあるのかもしれない。

しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道とまどふまで散れ

ひとりの人がさり気なくさらさらと日記に書き残しているひとつの歌があった。それは古今和歌集の歌で、わたしは、ふとしたことでそこに立ち寄って拝読し、すごく得した気分になったので、ちょっとメモした。

古今和歌集なんてあつしには関係ねえものなのですが、桜の花を見上げ、またその散りそめを見つめ、その樹の下で何を感じるかはまことに十人十色なのかもしれないものの、この中古の時代にも桜の咲く時期に、いや、年がら年中人は出会いながら別れてゆくという宿命を背負っていたのだ。

そして、「惜別」という字が物語るように過去へと追いやられてゆくひとつの別れの歴史を、この上なく惜しんだのだ。

人はすべてにおいて、喜怒哀楽の行き着くところは「悔しさ」であるとわたしは考えてきた。まさに、悔むことへの、これも呪いなのかもしれない。

多くを語ってはいけない。別れは静かに送るものなのだ。

とまどふて桜並木の花も見ず

## 動かす

---

[alcoholife](#)のブログのなかで、ヌカガさんがこんなことを書いている。それには「[水の檻](#)」というタイトルがついている。

他者に対して、「こうして欲しい」を伝えることより、「こう思って欲しい」を伝える方が、ずっと難しいんだね、たぶん。」という最後にかくれていた言葉が頭に残った。私がいつも求めてしまうものはそれに近いものな気がする。「こうして欲しい」わけじゃなく「こう思って欲しい」。それは難しいんじゃないくて、伝えたくてできないことだ。誰かの気持ちを自分の思う方向に動かすこと。

この記事は書き出しで

布団横の本棚にあった文庫本を取る。第一章のタイトルは「水を抱く」

と、題名について触れていて、そのことをtwitterに書いているのを見かけて「銀マド」に「水を抱く」という言葉から連想した思いをメモした。

私は  
まさに「水を抱く」ように私は夢の中を彷徨ってゆく。果たしてこれは夢なのではないか、私は夢の中で夢を見ているのではないか、と思いながらも、破滅的に貴方を抱いて息を止めて深く沈もうとした。もう放したくない。熱い願望が身体から弾けるような気がした。  
と書いた。

---

人とは、つまり自分のことで、自分とは即ち己の心のことで、そいつたちが持つ疑問や、或いは欲望や嫉妬、歓びなどなどは、ある種の普遍性を持っているのだ。

彼女が「こう思って欲しい」と書き留める事柄は、人それぞれが胸に手を当てると必ず存在する。

私も或るものを「動か」せずに泣き言ばかりを言っている。  
そんなもの、私の意志じゃどうにもならないことなんだと不貞腐れている。  
だから余計に、ズキンときた。

---

2010年4月 9日（金曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 苛立ちも今なら許せる穀雨かな

---

2,3日前、季節外れの冷え込みから開放された日があった。

雨が降りそうで、まだ降らないという中途半端な朝で、いつもならそういう天候が許せないところだろうが、その温い風がやけに心地よかった。

温い。温いと感じるとわかりやすいかもしれない。

温いは、温くい、と送ることもできるが、私は今、お茶が冷めたときに舌を優しく、人によっては不快に潤すあの温い雨の降り出す直前が気に入ったのだった。

冬の寒さが、少しずつ人々の心を魔法にかけたように春になじんでゆき、やがて忘れられていってしまう。こんな寒い季節など来なくていいのに、と毎朝思っていたほんの一箇月ほど前が嘘のようだ。

そう。

人の憎さも

愛らしさも

時がたてば嘘のように消えていってしまう。

穀雨はその儀式をするための禊の雨かもしれない。

---

2010年4月21日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 私の四月の物語

---

そろそろ終楽章かな。  
なんちゃって。

恋なんて四月の風よシャボン玉

---

2010年4月28日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

### □■巻頭言

例年より2,3日遅くなりましたが、無事に梅雨入りとなりました。

雨降りを決して喜んでいるわけではありませんが、何事もほどほどに自然の恵みを受けなければ、またいつか昔にあったように水不足になって、日本中が枯れてしまっても困ります。ですから、足元を濡らしながら傘を差して坂道を登ってくるのは嫌ですけど、梅雨はそれほど嫌いではないです。

雨が続く鬱陶しい日が続いても、気分を変えれば充分に楽しめます。先日、多気町(旧勢和村)の丹生大師の里の近くのメダカ池へアジサイを見に出かけてみました。時期が少し早かったため、満開にはなっていなかったのですが、降り続く雨のおかげで森の奥から流れ落ちてくるせせらぎは元氣よく流れていました。

綺麗な水がさらさらと流れているのを見ても、昔はそれほど珍しくもなかったし嬉しくもなかったのに、このごろはアラ！とちょっと驚きます。蛍も飛ぶかな、とか想像したりするようになりました。

一の橋二の橋ほたるふぶきけり 黒田杏子

吹雪くように蛍が乱舞する光景は今や非常に珍しいものとなってしまいました。「家の座敷の中まで飛んで来て蚊帳にとまっていたものだ」と子どもを思い出しながら母がよく口にしています。

宮本輝さんの小説に「蛍川」というのがあります。浴衣の裾を夜露に濡らしながら蛍を追う情景がテーマと相まってとても感動的な作品ですが、現代の蛍狩りはもっと商品化されたもののような気がします。「環境」そのものが経済社会のなかで商品化されている時代なのかもしれません。

### □■編集後記

先日、我が家のある空間に放置されていたプラスチックのごみを分別する作業をしました。自堕落な家庭なのでプラスチックのごみは散々な状態で放置されていました。まず、「白いトレイ」と「その他のプラスチック」に分類しました。その他の「プラ」は地区の回収日に袋に入れて出しますが、あまりの多さに腰が抜けそうになるほど驚き、この際、細かく切断破碎しようと思い立ちました。

切断破碎作業をやりながら面白いことがわかってきました。我が家の「プラ」の殆どは、ハンバーグやお弁当などの惣菜を入れているポリエチレン(透明のもの)で、この材質は非常に柔らかいもので非常に切断しやすいが、パッケージの強度を上げるために容器の周囲(ふたと本体のあわせ部分)に折り返し処理や二重化処理がしてあるため捻じ曲げるとか折り曲げるには硬いことに気がつきました。企業の容器設計者のみなさんの苦労を想像しながら、この強化部分を工夫してあらかじめ細く切り取ってしまうと容器の切断が捗ることもわかりました。

もちろん、それ以上に、我が家(あるいは社会には)このような容器がメチャメチャたくさん使われていて、何を買っても容器に入れられて渡されるのだということを再認識しました。

容器の切断破碎を定期的にするのは嫌です。切断機械(シュレッダー)を開発するのが賢いのか、容器が我が家に来ないように工夫するのが賢いのか。人類が繰り返してきた過ちの歴史を振り返るならば難しくないようにも思えたのですが、身近な人と話すとそうでもなさそうです。

## 陽がさしてきた

---



日曜日のJR。  
ひとり、学生さんが乗っているだけ。  
クラブに行くためのジャージを着ていた。

陽がさしてきた。  
きのう、たんまりと降ってきょうも雨かと思ったけれど

雨があがれば、  
濡れてつまらなかったときのことは忘れてしまう。

人生もそんなモノかもしれない。

---

高速道路が無料になってるんだって。  
アタマに来ることだってあるさ。

タダはよくない。たとえ十円でも取らなきゃ。  
その金を、困ってる人に使えばいい。

だったら、十円ではなく、百円で、困ってる人と病んでいる人に分ければいい。

じゃあ、百円じゃなく、二百円で、地球温暖化のストップのために使おう。

それなら、五百円で。

どうして  
そういう話を  
誰もしないのだろうか。

---





## 塵埃秘帖(二十世紀篇)

---

昔の・銀マド>種田山頭火　〈啓蟄号〉

-----

▼山頭火の句集をハローメッセージに入れるために、句集を手にして久々に読み耽りました。無季の句もありますが大ほとんどの句からは季節が連想できます。春の句を読むと春の風が漂うような感じがする。

春潮のテープちぎれてなほも手をふり  
窓あけて窓いっぱい春  
山ふかく落のとうなら咲いてゐる

▼3月になってぼかぼかな日が続きました。寒かった2月が終わって、やっと暖かくなってくる兆しが出てきた。寒さが戻ることはあっても、もう幾つか寝ると確実に花が咲き山が笑う。

▼さあ、走ろうか、っていう実感が出てきますね。桜の開花は例年よりも早いという新聞記事もありました。私の小学校入学の日には4月4日だったと思いますが、校庭の桜が満開でした。大学の入学式は4月1日で、北の丸公園から千鳥が淵の桜が満開だった。

▼まず最初に静かに山茶花の花がぽとりと落ちて、そっと梅や桃が咲く。どこからともなくいい香りが漂う。やがて、落のとうが顔を出し筈が出て桜が咲いて、タラの芽が吹いて…。

▼何だか、嬉しいね。

| 2000-03-04 09:52

| 2005-03-04 18:58 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

昔の・銀マド>梅一輪の暖かさ? 〈雨水篇〉

-----

梅一輪　一輪ほどの暖かさ　嵐雪

▼ちっとも暖かくなりません。痛風の傷みも和らいできたので、車で図書館に出かけました。その途中で5分咲きほどの梅の花を見かけた。窓を開けてみましたけど匂いは届いてこなかった。

▼図書館で、宮本常一の本をパラパラ見てたらあつと言う間に時間が過ぎてしまった。あれも読みたいこれも読みたい…と考えるばかりで、じっくり読まないんです。およその書籍名だけメモをして後で順番に買って家で読むというパターンが多いかな。(高額な本はじっくり通って読みますけど。)

▼最近、彼の著作を入手したくて本屋を回って気が付いたことがあります。それは…多くの本屋さんが岩波書店の本を店頭に並べていないんです。理由は、買い取り品だということらしく、どこで訊ねても注文になりますが…と言う。

▼そこで図書館で、ちょいと見ておこうか…ということになるのですが、いつもながらあれもこれも目移りして道草していて、お目当ての「忘れられた日本人」(岩波文庫)を手取るまでには2時間以上かかった。

▼宮本常一は、四国の梶原を訪ねていまして、それを忘れられた日本人の中の「四国源氏」という項で書いています。梶原は、四国ツーリングライダーにとったら絶対に逃せないところですよ。何か通じるものがあるのだろうか…。

▼色々読み深めていくと、様々な皆さんがレポートの中で絶賛してきた土地に彼の足跡が残っている。九州山地の椎葉村、四国の梶原村、岐阜県の石徹白(いとしろ)、東北の各地…。佐渡、対馬…。

▼そういうことで、私も今年のテーマが見えかけてきました。黄金週間にはまず四国を横切って、瀬戸内海に浮かぶ周防大島を目指すことになりそうです。もちろん、松山で山頭火の一草庵には必ず寄るつもりでいます。

| 2000-02-19 18:04

| 2005-02-19 18:56 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

昔の・銀マド>(ちょっとエッチな…)塵埃秘帖

-----  
乳フェチなあなたに      \_ \_ \_ \_ \_

▼椎名麟三だったか誰だったか…「深夜の酒宴」という小説があったな。いや、深夜の自画像だったか…。いやいや、それは私が友人にあてた手紙の題名だったか…。久しぶりに夜更かしをしています。だから「深夜の…」という題名を思い付いたのです。時々、タイムスタンプが12時を回っている人があるのを見かけて、昨今の私には無縁の時間と思っていたので、少し嬉しい。昨日からうちのんは子どもを連れて実家。私はひとり身です。用があって明日の夜から泊まりで出かけます。

▼今日、吹奏楽団の練習があって音楽室に行って「ひとりには寂しいよー」と話したら、「いいなあー、うらやましいなあー」ってニュアンスの言葉も出てました。感じることは人それぞれです。それで、その音楽室にて発見したもの。吹奏楽団のOBの女の子(都留文化大学の学生してるんですが)が先生に送ってきたメールだって。

- 
- 1 普通乳 (o)(o)
  - 2 でか乳 (o)(o)  
もっとでか乳 (@)(@)
  - 3 寄り乳 (q)(p)
  - 4 ちょっと乳 |+ +|
  - 5 おとこ乳 |. |
  - 6 相撲乳 (. .)
  - 7 よせてあげ乳 (Y)
  - 8 たれ乳 UU
  - 9 もっとたれ乳 VV
  - 10 超デカ乳りん (◎)(◎)
  - 11 ストリッパー乳 (★)(★)
  - 12 ホルスタインチチ (。λ。)
  - 13 だっちゅうの チチ \ \ Y //
- 

▼くだらなすぎて、ちょっと笑える幸せのメール…だって。彼女が新入部員として吹奏楽団に入ってきた頃をハッキリと憶えているのが二重写しになります。ほんと、可愛かった子がもう大人だもんね。やがて私の娘もこのようなメールを友だちとやり取りするようになるのかねえー。

▼深夜の3時に眼が覚めて、部屋にこもってメールを書いている。学生時代は夜更かしだったのを思い出します。夜通し本を読んでいるか、手紙を書いてました。今夜は、若返ったようで…。いや、若かったら星空を見上げに外に出ているかな…。

▼新聞屋さんのバイクが配達を終えて走ってゆきます。やがて東の空が白んでくるのでしょうか。しんと冷えます。もう一回、寝ようかな。

| 2000/02/12 05:18

| 2005-02-12 05:18 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

昔の銀マド>塵埃秘帖 <節分号>

-----  
▼仕事に追われる日々が続きながらパティオの皆さんのメッセージに励まされて春を待っている。誰もがそんなものだろう。春よ来い…を歌う子供も減ったなあ。今日は節分。職場のみんなも急いで帰って行きました。田舎では、まだまだしっかり豆まきをする家庭が多い。子供のころは、本当に鬼がくるかのような顔つきで玄関で豆まきをしたものです。

▼昨日、家族のみんなが食事も終えた時刻に家に帰ったら一枚のハガキが届いていた。このパティオでもお馴染みの八嶋さんからのものでした。彼のハガキはいつも写真がレイアウトしてあるもので、いただくたびに彼のカメラ視点に出会えます。なかなか写真の話をしに出てきてくれませんが、彼の写真には静かに風景を見つめる優しい視線を感じます。人柄が出てるようで素敵です。

▼今回いただいた写真付きハガキも素晴らしい。パティオが絵の出る表紙を持っていたら、このハガキだけを掲載したくなりそうな写真です。大阪駅のホームで4人が並んで撮っている。これって駅員さんが撮ってくれたんだっけかな。記念写真を撮ったあとホームの端から端まで押して行きましたね。

▼多分、八嶋さんもそして私は確実にスリムです。私の場合、今よりも10キロほど痩せていると思うな。他に、あの時のVMAXや切符や北海道を走った旗がレイアウトされています。

▼彼との出会いは、1989年の函館から新大阪へのモトレインでした。通信を始めるより昔の事です。彼もあれから転勤で北海道暮らしが長かったりして、まったくお目にかかれずに10年が過ぎます。私からは写真も送らずに彼の写真ばかりを拝見して、お互いに年齢をとってしまったな…と思って苦笑いをしています。(=^\_^;=)

▼昔に戴いた八嶋さんからの便り(メール)の中にとっても面白い話がありました。出張で名古屋へ出かけて「オリエンタルカレー」を見つけたので買って帰ったという話です。宝物を見つけたような感激がとても嬉しそうに綴られていましたのを憶えています。彼は水産系の大学から食品会社という…電機系から家電会社と同じか…経歴の人だけに、食べる物を見る視線が違うんだなと感動しました。

▼思い出は、いつもどんな時でも素晴らしい。ああ、歓びを共にして北海道から帰ってきた時が懐かしい。でも、もう忘れていることも多いのが寂しい。いや、忘れてもまた行けばいいじゃないか…と多くの人に私は助言し続けてきた。今夜は、自分に激を飛ばしている!

-----

やっぱしねえ  
ひとり旅を続けていると  
自分を見つめる視線が  
ああ間違っていないなあって  
感じる事がありますね  
時にはひとり寂しく  
誰もあてにできない原野のようなところを  
ひたすら走り続けて…  
何が悪いとか  
誰が嫌いだとかいう  
マイナスの意地っぱり根性が消えてゆき  
そこにはやがて  
寂しさを乗り越えた歓びが見えてくる  
そんな感動に出会えた自分を褒めながら  
ひとりごとが続く  
旅人である自分が  
ちっぽけになったり  
大きな人間に思えたりして…  
春を迎えて  
いつか味わった感動を思い出していると  
もう心が騒ぎ出す  
言葉にできないけど  
心が騒いでいるのを伝えたい  
みんなのざわめきも感じたい  
明日は立春です  
感動

昔の銀マド>インフルエンザ <快気祝篇>

-----

▼先週の水曜日に履患して5日目の床にふしています。途中、土曜日の夕刻に数時間だけ親父の三回忌の法要に立ちましたが、それが良くなかったようで高熱がぶり返しました。普段からあまり健康でない自分の身体を思いながら、旅を続けるためにも強靱な身体にならねば…と誓ったのです。

▼その間も中毒のようにパティオのチェックをしましたけど、これってほんと中毒に近いなと感じた。こういう時には投げ棄てる程度の「放任姿勢」が必要ですね。パソコンに向かえばやはり少し熱が出る。仕事だったら実験しながらプログラムと格闘する訳だから身体に良い筈がない。

▼寒いからかな、皆さんのお話があまりアップされてこないのがやけに気になったりして。でも、暫く、休養させて戴きますので枯れない程度に書いてやって下さい。

▼雪が舞うような寒い日がありました。1月23日の折々のうた(朝日新聞)に早川まささんという人の句が取り上げてありました。飯田龍太さんを師と仰いだ人だと言っている。

>> まとめ買いして故郷は雪深き

▼これを読んで「ふるさとの沼の匂いや蛇苺」という句を思い出した。これは飯田龍太さんだったか。このコラムの中には他にも数句引用してある。

>> 繭売って家ひろびろと晩夏光

>> 雪の降る日暮れは人をやさしくす

▼去年、行けなかった黄金崎の不老不死温泉あたりから五能線沿いの鄙びた集落…のようなところを幾つも訪ねて、こんな句はできなくとも、人々の生活に触れるような要素を決して失わない旅をしたいものです。

▼子供のころに見た蚕さんは家の中で特等の部屋をもらってました。今、全国のどのあたりに行けばあの棚で桑を喰う蚕を見れるのだろうか。あれば、探しに行きたい。そんな旅。

▼大寒です。でも、あつと言う間に節分、東大寺のお水取り。梅の香りに誘われて山里をふらふら、桃の香りに誘われて人里をふらふら…。やがて桜の季節になっていきます。梅林の枝打ちした捨て木を処分する焚火に手をあぶらせてもらった去年。今年の準備運動はどのあたりを走ろうかな。ぼんやりと考えています。

| 20000/01/24 17:20

| 2005-01-24 18:43 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

昔の銀マド>師走だぞ一篇(1999年から)

-----

残すところ、簡単に指折り数えるほどで今年も終わりとなりました。様々なことがあった一年でありながら、具体的に甦ってくるのが数少ないんです。記憶力の衰えが大きいのは隠せないけど、やはりその事件を思い起こすだけのトリガを失っていることが多いのではないかとというのが私の感想です。

記憶というのは意外としっかりしておりますので、そのトリガだけがちゃんとかかっているればしっかり思い出せる筈なのです。ところが、何があったのかを思い出せないのは、印象がうすい訳です。

バイクで旅をしても、それがのんびんだらだりとした旅でどうでもいいような旅なら、記憶には何も残らない。ジュースを買ったコンビニのレシートが一枚が出てきただけで、その前後の出来事が思い出せるのですから、どれだけその瞬間に燃えているのか…です。社会問題にしても政治問題にしても、身近じゃなくなりつつある。介護保険にしても401Kにしてもため息ばかりが残って、無関心を装っているのか、本当に無知なのか。私には死際に苦しむのは嫌なので楽に死にたい、いいホスピスを探さねば…なんて言ってます。

さて、皆さん、年の瀬で忙しいと察します。パティオのメッセージを読むのが精一杯の人も多いかも。それが負担になった

ら、それは罪悪です。気楽に付き合ってくださいね。せっかちにレスを書く必要もないし、新しいメッセージに混じって古いレスがあっても大歓迎です。

私が夢見るのは、のんびりできる休日に読み残したメッセージをじっくり読み返して戴いている皆さんの姿です。皆さんの書いておられるメッセージは10年後にも輝いているような、そんなパティオであって欲しいと思っています。

いかがですか？ 皆さんのこの一年での様々なため息でもいいし、思い出でもいい。ちょっとした事件。お笑いなネタでもいいです。この場を借りて、吐き出して、来年の旅の原動力にしませんか。

-----

1999年の銀マドを掘り起こしてきました。

| 1999.12.17 22:10 パティオにアップ

| 2004-12-16 12:22 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

2000年銀マド>秋味 <塵埃秘帖10月19日号>

-----

銀マド>秋味 <塵埃秘帖10月19日号>

| 2000/10/19 23:25

▼メールを時々くださる方が、腹子飯のことを書いていらっしやった。実に食欲をそそる秋の味覚だ。素朴で美味。私が子どもの頃はこのような素朴な味が秋を彩っていた。未知名味です。

▼中学時代には「茸狩り遠足」というのが恒例で、近くの山に学校じゅうで出かけて山を駆けづり回って茸(きのこ)類を採って、野生の中でごった煮料理をするのであった。田舎地方では当たり前の行事で、まったけ等も決して珍しくもなく、その他の茸(きのこ)の方に美味なものが多かったので、価値観のギャップにいまだに悩む。

▼秋味といえばビールである。ちょっと強引だな。私は秋味ビールは少し好み外である。「エビス」などのように、こってりした味付けが主流のようだが、ビール党としてはさっぱりの方が好きだ。

▼秋も深まってくると、少し寂寥感が漂い始める。わーい、名月だ!とはしゃぎ回っている時期が終わって、やがて来る冬を想うから?!

▼「はや夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く」このうたの、どこにも持っていけない、やるせなさのような気持ちを含んだところが途轍もなく好きです。福永武彦の「忘却の河」という小説に出てきて知った歌なんだけど、肝心の小説は、暗い、文学の味のするものだった。これを機会に読み返してみようか。

▼女心は、やがて冷めて寒くなるから、秋の空。男は未練があって熱くなるから春の空。

▼妻が私に、しみじみと語りかけた。お父さん、随分と落ち込だはったようですけど、ツーリングもめげてはったけど、そろそろどこかに行った方がええのんとちがう?という。そういえば、すっかり弱った私ばかりが目立っていた。もうひとりでは走れないのではないかとさえ思えた。妻の語り掛けには、こちらも感動した。

▼バイクに乗ることを生きがいとしてきた奴が、バイクに乗らなくなったら、只の人以下である。

▼私に秋のツーリングの味をしてくれたのは「信州」である。やはり信州に出かけて行きたい。初めて野営をした二十数年前は、三宅島であったが、凄く寒かった。このまま死んでしまうのではないかとさえ思うほど寒かった。

▼今、そういう状況で、自分の真の姿に戻ってみたい衝動と、もう少し未知な旅の姿を求める自分が葛藤している。秋味とは、こういうものを肴に酔いしれる自分には、まだ少し合わないか。もう夢を追いかけるのはやめて、物語りの扉を開けて、舞台に足を踏み出してみるのもいいのかも知れない。

▼訳のわからんことを書くなよ。

「旅立て、オヤジ!」

そんなふう to 子どもが叫ぶ。(笑)

-----  
| 2000.10.19 : Touring.Relief@nifty /  
| 2004-11-04 17:33 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

2000年銀マド>42才最後の日 <誕生日前日号>

-----

銀マド>42才最後の日 <誕生日前日号>

| 2000/10/12 20:39

★塵埃秘帖/誕生日の前の日★

▼いよいよ、42歳の最後の日を迎えた。新しい年齢を迎える前に、この最後の日を乾杯しよう。

▼確実に人生の半分を過ぎていることを確信する。勉強に追われた日々も懐かしい。怠けてばかりの学生生活も。今となつては、親父も逝ってしまったし、感謝の気持ちも苦笑いである。

▼さっき、TVを見ていたら南こうせつとかぐや姫のコンサートの再放送をしてました。次々と歌えてしまう自分が可笑しいが、それを見ているうちのんが違った一面に出会ったようで、新しい私を発見したようだ。中学時代はギターを持って教室でよく、歌ったものだ。

▼スペースシャトルが地球を回っている。名月を横切って飛んで行く…姿でも見れたらいいだろうなあ…と思いながら月を見上げる。

▼満天の星も素敵だけれど、あの淡い色の月の影は、私の心から穢(けが)れた何かを拭い去ってくれる。同じ月を、同じ空の下で見上げている人たち。同じ気持ちの人もあるのだろうな。

▼秋はもの悲しいのですけど、からりとしているので、好きです。

▼人生で一番、愕然としたのはどんな時だっただろうか…。駄目だとわかっていたけど、原級留置きの項目に私の名前があったこと(進級欄に名前がなかったこと)だろうか。いやいや、そんなの、些細なことだった。大事なひとりの女性に結婚を申し込んで断られたことか。京都の夜景を見下ろせる山の上でひとりしくしくと泣いたな。バイクに乗って走り出しても涙が耳に流れたよ。落第しても、友だちは2倍できたし(2学年分)、失恋しても鯉の甘さと辛さを味わえたんだし…。

▼それにしても、いつから私、こんなに酒飲みになったんだろうか。ドラマを見てはひとりで泣き、映画を見ても小説を読んでも泣いてばかりいる。困った、困った。

| 2004-11-04 17:31 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

2000年銀マド>仲秋 <9月中旬号>

-----

銀マド>仲秋 <9月中旬号>

| 2000/09/12 00:08

★仲秋の月か… 哀しいね★

▼立秋から白露までを初秋、白露が過ぎたら仲秋、そして寒露から立冬までが晩秋と呼ぶのだという。9月7日は、白露だったので、月が雲の向こうでまん丸になっている筈であるが、あれも仲秋の月だが、あと30日後に巡ってくるのが名月になる。

▼古代エジプトの人たちは30日の暦を用い、365日で割って余った5日を祈りの日に割り当てたという。NHK出版の四大文明のエジプト篇のどこかに書いてあったと思う。暦という概念が存在しないとき、そこには表記文字も無ければ表音文字も無い。心の中にある凸凹や悲哀は、全て言葉として消えていったのだろう。

▼都心でどれほど月光の情緒が伝わるかどうか、私には想像できませんが、月の明かりというのは、色白の女の艶よりも

神秘的で、何よりも哀しい。

▼古代人は、秋の月をどんな気持ちで見上げたのだろうか。暑い夏の後に来る収穫の秋に祈ることを始めたのは、縄文時代頃かなのだろうか…。考えてみれば、縄文は平和だった。人々が侵略をするための争いもなかったという。争いの跡が発掘資料の中で確認できるのは、弥生を過ぎてから。

▼封建制度の世の中、農耕はまさに奴隷のようだった。収穫した米を献上せねばならないことに理由などなく、怒りと虚脱感で、秋の空を見上げたのであろう。その時も今も、秋の月に変わりはない筈だ。

▼さて、現代人は幸せでそれに満足しているのだろうか。阪神大震災の後に起こった「神戸児童連続殺傷事件」をまとめた文庫(朝日文庫:暗い森)を読んだ。子供達が病んでいるのではなく、社会が侵されている。しかし、何度も書くが科学は解決できないと私は思う。

▼物質文明が十分に満足して、戦後の発展が究極の至福を迎える頃に、人々の心はゆとりを失った。学歴を追い、出世を夢に見てサラリーマンという気楽な稼業を目指した。願いは叶ったようであるが、ゆとりというものを失うのである。

▼月を見上げるだけで様々な思いが浮かんでくる。哀しい別れも甦る。こればかりはどれだけお酒の力を借りても脳裏にくっきりと出てきて消えてくれない。わかっていながら、グラスに氷を放り込む。

| 2000.09.11

| 2004-11-04 17:29 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

銀マド>秋を探しに…〔10月初旬号〕

| 1999/10/02 09:57

夕焼け雲うつくしければ人の恋しき  
もりもりもりあがる雲へ歩む

久しぶりに山頭火の句集に手を伸ばしてみた。秋のうたを声に出して読んでみたくなった。昭和15年10月11日に彼は一草庵(松山市)で逝った。最期のころにこの住まいでよんだのがこれらの句だ。

そういえば、芭蕉も10月(旧暦)に逝ったなあ。そんなことを連想しながら、熱いコーヒーを久しぶりに入れてみた。キリマンの酸味のきいた苦みをゆっくり味わう。

(想いが続く)

苦い…

愛…

情熱…

散リユクタベ(銀色夏生)という詩集が山頭火の句集の隣にある。

僕たちは弱いけど  
今は力はないけど  
いつかきっと  
すぐしあわせになれるよ  
いつかきっとね  
だから  
僕の手を強くにぎっていて

そのまた隣に、中島みゆきの詩集がある。

何もあの人だけが  
世界じゅうで一番やさしい人だと  
限るわけじゃあるまいし…

明日も今日も留守なんて  
見えすぐ手口使われるほど

嫌われたらしょうがない  
笑ってあばよと気取ってみるさ

ゲーテ「思い出」から

たがいに胸せまる思い出  
よりそったあの時をまだ覚えていますか？

\*\*\*

秋という季節は、まったく不思議な季節だと  
思いませんか？ じっと物思いに耽っている  
だけで旅に出たくなる。

誕生日

「秋を走る」そういう話でお祝いしてね。  
とっておきのグラスを出してきて、久しぶりにオン・ザ・ロックで飲もうかな。

| 1999.10.02

| 2004-10-28 09:48 | 塵埃秘帖(2000年以前)

---

小さな旅

ホッとする時間を求めて… ----- 1999年10月29日

松阪城跡の「城のある街にて」の石碑がある石垣から赤いポストを見降ろしたあと、天守閣の方に歩いたら掘坂山の上の空が夕焼けで赤く染まっていた。秋の夕暮れは、静かに暮れてゆく。御城番屋敷の石畳を歩いていたら旅に出たくなってくる。日頃から忙しさに追われ自分をホッとさせる間もない人も大勢あるだろう。社会には様々な軋轢、ストレスが溢れている。最近では家庭にも及んでいるとか。誰にも束縛されず、自由に大空を飛ぶように「小さな旅」に出てみませんか？ どうして？また急に…って誰かに訊ねられたら「青春を探しに…」って返事をしてあげばいい。

中仙道…。不思議なほどにこの歴史街道にはなつかしさが漂っている。子どもの頃に見た風景があちらこちらに残っている。朝露に濡れて輝くはさにかけた稲。軒先に積まれた薪。あさげの支度をする家の煙突の煙。ある年の秋の早朝、時雨でいた空に太陽が戻ってきた瞬間に私は馬竈峠にいた。木曾は山の中である。島崎藤村は夜明け前でこのように書き出した。あの頃も山深かったが、今でも山の中である。

街道の坂に熟れ柿火を点す 誓子

庭にたわわに実を結ぶ柿の実を取り合いして食べあう子どもの姿も失われつつある。いつの日にか私たちも心の依り処であるこんな原風景(原点)を失ってしまうのではないか。そんなことを考えながら旧街道を散策している。「送られつ送りつ果ては木曾の秋」と芭蕉は49才の秋に、漂泊の俳人・種田山頭火は52才の春に俳人井月の参墓を思い立ち「おちつけないふとおもたく寝る」と木曾の宿で詠んでいる。

一句も浮かばない私がそこにいた。土産物屋の奥さんと峠道の話をしていたら「十曲峠」と書いて「じっきょく」と読むのだと教えてくださった。いにしえの時代からの旅人がその疲れた翼を休め佇んだ坂道を今もなお残している。車両の入れない石畳を歩く人の影は少ない。苔の蒸した石碑に「これより北・木曾路」と彫り込んである。美濃から木曾へ。日本の旅人は西洋と違って、かなり近代まで徒歩で旅をした。シンプルに「木曾路」と刻まれているだけの道しるべだが、惹きつけられるのは私だけだろうか。何もない所に佇んでいるだけがいい。

すっかり青空が戻っているけど、谷には霧が立ちこめていた。土産物屋の奥さんが美味しい「栗きんとん」の老舗を教えて下さった。「すや」という店は宿場町などの観光土産物屋には卸しておらず本店を訪ねるしかなかった。そこで中津川の市街まで下りて買うことにする。さすがに季節限定で、秋だけしか入手できないという。いや、昔は何でもその季節にしかなかったのだから、現代人の錯誤を修正するために旅に出たようなものか。あれこれ講釈を考えながらお目当てのものを購入し、木曾の御岳山と誰もが歌う大山塊の麓の村を目指した。開田村で蕎麦を喰い、濁河で湯に浸かろうというのであった。(蕎麦話は機会があればいつかしましょう。)

栗きんとんを手土産に家に帰った後、家族の味の評判は素晴らしく良かったことを付け加えておきます。



11月初旬号 1999/11/02 22:00

すっかり寒い。

吐息が白くなり始めるのが7℃、落ち葉が落下する速度が50～150cm／秒だといいます。永年、数字と付き合いをすることを専門にしていたせいか、こういう数字にロマンを感じます。事実がそうなのかには少し疑わしさを感じますが、ロマンというのはそういうのを抜きにして味わいたいと思うのです。

寒いので、ウイスキー党の私も今日はホットのお湯割りを飲んでみました。冬が間近なのを感じます。冬でもビールを飲みます。ビールを一杯飲んでからウイスキーを戴きます。ほろ酔いの方がメッセージがうまく書ける？ 酔っぱらうと多弁になると学生時代の友人が、よく言いました。おしゃべりということですね。

塵埃秘帖、1日遅れてしまったなー。

つい先日のメッセージで、大型バイクに乗るのは見栄ですぞ…なんて書いてしまった。確かに見栄です。これは譲りませんが、バイク乗りはこの見栄を大事にしなくてはならないのだ！ということを書かなかった。この塵埃秘帖を読んで下さっているかどうかは不明ですが、ぜひとも、素晴らしいツーリングを実現して欲しい。

まだまだ自分の世界なんて狭いですよ。でっかいバイクでもっと遠くへ冒険してはどうでしょう。ぶいぶい飛ばして(法定速度は守ろう)東北を走ってみてはどうですか。わんこそば、稲庭うどんを食べるためだけに情熱を注ぐような旅。それをやってから、バイクの買い換えを考えても惜しくないかも。(伝わったかなー)皆さん、情熱をアツク、語って下さい。

これを書いている横で子どもが私の本棚の本をあさっている。昨日、部屋の模様替えをして、司馬さんの本や他のお気に入りを手が届きやすいところに集めたからか、「竜馬がゆく」を手にとってソファに座った。そのあとは「平家物語」。何だかシナリオに書いたみたい。私の自慢！の書斎に居座ってくれるようになるなら嬉しいな。

宮本輝の「血脈の火」(流転の海、第三部)を読み終えました。「錦繡」を読み始めました。「錦繡」(新潮文庫)の最初の5ページ。ぜひとも、読んでみてください。立ち読みでも可能でしょ。私もこんな再会をしたいいいい…。

1999.11.02

## 塵埃秘帖2nd

---

新・塵埃秘帖へ移行する前の「塵埃秘帖2nd」をここに残します。

(「銀マド」ブログ記事から)

---

塵埃秘帖は、ここでいったん終了し、続きを「新・塵埃秘帖」として「Walk Do'nt Run」において継続します。

ありがとうございました。

| 2005-01-05 23:00 | 塵埃秘帖(2nd)

---

銀マド> 素敵なブログ 小寒号

小寒の星も夜空で震えたり (ねこさん作)

車が信号で止まったので窓の外を見上げたら名前を知らない星座がくっきりと見える。ああ、ココは山の中なんだなって感じました。滑走路のような国道が何キロも直線で続く。

ほんまに冬はよく瞬くわ、お星さま。古代の人はこんな神秘的なものを見上げて暮らしていたんだね。信仰もそれほど明確に無かったころ、人々は自分の心と対峙して暮らしていた。争いもなく闘いもなく軋轢もなく。

きょうは小寒。

ぶるっと寒い朝だった。でも凍らないから私の町は過ごしやすい。

明日はもっと寒いそうです。

三日間、PCの前で過ごしたので頭痛が引かなくなってしまった、ピップエレキ板を4つも貼っています。

で、その間にあれこれとブログを読んでいて、素敵な人に会ったよ。。

いつまでも転んでいるといつまでもそのまま転んで暮らしたくなる 山崎方代  
いいですね。

cf:小寒の星も夜空で震えたり

流れ星を見つけようと空を見上げたのはつい先日のことだ。

小寒。きょうも素晴らしい星空だった。

【塵埃秘帖】参照

| 2005-01-05 22:27 | 塵埃秘帖(2nd)

---

銀マド> 忘年会 大雪篇

風が冷たくなりました。

塵埃秘帖をすっかり忘れて忘年会に行っていました。

あの日の日記からトラックバックを貼っておきますので、そちらをどうぞ。

| 2004-12-06 17:23 | 塵埃秘帖(2nd)

---

みんなく

アラビアンナイト大博覧会。

高速道路を走って、けっこうな金額もかかるのですが

久々に国立民族学博物館に行ってきました。

娘にはそれなりにいい刺激になったようです

やっぱし、アラビアンナイト読むしかない。

| 2004-11-07 20:37 | 塵埃秘帖(2nd)

---

#### 春のKLE

写真をやっと現像しましたということは日記に書いた。

それがこちらの写真です。

今は元気になってます。



#### 深まる秋

落ち着いた静かな街を訪ねたいものです。

| 2004-10-30 09:18 | 塵埃秘帖(2nd)

---

#### 塵埃秘帖

今まで「落書き」と書いていたけど、「塵埃秘帖」とします。

HPに書いていたのはこの時期を持って終了。

これからはこちらに書きます。

監視室の裏窓も同時に保留とします。

マイペースで書きますので、時々覗いてやってください。

| 2004-10-27 22:06 | 塵埃秘帖(2nd)

---

#### 寂寥感

帰って来るときの写真ができましたのでアップしておきます。



| 2004-10-25 22:08 | 塵埃秘帖(2nd)

---

本屋をぶらつく

エイジ: 重松清  
蛇を踏む: 川上弘美  
を買って帰った。

読書系のハローメッセージを変更した。

さあ、読もうか。

| 2004-10-10 18:01 | 塵埃秘帖(2nd)

---

嬉しいこと

嬉しいことがあると隠せない  
でも  
それを聴いてくれる人が  
今は  
いないのよ

| 2004-09-18 21:45 | 塵埃秘帖(2nd)

---

銀色夏生 「散リユクタベ」

eデモ読書系に、銀色夏生の「散リユクタベ」を書いてみたが、ありゃあ、どうだろうか。相応しくなかったかね。

| 2004-09-16 10:46 | 塵埃秘帖(2nd)

---

いとも簡単に

いとも簡単に  
カワイコちゃんに惚れてしまう

オマエの悪い癖よ  
何度、失敗したら気が済むのよ

天国と地獄は知っているはずなのに  
いつまでたっても愚かよねえ

| 2004-09-02 23:35 | 塵埃秘帖(2nd)

---

あの晩

あの晩  
私はたいそう酒を飲みすぎた。

あの子に強引に抱きついて  
衣類も剥ぎ取って、  
からだじゅうを嘗め回して

それでも放さないと言って、わめき散らした・・・

そんな記憶が蘇えてきた。

いや、あれは夢だったかもしれない・・・

| 2004-08-18 22:46 | 塵埃秘帖 (2nd)

---

本を読む女(林真理子)を読み終わった

林真理子。

日記にもかいたけど、  
京都からの帰りに、「本を読む女」を読み終わった。

いいじゃない。  
あの、重苦しいペンタッチ。  
文学ですね、彼女。

※「本を読む女」はNHKのドラマでもやったようですね。  
そちらのHPも見ました。  
ソレを読む限りでは、私はやっぱり原作がいいな。

----

2004年8月15日(日曜日) 日記から

林真理子さんは読んだことがなかった。  
なかなかしつかりした文章で始まったので、この作品はずるずると読み始めています。

養老猛の「スルメを見て イカがわかるか」  
松本清張の「黒の福音」  
を同時に読み進んでいるのでどれが最初に読み終わられるかは不明です。

けど、  
林真理子は、なかなか、林扶美子の放浪記のようなタッチで、直木賞作品もぜひ、この後には読んでみようと思っています。  
さて、明日は大文字。

| 2004-08-18 12:29 | 塵埃秘帖 (2nd)

---

静かなお盆の日々

ブログタイトルを「初恋は・・・」として  
カテゴリに「鶴さん」を持ってきた。

入れ替えちゃったってわけ。

静かなお盆の日々。

明日は大文字。  
おうちの屋上から、鳥居と東山の「大」が見えるの。  
嵐電のコトコトという音を聞きながら、ビールを飲もう！

落書きをしよう

昔なら、大学ノートの隅っこに、  
万年筆で走り書きをしたような  
そんな些細なメモでも書くか。

あるとき、そんなメモをノートの隅っこに見つけても  
ちぎって棄ててしまえない  
なあに  
何にも大事なことなど書いてないのですけど、ね。

現代は、万年筆で紙には書かない落書き・・・  
ちょっと寂しい気もするな。

夢を食べる虫・幸せを追う虫

未知なるものに好奇心を向けて、様々な方法によってこの欲求を満たそうとしてきた。そんな気持ちを殆どの人は、もともと持っているのではないだろうか。

山の向こうには何があるのかと、日没になると母親に尋ねた子どもの頃の方が、今よりも遥かに私は、学者だったようだ。

子ども心を棄てきれずに「夢を追ひ幸せを食べる虫」(自称)である私は、前にある未知なるものを見つめられるよくきく眼と、それを輝かせるに足るだけの涙を、今年もまた追いつづけることになるだろう。

〔1983年新年決意文から〕

## やがてすべては遺言に

---

(14日)恋愛かもしれないし遺言かもしれない。遺言。伝言。恋文。おぼえがき。うらみ、脅迫、未練、諦め。| 先日そう書いた。近ごろ、書くことそのものがすべて遺言のような気がしてくる。恋を諦めると未練に戻りそれが脅迫や恨みになってやがて遺言になってゆくのだ。

---

2010年7月16日(金曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 廊下

---



廊下と打って老化と出て苦が笑い

----

廊下の写真がケータイの中に残っている。

私はこの廊下を見て、どういったところに魅力を感じたのだろうか。じっと収束してゆく廊下の突き当りを捉えて、時間との対比を思い浮かべたのだろうか。

それとも、異空間から忍び寄るような白い光に、急激な時間の変化とそのあとの刹那的な静けさに美しさを見たのか。

廊下は、静かにそこに続いていた。  
どこへ行くのだろうか。

教室には人影もなかった。  
春のある一日のことだった。

(思いの続きは、またそのうち)



## きょうの夕焼け悲しいほどに綺麗で

---

〔19日〕

きょうの夕焼け悲しいほどに綺麗で



夕焼けがとても美しく、真っ赤に西の空を染めていたの。

それは、19日の日暮れのことだった。

車から降りて、二人で空を見上げた。

きれいやね、と私が言うと

悲しくなるから嫌やわ、とうちのんが言う。

悲しいか。なるほどね。

散々悲しい思いをしてきたの、まだ悲しいか。



空の赤み。

光学的には、光の3原色のそれぞれの明るさを、R、G、Bとして表しますと

分母=R+G+B、分子=R、とした  $r=R/(R+G+B)$  を算出すると、これを「赤み」といいます。



夕焼けが人の心を悲しませながら、空じゅうに赤みが広がってゆく。

地球の丸さを考えれば、まことに普通の自然現象で、高層の雲は、波長の短い赤みの成分だけを戴きながら、東の空へと移動してゆく。

反対夕焼けという。

もう散々悲しい思いをしたのだから、物理の教科書のことはいったん忘れて、赤い空が消えてゆくのを愉めばよかったのに。

月が東で。

半月へと近づいていることも気づかずに、そそくさと家の中に入ってしまった。

私は自室で、窓枠にはまった半月をみた。

---

2010年7月21日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 白露も過ぎて

---

白露、ということで少し昔を回想したら、なんだか苦々しい思い出の作文が出てきた。

[あらし去り白露がきゅんとすまし顔](#) ねこ作

先日から、書きかけていた残暑見舞いを兼ねた巻頭言の下書きを貼っておこう。(改訂のことあり)

---

残暑お見舞い申し上げます。

今年の夏は記録的な暑さということもあり、ビールなどの「のどごし」を刺激する飲みものがたくさん売れたそうです。

武田泰淳の奥さんの武田百合子著「富士日記」(中央公論新社)を読むと、泰淳はいつもビールを飲んでいます。

「かんビールをポンとぬいて…」と泰淳がねだる様子が昭和51年9月の日記にも書かれ、この月を最後に日記は終わり、泰淳は10月5日に胃がんと肝臓がんで逝ってしまいます。

富士日記には、家計簿的な日常も書かれていて、昭和39年ころから泰淳が亡くなる昭和51年までの様子や、そのころの人々の暮らしが随所に出てきます。

昭和39年のころは大卒初任給が2万円あまりの時代でした。武田泰淳ほどの人物でありながら、メザシであるとかもやしのあえ物などという非常に質素な暮らしをしていることも伺えます。

およそ10倍になった現代、豊かさとその満足度を環境的な視点で振り返るだけでも面白く読めます。

(断筆)

---

2010年9月10日(金曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 信頼というもの

---

信頼とは何だろうということを考える。そのきっかけは、不調が続くバイクの話を読んでいた人の「もっと信頼できる店に頼ってみては」というアドバイスの言葉であり、あるいはさらに大きく私を揺り動かしたのは三十年来の友人の身内に起こっている不測の出来事に拠るものだった。

信頼という簡単な言葉であっても、ふとしたきっかけで考え続け、深みを探れば果てしなくそこに潜んだ哲理が浮かび上がる。

友人の身内は、危篤が続く状況に追いやられている。意識が戻ることも無く生き返ることもできないかもしれない。しかも、本来ならば近くに住んで居るはずなのに、仕事の事情で飛行機を使っても8時間以上掛かるところにいて応答のあるうちに会えなかったという。年齢的にもまだまだ20年は早いと思える。様々な面で運に背かれた形になる。信頼して、順調な軌道の上を走っていると思っていたのだ。ここにも信頼という言葉がある。そして、信頼とは人物を信じる状況を指すだけでなく、あらゆる状態を見守っている自分の心の形を表すこともあるのだ。

何をどういう形で信じればいいのか。この廃れきった世の中で信じるものなど無くても銭金があれば生きて行けるとでも言うのか。信じられるものは神のみなのか。いや、神など信じられないのか。

\*

私たちは信じるということを数限りない対象において様々な形で捉えている。それは、物理的にも心理的にも、また行動科学や精神科学が及ぶような分野においても、あてはめて考えている。

与えられた既得権のように厚かましく手中に持つこともあれば、感謝に満ちた信用もある。善し悪しなどは無く、ひとつの状態を表現するものとも考えられる。

それを物理現象と考えるなら、エネルギーは質量と速度が生み出すのだから、信頼、あるいは信頼関係というのは、そのものの思いの深さと情熱度合いということになってくるのだろうか。

しかし、そこには、これまで私たちが生きてきたこと、生かされてきたことへの畏敬が含まれていない。

まっすぐ跳んでゆくボールは突然曲がったりはしない。路線バスも定めれていない交差点で曲がったりはしない。

そうなると、どうやら、曲がらないと信じることは実は信頼とは呼べず、予期せぬときに何かの時点で曲がるかもしれないという事実を見詰め合うこと、またはそういう危機を共有すること、向き合うことが信頼なのではないかとさえ思えてくる。

かといって、危機管理などという安直な言葉で片付けられると腹が立つ。もっと心の奥の襞の中まで沁みこんだ感情的なものが「信頼」なのだ。

神は幸せというものも齎してくれるが、罰という裁きも可能だ。

いまや、信頼という言葉自体が風に晒された死体のように、無表情に残されている。

信じることは信じられることだ。そこには何の合理性も実益もないし、科学も哲学も無い。

信頼という言葉が深いところに秘めている重要な意味を見失った現代人たち。

そういう人たちが溢れかえった空間(または時間空間)を私は彷徨っているのだ。

----

(これも遺書のなかに綴じ込もう)

## 信頼というもの その2

---

(ゴミだなと嘆きながらここに書く)

信頼というもの。

……というわけの分からない私の呟きにたくさんのコメントを戴き感謝します。

答えの無い問いかけに答えるのは難しく、そこところを上手にかわしてひと言を残してゆくというのは、人生を上手に生きることに通じると思います。

みなさんのもうひとつの姿を見るような思いです。

さて、きのうのお話の続きを今朝から書いておりました。話は書物のことに無理やり急旋回します。

「それよりも一冊の本と出会って、どれだけ心を動かされるのかってことが大事なんじゃ…」

八木沢里志の「桃子さんの帰還」(森崎書店の日々に収録)のなかでこんなことを書いていて、冷めた言い方をすれば何を今更…ということになるが、そんなことは分かっているが作者はさり気なく書いたのだろうと想像すると、改めて作品の清しさが伝わってくる。

信頼という重々しい言葉を投げかけておきながら答えも出さずに、というか答えも出せずに放り出した私の心理までを理解してくれる人など、たぶん誰も居ないだろうが、私は「信じる」ということと「頼る」ということを、発生学的に考察したかったのだ。

どうしても二つに分けて考えねばならない。複合の言葉なのだから、ひとつずつ紐解くことにする。

信じるといことも頼るということも、どちらも親の言いつけでできるようなことではない。つまり、その人自身の心の奥底に存在する本心のような部分が無意識に決定するものだということだ。

もうひとつ、その結果が必ずしも正解であったり、報われる結果を導くというようなハッピーエンドなストーリーでもないというのも現実だ。

信じることはある意味では信仰のような側面を持ち、人を信じることは己の誠に通じるともいえる。「頼る」「頼られる」というような相対する言葉にもそれらが当てはまる。

さらに頼られることの奥深くには、その人物の(またはその出来事の)重みが生きてくる。人に重みがあれば、そこには尊敬の念が返ってくるし、行いであれば実行力とバックアップが対になって勢いを生む。

仁義礼智忠信孝悌。

これは、南総里見八犬伝で皆さんもよくご存知な語句だが、やはり人はそこに戻ってくるのだ。

どの漢字にも棄てがたいものがある。

私たちは、これまでにこの日記で書き綴ってきたのだが、「豊かさや満足度」という現代人の骨の髄まで溶かしてしまった麻薬より恐ろしいものを、もう一度見直さねばならない。

この八つの文字の全てを、失いかけている。

(今夜も纏まることなく夜が更けるか。御免)

結局、何が言いたいのかワカラン。＞自分

人の純真さが薄れてきていることを嘆いたのかもしれない。

自分のことしか考えない社会に怒りを持っているのかもしれない。

悪が悪として裁かれないことや戒められないことに怒っているのかもしれない。

世の中が、間違った方向に多数決で進んでゆくことに怒りを持っているのだろうか。

まあ、いいや。もうすぐ死ぬ時期が来るし。それが諦めの言葉なのだが。

---

2010年9月14日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 美性を失う

---

ニンゲンは賢くなって、万能と思いこんでいるようなところがあるけど、ほんとうは儚いものだということを、恋をする人こそが一番よく知っているのではないだろうか。

数学と物理の世界で暮らしていると、数字がひとつ違ってもそれは別なもの。ましてコンピューターの世界では、一生めぐり合うことのない分厚い境界を隔てた情報群になります。

人間は、知性を持って、合理性を追求して、どんどんと便利で楽しい世界を作るのだけど、恋の世界はどうだろう。どんどんと退化して行ってしまうところもあるかもしれない。

運命だとか宿命だとか、  
結婚だとか恋愛だとか  
幸せだとか  
憎しみとか

様々なモノに理屈もあろうけど。

私は  
ひと目会った瞬間に好きになったり  
その瞬間に抱きしめたり  
うしろ姿にドキドキしたり  
追いかけたり  
声を掛けたり

見つめたり

そういう感性が、  
美性を失ってしまったことに

現代の最悪の荒廃を感じるなあ。

私には好きな人がたくさんいて  
いつも、誰かにドキドキさせられています。

恋をするためには  
街を歩いて  
夕焼けを眺めて  
時には月を見上げて  
私を時には思い出して  
気持ちを高ぶらせておいてください。

| 2009-09-03 21:31 | 日記系セクション |

## 飛行機雲

---

その飛行機雲が、茜色に染まっている。

さらにクロスするように燃えるように真っ赤なジェット機が高度を下げながら中部国際空港のほうに向かってゆく。

いいもの見たな。得したなって思う日ってのは、何でも綺麗に見える。

干潮で大きく干潟が広がっている河口を渡る橋を越えるときも、薄暗い海の向こうに反対夕焼けが出現していて、ありゃって思ったりするのです。海と空の境が薄く消えてゆくのです。

-----

ある人の日記に飛行機雲のことが書いてあって、ご挨拶代わりにコメントを書いたのでココに控えておこう。

思いつきでさらさらと書いたのだから、改訂したいところだが、そのままにとどめておきます。

---

| 2005-05-10 20:15 | 日記系セレクション

---

2010年9月15日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 音楽篇 (1)-(6)

---

音楽篇(1) — 北山修 —

---

「戦争を知らない子どもたち」という曲を、音楽室のグランドピアノの脇でギターを弾きながら歌った。それがフォークとの出会いであり、私が音楽の世界に入るきっかけでした。

吹奏楽部→ビックバンドジャズ→コンボ→ビックバンド→吹奏楽団→ビックバンド…

-----  
その始まりは、北山修だった。

♪海は嫌いだ悲しくなる

とか

♪あなたに捧げた 言葉の中に  
| 嘘はないけど 何か気になる  
| こんな気持ちを 違うあなたに  
| ほのかに寄せた 思い出があるの  
(「初恋の人に似ている」から)

とか

そうそう、

♪人は誰もただひとり 旅に出て  
| 人は誰も故郷を 振り返る  
| ちょっぴり淋しくて 振り返っても  
| そこにはただ風が吹いているだけ

これって、音楽の教科書に載ってるそうですね。  
驚きです。

---  
ちょっと、「音楽篇」ということで、思い出を綴ってみるか。

(続)

| 2005-12-06 18:41 | 日記系セクション

---

音楽篇(2) — 北山修 —

---

いったい、どんな感性を持っているのだろうか。  
彼の目は、街をゆく人の、素朴な動きやその心の中を、神様のように見抜いているようでした。

吉田拓郎の、

♪私はきょうまで生きてきました……  
も唄いました。

けれども、もうひとりの私は、詩人北山の詩を静かに読みました。

♪愛とあなたのために わたしは  
| この世に生きているの わたしは



(愛とあなたのために)

.....

♪天使が恋を覚えたら  
| ただの女になるという

(天使が恋を覚えたら)

.....

♪ろうそくの ほのおがゆれるよ  
| この火が消えるまで あなたとお話したいの  
(ろうそくのほのお)

オトナになりたい。  
でも、それには時間がかかる。

嫌いな言葉は、「悩む」  
好きな言葉は、「口ずさむ」

好きな人ができたら「好きです」と伝え、悲しいことがあったらそのまま凹む。

北山修が教えてくれたちょっとオトナの恋に辿り着くにはもう少しの時間が必要だった。  
そんな年ごろに、歌にまみれ、詩にまみれ、受験時代を送ったのです。

♪あの時 同じ花を見て  
| 美しいと言った二人の  
| 心と心が 今はもう通わない  
(あの素晴らしい愛をもう一度)

私には未知の世界のドラマだった。

ほかに頭をよぎった歌など.....  
-----

高石ともやの「受験生ブルース」  
五つの赤い風船の「遠い世界に」  
赤い鳥「翼を下さい」  
チューリップ「心の旅」

(たぶん続く)

| 2005-12-07 10:08 | 日記系セクション

---

音楽篇(3) — モーツァルト —

---

アイネ・クライネ・ナハトムジークとの出会いは衝撃的だった。

そのころ、ちょうど父に頼んで買ってもらったステレオプレーヤー(安物品だった)にどっぷり浸かっていて、毎日、モーツァルトを聴いたものだ。  
レコードを擦り切れるほど聴いたのはこの曲くらいだろう。

そういう訳で、高校時代は、クラシック音楽にどっぷりだったな。モーツァルトの交響曲40番、41番の良さをアツク語り合った友もいた。

クラブは、吹奏楽部と音楽鑑賞部でした。吹奏楽部で「ワシントン広場の夜は更けて」をやりながら、一方でベートーベンと出会い、第九に痺れたのもこのころだった。

楽器を吹くことから、次第にジャズに傾き始め、ベートーベンとの混在の中で「モーツァルトは綺麗すぎて嫌いだ」と言うようになってゆく。(また戻ってきますので心配なく)

大学に行ったら音楽関連のクラブに入ろうと思っていたもんな。グリークラブもいいなあとか、気が多かったのも事実だった

が。

今はチャイコフスキーやほかにもたくさん好きな人がいますが、高校時代は、前期がモーツァルト、卒業から大学時代はベートーベンひと筋でした。

(たぶん続く)

| 2005-12-15 23:03 | 日記系セクション

---

## 音楽篇(4) — 阿久悠 —

---

私は阿久悠さんの大ファンです。

大学受験の下見と称して東京へ無計画に出かけたのは高3の秋だったな。広島カープが阪急ブレーブスと日本シリーズをしていたような記憶がある。早稲田祭とかに行ったんですが、記憶が途切れ途切れだ。クラスメイト4人で行きました。

名古屋から新幹線に乗ったら、A、B、C席の友人たちと離されて座ったD席でしたが、ふと見ると隣の席に同年代の女性が…。そのころは女の子に声を掛けるというようなことなど、一切できないウブな私でしたが、その子と少し話をしました。

名古屋市にある南山大学の付属の高校ってのがあるのかどうか知らないけれど、どうやらその3年生らしく、彼女も来年4月から東京で女子大生になるために奮闘中だという。長い髪の上品で可愛い子でした。

よーし。これはチャンス。4月になったら「プロポーズ大作戦」(※)に出ようじゃないか。

(※番組名は、ご存知の方は少ないと思います)

まあ、そのときの隣の席の女の子が当時のアイドル「岩崎宏美」と横顔の雰囲気がそっくりでしたので、岩崎宏美のファンでもあります。

阿久悠作品ですと、この年は、

○ 北の宿から

がヒットした年でして、レコード大賞もとったのかな。

岩崎宏美ファンとしましては(単純だな)、僕も東京に行って華やかな学生生活を送るのだと、日夜、受験勉強に励んでいたのです。

○ 二重奏(デュエット)

○ ロマンس

○ センチメンタル

○ ファンタジー

○ 未来

○ ドリーム

すべて、作曲 筒美京平

阿久悠さんのファンでもありますが、さらに京平さんの大ファンでもありました。

これから数年間の歌謡曲については、任せてください。大好きです。

大学受験は、早稲田にも理科大にもふられて、東村山のわびしい寮生活に入ることになり、「プロポーズ大作戦」への夢は儚く消えてしまったのです。(昭和50年から51年)

| 2005-12-31 19:00 | 日記系セクション

---

## 音楽篇(5) — 青春 —

---

大晦日に音楽篇(4)を書いてから、ひと月以上が過ぎる。

忘れていたわけではない。次から次へと甦る「あのこと」を纏めきれないのです。アキラメタ。

- > 君は何を今待ち続けるの
- > 街の片隅でひざを抱えて
- > 届かないあの手紙 別れた夢

青い三角定規がそんな歌をうたっていたころがあった。  
その歌の本当の意味など分からないまま、ギターを抱き口ずさんだ時代があった。

あそこ、人生最大の壁と思っていた受験という試練に挑む日々の合間に、同じく競い合いながらも心を本当に許しあえる友がいた。

(※ あんなの、人生において何の壁でもなかったということにはずっと後になって気づくのです…)

中村雅俊が青春ドラマの主演を演じ、そんな世界へともう一歩で自分たちも辿り着くのだ、という夢を持ちつづけた。

- > 夢の坂道は木の葉もようの石畳
- > まばゆく白い長い壁
- > 足跡も影も残さないで
- > たどりつけない山の中へ
- > 続いているものなのです

下駄を鳴らして街を歩き、気分転換と言って多摩川上水のほとりの並木道や小平霊園を駆け回った。南武線の鉄塔の向こうに夕日が沈むのを眺めては、早稲田の杜にそびえる理工学部の研究棟に未来を馳せた。

1年間の萩山寮の暮らしを終えて江古田にある能生館という下宿に、文学部に進んだ島田君の紹介で私は転がり込んだ。法学部の先輩が4人、商学部の先輩が1人という顔ぶれで、そのみなさんと一緒に(私だけが)のほほんな学生生活を始めたのだった。

- > 青春時代が夢なんて
- > 後からほのぼの思うもの
- > 青春時代の真ん中は
- > 道に迷っているばかり

阿久悠は、こんな名言を何処でどうやって思いつくのだろう。

青春という言葉は、あのころは嫌いだった。

フォークソング、ジャズ、クラシックという音楽ジャンルを行ったり来たりしながら、筒美京平という作曲家に染まってゆく。

70年代の歌謡曲と筒美京平に明け暮れて、朝から晩まで部屋では音楽がなり続けているという大学時代を過ごします。

事情があって能生館を2年で出ることになるのですが、江古田を気に入っていた私はこの場所に住み続け、たまに西武線、地下鉄に乗りたくなくて大学に出かけるものの、大学界隈の古本屋で文庫本を抱きかかえるほど買い込み、江古田駅裏の焼き鳥屋さんで持ち帰りに数本買って、風呂もカーテンも無いアパートでビールを飲むというようなグウタラな暮らしをしていた。

アパートは桜台3丁目という高台にあった。あのころは地下鉄など無く駅まで20分ほど歩くところだった。その代わりに、アパートの廊下の突き当たりから富士山が夕日に赤く染まっているのを見ることができた。

恋人もいない、静かな暮らしだったなあ。

— — — —

江古田のことは、以下がもう少し詳しいです。

[江古田\(4\)〔2004年7月下旬号〕](#) 2009.03.08

[江古田\(3\)〔2004年7月中旬号〕](#) 2009.03.08

[江古田\(2\)〔2004年7月初旬号〕](#) 2009.03.08

[江古田\(1\)〔2004年6月中旬号〕](#) 2009.03.08

木綿のハンカチーフは、太田裕美。  
春一番は、キャンディーズ。  
なごり雪は、イルカ。

春は別れの季節なのだ。  
娘たちはどんな歌をうたって友と別れたのだろうかね。

前回・音楽篇(5)はコチラです。

#### 【ドラマ】

昔、「卒業写真」という短い物語を考えたことがあった。

グウタラな大学生活をおくっているオトコが主人公。まじめな友人に誘われて、そいつが就職先に決めた会社の年度末のバイトに呼ばれて出かける。

ところが、バイトの帰り道でばったり出会った学友たちと飲みに行き、給料としてもらった日当を全部飲んでしまう。  
(このへんがリアルだが)

御茶ノ水駅で意識朦朧とうなだれているところをに通るかかった電車には、4年前に「もう会えないかも知れないね、私は東京には行かないよ」と言って別れてきたオンナの子が乗っていた。

オトコは、酔い潰れていてそのことに気づかない。  
オンナは、ドアが閉まる瞬間にその子の姿をベンチに見つける。  
ドアは閉まる。  
過ぎる時間。移りゆく日々…

(オトコに会わせたい。)

でも、オトコはあと1ヶ月で東京を離れるんだ。

オンナは、オトコが好きだった。でも、会わないと決めたのには理由があって、4年間我慢をしたのだった。しかし、あの駅でのオトコの姿で崩れてゆく。  
ひとこと、別れだけでも告げに目の前に現れる瞬間でドラマを終えよう。

音楽は、「卒業写真」がいいなあ。

学生時代に、そんなドラマを考えていたんですよ。子どもでした。  
「別れは、美学だ」みたいな…。

---

#### 【日記】

啓蟄だった昨日、出勤途上で鼻血が出まして、職場の治療室に駆け込みました。  
大人しくしていると数時間は停止しているものの、夕方に再び出て、恐る恐る家まで帰ってきました。

青色申告の届けも完了して、さあ「オフィスねこさん」の始まりの日でもありました。

きょうは、近所の耳鼻咽喉科に行ってきました。  
原因となる心配はなく、止血剤をもらってきました。

---

#### 【きょうの買い物】

○関野吉晴著  
グレートジャーニー地球を這う ユーラシア～アフリカ篇  
筑摩書房 ¥950

○遠藤周作著  
女の一生(上・下) ¥705,¥667

| 2006-03-07 18:05 | 日記系セレクション

2010年9月15日(水曜日) [【随想帖 I】](#)

## 2005年 夏 日記系

---

次へ

---

人は、知らず知らずのうちに、心の依り処を求めている。

そこは、場所であったり人であったりイデオロギーであったりすると思いますが、自分たちの母なるものであるのだと私は思っています。

嘘をついたときも、悪さをしたあとも、冒険に出るときも、困難に挑もうとするときも、そこに帰ってくることができる。

どうして勇気が湧くんだろう。

くすぐったいようで、照れくさいようであるものの、本当の自分がそこにいる。

さあ。次のステップへ。

| 2005-08-31 09:09 | 日記系セクション

---

麦畑

---

波打つように広がる麦畑の中に一本の道が続いている。

その途中でひとりのライダーがバイクを止めていたので、私も傍らにバイクを止めて、同じ景色を眺めようとした。

彼女は「ほら、戴いちゃった」と麦の穂をひとつ取ってタンクバックに挟んでいることを打ち明けてくれた。

他に記憶の残る会話などなかったなあ。

大地は、景色と風と静寂で同じ感動をライダーたちに与えつづけている。

きっと今でも。

| 2005-08-31 09:05 | 日記系セクション

---

満月

---

めっちゃ綺麗な。満月。

用もなく足並み遅し満月や   ねこ作

| 2005-08-19 22:24 | 日記系セクション

---

フーテンの寅さん

---

NHK BS でフーテンの寅さんシリーズをやっている。

-----

25年前に学生だったときにはこのシリーズの映画なんてちっとも面白いと思わなかったし、映像作品としても素晴らしさを感じなかったくせに、今頃になってこの作品にじわ〜と来てる。

恋人のような友だちが葛飾柴又生まれで、この近くに住んでいたのだから、一度くらいは柴又や帝釈天に行っても良かったのに、そのころの私は映画にも柴又にも見向きもしなかった。

あれから、人生いろいろ。

そう、人生いろいろあってやっと味がわかるようになったのですよ。  
今頃になって柴又へ行ってみたくなってます。

まったくもって寅さんと同じ性格のような私。  
親近感があるのですよ。

| 2005-08-14 15:03 | 日記系セクション

---

## 上弦の月

---

上弦の月だったつけ 久し振りだね 月みるなんて・・・♪  
と、歌ったのは吉田拓郎でした。

小さく欠けた月は太陽の沈むときに一緒に沈みます。近日、大気が不安定だから夕日も赤いのでしょうね。

真っ赤な夕日は、太陽が沈んでしまったあとに、明るさを次第に失いながら赤みを増し続けます。それが暗い紫色のように見えて、空一面に広がり、さらにあとには東の空に燃え移ったかのように「反対夕焼け」になり、闇となって消えてゆきます。

私が職場を出るときには伊勢湾は既に真っ暗で、名古屋市のほうから湾の形に綺麗な街の明かりが見えました。湾の向こうには中部国際空港の滑走路の誘導灯が一直線にひときわ明るい。

忙しかった1日ほど、街は綺麗に輝いているように思えます。

| 2005-08-10 21:05 | 日記系セクション

---

## くまぜみ

---

MMさんの日記にコメントを落としてきた。

-----

暑い昼間にセミの声を聞かされて、頭がかっとなって・・・  
夕方にヒグラシ聞いて、物悲しくなっている。  
そんなことを繰り返しながら、夏になる。  
きょう、暑中見舞いメールを1通出しました。

(こんな短いメール)

お久しぶりです。  
昨日あたりからセミが啼き始めましたわ。  
そういうわけで、暑中見舞いです。

| 2005-07-13 09:27 | 日記系セクション

---

## ヤマモモ

---

昨日、西が丘小学校に用があって行きました。  
5年生はプールで歓声をあげています。  
グラウンドでは夏休みのうちに済ませなくてはならない工事に、現場の人が汗を流してらっしゃいました。  
校庭の片隅にヤマモモの木があります。  
いっぱい実を付けて、地面にも落ちて散らばっていた。

夕方、ヒグラシの声をききました。  
夏休みが近いのですね。

| 2005-07-13 09:24 | 日記系セレクション

---

砂浜を駆けて青春ごっこする

---

◆ 砂浜を駆けて青春ごっこする (ねこ作)

一句書いただけで、他に何も書き添えてない (後日・記)

| 2005-06-24 08:02 | 日記系セレクション

---

2010年9月15日 (水曜日) [【随想帖 I】](#)

---



## 東北

---

私、東北が大好きです。90年代には6、7回行きましたし、40日会社から休みをとったときも家族を置いて一人で放浪しました。

昨日か一昨日にのことで、[「岡本太郎のかいた東北」という本の話](#)を、どなたが書いていたのか忘れたけど、読んだのが頭にこびり付いていて、東北の話がユウさんのところで出てくると、さらに嬉しくなってきた、またまた、喜んでいるだけのコメントとなってしまうました。

— —

やっと休みが来たので少し追加を書かせてね。

岡本太郎のかいた…と上で書きましたが、「岡本太郎の東北」の誤りでした。私が目を通していたのは<http://nanaoaika.com/?p=276> というブログで、七尾さんはFMネットで朝の7時から30分間の番組をやってましてその名前を知っていたのです。

東北へゆくのですね。

私が東北へ旅立った、その何回目かのときは、青森県で三内丸山遺跡が発見された直後でした。

高速道路を使わず亀のようにゆっくりと辿り着いた私は、県境の発荷峠で、その道のりの長くて苦しかったことに感涙したあと、青森市内へと向かいました。

三内丸山遺跡は私を裏切らず、初日に立ち寄って次の旅先へと向かう予定が有ったにもかかわらず、私はそれを変更して連日遺跡にゆきました。発見間近ですから何も無い。ただの広場だ。

なんというか、東北では、それぞれの土地に人々が暮らしてきた文化というようなものを感じるのですよ。それは、寒さで閉ざされた点に起因するのか、そのあとに独自性を生み出したのか。言葉だってある意味では独自性といえるし、縄文時代から培ってきた北国の自信のようなものを感じるわけです。

都会の、銭金経済主義や合理性を主張した非人間的な社会の刃に侵されて欲しくない。いつもそう思います。

| 2006-01-14 08:47 | 日記系セレクション

---

2010年9月15日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 銀マド(日記系セクションから) 2006年 下旬日記篇

---

ばか、バカ、馬鹿

---

バカよね…か。

あたしバカよね、とうたう歌があったな。

自分で自分をバカと言いながら  
実は自分が好きなことがあるよ。

すると  
これからの道は、僕が作るんだから！みたいな自信が湧いてくる。

今夜は空を飛んでいる夢を見れるかもしれないゾ。  
恋人よ、両手を一杯に広げなさい。

---

| 2006-01-27 12:44 | 日記系セクション

---

呼び合う魂

---

おまえを棄てようとする魂と  
おまえを連れて生き抜こうという魂が  
あのとき、私の心の中で激しくぶつかったんだ。

置き去りにして、私はその場を逃げた。  
その夜、どれほどおまえを呼び続けたことか。

許しあえない仲になってゆく夜のこと。  
嗚呼。

---

| 2006-02-13 18:45 | 日記系セクション

---

イジワル

---

イジワルなオマエがほんとは好きでした ねこ作

卒業式の季節ですね。友達と別れることなんか、なにも悲しくなかった。せいせいした。  
俺には俺の行く道があるんだ。おまえらみたいな優等生じゃなく、劣等性ながらも、オオモノになってやる、って思っていたのかな。

オンナの子の中にも気になる子が幾人かいた。  
いつもイジワルを言うけど、黙ってクラブの部室に僕を連れて行ってくれた。  
その辺に座ってなさいよ、という訳ではないけれど、おとなしく僕は彼女のうしろ姿を見ていたな。

(もしもオトナになった今の僕なら、後ろから・・・危ないことになってしまうかもしれない)

放課後の校舎。  
屋上から遠くに海が見えた。

卒業するときもあの海を見たかったな。  
ふたりで。

なあ、最近、と言っても少し前からだけど、いいことがあったんだ。  
オマエみたいな、イジワルな友だちができたんだ。

みち、っていう名前なんだ。可愛さでは負けないからな。

| 2006-03-02 21:55 | 日記系セクション

---

今朝、新聞広告をみて、

---

今朝、新聞広告をみて、「約束の冬」(宮本輝)を発見した。

いい日だ。こんな清しい朝を迎えられて最高だ。  
早速、午後に出かけよう。

――――

きのうは、「ウエンカムイの爪」(熊谷達也)を読み終えた。  
【別記のため略】

――――

さらに、きのう、  
ガソリンスタンドで給油したあと、レシートを取るのを忘れて(2円引きバーコード付き)、私の大事な経費計上書類なのに！  
(2円も惜しいが)、と悔やんだ夜を過ごしたのだった。

(この悔しさを、うちのんに話したら、たいそう残念がって、慰めてやるからと言っていたのに、TVが枕元でガナッテいるなか、私は眠ってしまったのです…)

――――

久々に、日記を書いた。

日記は毎日書かないほうがイイと思っている私だが、久しぶりに書く日記が宮本輝さんの話から始まって、また彼にヤラレタ、という感じか。

| 2006-05-13 08:30 | 日記系セクション

---

【号外】 ないしょの話

---

ないしょの話だよ、と小さい声で言って、頬を寄せた。  
「キスしたい」って言えなくて  
「うそ」と言って誤魔化した。

そんな日があったな。

----

きょう、秘密の場所で、撮った写真

■ 桑の実

いつか、あの子が話してくれました。  
桑の実を摘んだ子どもころのこと。  
思い出の中じゃキミはひとりじゃなかった。  
甘い甘い桑の実を頬張っているキミを想像したよ。

あのとき僕はキミを好きになったのかもしれない。  
ムラサキの実を探しに二人で行く約束をしたんだ。

1個だけ口に入れてみました。  
本当はもっともっと食べたいけれど、  
僕は今、そんなことでセンチに浸っている暇は無いんだ！  
と強い心でお預けにした。



#### ■ クチベニマイマイ

殻の入り口のところが、口紅を引いたようになっているからそう呼ぶらしい。  
職場の木村さんに見せたらすぐに名前を教えてくださいました。

随分と懐かしいモノに出会ったような気がします。  
少し、早足で歩いてきたから、  
おいこら！  
と呼ばれたみたい。

桑の葉っぱの向こうは、夏の陽射しでした。



#### ■ 蛇莓(ヘビイチゴ)

— なあ、なあ、ええもん見つけたんやで  
— 何や？  
— 秘密やで。美味しいんや。甘いやろ  
— うん

麦を刈った後の田んぼは独特の匂いがした。  
それは大人になって、「ああ、ビールの匂いに似ている」と気づくまでは、触れてはいけない大人の香りのように感じていた。

子どものころは、時間がどこまでも長かった。  
日暮などいつになっても来ないような気がした。

僕は、あの子のスカートが赤かったから、好きだったのだろうか。

ひとつだけ何を語るか蛇苺　ねこ作



| 2006-06-13 19:10 | 日記系セレクション

---

氷見　そうめん

---

まっこさん@mixiが大門素麺のことを書いていた

-----

そうめん。食べたくまりました。

氷見もそうめんが有名なんですね。日本海の凍るような冷たい風がいいのだろうね。

能登半島は、鄙の香りがしていいです。

麺類大好きです。

夏になると何度か小豆島のそうめんを戴き物で食べることがあります。この麺も太いんですよ。パスタみたい。

そうそう、だし巻卵で思い出しましたが、随分昔に、京都の老舗のだし巻卵をTVで見て、私も真似して何度も挑戦しました。高級かつお節を買ってみたり、甘味を色々工夫したり。あと巻き上げも上手になりました。小料理屋をしたくなります。(笑)

結局、自己流に落ち着いてますけど。

「金沢から普通列車で行ってみたけど途中でひきかえしてきた。」

まっこさんて、ロマンティックな人ですね。

| 2006-06-24 09:19 | 日記系セレクション

---

エロチック

---

ぼくは、この人の日記を宝物のように思っていて

ほんとうはくまなく読んでもいいし

どんなふうを考えながら書いたのかをわかってもないくせに

そう思っている。

そこで、自分なりに理由を考えてみたりしている。

でも、結局のところ、ワカラナイ。

突然、日記に

「休憩します、」  
と書いてみたりするから、おかしい。

友だちのコメントが、友だちとは思えないほどに雰囲気違っていたりするので、友だちまで一緒に「好き」になってしまいそう。

簡単に逢えない人だから、それがまた、いいのかもしれない。  
逢えっこないのだから、諦めてるし、一目惚れすることもない。  
(このことは前にも書いたかもしれない……)

ぼくは、現実に苛立ちを感じている。  
そのことが言葉にできなくて、困っている。  
死ぬほど困ってはいないけど、イライラしている。  
野球中継で右中間を抜いたときのような爽快感を  
何とか、得たい。

言葉に困っていると、この子が現れて、  
ぼくの視界の片隅で、  
探している言葉をチラチラと見せてくれる。

なんとも、エロチックなアレよりも  
ぼくにはエロチックで、  
だから、こんな叱られそうなことを書いて、  
ふむふむと頷いているのです。

-----

【mixi、あるかたの日記へのコメントから】  
| 2006-07-19 21:48 | 日記系セレクション

---

ユウさんへのコメントから

---

ミクシーのマイミクにユウさんという方がいます。素敵な人で、大事にその人の日記を拝読して、ときどき訳のわからないレスも書いてしまってます。

ユウさんの日記の題名は、「いやな話。」です。  
先日の私のコメントと、そのコメントにいただいたレスへの更なるコメントを。

-----  
こっそりとここに立ち寄って自分なりに満足をして帰ってゆく私としましては、そろそろ、忘れられないために何かハンカチのようなものをサラリと目の前に落として去りたいものだが、「完全にひとりになれる夜」などを書いてらっしゃるので、ますますお声をかけづらい。

バーチャルな世界から抜け出して  
いつか、ユウさんを誘って  
思う存分、ユウさんの世界に浸って  
毎日の日記のような話を聞いてみたいという  
夢のようなワンカットが

少し萎んだ。  
シャボン玉ならこわれて消えた、、、だろうが

夢だから、萎んだ。

この日記で最後にかいた「すこやか」が気に入った。

お見合いならばこの一言でOKってところだ。

-----  
-----

耳打ち話か。私もオトナになったな。でもそれを聞くユウさんもオトナなんだな。

だから、さびしいオトナだ。ははは。

お見合いが叶ったら、  
僕は旅の話などたいしてできませんけど、ユウさんの日記のような話を聞かせて欲しいです。でも、お目にかかることは無いと思うので、白状しますが、実は、私の知らない世界の話が多くて、ただそれだけで別世界の人なんだと思っています。だからこそきっと興味をそそる話が期待できるかな、って考えてる。

時間差か。  
現代人が疎かにしていると思いませんか。  
だから、故意に…ってわけでもないけど、活字は消えないんだから急いで読まない(レスを書かない)だけです。(読むのを忘れたままのこともあります。これもドラマでしょうけどね。・苦笑)

| 2006-10-02 23:02 | 日記系セクション

---

癩癩

---

-----

人間のからだって、  
いったい何でできているのかしら。  
臨終の鼠を秤にのせたら、  
死んだ直後に7グラム軽くなったとか、  
人間は死ぬとかならず21グラム体重が減るとか、  
それらは魂の重さだと言われている。  
ならばわたしが死んだらおそらく  
直後に3021グラム軽くなるにちがいない、  
だってわたしは  
水とたんぱく質と21グラムの魂と  
およそ3キロの癩癩でできているのだから。

-----

と、ユウさんが日記に書いていたので、15日以上過ぎてから感想を書いた。

この最後の10行は、  
どこかの誰かの真似をして書いたほどなのだが、  
ユウさんらしいので、好きだ。  
すぐにそのことをコメントに書けずに、フトコロで温めていたのですわ。  
そういうわけで、コメントが書きにくいけど  
「癩癩」もちなんだろうかと想像してみたら、  
またいっそう、この子に興味があって、可愛く思えるのだった。  
私も超一級の癩癩もちだ。【mixi 日記】

| 2006-10-26 19:26 | 日記系セクション

---

河よ

---

引き続きユウさん

-----

きのうの日記を読んでいて、大阪の夜の川を想像しておりました。私が知っているのは、造幣局の桜の通り抜けのときに見た淀川と、北浜に仕事で出かけたときに蕪村の「春風馬堤曲」を思い起こし付近の堤防を散策したときの川の景色です。

ほかには……

宮本輝の泥の河に出てくる河と、梅田から淀屋橋あたりを歩いて美味しいウナギ屋さんを探して回った時に見た川。心齋橋のあの橋から下流を見る川。

私がこのような大阪の川に出会う前、青春時代に東京で暮らしていたこともあって、石神井公園から流れ出る神田川が、高田馬場あたりを流れてゆくのを最初に思い浮かべました。早稲田大学の裏から目白台のほうへとゆく途中で神田川を渡ります。大阪の川と趣が違って、人々の暮らしの中を流れている感じが強い。

東京には坂道は多いけど、地面の下に埋もれてしまったせいもあって川が少なかった。それだけに神田川は印象深いです。

橋の欄干にもたれて、1時間も2時間も話をしていた学生時代を思い出してしまって、日記を読んだ時刻に東京のライブカメラを検索して覗いてみたりしました。

都会には、いろんな明かりがあふれていました。

私たちの眺め下ろした川は残っているのだろうか。そう思いました。  
(あのころは神田川が大ヒットしていたころでして、余計に懐かしかったです)

-----

追記

私の印象では、大阪の川は雄大で頼もしく素敵な川です。  
ユウさんはそうじゃないのか……な。

| 2006-10-27 21:48 | 日記系セレクション

---

寄り道

---

またまたユウさん

-----

ユウさんの日記に私の名前が載ってて、凄く喜んで、跳んで回ってウキウキしてた。

返事を書こう、と思えば思うほど、カッコウつけて何かアララということを書こうなどと考え始め、ついに何ひとつ書き出せない。  
そこで「おまえはアホやなー」と呟いてみるが、その次の言葉が浮かばない。

―――

私は田舎育ちで、しかも学校のすぐ裏に住んでいたんで、家から出て自分ちの畑などのある屋敷を通り抜けて道に出る距離のほうが、そこから学校まで歩く距離より長かったくらいだ。だから、道草など食ったことがなかったのだった。

マンション。

そんな言葉を子どものころの私は知らなかったよ。

一度か二度、都会へは出かけたけど、大勢の人々があの商店街の何処らあたりに住んでいるのだろうかがとても不思議だった。

人の住むところは何処にあるのだろうか。



デパートの裏に行けば家が建っているのだろうか。  
二階建ての家に住んでみたいな。  
窓から何が見えるのだろうか。  
いつも、そんなことを考えていた。

| 2007-01-15 22:07 | 日記系セレクション |

---

2010年9月15日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 信頼というものを考える

---

信頼というもの

2010年09月13日

### ▼信頼とはを考えはじめる

信頼とは何だろうということを考える。そのきっかけは、不調が続くバイクの話を読んでいた人の「もっと信頼できる店に頼ってみては」というアドバイスの言葉であり、あるいはさらに大きく私を揺り動かしたのは三十年来の友人の身内に起こっている不測の出来事に拠るものだった。信頼という簡単な言葉であっても、ふとしたきっかけで考え続け、深みを探れば果てしなくそこに潜んだ哲理が浮かび上がる。

### ▼友人に身内の危篤から

友人の身内は、危篤が続く状況に追いやられている。意識が戻ることも無く生き返ることもできないかもしれない。しかも、本来ならば近くに住んで居るはずなのに、仕事の事情で飛行機を使っても8時間以上掛かるところにいて応答のあるうちに会えなかったという。年齢的にもまだまだ20年は早いと思える。様々な面で運に背かれた形になる。信頼して、順調な軌道の上を走っていると思っていたのだ。ここにも信頼という言葉がある。そして、信頼とは人物を信じる状況を指すだけでなく、あらゆる状態を見守っている自分の心の形を表すこともあるのだ。

### ▼信じるとは何か

何をどういう形で信じればいいのか。この廃れきった世の中で信じるものなど無くても銭金があれば生きて行けるとでも言うのか。信じられるものは神のみなのか。いや、神など信じられないのか。

私たちは信じるということを数限りない対象において様々な形で捉えている。それは、物理的にも心理的にも、また行動科学や精神科学が及ぶような分野においても、あてはめて考えている。与えられた既得権のように厚かましく手中に持つこともあれば、感謝に満ちた信用もある。善し悪しなどは無く、ひとつの状態を表現するものとも考えられる。

それを物理現象と考えるなら、エネルギーは質量と速度が生み出すのだから、信頼、あるいは信頼関係というのは、そのものの思いの深さと情熱度合いということになってくるのだろうか。しかし、そこには、これまで私たちが生きてきたこと、生かされてきたことへの畏敬が含まれていない。

### ▼さらに考える

まっすぐ跳んでゆくボールは突然曲がったりはしない。路線バスも定めれていない交差点で曲がったりはしない。そうなると、どうやら、曲がらないと信じることは実は信頼とは呼べず、予期せぬときに何かの時点で曲がるかもしれないという事実を見詰め合うこと、またはそういう危機を共有すること、向き合うことが信頼なのではないかとさえ思えてくる。だからといって「危機管理」などという安直な言葉で片付けられると腹が立つ。もっと心の奥の襞の中まで沁みこんだ感情的なものが「信頼」なのだ。

### ▼信頼なんて存在しないのか

神は幸せというものも齎してくれるが、罰という裁きも可能だ。いまや、信頼という言葉自体が風に晒された死体のように、無表情に残されている。

信じることは信じられることだ。そこには何の合理性も実益もないし、科学も哲学も無い。

信頼という言葉が深いところに秘めている重要な意味を見失った現代人たち。

そういう人たちが溢れかえった空間(または時間空間)を私は彷徨っているのだ。

(日が変わって)

### ▼信頼というもの——その2

信頼というもの。……というわけの分からない私の呟きにたくさんのコメントを戴き感謝します。答えの無い問いかけに答えるのは難しく、そこところを上手にかわしてひと言を残してゆくというのは、人生を上手に生きることに通じるといえます。みなさんのもうひとつの姿を見るような思いです。

### ▼続・考える

さて、きのうのお話の続きを今朝から書いておりました。信頼という重々しい言葉を投げかけておきながら答えも出さずに、

というか答えも出せずに放り出した私の心理までを理解してくれる人など、たぶん誰も居ないだろうが、私は「信じる」ということと「頼る」ということを、発生学的に考察したかったのだ。

◎「信」と「頼」に分けるてはどうか。もしかしたら二つに分けて考えれば見えてくるものがあるかもしれない。複合の言葉なのだから、ひとつずつ紐解けばいい。

◎「信じる」といことも「頼る」ということも、どちらも親の言いつけでできるようなことではない。つまり、その人自身の心の奥底に存在する本心のような部分が無意識に決定するものだということだ。

◎信頼という行為の結果が必ずしも正解であつたり、報われる結果を導くというようなハッピーエンドなストーリーでもないというのも現実だ。

◎信じることはある意味では信仰のような側面を持ち、人を信じることは己の誠に通じるともいえる。「頼る」「頼られる」というような相対する言葉にもそれらが当てはまる。

◎さらに頼られることの奥深くには、その人物やその出来事の重みが生きてくる。人に重みがあれば、そこには尊敬の念が返ってくるし、行いであれば実行力とバックアップが対になって勢いを生む。

◎仁義礼智忠信孝悌。この言葉の中にも「信」が存在する。南総里見八犬伝でも出てくる語句だが、やはり人はそこに戻ってくるのだろうか。

#### ▼信じる根拠の変化

人間関係が希薄になっているのだろう。だから、心から信用できるものや人が少なくなっている。物事をお金や数字や統計的な割合で表現する傾向を見てもわかるように、スーパーの買い物ひとつを取り上げても、信用イコール数字なのかもしれない。

◎みんなが買っている、誰かが良いと言う、そういう情報がネットにある、カタログに信用できる数字が記載されている、性能表の内容が良い。

◎癌の治療、脳外科的疾患の治療についても、医者の評判、噂、テレビの情報、新薬の情報、最新医療のTVなどでの紹介、病院の事故率・失敗率。

#### ▼信頼できるものの激減

数字の上では身の回りには私たちに役立つものが増えているのだが、どうも温かみのようなものが減ってしまったことで、心から信頼できるものがなくなってきて、信頼という言葉のもつ意味が軽々しくなってきたのではないかということかな。

▼これまでにこの日記で書き綴ってきていることは、私たちは「豊かさで満足度」という、現代人の骨の髄まで溶かしてしまった麻薬より恐ろしいものがあり、それが様々な面で人々の暮らしを激変させたこと。そして生活レベルや満足度は満たすのだけど、その変化により人と人との間に存在していた温かみのある信頼関係は、お金や数字や情報では語れないところで破壊されてしまっていること、を認識に無くてはならない。情報を活用していいものを手中に出来ても、なんだか嬉しくない気持ちが残ったりすることがあるのはそのせいなのだ。

▼家族を癌で亡くすかもしれない。脳卒中で死なせてしまうかもしれない。そこに、当人とあとに残るものとの信頼があれば、また治療をする医者との信頼関係が確実に出来ていれば、もしかしたら短い運命であるのかもしれないけれど、自分でもひとつの区切りをつけることが出来るのかもしれない。

現実にはそんなに甘いものでもないとは叱られるかもしれないが、たくさんの人を見送ってきた。そういう年齢に達している。不治の病、手遅れの病気、突然の変化、事故、自殺、老衰。治療の限界を感じて自分の父も死なかしてしまったのだが、今更、そのことを悔いて仕方がない。

そういう世相のもとに生まれてきたのだと思う。

#### ▼この日記の初版では

結局、何が言いたいのかワカラン。＞自分と書いた。

人の純真さが薄れてきていることを嘆いたのかもしれない。

自分のことしか考えない社会に怒りを持っているのかもしれない。

悪が悪として裁かれないことや戒められないことに怒っているのかもしれない。

世の中が、間違った方向に多数決で進んでゆくことに怒りを持っているのだろうか。

まあ、いいや。もうすぐ死ぬ時期が来るし。それが諦めの言葉なのだが。

(まんざらハズレでもない悩みかな)

---

2010年9月17日(金曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 私を導く舟

---

人は死んでしまう。この事実は、誰もが動かせない。

生きたい、生き続けたいという欲望があるように、生かし続けたい生きていて欲しいという欲望がある。それは願望に近いのかもしれないが。

死にたいという願望がある。私がいつも願っているように、カメラのシャッターがカシャリと落ちるように、死んでしまいたいという願望がある。

憎き人や恨みのある人やモノをストンと終わらせたいという、いや、消してしまいたいという願望もある。

自由に生命を操ることができれば、科学技術で遺伝子を犯すように、命も手中にすることができるのかもしれない。

果たして命とは何なのか。

怨念の対象なのかもしれないし、愛を形にする大切な約束物なのかもしれない。

自分の自由や欲望を実現するための舟なのか。

それとも、儚く切ない願いだけなのか。

願いを持ち夢を抱く私たちは、心を生かす血液のように、命という舟のようなものに乗って時間を彷徨う。

そう。やはり、そこにもカメラのシャッターをカシャリと切るように、パソコンのシャットダウンのボタンを操作するように、私たちは命を自由に断ち切ってしまうことができてもいいはずだ。

私は、自分の命は自分でボタンを操作して切りたいと願っている。

新しい人生の出発を選択する権利は私にあるのだから。

◇┐

└◇

しかし、その考えもひとつの選択であることも知らされる。

激しく燃え続けている情熱や夢を胸に、振り返ることなく突き進む人たちがいるように、生き永らえたいと強く願う人もいることは間違いない。

いや、むしろ、そのほうが自然であり、人間としての正直な姿なのかもしれない。

私はいつどんな理由で、突き進むような情熱を失ってしまったのだろう。

## 古い手紙の下書きから

---

ときどき  
あちらこちらを  
片付けて

すっきりしたことがある。

嫌な思い出もあれば  
いいこともあるが、  
プチッと消してしまうのだ。

躊躇ってプチッと押すの、その前に ねこ作

+

立春に母を訪ねておかき食う 2004年2月 4日(水曜日)  
突付かれて無頓着な振りをする 2008/07/25  
けたたましくクマゼミ鳴いてイライラと 2008/07/23  
休日の朝に茄子を和えて食う 2008/07/11  
茄子(なすび)和えこれだけでもいい朝ご飯 2008/07/11  
前髪を切ってそちらにキスをして 2008/07/03  
路地裏へときめきながら袖を引き 2008/07/03  
人恋しミカン畑の丘の道 2006年6月 3日(土曜日)  
大根の湯気が恋しい寒露かな 2004年10月 8日(金曜日)  
彼岸花咲いたと父に手紙書き 2005年9月17日(土曜日)  
明かりなき奥座敷まで照らす満月 2005年9月18日(日曜日)  
寒風が眠れぬ夜の窓揺する 2005年12月 6日(火曜日)  
別れると知りつつ無言の指きりを 2005年12月 6日(火曜日)  
猫だるま眉間にしわ寄せ襟立てる 2005年12月 6日(火曜日)  
鬼去りて柵照らす朝日かな 2006年2月 4日(土曜日)  
スズムシや親父なきとて今も啼く 2006年10月21日(土曜日)

---

2010年9月23日(木曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## 過去は大事なんやで

---

「過去は過去… 今の方が 大切に思うんですが…」

と仰る方があって、そのもうひとつ前の話は省略しますが、私が少しつぶやいたのです。

\*

過去は過去で大事なんやで。

今を生きるときには、過去からの変化を読み取り、考え方やものの見方も解析したり学んだり、ヒントも貰って生きていかねばならないと思うのです。

だから、過去は過去として過ぎ去ったもので、済んでしまったものとしかみてないならば、今も今だけしか見て無いことになる。

未来から見つめれば、今は過去や。

だから、今が大事なら、未来も過去も大事やということになる。

確かに過去を思い出したり頼ったりするのはよくないのですが、しかしながら、今を生きるときには、未来を見て、しっかり睨んで生きていかなあかんと思うの。

振り返るなんてのはセンチなもんじゃなく、過去を睨んで未来を計るという闘いです。がははは。

\*

とまあ、そんな返事を書いたのです。

---

2010年10月 9日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## またまた、にっこりな話

---

今までにも登場したことのあるA子さんの話。

お隣に腰掛けているA子さんと、日に日に詰まらない話も出来るようになって来たのですが、私が酉年でこの子が戌年ということで、25歳という年齢ギャップは親子の会話のようでもあります。

休日には何をしていたのかとか、最近何か映画を見たのかとか、普段は御飯を食べてからあとは何をしているのかとか。

些細な話をするうちに、さり気なくメールを尋ねたらすんなりと教えてくれて、週に何回かメールをする。何の意味も無いメールですが。

そんな彼女が昨日、まじめな顔をして  
—— ねこさん(本名で)、いい人が出来たんですよ  
という。

—— どうりで、先日の大雨の日に、中津川まで栗ご飯を食べに行っていたなんて、私の想像がドンピシャやん。  
というと、素直にまたニッコリとしている。

この子は、この歳であるが、綺麗で尚且つお茶目なところがある。しかも非常におとなしいみたい。ひとりで静かに好きな恋人を想いながらニタニタしたりしているのが似合うところもある。

可愛らしいので、入れ替わり立ち代り男性が用事を作ってこの子のところへやってくるので、部内の男性の名前を覚えるのにも助かっている。

私は「恋人できたのか……」と父親のような感覚でひっそりと歓んだのですが、その後の仕事は少し異変となってしまった。非常にすまし顔の美人の彼女がときどきにっこりと思い出し笑いのような顔をしているような錯覚に囚われて、ちらりちらりと彼女を見てしまい、こっちまでそわそわ状態になってしまったのです。

夕方の列車の中から、私がそのことを短くメールで書いて送ったら、「まだまだ緊張していて、自分でも何を言っているかわからんことがあって、付き合うって難しいです」、というようなことが書いてあった。

---

2010年10月20日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 心に旗をたてる

---

先日、ある方にちょっとした手紙を書くことがあった。

感謝したい。

手紙を書くことで、自分を見つめることができる。

手紙を投函するまでにじっくりと書面を眺めることがめっぽう少なくなった。

それだけに、いつもよりもじっくりと見つめたかもしれない。

それでも、二三日しか暖められなかったけど。

□□

(断片)

▼どんなときでも、メールをいただくとても嬉しいです。さらに、相談を受けることで信頼されているのが嬉しくて、頑張っ  
て答えなきゃと思います。そういいながら、たいへんなメールを受け取っちゃったな、って思ってみたりしてます。だって、あな  
たの人生を曲げてしまうかもしれないわけでしょ。

▼答えを急ぎますか？二面性があるって、急いで決定してしまわねばならないことと、じっくり熟成させて考え抜くことが共存  
しなくてはならない。いっぱいいっぱい考えて、最後はさりと決めてしまう。

▼久々のメール、拝読しました。相変わらずの頭脳明晰さ、感心します。なるほど、ヒトは明るく振舞っていても、色々と悩  
みを持ちあわせていることだってあるよね。深く考えることも大事だね。それが人生。

▼あなたのことは何も知らないといっても間違いじゃないですね。何となくわかるのは、勇気と大胆さと自信に裏付けされた  
行動力があって、それを許した周囲の大きさも恵まれている。素晴らしい人間関係をお持ちだということ。

▼悩みは、素晴らしい才能のようなものがあるって、まださらにその人を悩ませてくる未知なるものであることが多く。ヒトは  
その未知なほうへと向かおうとし、これまでの経験では解決ができないほどの大きな悩みを抱き続けている。そういう人生  
を選んだのはその人の人間性であり、人間味である。そんなことを考えながら。

▼あなたがメールを書いていた深夜という静寂は、人間を魔術にかけたようにあなたを弱気にさえてしまうこともあるかもし  
れません。人は弱いものだ大勢の批評家たちがいい、強いものだとも言われてきた。静寂が思考を混乱させるけど、酔う  
ているようにも見える。

▼さて、出会いやそのあとの併走が勢いよく夢に向かって突っ走れるかどうかってのは、夢が一致していることと、その夢  
をお互いが理解しあって認めていることと思う。世の中で騒ぎのネタにされる離婚の理由なんてのはまったくもってナンセン  
スで、セックスと夢さえ一致してれば幸せに目標に向かって突っ走れる…と夢のようなことを考えている愚かな私です。

▼スズメはなぜ電線から落ちないのか。落ちそうになったら飛べばいいから。そう思うことでここまで生きてきたけど、近頃  
は飛ぶ自信が少なくなり意欲も夢も薄れつつあるけど。

▼長い、いや、短いかも知れない人生。迷ったときほどほんとうに頼りになるのは自分だけです。他人の意見ほど無責任  
で、あてにならないものはない。もしも当てにできるものが在ったとしたらそれは、「結果論的正解」なんだと思う。つまり  
は、長いか短いかという修飾語は不要だったのだが、書きながらモラトリアムのようなものを探っているの。

▼行く先に当てにできるのは自分の判断力だけだ。引いて言えば、自分の人間性、人間味ですね。じっくり考えて、得  
た答えや選択に間違いは無い…というか、それが正解だと思う。だからこそ、そこで、じっくり考える。「結果的正解」しか存  
在しないのだから、戻れないのだから、いろんなものにインスパイアされながら、自分で考える。しかしながらも逃げ道とし  
て、やり直しができることはやり直せば良い、という手段を残しておく。

▼やり直すって、時間は戻せないじゃないか、と反論もある。それは自問でもあるが、その拳句、戻せない時間と闘うなら  
ば、行き当たりばったりもひとつの選択かも、とも思えてくる。そんな支離滅裂に見える中にも確信がある。それは、逃げ道  
は必要で不可欠なモノなんだけど使わない。道は1本しかないのだ。自分はひとり。…ということ。

▼自分は何に向かって走りたいのだろうか。お金なのか。名誉なのか。地位なのか。ささやかな幸せなのか。優しい朝日の当たる食卓で、美味しいコーヒーを二人で飲むのが夢か。激動する世界のどこかで、世界の貧困を救うために駆けるのか。自分の求める美をカタチにするために、目を閉じて瞑想をするのか。哲学の世界に身を置くのか。

▼大きな変化球を投げたいわけよ。私の場合は、そうだった。真っ直ぐの球が、予想通りに投げ込まれるばかりの人生は嫌だった。しかし、結婚して、親となり、老化への一歩を歩みだしてから、自分の小ささに気が付き始めた。

▼あなたは乱れたスパイラルに巻き込まれる。そこであなたの悩みはインスパイアされてゆく。

▼そうそう、オリンピックの選手だった森末慎二さんが、バクテンをするときにみんな誰でもが怖がってできないけど、それはあの瞬間に目を閉じているからダメなのだと言っています。目を閉じるのではなく、自分が手をつく地面のほうをしっかりと見なさい。この言葉は、好きです。

▼自分の行く未来を見るのも大事。夢を描いてそれを見るのも大事。一歩の足を踏み出す地面を見るのも大事。、受験時代に「困ったときは鏡を見よ」と自分に言い聞かせていたことを思い出しました。見てるようで見てないの。

▼私の師匠の言葉に

- 心に旗をたてる
- 片時も忘れず抱きつづける
- 一歩でも近づこうと地道に努力する
- 旗の大きさが、その人生を決める

旗を立ててください。

あなたをなびかせる風になりますから、私。

---

2010年11月27日（土曜日）【[随想帖 1](#)】、【[雷山無言](#)】

---

## 背中合わせ

十二月に考える、ということで一年を振り返ろうとする日々が続く。次の一手を会心で打ちたいための策略を講じたいと願うがゆえに想いが拡散したり、逆に足踏みをしたりする。

日記のページをぱらぱらと捲ってみると、消えかけていたひとつひとつの出来事やその時の感動や驚きや嘆きが甦る。今年もいつもの年と同じように暮れていこうとしているのだ。

それではいけないと自分に語りかけるもうひとりの自分がいて、さらに、それでいいのだ、とニコニコしているまた別の自分もいる。

日記を一月まで繰ってきて、もう一枚ページを捲るとまたその昔の十二月。時間は何の区別もなく季節が巡る。良い過去も忌々しい過去も消えてゆく。

時間が過ぎるたびに自分の中に存在していた新鮮味と初々しさが消えてゆく。それはひとつの脱皮にも似ているとすればそれでいい。

十二月と一月は背中合わせだ。ほんの三百六十五日前には、もう一人のわたしが暮れゆく年を省みていた。そんななかで、境目のない月日をいかに充実させるかという纏まり切らないテーマが人生後半の重要な課題になりつつある。

--

12月6日の天声人語が「賢者の贈りもの」(O.ヘンリー)の一節を引用していた。

「人生は「むせび泣き」と「すすり泣き」と「ほほえみ」とで成り立っていて……」と名作の作者O.ヘンリーは呟く。

以前、わたしは人は悔しいから泣くのだと書いたことがある。痛いからでも怖いからでもない。そのことが悔しいのだ。咽ぶ人だって悔しいだろう。「すすり泣きが一番多い」とO.ヘンリーは書くが、その内心は悔しさで満ちているのだ。

喜びと悲しみは、背中合わせだ。世の中の何処かで喜ぶ人あれば、何処かで悲しむ人もいる。もっと世の中の人が他人の悲哀や悔しさを理解しあえれば、政治だって環境だってもっともっと良くなる。他人の哀しみを自分のそれに重ね合わせるゆとりがあれば世の中は必ず変わる。もっと言えば、景気でさえ良くなるかも知れない。

自分の幸せと他人の幸せが背中合わせにあるのだということを、人々が理解できるようになれば、地球温暖化だって食い止められるだろう。豊かさも経済成長も、もはやそれほど目まぐるしくは進化しない。だから、上手に質素と不便に付き合う準備をしなくてはならないと思う。

そんなことを考え続けた一年だった。これからは生きることと死ぬことは背中合わせなのだという事実を見つめて、何が残せるのかを考えて生きたい。

--

たくさんの人にお世話になって、また教えられてここまで来ることができた。チャンスを与えてくれた方、門戸を開いてくれた人、親身になって助言をしてくれる人たちに助けられ歩み続けてくることができた。歩みながら自分が残した足跡に勇気づけられ励まされ叱咤されてまた一歩次のステップを踏み出す。その一歩がほんの少しの狂いを持てば挫折が待っているし、踏み外せばどこかに落ちてゆくのだ。誰もがそんなスリリングな一歩を毎回毎回慎重に踏み出しているわけではないものの、暮れゆく年の瀬に限ってはそういう自省も必要だと感じる。

立ち止まって後ろを見る。それが坂道であるならばその坂道は上りだったのか下りだったのか。平坦な道かも知れないし、わたしは海原を超えて島にたどり着こうとしているのかも知れない。冒険者でありたいと夢見たことがあった。しかし、今や華やかな道の果ての冒険は不要だ。小さな力で大きなものを着実に動かす梃子のような一役を目指せばいい。

--

いつもと違った新しい年を築きたい。そう密やかに決意をする。そのためにはいつもと違った年の暮れを迎えねばなるまい。二十四歳で社会に出て、ほぼ十年おきに大きな変化を迎えてその都度決断をしてきた。

ほら！今年はそんなときなのかもよ、と自分にそう呼びかけてみても、テンションが低いなあ、と嘆く。

いろいろ考えることはグルグル廻る。もう中心には戻ってこないのだろうか。恋がしたい、旅に出たい、美味しいモノが食べたい、涙も枯れるほどの感動的な物語に出会いたい、腰が抜けるような美人に会いたい。

年頭のあいさつ(年賀状)を出すのをやめたのは、仕事を辞めて年収が三分の一以下にダウンしたときであるのだが、そのころの記憶ももう風化し始めているものの、挨拶など要らないしする余裕もないというのがあの瞬間に感じていた本音だったと思う。

その後、社会のあらゆるものまでもが急降下して、人々の心は荒んでいった。年賀のあいさつを合理性というような言葉で改革へと追いやられ片付けて、電子メールなどで済ませる人が目立つようになったのもこのころかも知れない。

年賀の挨拶状を経費節減や作業合理化で整理したことが失敗であったというのではなく、その文化の背景にあった目に見えない深い意義をあつさり捨ててしまい忘れようとしていることが誤りなのだ。現代社会が病んでしまって立ち直れないのはそういうものをバツバツと捨てたのが原因でもあろう。

年賀という文化は、一年間の様々な失敗の懺悔と成功の称賛を顧み、この上なくお世話になった方々や昔の貧弱だった自分を支援してくださった皆様への感謝を表すひとつの手段であって、年末年始に気持ちを整理してお礼を伝えるところに大切な意味があった。

それを廃止してしまった人たちが多いのだが、そこにあった大きな意味までも廃止をはいけなかった。他にも文化的な生活習慣や道具などを捨てるとこのようなことがよくある。生活の中に長い歴史の中に根付いてきたものを、簡単なパラメータだけで切り捨ててしまっているまいか。

素敵な恋をしたいというおバカな夢でもいいから、わたしのお世話になった人たちに、ここに書き連ねてきたことを伝えなくてはならないのではないかという、激しい責務を感じる日々が続く。

---

2010年12月14日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 言葉の断片から

---

▼「塵埃秘帖」という日記があって、そこには取るに足らないことを書いている。もう10年以上も前から断片的にかく。中には本当にゴミ箱に放り込まれて消えて行ったものもある。

▼今年もメモがいくつか残っていて、それも断片的には塵埃秘帖で取り上げたりしてきたものの、断片の片割れを棄てられずにいたり、また読むかもしれないのでと思いつつ座右に置いたままのものもある。

+

福永武彦、風土 から

--

道子さんが一人でぼんやり考えている時には、あの人に天使が附いていて、二人の間で何か秘密なお喋りをしているんでしょう。

それは君がまだ小さくて、人生を知らないからだろう。人生というのもこうしたものだ。表面はいかにも静かで何の不安もないように見えるが、しかしいつでも、白波のように、絶望が牙を嚙んでいるのだ。海はまったく人生に似ているよ。粗暴で、強情で、残酷で……。

--

▼作品のどのあたりだったのかはあまり覚えていない。福永武彦は、何も結果を求めないで、正直に活字と向き合い、目に見えるものと語り合いたいときなど、しみじみと読める。静かに読める作品たち。

□

今年は向田邦子も読んだ。

--

向田邦子

「花底蛇」

花をいけるということは、やさしそうにみえて、とても残酷なことだ。花を切り、捕われびとにして、命を縮め、葬ることなのだから。花器は、花たちの美しいお棺である。

花をいけることは、花たちの美しい葬式でもある。この世でこれ以上の美しい葬式はないであろう。

\*

「無口な手紙」

昔、人がまだ文字を知らなかったころ、遠くにいる恋人へ気持ちを伝えるのに石を使った、と聞いたことがある。

男は、自分の気持ちにピッタリの石を探して旅人にことづける。

受け取った女は、目を閉じて掌に石を包み込む。尖った石だと、病気が気持ちがずさんでいるのかと心がふさぎ、丸いスベスベした石だと、息災だな、と安心した。

「いしぶみ」というのだそうだが、

\*

「独りを慎む」

ソーセージを炒めてフライパンの中から食べていました。

小鍋で煮た独り分の煮物を鍋のまま食卓に出して小井にとりわけず箸をつけていました。

座る形も行儀が悪くなっている。

同じ人間でも男の笑いと女の笑いは別である。

にらめっこがおかしくなくなったとき、男の子はおとなになる。女がヘンな顔を見ても笑わなくなるのは、老婆になったときに、死に目に近いときであろう。箸が転げて笑うのは女である。男はそんなものでは笑わない。女は、身に覚えのあるもの目に見えるものしかおかしくないのだ。政治や社会現象は目に見えない。抽象画である。女は笑うことが出来ても、嗤うことは出来ない仕組みに身体が出来ているらしい。

--

□

▼水の流れが元には戻らないように、私の瞬間に考えることは、正確には、二度と再現できない。それは生きている自分の姿にも当てはまるものであろうし、日常の自分の姿や言葉にも当てはまると思う。

無数の感情のなかにというか、刻々と変化する心理の上で、私たちの五感は刺激を受ける。

今年のわたしは、体や心のどのあたりをどのように、刺激されたのだろうか。

棄てられずに残っている言葉の断片から思い出している。

---

2010年12月18日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 飛鳥 ― を歩きながら考える

---

飛鳥を歩いたときに、少しこの時代のことを考えている。  
まあ、私の口癖であるのだが、夫婦でこんな話はほとんどしないなあ。

――

飛鳥時代の人たちの日常会話を想像したことある？  
幸せとか豊かという言葉はなかったな一、多分。

「環境」という言葉はない。  
「宇宙」という概念もない。  
「心臓」とか「命」ということもまだ言葉になっていないだろう。

もしかしたら、幸せという概念もなかったかもしれない。

ほとんど、犬やサルたちの会話に似ていたかも。  
感情と感覚くらいを言葉にできただけで、文字が使われ始めてモノの名前を呼ぶ習慣が付き始めたころや。

しかし、  
そのころでも、戦や争いはあったんやな。

でも、神に対する畏敬も大きかった。

人類は、言葉と文明と知識を技術を得て、畏敬の念を忘れてゆくのだよ。

――

橘寺、川原寺に行けなかったけど、あの付近に佇むと、人間の生身の原点に戻れるような感じがするわ。

## 断捨離

---

断捨離が話題だそうです。

上手にブームを作るから、作者というのは大したもの、メディアも抜け目がないと思う。  
その一方で、その着想の過程が大事やろ。  
それが押しなべての感想。

--

断捨離。

当たり前のことをもっともらしく解説すると、社会が過剰に反応してブームが起こったり、ベストセラーになる。そういう社会を考えると世相が見えてくる。

本来ならば、人々はそういう摂理を生活のなかで自らの力で見出すのが望ましいわけで、今や現代社会の実質上の舵取りをしているメディアによって(断捨離 ブームが)生まれて、商業主義に押されてちやほやされる。

断捨離、そのものをとやかく言うのではなく、その本の書かれていることは素晴らしい。本についてはそれ以上は何もなく、どうぞみなさん学んでください。

だが、こういう現象を見ているとすべてにおいて流行を扱う社会がオカシクなっている。

人は、行動規範やその考え方、物事の摂理、原理などを、他人や外部から与えられるのではなく、自分で見出すのが自然であり理想であるはずだった。

このことを書いたベストセラー本の最初の数ページに相当する中身は、一人一人が日常においてあらゆるものを見つめて自らで導き出すものであり、ここで最も重要なことは、そういうものが生まれてくる過程であり土壌であると思う。

そういう過程をカタチにしない世の中が、不況に代表される混沌を生み出しているのだ。決して過言ではないだろう。  
(R1.1)

---

2010年12月25日(土曜日)【[随想帖 I](#)】

---



## 斧入れて香におどろくや冬木立（蕪村）

---

青空がガラス越しに見えている。

しかし、山茶花の花が揺れている様子から風はなかなかのものらしい。

クリスマス寒波というらしい。

この頃のわたしは少し枯れ気味で、目でも耳でも刺激を受け止める器を半分ほど閉じているままだ。

こんな時には、蕪村がいい。

斧入れて香におどろくや冬木立 蕪村

はっとさせられる。

いや、

はっとさせられなかったら、もう一度自分を磨かねばならない。

---

2010年12月25日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 年の終わりに考える

---

あと二日出れば、仕事を収めることができる。  
まあさまざまなことを思いながら年が更ける。

(じっくりと考えてみようか)

ということで、12月の昔に書いた日記からトラックバックを集めてみた。  
(ケータイではトラックバックは見えないみたいです)

同じようなことを考えているのが、進歩がないというか、世の中そんなものなのかもしれない。

--

おふくろに電話をしたら、28日に餅つきをしたいという。  
今は誰も手を貸してくれる者はなく、一人で機械でつくという。

餅をつくゆとりを失うほどに社会は多忙なのか、と問いたい。

丸く丸めた鏡餅は自分で作る。  
手にあかぎれを作っても縄をしめてこそ、本当の正月が迎えられるのだらうと思う。

しかし最早や、何年も前から、命をお金で買うような時代になりつつあるのだから、感謝もお金で買うのが当たり前になるのかもしれない。

古代人は崇めたという神。  
それは、太陽であり水であった。さらに、火であり木であった。  
その神は、哲学的にも普遍的なもので、私たちの心にとっても不可欠なものであったはずだ。

どうしても  
科学技術の進化が豊かさをもたらし、神が御座なりにされ、心が廃れたとしか思えない。

何が悪いのかということではないが、自分たちの環境さえ、豊かさや快適さを盾にして犯してしまってゆくところが信じられないし情けない。  
結果が良ければいいじゃない、辻褄が合えばいいではないか、という声には、呆れてモノも言えない。  
過去に辻褄が合った試しは一度もないのだから。

## 春先はもぞもぞする。

---

少し陽気が穏やかになってきたので、自室に居てパソコンの前に座ることが増えてきました。  
青空を見ながら、窓の棧の前を鳥がずっと通り過ぎると、春の到来を目で感じますね。  
昨日は雪が降りました。けれども春の息吹が満ちていた。

どこかにも書きましたが、宮本輝の作品の感想をすべて書こうと思えば寿命が尽きます。その時に書いておけばよかったのに、もう一度読み返すと浸ってしまうので浮き上がってこれなくなる。もう一度読まなければその隅々までもは思い出せないし。

忘れることも大事なんだから、と言い聞かせながら、ハズレくじは引きたくないぞと思いつつ、まだ読んだことのない作品に手を伸ばしてみたり、古典を読んでみたり。時には歴史解説であったり、専門の数理科学の本であったり。でも数学の本はすぐ飽きてしまう。

それでも、宮本輝を読み返した理由は、何故、ロカ岬だったのか、その時に何を私は思っていたのか、タイムスリップしたかったからかもしれません。

関わりのある方のところにお立ち寄りして、静かに引き上げてこうと思っているのですが、もしかしたら何か通じるものを感じあいながらひと言でも言葉が交わせればという期待がある。昔、電車の中で隣の席の人に話しかけたこともあったけど、おそらく二人とも電車を降りた後の余韻を最高に楽しめたはずだ。いいえ、今はそんなおおらかな時代じゃないかもしれないな。

mixiも随分と変わってきてしまって、が近頃の口癖。

この中をいろんなものを求めながらさまよう人たちそのものには大きな変化はないにしても、たとえばそこ流れる水の温もりや街の風情が変わってしまうと全然違う街に見えるように、私の周りを通りかかる人たちもちょっとかわってしまっているのかもしれない。

宮本輝のファンは、変わらないのだな。

そんなことを思いました。

ファンだというだけで、マイミクになってそれきり音沙汰もないけど、揺るぎない安心感と静かに残っている足跡だけで、大切なマイミクを(おそらく)感じあっているような方たち。

別に友だち(マイミク)じゃなくてもいいのにね。

そんなこんなで、永年やっていた読書部も畳みますと宣言して、それでも何も言ってこないのに、やっぱし、ロカ岬の話に足跡を残してる。

きっと、

(会うことなど絶対にないと思うが)

実際にあったとしても話題に困ってしまうのだろうな。

まるでラジオの時代にラジオドラマのヒロインを夢見て追いかけたころのような優しさを、今の緩やかになろうとする暮らしの中に求めているのかもしれないな、とも思う。

春先ってのは、もぞもぞする。

身体のだこかだったり、気持ちだったり、景色だったり。

空気だったり、水だったり、音も…かもしれない。

と、そんなことを考えていたのだが、

こんなことをブログに書くために走り書きして

これはあなたへ届けてようとした手紙だったのかもしれないと  
苦笑いしながら、考えている。

## 生存証明という日記があった

---

昔、「生存証明」という日記をよく見かけたものだ。

死んでしまえば自分で日記は書けなくなってしまうので、誰にも内緒でブログなどを書いていた場合には、永遠に知られないまま終わってゆく。

だから、生存証明という言葉に大きな意味があるのだろう。

何か、不手際を起こしたり失敗をやらかしたら、それが飲酒運転のようなものなら間違いなく新聞は名前と年齢と職場と役名を報道するのだろう。面白がって。

死んでも報道するかというと、それはない。

----

雪が降って

いっそう

春が近くなったと実感する。

---

2011年2月16日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

ゼロに近づく。

---

ついこのあいだのこと、ノートにそう書いてじっとじっと眺めている。

数理科学でメシを食っているとゼロという概念はとても重要であるものの、反面、無意識の中にあることもある。

すべてはゼロに近づく。詰まりは、逆数を取ることで無限大へと広がる。

人は、生まれたてのときにおいて無限大の情報量を受け入れることが可能だ。だから赤ん坊は空箱。エンプティセット、空集合だ。

空っぽの自分に無限の情報が流れ込むから、時間が過ぎるのを速く感じる。情報量の側から見れば時間が止まって見える。

年齢とともに情報は減少する。そこで、感動することが薄れ、時間が流れるのを速く感じる。クロックが遅くなっているのだ。やがて止まって生命は終わる。

――

世の中の不都合への怒りも、また飲みも自由にその感想を述べることができるという世の中で、贅肉だらけの情報が飛び交っている。

総理のマイナスを指摘する声が聞こえてくる一方、マイナスをいう人にプラスも指摘できるのだろうか、という疑問。定性的な評価ではなく定量化した評価力を失った、自己満足だらけの情報量に纏わられた人々があふれ、情報というものに捻じ曲げられてゆくのが滑稽だ。

プラスを抽出する能力のないモノたちが世の中の情報を牛耳ってしまい、ツイッターやソーシャルネット、果てはインターネットに吞まれて滅びてゆく時代が来るだろう。

――

私の体内クロックは遅くなりつつある。

遅いクロックだからこそ見えてくるものもあるのだ。

社会学者が最も、今、フーリエ変換を勉強しなさいねばならないのかもしれない。

---

2011年2月26日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 有事斬然 無事澄然 失意泰然

---

東北地方太平洋沖地震に伴う電力不足に対応するための家庭ですぐ出来る節電 21  
という呼びかけを地球温暖化防止活動推進センターが行っています。

1. 暖房の温度設定を控えめ(20℃)にする。
2. こたつやホットカーペットなどの部分暖房を活用する。
3. 暖房時に、窓に空気層のある断熱シートを貼る。
4. 暖房時にカーテンを閉める。
5. エアコンのフィルターを掃除する。
6. 暖房の使用時間を可能なかぎり短くする(就寝前に1時間消すなど)。
7. 暖房時に部屋のドアやふすまを閉め、暖房範囲を小さくする。
8. 暖房時に家族がいっしょの部屋で過ごす。
9. 照明を使う時間を可能なかぎり短くする。
10. テレビの画面を明るすぎないように調整する。
11. 電気ポットの保温をやめる。
12. 炊飯ジャーの保温をやめる。
13. 冷蔵庫を壁から適切な距離を離す。
14. 冷蔵庫の温度設定を強から中にする。
15. 食器洗いでお湯を流しっぱなしにしない。
16. シャワールの利用時間を可能なかぎり短くする。
17. お風呂の自動保温を止める。
18. 衣類乾燥機や洗濯機の乾燥機能を使わない。
19. 保温便座の温度設定を下げる。
20. 使わないときには便座のふたを閉める。
21. 使用していない電気機器はコンセントから抜き、待機電力を減らす。

――

私はこのすべてをすでに5年以上前から実践していますが(仕事ですから)、興味があることは、まさかこのことを知らなかったとか、無視していたとか、まあいいやで済ませていた人たちがたくさんあったとしたらどうしよう。これはちょっと見逃せないことだと思う。

平成17年(2005年)ころから相当に喧しくPRLしてきたのだし、「美しい国」(うつくしいくに)という言葉を安倍総理が仰った時に「憎いし苦痛」(にくいしくつ)と、逆さまから読んで嫌味も書いてみたりしてきた。

――

◎今の暮らしよりも、少し苦痛を強いて節電や生活レベルを落とさねばならない。「苦しみなしに節電ができる」なんていう甘いモノではなく辛抱を強いて今を打開すべきだ

◎今日の夕飯の5皿の一番端っこのお皿を節約して、世界のどこかで苦しんでいる人へ向けて届くように工夫をする

◎自分のお皿に盛るのではなく、隣の人のお皿に盛る。自分のお皿にはどこかの誰かに盛っていただけるようになる

このような気持ちをと呼びかけた。

――

子どものころに「椅子取りゲーム」をして最後の子をはじき出す遊びをしたことがあったのを記憶している方々も多いだろう。

あのときのルールが、取った椅子を誰かに捧げて、自分も誰かに捧げられて、複数捧げられた人はまた誰かに捧げて、ゲームを続ける……と習っていれば人の心は違ったものになっただろう。

21個の節電項目を見ながら、これらはすべて誰かに捧げるために行っているのだ、と感じる。

これまでに「豊かさと満足感」というテーマでくどいことをこの日記やブログで書き続けている。

自分たちの「豊かさ」をきちんと振り返って今一度「あるべき姿、あるべき方向」をみんなで考えることが必要だ。当面は募金や支援、節電でよからうが長期的戦略を睨んでいる澄み切った眼が必要だ。

改めて

自處超然(ちようぜん)

處人藹然(あいぜん)

有事斬然(ざんぜん)

無事澄然(ちようぜん)

得意澹然(たんぜん)

失意泰然(たいぜん)

とあえて書く。

---

2011年3月20日(日曜日)【[随想帖1](#)】

---

## 地球と人類が交わした約束

---

四月の初めに考える([4月3日](#)の日記)のなかで

自然の移ろいにうっとりさせられながら、こうして春がやって来るという約束は百年も千年も昔からなされていたことであろうと思い、また一方で東日本に地震災害にもたらした地震も地球と人類が交わした約束であったのかもしれない……とも考えたりしていました。

と書いた。この一方で…と続く一節、「地震も地球と人類が交わした約束であったのかもしれない」の箇所が誤解を生むということでチェックが入った。

しかし、私はこの記事の中でもっとも言いたかったのがこの「地震も地球と人類が交わした約束であったのかもしれない」という箇所なのだ。

人間には、幸せになったら昔のことを忘れてしまうほどに、あほなところがある。少しは反省しなくてはならないのだが、その反省の弁が様々なメディアで騒がれているような内容で、まだまだ心のどこかに駆引きがあって、損はしたくないし得したい。幸せ逃したくない。そんな気持ちが見え見え。

都心機能をどこぞ安全なところへ移動して、東日本を縄文時代から住んでいた人々に返納しようと提案するような人はいないのか。

東日本、東北地域に古来からあった文化を取り戻そう。

---

2011年4月13日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 負けたの、悔しいけど

---

ヒトは、自然を畏れなくなってから、自然にすぐ負けるようになったね。  
科学技術が進んでからだな。

地震にも負けた。縄文人は負けなかったよ、きっと。

賢って本当かよ。そう思っているだけじゃないの。弱いよ。

原始的で貧しくても強い方がヒトの本当の姿だよ。

豊かさを勘違いしてるよ。

ずっとそんな疑問が頭にある。

---

2011年4月15日（金曜日）【[随想帖 1](#)】

---

## 怒りを発する

---

アウトドアの話(省略)を書きましたので、そこで学ぶべきことも少し触れます。

やはり、今は遊びでアウトドア、という感覚の方が多いのですが、本来は人間と自然との共存としてのアウトドア生活だったと思うのです。

坂道を降りて崖の下の河原に水を汲みに行くから水を大事にするのだし、一生懸命に木を擦って木くずに火をつけるのを経験して火というもののありがたみを知る。

現代人は(…と、ひとまとめに括ってしまっては叱られるかもしれませんが)、やはり楽しいからのアウトドアであり、それらが歴史的に文明化してしてきたことを理解して学ぶという手順を省略化してしまっています。

そのあたりに対して、自然という私たちをとりまく神様のようなものが怒りを発したような気もしています。

石原慎太郎の「天罰」発言が波紋を呼びましたが、内容に筋違いはありましたが、「天罰」を意識したという点ではこの人も捨てたもんじゃないと思いました。

---

2011年4月16日(土曜日)【[随想帖1](#)】

---

## 長い歴史

---

福島県の友だちの日記を読む。

|『人と土は離れられない』  
| 今、今年の米作りがまだ許されていない。

――

放射線が降り続き、農作物の作付にも影響が出る。  
季節は容赦なく春を迎える。

田一枚植ゑて立ち去る柳かな 芭蕉

――

1年後にどんなことをしているのか。  
3年後は？  
10年後は？

今の私たちには未来のこの現場の姿が見えてこないし、実際に見ることができないのが現実です。

1年後も、報道は同じことを言っているかどうかは不明で、むしろ冷え切っているかもしれない。

水を今と同じようにかけ続けているかもしれない。  
窒素を送り続けているのかもしれない。  
退避した人の生活も食事も、今とさほど変わらないまま、1年が過ぎているのかもしれない。  
未来が見えないと不安になる。  
だから、精神的もまいってくることになる。

だけど、ここで、事実と想像の話を決して混同してはイケナイのよね。

長い歴史の中に、ぽつんとコメの生産がゼロという空間があっても仕方がないことだな。  
現実として今は悔しいけど受けるしか選択肢はない。  
間違いなく無い。

長い歴史って……

- ・人の寿命の80年の歴史年表。
- ・暮らしの進化の歴史年表、世紀で区切るか
- ・文明の進化の年表…千年で区切ってみようか
- ・人間の歴史からすれば100万年の刻みになる。これでも地球の歴史には程遠い。

地震はこの最後の歴史年表の上で鼓動をしているのだし、人の我欲は最も短い時間の刻みの上にいるのだ。

## 将来を考えるととき……

---

(Gさんの日記に書いたコメントですが、あとで見直します)

子どもであっても大人であっても、大局的に見たら子どもなんだと思うことが多いこのごろです。

人は永遠の欲望を絶やすことなく持ち続けることで生き生きとしておれるし道を拓くこともできる。

畑を耕すのは簡単なことかもしれないけど、それが実は簡単ではないのだということに気づいたときが、ひとつの悟りの開くときであり、畑に実る作物が来年も再び実をつけることを夢で描けたら、ヒトとしての才気をひとつ生かしたともいえるのか。

来年花が咲くかどうかは予期できないし、来年嵐が来るかもしれないことや日照りに見舞われるかもしれないことを考えると、必ずしも明るい材料ばかりでもないのだが、人間というのはそういうときにこそ逞しさをプラスに換えて知を結集し、長い歴史で築き上げてきた文化の礎のもとに、楽しく生きているのだ。

そんな暮らしに絡みつくように、人が目の前に現れて、これまた自分の人生は二転三転とする。  
スリリングで面白いことは、なかなか思うようにことが運ばないことと、そこに愛が生まれ、時には憎しみが生まれ、義理を果たし情けをかけて、この世の川を渡る。

長いのか短いのか、人生というのは見通せるようで見通せるものでもない。  
その中で自分の一歩先と百歩先を同時に見つめて、沿道の景色にも目を配り、人を助けまた助けられ、ケラケラと笑いながらずっとゆけたら幸せだ。

一人より、二人がいいよ。私はそう思う。

そこで少し考えるけど

質のいい一歩と質の悪い一歩があることは確かだ。

百メートルを全力で走るとしても、きれいなフォームなら速く走れる。

ほんの少し科学の力を借りて、歩幅やつま先の動きを直せば、速くなれる。

大勢の人が交差点で衝突をしないことや、散歩をしている爺さんが水溜りにハマらないのは無意識に前を見ているからだけど、人生の一歩だって前を見て歩いているさ、と思っていると大間違いのこともある。

さらに考える。

前を見るって……何だろう。

絡み合った人や、人の心。さらにそれを取り巻く事件を見ながら、私たちは何を思いつつ歩んでいるのだろうか。

水溜りに落ちなければいいわ。

車に轢かれなければいいわ。

雨に降られなければいいわ。

美味しいものが食べられればいいわ。

とりあえず私にだけ、放射線や津波が来なければいいわ。

私の家族が幸せならいいわ。

わたしの身近な人が幸せならいいわ。

地球上のみんなが幸せであって欲しいわ。

幸せって何だろう。

誰もが一度は考えたことがあり、答えを持っている人もあるし、決めきれずに追いつけている人もある。

一歩、百歩、千歩。答えは刻々と変わり、百通り、千通りの答えが待ち受ける。

旅はまだまだ果てしない。

でも空を飛べないから、大空から行く果ての道のりを見ることもできない。



---

2011年5月21日（土曜日）【随想帖1】

---

## 愉しむ

---

「楽しむ」と「愉しむ」を  
きちんと区別して用いている人もありますね。

時間が過ぎて  
子どもを育てて  
自分も歳を食って

つまりそれはある意味で社会的責任を果たすことだと次第に気がつき始めて、

時間を送りながら  
自分は哲学者になってゆく。

---

[#480.発想の転換](#) [くみさんのブログへ](#)

---

2011年6月12日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

お前ら、近くに住んでみろ！

---

放射線というのは、発生源があって、そこから水が流れるように出てくるのよ。

つまり、発生源は、アソコでしょ。

そして、福島 of 皆さんや大勢が、発生源から飛び散った水のようなもの(放射線)をかぶっているのですけど。

大事なのは、その、出てくるところをきちんと教えてよ、といたいのですわ。

壁の隙間なのか。

煙突なのか。

ドアなのか。

そしてそれが、なぜ散らばっているのか

目に見えるように教えて欲しいの。

みんなそう思っていると思うのに

報道のボケどもは、数値ばっかし見せびらかして

天災の人の報道は、もういいよ。

気の毒なんだけど、天災なんだから。

人災の事故の、その後をどうするかをはっきり決めて

埋めるとか、蓋するとか

早く言え！と言いたいよね。

これからの原発の話も、政治の話もどうでもいいの。

別のテーブルですればいいのよ。

現場をどうしたいか。

何をしたら、どう良くなるのか。

明示しろ。そういいたいの。

お前ら、近くに住め！という言葉は、そういう気持ちもあって出て来るんだと思うな。

---

2011年6月20日（月曜日）【随想帖Ⅰ】

---

## 赤い花アナタの心に突き刺して ― 九月彼岸篇

---

9月が終わってゆくね。  
あっという間に。

秋は好きなのですが、  
好きというにはあまりにも足早に終わってゆくので  
好きを愉しんでいる暇がない。

――

台風通過が、9月21日  
彩が沖縄に、9月22日

飛鳥散歩は、9月24日  
ゴロンゴロンと9月25日

――

微分積分というモノを高校時代に習ったのですが  
この考え方が数理学として確かなものになったのは  
割と近代であったのではないのでしょうか。

それまでは、解析学というよりも、  
数列の概念でモノの変化を捉えていたのでしょうね。

数学理論は難しいので得意な方に任せるとして  
数学史や科学技術史を分かりやすく紐解いてゆくと  
社会の哲学の変化を一種の理学として見つめるのに役立つような気がする。

変化を読み取るということは  
本能的にも非常に重要な才覚で  
学理的にも欠かせない。

無意識に人々の心理に潜むものを掘り起こし  
役立てるというのは改革に欠かせないことで  
微分的にモノを観察する習慣は、  
多くの人々に無言で求められている。

\*

秋という季節が、このささやかなる変化を  
しかも予測不可能な変化を連日起こすために  
好きだといわせない冷たさを感じるのかも知れない。

言ってみればやんちゃな季節なのだ。



- 
- ▼秋の味届けてくれて初対面
  - ▼心から好きですの言葉、傍に置く
  - ▼傍らに置いて立ち去る恋手紙

得体の知れない女に  
不惑な魅力を感じ  
夢中になってゆく  
売れない詩人の書くドラマ。

しかし、だ。  
結構、日記として面白い。  
そのころのドラマが蘇えってくる。  
現実忘れてしまって、何ひとつ浮かばないから  
ある意味では都合がいい。

---

| 9月22日 木曜日

---

- ▼赤い実はわたしの心に淋を置く
- ▼好きな人への手紙は嵐の波にさらわれて

どうやら、好きな人のことは諦めて  
ひとりで秋を愉しもうと決意をしたのか。

いいえ。

ねこがよそ見をする振りをするようなもんですか。  
(分かるかな)

---

| 9月23日 金曜日

---

- ▼秋分にそそくさ季節を片付ける
- ▼なすび和えひとりで食べて夏送る
- ▼秋茄子を食うておかんを思い出す

なすび和え。  
これは伊勢平野の人だけが食べるものかもしれない。  
茹でたナスを味噌で和えるだけだ。

朝ごはんのあつあつにぴったし合う。

---

| 9月25日 日曜日

---

- ▼赤い花アナタの心に突き刺して

激しさはさらに増すのだが  
私はあの人が穏やかに  
花を生けている姿が好きだ。

あの人が好きなのではなく。  
あなたの心に突き刺しても  
かまわないんだ。  
大好き、と言いながら。

---

2011年9月25日（日曜日）【随想帖Ⅰ】

---

## 月丸く、さらに木星へと近く

---

ちょうど1年、またはそれ以上前のころの日記に読み耽ると、  
やはり昔には戻れないのだと、少し、悲しくなる。

少しばかりの劣等感と  
誰にも負けない自信と  
きらきらと輝く目が必要だ。

「着地点を見つめなさい」

すばらしい言葉だ。

(2006年10月12日)

---

今年は12日が暦の上での満月だった。

### ▼月丸く、さらに木星へと近く

この夜に、明るく輝く月はなかった。  
月はまあくなり、木星を引き寄せてゆく。

秋の深まりをしんしんと感じる。

昔の日記を捲ってみるとそれほど進化のないことが自分でも分かる。そもそもそんなに進化などあるものか、と開き直るのだが、僅かばかりの変化がいつか大きな変化を生むことも間違いではない。

プロ野球の投手は、たくさん曲がるカーブが多くの三振を奪えるというものでもないのだから。

\*

今年は、ふたりで。

ひらがなで、ふたりと書く。

優しい感じがする。



[サントリー 山崎](#)

## 叶わぬもの その2

---

叶わぬもの を書いて、静かな余韻が訪れる。

わたしは、少しずつ昔へ昔へと引きずり戻されてゆくのだ。  
輝かしいときもあれば、墨色に沈んだときもある。

浮き沈みを繰り返しながら、今もこうして得体のしれない時空を浮遊している。  
正体が不明であればあるほど、もしかしたら、自己満足のできる作品が仕上がるのかもしれない。

しかし、人はそんなものなど、これっぽっちも評価しない。

――

ふとしたことで、1978年からの4年間に出したはがきを再び見た。  
それは、万年筆でかいた年賀のあいさつ文で、中学時代に特別に仲良くしていた女の子で、高校時代の空白の時間を経て大学時代にときどき手紙を書いていたのだった。

手紙にはいつも、東京を離れていつかは生まれ故郷に帰りたいとか、就職を決めたときには、このまま京都かもしれない、など書いている。

十九歳から二十三歳までの手紙をみて驚くことは、今とまったく字の下手さ加減が変わっていないこと、文体までも似ているような気がするからだ。  
わたしにとったら宝のような手紙をその人は処分に困っているようだったので、写真に撮ってメールで送ってもらって見ることができた。

棄ててもらおう。

――

話を、「叶わぬもの」に戻そう。

▼一度だけ貴方を憎んだことがある

ここには憎んだ理由も書いてなければ、誰を憎んだかにも触れていない。  
貴方が誰かも分からない。

本当に1度だけだったのか。  
2度と会わない人だったのか。  
会えなかったために憎み続けることができなかったのか。

▼あの頃は海がみたいが口癖で

さて、どこの海だったのかな。  
誰かと見に行きたいと願っていたのだろうか。

海は何をわたしに語りかけてくれたのだろうか。

▼君の住む入江の街の朝が好き

そんな入り江にわたしが立ったことが果たしてあったのだろうか。  
朝日を見ながらわたしは無言で居るのか、居られるわけもない激しい衝動。

静かな風の中を漁船が外海へと出てゆく。  
そんな静かな風景をドラマのように夢見るだけだった。

君が好き。そう言いたかったのだ。

▼いつまでもナインショでいいの好きなこと

叶わぬものは、それならそれで  
そっいつか忘れてしまうまで、置き去りにするしかないよね。

自分で自分に、  
ナイショなんだからといい続けて  
叶わぬものは、忘れてゆくのだらうと思う。

4つ書き残した十七音のつぶやきも  
きっと十年後くらいには、  
その意味すらも、思い出せなくなっているような気がする。

新しいロケ地で新しいドラマを撮り始めなきゃ行けないよ、と自分に言い聞かせてみる。

---

2011年10月29日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

赤、鮮やかに、慎ましく

---



センリョウ

2011年11月 2日（水）

11月2日

庭を少し散歩すると、軒先で干し柿が食べごろになっていたの、ひとつちぎって食べた。

秋は赤がよく似合う。

▼鮮やかなオヤジの遺産言葉なく

▼赤鮮やかに慎ましく庭に居り

---

2011年11月 4日（金曜日）【随想帖 I】

---

## 足元に霜柱あり容赦なく踏む

---

うしろすがたのしぐれてゆくか

種田山頭火がそう詠んだ時雨の冬がやってきた。

早夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く。あのころには時雨を少しばかりは楽しみにしていたのかも知れない。時雨という言葉の響きが好きなのだ、きっと。

—

平成18年の今ごろに発行したメルマガの巻頭で私はこう書いた。

11月12日の早朝は、鈴鹿山麓でも晴れ間と時雨が交互にやってくるような空模様でした。

時雨の合間にきれいな虹が出ていました。

その虹をカメラに収めようとして外に出たら、冷たい風が小雨混じりに吹き付けてきます。

「早夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く」 そんな季節の到来です。

そのころ、御在所岳頂上の気温はマイナス1℃。

夜明け前には初雪が舞っていました。

例年より6日早い記録だそうです。

(津地方気象台発表)

■

今年も二三日前に気象台が初雪を発表している。

ぼんやりしていると冬に凍らされてしまう。

ゆるゆる生きる。そういうことを仰る方が多いですけど、ゆるゆると激しくは適度に混在してこそ、それら本来の力を発揮する。ゆるゆるばかりではいけない。

木枯らしの吹く冬には、それなりの備えをして冬に望み心も体も鍛えて四季の変化を愉しんでゆく。

うしろすがたを追うのもよい。

ふりむくのもよい。

私はどこに行くのだろうか。

そこが大事なのだ。

足元に霜柱あり容赦なく踏む ねこ

砂女さんのブログ([雨降茫々日々記](#))から

[君に似たうしろ姿を追いぬいてとんとんとんでもふり向かず](#)

## 遠慮がちに

---

[特別な予定などない明日でも](#)というブログがあります。まあ、今までにもふらっとネットを彷徨っていて出会って、悲しいことに知らない間に姿を消してしまった方もあるので、この作者の[komukana](#)さんもいつか、会えないままに終わってしまうのかもしれないと思うと、ここにお借りしてくるのも、これからたびたびお借りするかもしれないことも、申し訳ないような気がするし、また自分のブログとしても不完全だと思ったことがあった。

しかし、現代ほどネットが自然消滅的なものを美学として、一時的であれその美しさを燃やそうというのであるならば、私だってここで燃えて尽きてしまってもそれはひとつの完結の姿なのかもしれない。

+

095

遠慮がち差し出す君の左手を握る加減がまだわからずに 香村かな  
2011-11-15

+

この握られた手はいつまで握ったままで、二人はどこに行ったのだろう。

そんな野暮なことを少し考えたのだが、そのあとで、ふと、私の過去にこのような遠慮というものが存在したことがあっただろうか、とも思った。

人を好きになれば、我慢できずに「すき」といい、別れたくなければ「いやだ」と叫ぶ。

もしも「遠慮がち」に生きていたら、どうなったのだろう。ふと、そう思う。

---

2011年11月27日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 引き戻るところ

---

記憶というものはとても曖昧で、先日も学生時代に住んだ街を30年ぶりくらいに歩く機会を得たのですが、駅前はこれほどまで狭かったらうかとか、商店街の規模もこんなものだったかと感じたのです。

二十歳から二十四歳ころという最も信頼できる記憶細胞を持っている時期に、この程度のことが正確に頭の中に残せないのだから、思い出というものは甚だいい加減なものなのだとということがいえる。

三角形の面積を求める公式や三平方の定理を中学時代に一生懸命覚えて、後になって微分積分を習ったときにそんなものがいとも簡単に証明されていてしまい、また新しい数学的な難問が頭の中に蓄積されて、私たちの頭脳は解析することを経験でなくカラダで覚えて使いこなし始めるわけですけど、そこに必然として存在する記憶力というものと、玉虫色にあせてゆく生活の中の思い出や恋愛感情などの記憶を司る力とは、もしかしたらまったく違う場所に想像もできない仕組みの違いをもち置かれているのではないか、と思うのです。

ヒトは、だから、信じられないほどアホになれるし失敗も犯すのでしょ。

\*

砂女さんは[雨降茫々日々記「671」](#)のなかで

「この頃、どうも目を開いているときより閉じているときの方が色んなものが見えるような気がする」という一節を書いておられ、本文を読み終わってからも、なお歌人というものは理学者のような視点や思考回路網を持っているのかもしれないのだな、と思ったのです。

私も、果てしなく、昔に引き戻られつつある。遺伝子で残せないものを遺さねばならないとこのごろ切実に思う。

---

2011年11月30日（水曜日）【[随想帖 1](#)】

---

## 去年の今ごろ

ふとしたことから去年の今日のつぶやきに再会して、そこに自分の進歩のないことに気づくのだが、ひとこと「進歩がない」といえばマイナスの意味にもなるものの、ヒトはそう簡単にあらゆる面で進歩できるものでもなかろうから、そういう窪んだ時期があってもいいのではないかと思ってみたりしている。ジャンプをする前には屈むのと同じようなものだろう……。

私たちは学校にいく過程で三角関数というものに出会う。 $\sin$ 、 $\cos$ 、 $\tan$  である。この基本的関数は、その前に習った  $x$  の2乗、3乗などという  $n$  次関数と、後で習う複素関数とあいまって、世の中のすべての状態を近似的に表してくれるとっていいだろう。 — その意味の持つ一番大事なところを高校の数学では教えないで、解法に終始するのが少し残念だが。

人生においてであろうが、人間関係であろうが、ヒト社会でも、動物たちの仲間でも、生命の進化においてても、また心の変化においてても、私たちのすべての行動のプログラムにはそういう関数成分が含まれていて、その関数には終わるものがなくどこまでも続くことを定義している。

ヒトは転んでも立ち上がらねば歩き出せない。転んだままでなければ移動できないならばそこには事情があろうけど、転がったり滑ったりする技術を身につけてゆく。起き上がると必然的に速度が必要になる。つまり、速かろうが遅かろうが、動作は速度を持った行動(走ること)に変化してゆく。

時間軸上に、そのように刻まれる私たち。

私たちの心。

そして、私たちの悲しみや喜び。

それを受け入れることは決して怖いことでも不名誉なことでもなかった。

永遠の美学としての数学関数の中で生きてゆく。

なんども走って転んでまた走る (ヌカガジュンコ)

フーリエ変換というのがあって、押しなべていえば時間関数で表した軌跡を周波数成分として解析(変換)するのだが、これと似たようなことは人間の頭の中では比較的容易く行われてきているように思う。

たとえば、ヒトの笑顔をフーリエ解析してみるとか。怒りや喜びであってもいい。結局のところ個性だ何だといいつつ、その喜びや悲しみには数知れない背景や重みがあるのを、「嬉しさを★5つで表現」みたいな調子では行かないだろうということも知っているし、人には言えないものを聞かなくても理解しあうという心も持ち合わせている。だからヒトはそんな曖昧さをきちんと分析しているのだ。

ヒトの性格だって同じだ。

あらゆるところで食い違いがあり異質であるにもかかわらず、とても仲良しでくっついて離れない二人だっている。(私たち夫婦みたいに)

歯車だって、どんなすばらしい技術者が最高の設計図を描いたとしても、必ずギシギシと音を立てるだろう。止まってもいいし、悲鳴を上げてもいい。歯が磨り減ってがたがたになってもかまわない。

いつかどこかで誰かが定義付けた複合的な三角関数のウェーブの上をサーフィンでもするように流れていくしかないのだ。

歯車の数がそれぞれ違うからときどき止まるときどき走る 砂女

— 師よ、転んだらどうすればいいのでしょうか？

— なあに、起き上がればいいのだ。

そういえば、そんなことを学生時代のノートの裏表紙に書いていたなあ。

あの大学ノート、どこにいったのだろうか。

毎年、同じようなことを振り返りながら年が暮れれてゆく。

——

[\(前年同日を見る\)](#)

---

2011年12月10日(土曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## ごみー最近の言葉メモから

---

### 最近の言葉メモから

#### ◆年金

年金って老後に収入もなくなったときを保証してもらえるように若いうちからかけておく仕組みです。老人が増えて原資が食いつぶされてきていますので、受給年齢を引き上げていこうとすることは理解できます。しかし、その負担をほぼ全面的にこれからの世代や払える人に頼るのは、本当に正しい筋道とは言えない。

#### ◆掛けた額に達したら辞退すべき

まず、老人になって年金をもらい始めて、自分が掛けた金額に達したらそこで年金受給を停止するのが正しいと思わない？  
余分なお金を払うのは打ち切って、生活保護の支給額に変更すればいい。そうすれば原資の食いつぶしを少しは防げるはずだ。

#### ◆高齢化社会

老人を守る、高齢者を守ることと、年金を受給者に払うことを同一線上に置かない。これは大事です。  
贅沢は敵だといった時代に還るべき。優しさも取り戻しながら。

#### ◆あさましい

自分だけ得しようとか、掛けた以上にもらわな損やという卑劣な行為を摘み取ることは、地道であっても大事ではないか。  
そして、そういうことを当たり前に行っている社会へと、今を改革せなあかん。  
早く亡くなってゆく人は、せつかく掛けたのに気の毒だが、その人のご不幸をお悔やみするとして、ほかの連中は自分の金でないものをもらって得をする必要はないだろう。そういう時代じゃないのだ。

#### ◆税金

どうして少しでも払わずにしようとするのか。  
自分だけ得をしようとするのか。  
人間として最もアホな姿じゃないのか。  
そう思う。

そもそも論ですが、自分たちの社会は自分たちの歴史の上で築いてきたのだという意識が欠落して、自分の力や努力だけで今の地位や名誉や資産を得たと思っている人が多すぎる。  
もう少し、歴史的な先駆者の知恵に感謝をしなくてはいけない。

#### ◆無人島にひとりで暮らしているのではない

税金は、払わされるのではなく、納めるのであろう。  
本当に必要な種別なのかどうかの吟味は相当真剣にする必要である。しかし、どこぞのボケ首長みたいに、何でもかんでも減税できるわけがない。  
税金とは何か。考えれば分かるでしょう。  
なぜそのようなシステムが、太古の昔に考え出されたのかを考えれば、税金は価値あるものであることをしっかり学び、その徴収方法や種類を徹底議論すべきです。

#### ◆暮らしを考える

通貨が不要な暮らしをする人はほとんどいなくなってきたものの、私たちが用いている通貨とそれが流通する社会と、その社会の構造の地域性と、それらがもたらす地域の中での通貨の実質価値を考えれば、税金というもののありべき姿が見えてきます。  
税金というシステムが東京などの都会中心の生活や経済社会を基準に作られていることもわかってくる。  
そこから見つめなおしていくことが大事だ。

#### ◆マネーはどこに消えるのか

大きな自然災害と人災を蒙ったのにもかかわらず、全然、反省しないで自分たちだけの幸福を考え続ける。  
経済的な理論は知らんけど、ウチの国にある資金は燃えて灰にならない限り、国民に戻ってくるような仕組みを作ること  
は、それほど難しくないと思うのだが、残念ながら現実は難しかったのだなあ。

#### ◆暮らし

歪んだ波形を合成してゆくと、必ずノイズと損失が発生しますが、その状態に似ているのかと思う。  
結局のところはノイズや損失というものは、中流意識の中で発生した贅沢や成金家族の無駄遣い。  
一生懸命に東北災害に募金をする方々の姿を見かけても、人の暮らしのスタイルから見直してゆかねばならないのだと  
痛感する。  
高度経済成長社会が遺した社会の中にある吹き溜まりのような無駄やエゴや贅沢をきちんと摘み取ることが不可欠で、経  
済理論がいくら先行してもこのあたりに諸悪の根源が眠る。  
しかし、それらをゼロにすることは今や不可能で、永遠に椅子取りゲームやド貧民ゲームは続くのでしょう。

人の気持ちが変わらなければ上昇望めない。

#### ◆絆

どうもこの言葉に「待てよ」という気持ちが引っかかる。  
人々は優しく労わりあっているようで、情熱を持って前進して活躍する人も多い中、(推測)2割くらいのマイナス因子で社会  
は随分と混乱して立ち止まっている。  
絆は、触媒のようなもので、本当に必要なものがほかにあると思う。

#### ◆SNS

奇麗事を飾って満足するだけの社会や、馬鹿なメディアに煽られるのはやめて、本当の哲理を考えることのできる流れは  
生まれないものか。  
軽々しいネットワークシステムがもう少し損得抜きで動いてくれるといいのだが、無理だろう。  
だったら、一切を、麻薬取締りのように両断すればいいのだ、と言いたくなる。  
麻薬の拡散は取り締まるが、メディアの進化は無条件で認めてしまった。反省は本当にないのだろうか。  
でも、自分のことしか考えない社会なんだから。…………という具合に、年金の話のようなところに戻る。

## またまたエネルギーの話

---

昔にも書いてましたが。

[エネルギーを考えるⅠ](#) 2011年5月17日(火)

[エネルギーを考えるⅡ](#) 2011年5月18日(水)

---

### ◆お馬鹿投書 ― 原発

原発がなくなったら電気に困る、という投書を、先日、新聞で見た。まだこんなことをマジメに考えている人がいることに驚いた。

### ◆電気自動車

動力を電気から作り出すことは、もはやそれ以外の方法は簡単には思い浮かばない。  
かつて、歴史の中では、電気以外に蒸気タービン、風の力、人間の力に頼って輸送機器などを動かした。

海から空へ。または地上をより速く。そのために電気というものが使われるようになってくる。

しかし、本当は、電気というものはヒトが作り出したものなのだとことを忘れてはいけない。

### ◆これからの自動車

間違いなく電気になる。トヨタ自動車がどうも嫌がっているようだが、主導権をとりたいという企業の潜在意識があるのだろう。

街の中を走る自動車は、数年で30%を越えて、10年で50%を超える。  
間違いなく、そうならなければ社会が変われない。

### ◆電力供給に変化がある

電気で走る自動車に供給する電気を今の電力会社だけが供給してゆくとしたら、社会は発展しない。新しいシステムを無から創出するのがこれからの開発者の才能だ。

### ◆近所は電気自動車

遠くへ行くときには、電気自動車をたとえば各県ごとに乗り継いでいけばいい。  
近所を走るのであっても、電気が切れたら乗り換えて走り回ればいい。  
みんなが共有するシステムが浸透しつつあるが、それがもっと社会に一般化、広範囲化する。  
そうすれば、電気自動車を邪魔する仕組みが消えてゆく。

### ◆通勤や買い物は自宅で充電

マイカーは消えないだろう。でも、電気自動車はマイカーになって行く。いつかはクラウン……のような車がお宝な社会思想は消滅し、まずは社会に自分がいてその中で車を使わせていただくという考えになってゆくと、自家用車は未来の車になれる。トヨタが拒むだろうか。

### ◆原発は、歴史の遺産

知恵が生み出したものに失敗があってもいい。  
潔く切り捨ててしまう決断が必要だ。  
自然エネルギーを使う。

### ◆自然エネルギー

それでは足りないというヒトがいるが、本当に足りないというのなら、その人を筆頭に使わずに暮らす社会を作り、そこから足りるようにエネルギー改革をすればいい。

しかし、実際は足りなくなっていると考えている。技術開発の力で必ず足るようになる。  
ここで知恵を使わずしていつ使うの？

#### ◆風と電気とバイオマス

何年か前の日記でも、しつこく書いたけど、ほとんど無反応だった。  
書くのが早すぎたのと、みんなが幸せすぎたのだった。

国民が全員失業すれば……社会はかなり改革されると、暴言を吐いている私ですが、エネルギーにおいても不幸があった  
ことで(原発事故で)初めて新しい方向を探し始めた。

だから、余計に、不幸を無駄にしてはいけない。

#### ◆贅沢を見直す

成金になったからといって安易にお金を無駄に使うな、と言いたい。  
便利を不便にしてから、見直すことも大事だ。

エネルギー問題と生活スタイルは大きく歩み寄ることが大切だと思う。

(メモなので、書き直すことは大いにあります)

---

2012年1月 1日(日曜日)【[随想帖 1](#)】

---

## 成人の日、昔を辿ることは、ヒトの宿命だ

### 【- Walk Don't Run -】遺す言葉

というのを加筆しながらホームページへ集めています。成人式のニュースをやっていたので、いろんなことを思いながら、成人式とはどうあるべきなんだろうかと考えていました。

ちょうど、ちょうど去年の今頃にあれこれと拾い集めた日記があったので、引っ張り出してきて少し読みました。(拾遺集として自分のために書いていますので後ろに貼りますが)

\*

「成人式は必要か？」のまえに考える。

成人を祝ってもらいたがる人、さらにその喜びと決意を生かして前進しようとするような進取の気性の青年を育ててゆけるような教育と社会システムを作りあげることが大切なのではないか。

スカばかりの人間を、ニセゆとり教育や甘やかし教育で、あるいは点数至上主義と経済最優先の考えで、育ててゆけば、この国の人(ヒト)は骨抜きばかりになってしまう。社会保障も教育も暮らしをいくら一生懸命に考えても、頭の中が空っぽで哲学なき人物を大量生産して、大衆迎合的波に吞まれていってしまう社会では、今からもいつそう社会は退化してゆく。

負のスパイラルを脱するには、スカとは何なのか、を考えることから始めることが必要だ。

---

1年前の日記、2011年1月 9日(日) — [成人の日ですね](#)

◆

### [成人式のころ](#) [- Walk Don't Run -]

成人式のころ 銀マドも2002年に突入です。今年もよろしく。-\*—— 成人式的话题をニュースでやってましたので、ふと思ったことを書きました。-\*—— 今年も成人式の季節がやってきた。このパティオには成人する人はいないでしょ?結婚する人はいますね。それもこれもひとつの旅立ちといえます。旅立つ時にはきちんと襟を正して心新たに一步を踏み出すと思います。その一步が闇の中の一步であれ晴れ舞台の一步であれ、心は感動に満ちていることだろうと思うのです。ところがどうも昨今の成人さんはそうではないらしい。... [続きを読む](#)

◆

[言葉](#) [- Walk Don't Run -]銀マド / 言葉 ▼言葉は、身の回りにあふれていて、ありふれたものだ。その数々の中からたったひとつに反応し、掘り下げて見つめてしまうことがある。我々はそんな巧みなことができる人間である。年末のある日、職場で、対話をするのを失ってしまった悲しい人に出会った。どうにかしてやりたい気持ちと、蝕まれていてそこへは入ってはいけないという戒めに似た罪悪感とで、しばらく私は考え込んでしまった。どうしても、対話を放棄しているその人の心の奥に私は踏み込みたかった。しかし、対話を拒む人にはその人の世界があるのか... [続きを読む](#)

◆

### [ジンクスが風上へ誘う沈丁花](#) [- Walk Don't Run -]

成人式にも出る暇もなく日夜机に向かい臨んだ試験であったが、残念ながら満足な感触は無いまま三月を迎えていたと思う。駅までの歩き慣れた道路のどこかで、沈丁花の花がぷんといいい匂いを放っているところがあった。進級発表の日には匂いを嗅ぐと期待が叶わないというジンクスがあるのだという話を聞いて、些か気に掛けていたものの、住宅街を歩いてこの花に遭遇しないで過ぎることは難しい。当時は、今のように「留年」という言葉があったものの「落第」という呼び方もしっかりと使われていた。正門を入り階段を駆け上がり教養棟の進級発... [続きを読む](#)

◆

### [オヤジの背中](#) [【2002年6月中旬】](#) [- Walk Don't Run -]



オヤジの背中 [2002年6月中旬] ▼(パティオのYさんのメッセージを思い浮かべながら書いています)▼生意気にも、子育てのことでコメントを書いてしまった。ろくに子育てもしないでここ まで来た私が書いたので、まことに失礼なコメントだったかと、幾分消沈気味である。▼これからの未来がある人には、それなりの希望と情熱と信条を持って生きて行って欲しい。子育ても然りです。それが私になかったわけではないが、ややもすると現代人には(←若者たちというとジジイみたいだしね)それが不足しているようにも思う。▼正高さんの... [\[続きを読む\]](#)



[夢を食べる虫](#) [- Walk Don't Run -]

94/01/29- 夢を食べる虫--はじめに-- 倉持さんに就職の話をし始めてみると、さまざまな連想が起こりました。それは内省的なものが多く、自分の歩んできた道を省みて一喜一憂をするものでした。冷静にみるとかなり不平不満が多いようですので、つまりは私のような人生を歩んではいけないと云う示唆なのかなと苦笑いをしています。毎度愚痴ばかりを書いては恥ずかしい限りなので気をつけて書いて行きたいと思います。こんな愚痴も諸先輩方の厳しい顔色を思い浮かべると尻ごみします。しかし、手厳しい意見 も聞ければ幸いです。特... [\[続きを読む\]](#)

---

2012年1月 9日(月曜日) [【随想帖 I】](#)

---

## 秒読みは生まれたときから

---

ふとぼんやり見てたら  
誕生日の文字が目について  
メッセージなんて送ることは  
柄じゃないからしないし  
やった試もないのだけど

どんな顔をして誕生日を過ごしているのか  
もしかして知ることができるかも思ったりして。

だんだん歳をとるので  
近頃は遺書めいた言葉を書いて作品作りをしているけど  
もっと20歳くらいから書けばよかったと、  
くすくす笑いながら 反省している。

秒読みは生まれたときから始まっていたのだ。

(ユウさんの誕生日に)

---

2012年1月18日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 感謝とか恩義とか仇とか憎しみとか。

---

たくさんの人を見送って自分も大人になってゆく。

親が死んで、世の中がはっと見渡せる。

人の宿命かな。

感謝とか恩義とか仇とか憎しみとか。

いろんな言葉があるけれど、こんな節目をいくつもこなさなきゃ、真意はわからんものよね。

これからよ、人生は。

――

先日、ある方の言葉に走り書きで上述のようなコメントを書いたのだが、この言葉には至らないところが多いことがわかる。

受け取った人は困惑するし、伝えるべきことではない部分で反応なされた可能性もあろうし、このように意味の難解なコメントは避けるべきであろうと自分に言いつつ、少し分析を試みる。

ヒトは、通則として歳の順番に逝ってしまう。このことは千年経っても変化は無い。通則。

しかし、その規則に従わない事例はいくらでもある。世の中は例外によって成り立っている。だから、確率論も存在するし、そのおかげでご飯も食べてくることができた。

親より早く逝く。逝くべきでない人が先に逝く。

私たち人間は、このような一見して不条理のようなことに底知れぬ悲しみを抱き、嘆き、苦やしむ。

ヒトの涙は、すべてが悔しさから成り立っている。悔しさを克服すれば涙はなくなるが、悔しさをなくしたらヒトはヒトではなくなってくるのではないか。つまりは、涙はヒトの証なのだとも言える。

親しい人が死んでゆく。死んで欲しくない人が死んでゆく。引き止めることはできない。

そういうものを運命といい、その重みを背負うことを宿命という。

恩義を強く感じ、人を惜しむ。そこには、感謝の気持ちがあふれる。

しかし、場合によっては仇とか憎しみであることもあろう。

死んで欲しい人があるとまでは断言できないにしても、人生の道程の上から消えてしまっただけで欲しいと思う人が過去にいたことは事実だ。私はそういう悪者の側面も持っている。

死んだら終わりであっても、許せないこともある。死刑ではなく、懲役千年というような極刑も世の中に存在して欲しいと思うことすらある。

命を亡くした人を見送るのは辛い。そしてその辛さは必然的に年齢と共に増加し、それは指数関数的に、そう、 $f(x)=\exp(x)$  的に増え続け、最後は自分である。

その1コマ1コマに自分の感情の乱れがあり、哀しみはもちろんのこと、苛立ちや憎しみ、同情、後悔、怨念、果ては無関心などもあるのかもしれない。

だが、その瞬間に自分自身を奮わせる波動のようなものは、誰の力や意思によっても揺るがせることはできず、心が正直であればその微動でさえも受け止めざるを得ない。

得てして、人は未熟で未完成で揺らぎに動じやすい時期に、困難やアクシデントなどの大きな変化を受けることが多い。いや、そんな気がするというのが正しく、それは確率の基本式を紐解けばそれほど難解ではないだろう。

人が消滅して行くときに、私たちは何を思うのか。

それは儚くも、巻き戻すことのできない過去であり、死に直面するたびに許せなかった過去や許してもよかった過去を振り返り、消えてしまったもの、―― それは命であり罪であり、または功績でもあろうが――、を手繰るのだ。

人にはそういう節がある。竹のような節目かもしれない。

その節目を、いったいいくつ数えれば自分の番がやってくるのかは分からないけど、その節目を迎えるごとに一人の人間としての自分の姿を見つめ — 暫らくしたら忘れるかもしれないが — 、広くて澄みきった視野と、熱くなりすぎない冷静な感情と、いつでも奮えることのできる心を、少しずつ固めてゆくのだろう。

ちっぽけな日常の、その刹那的な馬鹿馬鹿しさから身を引いて考えることができる時にはもう手に負えないほどに自分が覚悟をしてしまっているわけで、だから、社会は太古の昔から愚かを繰り返しているのだ。

科学や哲学がどれほどまでに洗練されても叶わないのだろうと思う。川の流れは変えることなどできない。(水は清く、光に輝くようにはなれるとは思うが)

---

2012年1月25日(水曜日)【随想帖Ⅰ】

---

## 錯覚に陥る

---

平成18年にも大雪が降った。

そのニュースを耳にしたあとに、決して意識したわけではないが、偶然に平成18年(2006年)の春の自分の日記に辿りついた。

まったく別のことで検索をしていたもので、読むうちに雪のことが蘇る。

[水ぬるむ春分に 一 塵埃秘帖 春分篇](#)

など、読んでいて「ハッ！」とする。

◇

花は散るのだ。新しい芽を出すために自らを棄てるのだろうか。

人間は、自然という奥深いものの、ひとかけらにも満たない小さなものだ。

なのに自分が一番だという錯覚に陥っている。

---

2012年2月 1日(水曜日)【[随想帖 1](#)】

---

## 詰まらなくしているもの

---

(さとこさんの日記へのコメント)

私は永年、パーな会社の技術者をしていましたが、  
こういった会社が詰まらなくなっているのは、内外の多くの人が感じているとおりです。

そのことを、あれこれ言うつもりはないですが、面白くないですね、社会が。

高額で美味しいものであっても、好きでなければ食べないような性格ですから  
いい商品を出しても、それがつまらないものだとは魅力はないです。

いまの世の中はすべてが正反対で

高額で美味しいものには、味も分からないし見抜く力もないのに飛びつく奴らがわんさかいる社会でしょ。

しかもタダたっだりしたら、人気沸騰で。

さらに、持っていないとのけ者みたいで。

そういう社会は嫌なので

田舎に引き籠もっていますけど、

さぞかし、都会は住みにくいのではないのでしょうかね。

脱線した。

ソニーも、そういう社会で企業を存続させなければならない使命が、企業経営としてあるのも事実。

まあ、だから嫌気が差して辞めたんですけどね。

あきらめるか

意地を通すか。

そんな気がします。

荒っぽい言い方ですけど。

---

2012年2月 4日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 昨日のままなら

---

Sさんが、心の病気で入院したときの友だちのことを書いていた。退院してからも親交があったのだが、次第に疎遠になり、音信が途絶えたあとしばらくして自殺という話を聞いたという。

人生とはなんだろう。幸せとはなんだろうかと、問い詰めてゆく。

――

(私は通勤の列車の中で走り書きをしたのでそれを貼って置こう)

人のスタンスってのは、些細なところで幾らでもバランスを崩す。

フラフラしないなんてのは特別な時で、いつもユラユラ。

そんなままで大人になってゆく。

いいのか、悪いのか。

分からないけど、生きていれば世界は広がり続けるし、自分でも変化しなくてはならない。

生きるという事は成長であるのだが、変化してゆくことでもある。

幸せだって、昨日のままなら、誰も自分を幸せとは思わない。

---

2012年2月25日(土曜日)【随想帖 I】

---

## 貨物列車のゆくところ

---

仕事の帰りにいつもの列車より少し遅く帰ると、私の降りる駅に長い長いJR貨物が行き違いのために止まっている。何両あるのかは暗がりなのでわからないのだが、ホームの端から端までかかっているように思う。切符を車掌さんに渡して跨線橋の階段を上って向こうのホームへとおり始めると貨物列車はゆっくりと動き始める。

いくつも並んだコンテナが徐々に加速しているのを見ながら、車両の繋ぎ目に小さなデッキがあることを見つけた。手すりがついているけども、ホームから飛び乗ろうと思えば簡単に移れそうだ。

高校時代に伊勢市駅に入ってくるJRの客車には扉がついていたが、走りながらでも飛び乗れたのを思い出したし、子どものころに見た客車にはやはり小さなデッキのようなものがあつた。手すりにもたれて走り行く汽車からさようならを叫ぶようなシーンを思い浮かべてしまう。

さて、このデッキにもしも飛び乗れたら、私はJRの行くところに気ままな旅を始めることができるのだろうか。

少し悪戯をしながら、誰にも見つからずにタイムスリップするようにどこかに出かけて行けるという夢のようなコンテナ。しかし、出かけた先には無限の束縛や規制が待っている世の中だから。このまま家に帰って黙って座れば水割りが出てくるのも悪くはないか。

寢床に入ってから、デッキで揺られている夢を見た。私はどこに行きたがっているのだろうか。

---

2012年2月25日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---



## 幸せとは、を考え続けて

---

幸せとは、を考え続けている。

世の中が経済的に成長を続けて、会社が核分裂のように大きくなり続ける中で、私の時代は就職戦線を闘っていた。ある人が、就職をする私に問いかけた。

「会社に入って何になるのが目標か」と尋ねる。「昔の新入りは社長ですというようなことを平気で言ったものだが今の子どもたちは課長ですというような子もいる」、そんな世の中に变化している話してくれた。会社に入れば未来があった。給料も組織も企業成績も、さらには物価や地価も下がるということは誰もが想像しなかった時代だ。

まさかの急旋回。しかし経済神話だけは残り続けたのではないか。いつか必ずまた昔のように右上がりを取り戻せ、増殖し続けるような会社が次々と生まれる社会が再現できる、と信じ続けている人がゼロにはならない。また、そうでなくては経済学というものの学問的価値がないのではないかと思いつけている人たち。

多くの人々はその神話を信じないと思いながら夢として棄てきれていないから、幸せというものを夢のステージの上に築き上げて、風が吹いたら喜び日が照ったら新しいものに期待して、次を諦めていない。

私が永年、エンジニアとしていた「パー」な会社も、本当はあのときに倒産すればよかったのかもしれない。しかし、本当にバラバラになるまでとことん解体をすることはありえなかったから、やはり今の姿が落ち着くべき姿だったのだろう。経営者というのは先を見据える力が凄い。

でも、会社という生き物は死にたがっていたのだし、贅肉が重くて、重病で腐っていたのだから、10万人の社員の3万程度を整理したからといって、見せ掛けだったのだと思う。7万人ぐらいを整理して、しかも本当に有能な人を残して再出発したいところではなかったか。

まあ、辞めたんだから、関心もまったくないのだが、社会が一向に良くならないのは、あのような腐った企業が、社会や社会を構成する人々を「幸せ」という迷信など飴のようなものを撒き散らすからだ。しかも利益を上げながら撒くものだから、社会が幻のようなその幸せに骨抜きにされてしまった。利益が上がっているころまでは良かったが、優良でありつづけるために迷信のように大企業神話だけが残り続けた。

人々は幸せというもの考える力をなくしている。マクドナルドのハンバーガーを食べるようになって、美味しいパンや美味しいハンバーグの味を見極める力が退化していったように、幸せボケの世紀がやってきたのだと思う。何も外食産業ばかりではなく、情報化社会の中で見直された時間軸上に重みつけられる価値観を背負ったあらゆる概念が、費用対効果のような一見まっとうそうな論理で社会を腐らせ続ける。今も。

いつかは再び。そんなことがあるわけもなく、そんな夢を見続けるようなステージなんかないのではないか。そんなことを考えながら、幸せとは何だろうか、を考え続けている。

---

2012年2月29日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 弱虫も啓蟄過ぎて顔を出す ― 三月お水取りのころ

---

桜吹雪が谷から吹き上げてくるころ、吉野の奥千本を訪ねたことがある。  
一人で佇むには最適の場所だった。  
杣道に踏み込むと西行の句碑があった。

ちょうど、大河ドラマに西行が登場して  
懐かしい吉野の山を思い出す。

桜のころに一度、赤ん坊だった娘を連れて花見に出かけたことがあった。

わずか20年ほど前であるだけなのに、今のようにモノゴトに過剰に人々が反応するようなこともない穏やかな時代だった。  
誰かがダッシュをしたら出遅れてはいけない、とか  
勝ち負けに必死に目を凝らして、常に勝ちの方角ばかりを見ているような風潮とか

そのようなものはなく  
比較的のんびりと、していたように思う。

しかし、やがて、人々は簡単なものやそれなりのお金や努力で確実に手に入り易いものに、抜け目なく手を出す風潮が現われ始め、その情報を付加価値をつけて売り物にする社会が出来上がってゆく。

新自由主義という便利な言葉ができて、人々は幻想の幸せを手にして、回復もしない経済の蘇りに夢を棄てない。  
今もそのままだ。

その幻想が、鬱憤を晴らすかのように、一見正しそうな政治改革に走ってゆく。

最たるものが、減税であり公務員の改革だ。  
間違いなくこの間違った選択で自分たちの生きる社会は瓦解する。

それでも、ヒトは自分の幸せだけを追うことをやめないだろう。

### 3月12日（月）

三月は弥生という。  
人の名前にも使われるやさしい響き。

ぬくもりが広がるのが分かる。

▼坂道を登って通うのこの春から

▼弱虫も啓蟄過ぎて顔を出す

▼ため息を手紙に添えて罪深く

### 3月13日（火）

少し温かかったのだが、今週は再びコートを出すことにした。

このころの寒さが一番好きかも知れない。

それは、三月という時節の持つ歓びもあるのかも知れないものの、寒かった日を今は許すのだ。

山の端が少し白いかな。  
布引の山も最後の白き肌。

子どものころにおとうちゃんと炭焼き小屋の中に入ったあの温もりを思い出した。  
列車の暖房がお尻にほんわか。

▼炭焼きのしたくを呼ぶや父の声

- ▼炭焼きの小屋の温もり春とおし
- ▼手のひらの汚れて温き炭焼き小屋
- ▼錆び付いたネジそのままにして蓋をする

---

2012年3月14日（水曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 「プラ」ごみを考えてみる

---

きのう、FACEBOOKとtwitterに

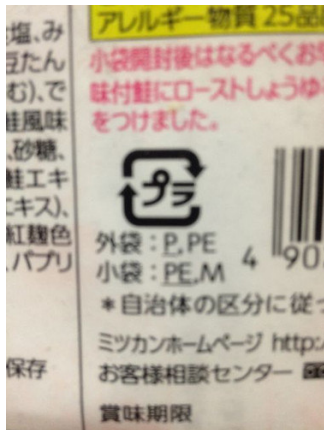
引越し難民を受け入れるため台所を掃除したらスーパーレジ袋が45リットルに3袋分出た。まだまだゴミ出る。

プラ扱いと不燃物、雑紙が多い。

不燃物も3袋は硬いなあ。

自分の家で実際にやってみて、社会の実態を予測できた

と書いてみた。



プラ

この「プラ」マークが、非常に身の回りに多いことが分かって、しかも、きちんとポテトチップスやラーメンなどの「袋」を集めてみれば普通の「紙ごみ」よりもたくさんの袋が必要なかもしれない、ということがわかった。

さらに、雑紙と呼ばれる雑誌ではなくダンボールでもない紙類も多いことに気づく。雑紙は、いわゆるパンフレット類、1枚モノの案内紙、ポッキーなどの箱も含まれる。

どうしてたくさんあるにもかかわらず、まとめてもらえず、つまりは資源ごみに回してもらえないのかを考えてみたが、答えは非常に明快だった。

分別は簡単であっても、ゴミとして出すときに面倒だからだ。

現代人は面倒なことをしてまで、みんなのためには尽くさない。

震災被害支援というような大義名分でもない限り。

---

2012年3月22日（木曜日）【随想帖1】

---

## ヌカガジュンコ写真展「音が伝わる温度」



ヌカガジュンコ写真展「音が伝わる温度」

2012年4月7日 土曜日

心斎橋へ出かけた。  
わくわくした。

泣き虫の僕が  
このときには、泣くのを忘れた。

■

2月3月になってスランプに陥っているのだと自分をなじってばかりいる日が続く。なればなじるほど、自分は委縮するがわかるけど、きっと、カラダに新しいカビのような種をまとして蘇れるような気もしている。

ほんとうは出る幕じゃないような気もするし、その正反対のような気もしながら、ヌカガさんの個展へと向かう。心斎橋に着いたのが10時ころで雨粒がビルの合間から落ちてきて、田舎者の自分を隠すように空を見上げたりする。

20年以上前だろうか、ハーモニカを楽器屋さんで買ったのを思い出した。1万円以上する私にしたらその当時細やかな贅沢な楽器だったが、寂しいときとか嬉しいときとか、このハーモニカは私をささえてくれた。

時間があるのでぶらっとする。appleストアに行く。ブックとデスクトップのパソコンを交互に眺め、ああ来て良かったと思いながら、何を見て確かめるわけでもなく、マックを見ている。

楽器屋さんにも立ち寄った。ピアノを見て、リコーダーを見て、オカリナを見て、ポントロのところへとゆく。キングとかバックとかコーンしか知らないけど、何の見栄もないのだけど、贅沢など何もしないのだからこれくらいはいいよね、と言いながら40万円くらいのを買いたいな。でも、今買ったもうすぐ迎える自分の最期のときに、この楽器が一番高価な遺品になってしまう。

そんな散策の時間を送りながらも、ずっと写真展のことが気にかかる。なんたって私は素人なんだし、とても素敵な写真をみにいってしかもその作者にも会えるなんて最高にウレシイのだ。

■

いっぱい喋ってごめんなさい。こういうところでは静かに見てるのが常識なのかもしれないけど、と気にしながら、お構いなしにヌカガさんに話しかけてしまう。たくさん語らない人だけに、自分がふらふらと彷徨うのがわかる。

写っているものと隠しているものと、訴えているものと秘めてるものと、期待しているものと諦めているものを、わたしはどうにかして掴み取りたいと思う。ああ、これって昔の大好きになった人の心が掴めなかったときに必死になって探ろうとした私に似ているのかもしれない、などと思う。同時に、レベルが低すぎる自分を心のなかで大声で叱る。

■

テーマなんてきいたら野暮なんだなと思いながら、そういうことを言葉にしてしまう。もう、この次にいつ再び出会えるかわ

からない作品たちを、記憶の中に刻みつけることが不可能だけに、必死になる自分がいたのだ。言い訳をするならば、だから、記憶を引き出す手がかりを探して一緒に仕舞おうとしたのだと思う。

そんなことは不要なのだとも思う。芸術は爆発だと岡本太郎が言葉を残しているけれど、ほんとうの意味を理解しているわけではないものの、爆発という響きが好きだからいっそうこの言葉も好きだ。

音が伝わる温度という一見メンタルで詩的な響きも、私の頭の中では数学的物理式にイメージ化されてしまう。爆発するエネルギーの変化量のデルタ $\delta$ ＝という文字がその先を探っていて、いつも到達するあらゆることが普遍的にもっている結論「モノゴトでも感情でも、そのエネルギーが満足させるものは変化量の大きさに決まってくる」というアレに到達するのだ。

■

ヒトは、温度という目に見えないものを姿に変えてわかろうとしてきた。音だって見えないもの。見えないものばかりが絡み合って作る物理現象を言葉にすると、詩的になる。

しかし、そこには、ほんとうに人々の心を震わせたものを伝えたい熱情があるのではないか。震えることはエネルギーだ。フクシマが震えて、そのあと、音も立てずに木々を揺らし、人々の心も揺るがせて、社会も震撼させ続けていることと、そのことが減衰してゆくことへの激しい怒りのようなものを、逃したくないのだ。

アナログ的に無限大のステップで、青から赤へと色彩が変化してゆく四季の変化や春に生まれたパワーが冬にかけて滅亡してゆくように、物理的破壊が放ったメッセージが消えてゆくのを引き留めてゆかねばならない。その使命をみんなが均等に担っているのだから、時々刻々と発散されるエネルギーの変化を捉えたいのだ。

瞬間を切り取るためには鋭くてよく見える眼が必要だ。その瞬間を読み切るアンテナも、変化を捉える素早い神経も必要だ。

でもそこには、シャッターが切れなくなるほどに感情豊かに潤んでしまう眼も心も欠かせないし、チャンス逃して悔しがる意地も、押し折ってもまた伸びる尖った鼻も、あったほうがいい。

ボクの好きとあなたの好きは正反対かもしれないけど、たった1枚でもいい、同じステージにのっかって別の角度から眺めることができたことが嬉しい。お気に入り言葉にしないということも大事なのかもしれない。そんなことをつぶやきながら、帰ってきました。

## 花筏見送る人も無言なり

4月の初旬に父を亡くし、急遽帰国したときに、帰る空港から便りをくれた友だちに出した手紙を、上手でないところは少し書き直したが、記録しておく。4月15日早朝に。

私の地方の桜は、まさに今散らんとしていて、

### ▼花筏見送る人も無言なり

というわけで、信州よりも一足先にソメイヨシノは葉桜になろうとしています。

お父さんがなくなって、そのあとにもmixiの日記を書き足していたりするようですが、人生なんてのは、そんな継ぎ接ぎだらけの驚きや喜びで出来上がっているのだと思っていた。

そんな中、今、自分の頭にあるのは、自分の番もやがて来るということで、もしかしたら、この次に葬式にかかわるのは、81歳の母親の葬式でないならば自分自身の葬式であるのかも知れないということだった。

そう、喪服なんて着られるかどうか、サイズのことなど気にしているなんて(といっても軽く触れただけなのだが)、お笑いネタみたいにも思えてくる。葬式なんてのはそんな感じでやってくるのありがたいのだろう。

今の時代、いつでも会えるという安心感が潜在的にあるものの、18歳で家を出てしまったこともあって、父親はそれほどいつもそばにいたわけでもなく、それは父だけでなく母もそうですが、これから死んでいくという不安や恐怖はなくて、既に私の心の片隅に住むところを持っていた。だから、どうぞ楽に痛みもなく逝ってください、とわりと冷めて祈ってられる。日々一緒に暮らしているならばまた話は変わってくるのだろうと思う。

しかし、生きるということは、人それぞれの思いの違いが歴然として出てくるもので、私の母の場合は、もうすぐ死ぬだろうと自分で言いながらも、ものすごい負けん気で生きたがっているのがわかる。「食事に注意を払って、生活に気をを使うように」と、子供らに言われても気にしないようなふりをしながらも、生きたがっているの伝わってくる。

その点、父は14年前に逝きましたが、いつ死んでも仕方がないほどにそれほど健康ではなかった人だったのですが「生きられないのは悲しいなあ」といつも嘆くようにしていた。けれども諦めのようなものを持つてようにも思えるときがあった。

私は父譲りで、生きることには、固執しないような面があって、いつ死んでもいいなと思っている。

人には、人を育てるという、つまり育成し次世代をよいものに改革してゆく大きな使命があって、(貴殿の場合は子供がないのでそのことには、理由もわからないし触れてきませんでしたが)、社会的に、その使命を負うことで、さらにもっと早く若き時代にその使命を意識することで一人前になる条件のひとつが揃うと思う。

夫婦になる、つまり結婚して家庭を持つという基盤のうえで社会に参加をし、その基盤の上で社会を見つめて、人間を見つめて、あらゆるものを理解しながら生きるのだ。人とはそういう社会の中で、社会に貢献して恩返しをしてゆく使命がある。

自分が楽しく。そんな傾向が現代社会に蔓延しているけど、人間なんてちっぽけなもんだから、社会を永遠に引き継いで行くような遺伝的な動物的使命を持っていることをあっさりと認めて、毎日の暮らしを見ることは大事なんだと、45歳あたりを過ぎてから切実に思う。

つまりは、詰まらない見栄や快楽や豊かさや怒りなども必要なことは認めるけど、そんなことにこだわって自分の人生の目標を狭義的に決めてきたことが社会の中での不満を生み、ばかばかしい欲に走る遠因でもあるような気がするのだ。

ボケに満ちた今の社会の奴らに対し、死と向かい合って生きろというわけでもないし、もっと世の中に尽くせというつもりもないが、じいいになってきて、そういう自分のことばっかしを見ている人を見ていて、ああ、あれは間違っていたな、と自分を諷めるわけです。

人にはさまざまな家族があって、そのお父さんがどのような影響や言葉や規範を次の世代に与え、遺していたかまでについて僕の言及するところではないのですが、父の遺したあらゆるものが、ゲーテの残した言葉と同じくらいに、神秘的で、詩的で、あるときは論理的に解釈することで、結構蘇ってくる。

つまりは、ささやかな周期で、遠大なる使命を背負っているということなんだ、と思うわけです。

花筏を、歓喜に満ちた酒宴の後の酔いで見送る人もあろうけど、散る花を惜しんで、涙で悔やむ人もあろう。別れと出会いの季節である時にお父さんが逝かれたことは、ご本人がどんな病だったのかはわかりませんが、花の中でのご逝去として記憶に残ると思います。

僕が第15回目の三重県の俳句で

▼散る花と国の峠でわかれたり

と書いて佳作になった時の心はどこにも書かなかったし誰にも言わなかったけど……。

別れとは、そういうものであり、峠道の向こうとこっちでは新しい暮らしが待っているということです。

新しい使命を明確にして、さまざまな社会の一員として、小さな力であり大きな力になって、もうしばらく生きていきましょう。(……と、自分に言っているみたいな手紙になってしまった)

---

2012年4月21日（土曜日）【[随想帖1](#)】

---



## キツツキと雨

伊勢新富座のホームページに「2012年4月」というタイトルで水野さん(新富座代表)が以下のように書いている。

—

5,6月は思いもかけず良い作品が並びました。

自信のラインナップで集客できるというのが興行の理想ですが、なかなかそうもいきません。

今、デジタル化が問題なのではなく、「映画人口の減少」が最も危惧される課題なのです。

このサイトについて マスコミもようやく映画の危機に気づき始めたようで、当館への取材も増えました。

いろいろありそうですが、もう少し粘ってみますか、不得手な梅雨時ではありますが・・・

—

昔、1975年ころのこと(高1か高2だった)、砂の器という映画があって、それに伊勢市の新道が映っているという話で、映画のことなど全然わからない高校生だった僕は、倉田山から宇治山駅という通学路しか知らなかったけど、ふーんといってそんな世間の話を聞いて、銀座新道にある大きな映画の看板を近鉄電車の中から眺めていただけだった。それから2,3年後に東京で映画を見る機会があって、砂の器をみた。どこかの映画館で、席を立たずに2,3回連続してみた。そんな記憶がある。

あのころは、そう、僕の学生時代は、朝9時にひらく池袋文芸座(300円)でその日1日だけ上映という監督シリーズなどの企画上映に朝の6時ころから並んで日が暮れるまで5回ほどみたことも多かった。

みんな僕と同じ奴ばっかしで、幕がひらくと大きく拍手をし、そして幕が閉まるたびに手がちぎれるほど拍手をして、いつまでも席を立とうとしない奴らばっかしで、映画館もそんなことは承知で入り口に溢れる人が絶えなくとも僕たちを追い出すこともなかった。

ほんとうに人口は減ったのかな、とも思います。あのころだって多くはなかった。都会のあのちっぽけな映画館に確かに人は溢れたけれど、ほんとうにあの映画をみたい人やあの映画のよさがわかる人や、映画というものを銀幕の向こうの別世界と肌で感じ理屈もなく自分を注ぎ込めた人は、少なかったかもしれない。減っていったように見えるのは、ニセモノの映画ファンであり、見かけもホンモノも区別できないいししようとしめない人たちであったような気もする。

社会は変化して「経済的」という概念がもてはやされて、山の中の数軒の集落に住む人たちの医療や福祉や、果ては郵便なども、どうぞ都市部に移り住んで快適に暮らしてくださいといわんばかりに、切り捨てられてゆく。

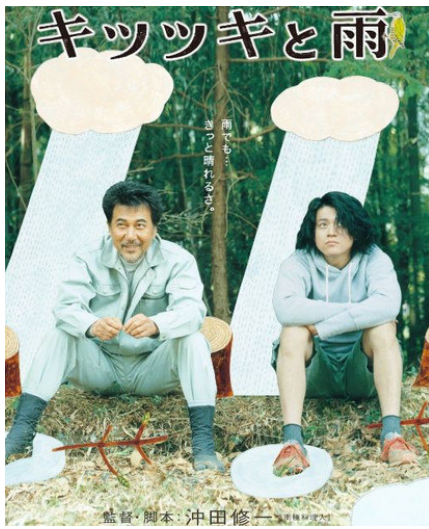
映画もテレビもニュースも報道企画も、月並みな言葉を使えば金儲けができなければ成り立たなくなっている。ヨーロッパの片隅で、中東のどっかで日本人が1人事故やテロで倒れてもニュースにするのに、山奥の静かな1軒家へ一番近い医者が閉院して車で4時間も掛かるところが最寄になるという事態が起こってもニュースにはならない。

映画人口は減っても、みる人の質や心に変化がないのならそれでいいように思う。欲しがっている人に届けられないのは悲しいとかいう問題でなく、悔しいという気持ちではなからうか。

では何故えに人口が減ったなどと思うのだろうか。確かに映画のソフトもハードも作風もポリシーも時代に応じて変化してきていることは認めつつも、映画人の意地のようなものは相変わらず変わっていない。いいえ、変わっていないのではなく、変化してゆく速さや道のりが違うといったほうがよさそうだ。

どんどん増える車、あっという間に夢を現実に変えてゆくテクノロジー、進化をやめることのない概念が生み出す世界と、ヒトの心が超ノロノロペースで変わってゆこうとすることの間に生じる軋轢のようなものが、ちかごろ見直されつつあるけれど、でもほんとうのことはわかっていないと思う。精神科の学者さんたちも確かに進化したけど、今の社会を捻じ曲げて腐らせている本質を見つめようとしないで、治療というお役を演じているだけだ。そんな社会に取り残されてこれからも映画というものが昔ながらの姿を守りながら残ってゆくことは、双方にとっても辛いことなのだろうと思う。

中身のまったくないストーリー性だけを売り物にして、味わいや余韻や厚みや深みも存在しない小説がバカみたいに売れて、それが高く評価されて、メディアは取り上げて騒ぎたて、人々は喜んで愉しんでいる。社会がどんどん変わるのについて行かなかったのが頑固で阿保だったのかどうかはなんともいえないけど、普遍的な芸術というものにもたらされる種の宿命的なシャワーなのかもしれない。



さて、新富座でみた映画のことは、僕があればこれと言っても仕方がないのですが、何よりも嬉しいのは、字幕の最後が画面の上に流れて消えて、フロアに明かりがついても誰も席を立たなかったことです。10人ほどしかいなかったんですけど、これもいい。(みんな女性だったこともメモっておこう)

ほんとうに僕が映画から感じたものは、古臭い映画風にみえながらも、時代が変わって社会が変わって監督が若返ってくれば、映画の作風は新しく変化してきているし、守るべきところはきちんと守っているし、作品のなかでは複数の波動を着実に個々に振動させて、最後にはきちんと共振させている。映像も綺麗だし、絵も綺麗だ。色も光も音もよかった。

昔の映画ってのは予告篇というのが一番よくて、本篇はそれを超えられないという作品も多かったし、それほどまでに予告が素晴らしかったのだが、この作品は予告篇より本篇がよかった。もちろん、いつものように、予告篇は本篇をみてからみたのですけど。

(俳優さんも、役所さんと山崎さんしか知らなかった…)

そうそう、新富座の水野さんが最後に、「もう少し粘って」なんて書いています。こう書かれると、「粘らずにサラリとして負けないで」、なんて書きたくなるなあ。

—

映画久しぶりに観ました。あれ以来

※ぐるぐる 幕を引かない — マザーウォーター

---

2012年5月 5日(土曜日)【随想帖Ⅰ】

---

## 風を感じる

---

少し前からときどき、[風のフォトスケッチ](#)というブログに立ち寄る。

何の縁もないといえばそれまで。FACEBOOKの友だちの友だちの……と辿ることもできなくはない。

津波の来る(地震の起こる)朝に、女川の観光協会のブログを見て、町の景色の素晴らしさを愉しませてもらい、明日はお祭りなんだなあ、と思っていたのに、地震が来てなくなってしまった。

あの日の午後、職場では議会中継のテレビが付いていたが、地震直後にニュースに切り替わった。そのニュース映像を見ながら真っ先にYさんを思い出した。街は確実に丸ごと流されているはずだった。彼の安否を心配する時間が過ぎてゆくのか、ネットに安否問い合わせを書いているのも発見したし、とても心配な日々が続きました。

いまだにご苦労な思いをなさっている方がおられるのを思うと、ヒトとして最大限の知恵を絞ってこれからのみんなのために前に進まねばならないのだと痛感する。

\*

写真スケッチの中には、風が吹いている。

山も海も木々も、知らんふりして風に吹かれているのだが

カメラは容赦なく、風が吹いている地上の音も静寂も、人の叫びも、的確に捉えている。

宇宙という想像もできないほどの大きいものの中にある、波長の長い生命を持った地球という星の上にある小さな島の、その片隅で生きている私たち。

サクラの花が咲き始めた日を日記に書きとどめ

鶯の啼いたときにうたを詠み

ツツジやフジが香りを放てば、大きく息を吸う。

少し前の日記に、サクラの花は嵐で散ってしまったのを見て、「あの花たちは散りたくなかったのだろうか」と書いた。

きっと、ヒトだけがそんなことを考えるのだろう。

---

2012年5月11日(金曜日)【[随想帖 I](#)】

---

## ひきだし

---

開けることを忘れていたほどほったらかしにしてあった本棚の下のひきだしに、おとやんの直筆の手紙があった。

学費を振り込んだので、しっかり勉強しなさい

と書いてある。

三十四、五年前のものだ。



鉛筆書きで  
旧仮名づかい。

しょっちゅう手紙を書くと  
勉強の気が散るので  
手紙はあまり書かないことにする。

健康に気をつけて。

と書き、終わっている。

公衆電話といえば、店先に赤電話があっただけの時代だ。  
手紙を書く夜は、さぞや長かったのだろう。

---

2012年6月 2日（土曜日）【[随想帖 1](#)】

---

## おびき寄せる

---

[836 妻子あるひとなんですと恋語る見習い介護士キシくん二十歳](#) 砂女

ここではいささかの酔いがあったうえでのこの綴り文なのかどうかは、不明のままとして、ヒトはひとつの場面のページをめくるときにひとつの言葉を用意しているように思うことがある。

あなたがそれを抱いていたかどうかは、私の勝手な想像で、当たりであってもハズレであっても構わない。ただ、この御茶目でありながらも真剣をぎゅっと握りしめたような想いを読んで、久しぶりに出会った「おびき寄せる」というモチーフに大きく心を揺らされた。

そうよ。あなたと私はいつもおびき寄せあいながらこうしてここまで暮らしてきたのね、と私の妻に語り掛けたい衝動に駆られる。

たったひとつの言葉が、この人の足音を実物のように頭のなかで響かせてくれ、風の音まで送り込んでくれる。煙が目に染みる。夕焼けの色が褪せてゆく。

四度目という数字を、もし会うことがあったら口にすることができるのだろうか。

私も会いたい  
あなたもさぞや会いたかろうに。

二つのグラスに、酒を注ぐ音までも届いてくるようだ。

---

[雨降茫々日々記 : 836](#) から

---

2012年8月14日（火曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 台風のなかで考える

---

台風が去って静かになりました。

『いよいよローカルの時代』という本。面白そうですね。

私も読みたいなと思いました。でも図書館にないので困ったの。

そこで、書評を書いた広井良典さんの本が「ちくま」の失書から出ているので、それ読もうかなと思ってます。

FACEBOOKなんて

「無いのも、それはそれで気楽でまあいいかという感じに」

なって来ましたか。いい傾向ですね。

そうです。現代人は、便利さや情報に侵されています。

何でも文明に頼るとするし、災害にあったとしても、どこまでも文明を使おうとする。

地震で破壊的な状態になっているだろう時でも、ケータイでの伝言ダイヤルを使おうとして広めているんですからね。

それよりも、泥水を飲んでもお腹が痛くならないような図太い神経と丈夫な胃袋を普段から鍛錬しておくのがいいと思いませんか。

江戸時代の旅人は、近所の小さな川でさえ簡単には超えられなかった。

もしも地震が来たら、テレパシーに準じるような深い心の繋がりと、山に上げる狼煙のようなものを使うのがいいと思う。まじめにそう考えていますが、誰も本気に信じてくれません。

子供の頃は、台風が来ると、必ず停電でした。ウンコを担ぐ桶を家の土間に置き、家の戸はすべて戸板で蓋をしてしまいました。今は、そういう文化は消えてなくなりました。

ヒトは、便利に溺れて豊かさ感覚に頭を侵されているのに、形のないものが生み出した情報のようなものやお金が生み出したあぶくのようなものに縋りつこうとしてる。

人の手が生み出したものや自然と共存するようなもので、合理性とかとは程遠いようなものを、もっと大切にしないではいけません。

そんなことを考えながら台風が過ぎてゆくのを見送っておりました。

――  
(富山のTさんへのメールから)

---

2012年9月30日(日曜日)【随想帖 1】

---

## ほんとうは、何かを待っているのだ

---

冬の寒さがじわりじわりとやってくる。

満ち潮が波打ち際の人たちに気づかれぬように  
ザザ、ザザとくるのとは少し違う。

キツネやタヌキが人間を騙す手口のように、  
明日には昨日を忘れさせて、  
のほほんとしている私たちを欺くのに似ているのかもしれない。

わかっているのに騙されて、  
冬になればこんどは温かい春を待つ。

春になると夏を恋しがり、  
秋が本当は好きなのだと嘯く。

恋人に好きだというのも  
30年以上も一緒に住むうちの人に、  
無言の眼差しを向けるのも

まだ何か  
もうひとつ何か  
驚くものを待っている  
……のかもしれない。

---

### あさやけを一番列車がくる季節

#### 満月を大吟醸と待っている

あさやけ…の作品は、年末の寒い朝に書いたのだと記憶します。  
霜が一面に広がる枯野の向こうの地平線から朝日が昇ろうとしてた。

大吟醸…の作品は、中秋の名月が過ぎてしばらく過ぎた頃、  
人恋しい秋の夜の切ないお話です。  
ほんとうは、大吟醸なんて飲んだことないです。

---



## 「のほほん」と「ゆるゆる」

---

### ことしの言葉

これを書いてからひと月ほどを迎えようとしている。

自分自身をなかなか振り返ることができないなかで、正月を過ごし、何もなかったように新しい年が加速してゆく。

「大晦日から正月へと切り替る」ことのある種の「畏れ」のようなものを私たちは忘れてしまっているのではないか。

何不自由なく暮らし、何が幸せなのかを見失い、その失踪にさえ気づかずに、のほほん生きる。

「のほほん」と生きることと「ゆるゆる」と生きることを混同して、「ゆるゆる」だけが独走して暴走してゆく。

明後日は母の誕生日。

その明くる日は父の命日。

---

2013年1月19日（土曜日）【随想帖 I】

---

## 消えてゆくもの

---

すっかり秋になりまして、先日から少し早いかなと思いながらコタツを出しました。この季節から冬の間は、すっぽり入って食後にうたた寝をするのが日課です。テレビを見ませんので、バックグラウンドで家族の見るテレビが鳴っています。

ちかごろは、お酒も控えてと自分に厳しくしようと思うものの、家族がそろくと3人でも賑やかな我が家ですので、つつい飲み過ぎてしまいます。ツマに内緒でウイスキーを足して毎日小言を言われております。

眩きと不平が混じったような「14%という数字」という日記を書いたにも関わらず、みなさんから多くの便りをいただき感謝をしています。

砂上の楼閣の如く築かれているネットワークの上の人間関係。地に足が着かないとか根っ子のない人間関係と言いながらも、そんなに簡単に斬り捨てることはできないとも思います。

mixi も「17音コミュ」とメッセージ機能、そして、気まぐれに書く日記については、暫く続けようかと思っています。でも契約をしているとどうしても毎日見ってしまうので、麻薬みたいでそれが嫌だと感じていますから、いつ断ち切ると言い出すか自分でも予測がつかない。

もちろん、ネットといえども心をさらけ出し、また、さらけ出した心をケアしてくれたり、刺激を与えて元気を取り戻させてくれた方々も多く、ヒントをくれたりした人にはほんとに感謝しております。

取るに足らない愚かな人間であるものの、数々の支えを捧げてもらいながら、それなりの哲学を刺激してもらい持ち続け、決して恥ずかしくない人生を送ってくることができたのも、身の回りの人々のおかげであると思います。

自分ひとりで暴走したり、思想的にという危ない書き方ですが、家族運営方針みたいなもので、ぽたりぽたりと脱線したり、のらりくらりとしているところがありますものの、もういつあの世に逝ってもよろしい準備は整った次第です。

そんな訳ですので、ブログでは「遺す言葉」も書き始めています。これは遺言ではありません。自伝でもありません。私の周りの人々の恐ろしいほどの素晴らしさを書き留めよう、人の生きる哲学とはどうあるべきかを考えようと思い、書き残すことを試んでいます。結論などあってないようなもの。脱線という言葉さえも成り立たないほど漠然とした回想録です。

天空のラピュタという映画が暗示した地に着かない夢のようなものを追うこと、あれにも少し通ずるような熱狂はもうこの辺でやめようかと思っています。

社会の数々の便利さに翻弄されるのではなく、スローに生きた人々の言いたかったことを、自分たちで工夫を重ねて編み出してきたその設計図のようなものの余白に隠れて計算をした筆算を辿るように、私の人生を辿って浮き彫りにすることはできないものか。このごろはそんなことばかりを考えています。

---

2012年11月13日（火曜日）【[随想帖1](#)】

---

## あのころは逃げ道が用意されていた

体罰のことで社会が騒がしい。桜宮高校のバスケットボール部の生徒が体罰を受けて、その後自殺をしていた事件だ。事件の真相は何らかの形で解明され歴史に刻まれて行くだらうから、私はここで所感も書かなければ言及もしない。

だが、こういう事件を報道で知れば、様々なことを考えさせられる。

ヒトは他のほとんどの動物たちと違って言葉を喋り手を使うことができる。使える以上はそれが武器になってしまうこともあり得る。つまり、言葉による脅迫、そして、手による暴力は十分に相手を制圧するための武器になることができる。

ヒトは自分たちの持った優れた能力が手に負えなくなっているのではないか、人間という動物として淘汰が始まっているのかもしれないとも思えてくる。

言葉を操り、2本足で歩き、文明を築き上げるという他の動物からかけ離れた能力を持った以上、これをヒトから奪い取ることは、相当に崇高な神の教えやお告げでもない限り、不可能だろう見て間違いない。つまり、その言葉による暴力も手による体罰も、その概念は消すことができないのだと思う。

\*\*

私は小学校4年生のときに父にひどく叱られたことを思い出している。

今は健康ですが、小学4年のときに腎臓の病気(たぶん腎炎だったと思います)を患いまして、2学期に丸ごと入院していました。顔がむくみ、オシッコにタンパクと血が混じるので真っ赤でした。安静にしていることと塩分の摂取を抑えることが治療となります。

併し私は気ままなふつうの悪ガキでしたので、病院の中で大人しくしていることはなく、歩き回ります。従って一向に良くならない訳です。何度も注意を受けてそれでも治らない私を父は厳しく叱ったのでしょう。人生の記憶の中で父に何かで怒りを表して叱られたことは1, 2度しかないのではないかという記憶の中の1回です。

当然、母が何度も大人しくしていないと治らないことを話しているはずですが、無視したわけでもなく、じっとしているなんて我慢ならないのが普通でしょうから歩き回りました。いっこうに良くならないので父が怒った訳です。

病院の中庭の木に括り付けられて、棒でバシバシと叩かれました。キリストみたいに姿だったのでしょうか。そのときの棒が何だったのかは私には不明ですが、後になって尋ねなかったのが今後も不明です。母が言うには父は泣きながら叩いていたそうで、それくらいしかわかりません。今想像するには、中庭に落ちていた木の枝かなにかであったのではないかと思います。木の物指しなんていうような甘っちょろいものではなかった。よく足の骨が折れなかったものだと感心しますが。まあ、そんな風にしたおかげで私の足は腫れ上がり、歩けなくなっていましたので、安静にしているしかなくなりました。

このころは、親の言うことを聞かないと裏口から放り出されて鍵を閉められました。農家の家には入り口がたくさんあり、鍵の掛けられないような戸もたくさんありますので、鍵に意味はなかったのですが、そのピシャリと閉めるところに大きな恐さがあった。

親のほうも、その辺から入ってくることは承知の上で閉め出すのですから、ちょっと喜劇的でもあるのですが、まるで猫をオモテに放り出すように投げ出されます。子どもはそのような目にふだんから何度も遭っていますので、親に叱られることには慣れています。

ところがあの晩の父の叱り方には怖さがあった。小学校4年生ですから、病気を罹って安静にしていなければならない理屈などはわかる訳がない。訳もわからず叱られたような面も少しはあったのではないのでしょうか。

父も身体が弱く、腎臓も人ほど強くはなく、若いときに私と同じように少し入院をしたことがあったのだと後で聞きました。自分の弱さを子どもに引き継ぎたくない気持ちがあったのでしょうか、36歳だった父は、このまま足がしばらく動かなくすれば否応なく身体は良くなると思ったのかもしれない。論理的にはなく、親の感情としてそう思ったかも、と想像します。

私はそれから少し親の言うことを聞く子どもになって、病気も慢性化することもなく全快して健康であります。中学高校時代には水泳も禁じられ、マラソンも程度に応じて許してもらえただけでした。大人になっても、風邪を引いて寝込んででもオシッコに血が混じらないか(親は)心配をし続けていましたが、大きな病気になることもなくここまで来れております。

体罰だとか苛めだとか自殺だとか。そういう行為には目標があつてのこと。目標をつかまえて、そのための手段に、それらが正しかったのかどうかと考えると、さらに、必ず同時にもうひとつの道、それは逃げ道でも大いに結構ですので考えておくことが不可欠と思います。

私を叩き続けたあのときの父は、何が逃げ道だったのでしょうかね。  
父の命日の前の晩にそんなことを考えておりました。

---

2013年1月21日（月曜日）【随想帖Ⅰ】

---

## 暮れゆく1月に昔を思う

---

昔の日記が出てきた。

それは、節分のころのものであった。

日記には「複素解析学の先生に就職が決まったので単位をお願いに行った」と書いている。

先生の顔はもう覚えていないけど、先生、ありがとうございました。

あれから私は京都の才社というところに就職しまして、まあ、その後いろいろとありましたが、学生時代のさまざまな教訓や問題提起のおかげで、ここまで来れております。

私の今があるのは、あの時期の答案に

「先生！就職が決まったので単位をください」

とか

白紙のA4の解答記述用紙に

「先生の出題された問題は私には解けませんでした。併し私は卒業しなくてはなりませんので一生懸命勉強しました。就職も決まっています。勉強したことを書きますのでお願いします」

と書いて、A4用紙に全く関係ない想定問題とその解答をびっしりと記述した。無線技術士の試験解答を書いたときのように必死で書いたのです。

そういう科目が、複素解析学以外にもたくさんあった。数科目はあったと思う。

（そしてそのことを思い出して今でも夢で魘されているとツマは言う）

3年になるとき、4年になるとき、そして卒業のときに、次々と同期生の姿が消えて行った時代だった。あれはあれで私なりによく頑張った学生時代だった。

今思うと、単位をくれた先生も素晴らしい。散々落としておいて、卒業のときはいくつかのハードルを与えながら大目に見てくれたのだ。

あれはちょうど今頃の季節でしたね。

31年前。

24歳。

## 節分に思う

---

きょうは節分で、お米も貰いたいので、母を尋ねた。

お屋。

ちょうど寿司を作り始めたところだった。

台所に酢の匂いが広がって食欲をそそる。

寿司が出来上がるまでぜんざいをしてくれた。

ぜんざいは、旨かった。

次に、

出来上がった手巻きの寿司を食べた。

太巻きと鉄火巻き。

それが、滅茶滅茶まずい。

しかし、その「まずさ」が

理由もなく嬉しいような気がしてならないのだった。

母の料理は昔から上手やった。

炊き込み御飯やいなり寿司、巻寿司、

たくあん漬けや菜っ葉の漬け物。

タマネギのみそ汁も。

いい加減であるにもかかわらず、

食材の味を生かす手法が

昔から受け継がれていることを

実感できる味だった。

もはや、

料理は引退しなさいと神が告げておるのだろう。

生きるのが精一杯の年齢になったからか。

あの旨い寿司や漬け物の味を、

次の世代の誰へも受け継げなかったことが残念だ。

しかし、それも、しかたあるまい。

もしかしたら、

今年が最後かもしれないと思い、

太巻きをひとつ貰って帰ってきた。

## 蒼茫とか茫茫とか

---

[蒼茫](#)とか茫茫とか。

この草冠が何とも寒々とした荒野の雑草のイメージを抱かせるのか。

高校時代に駅までのバイク通学の途上、小さな峠道の凍結部分で転倒して道の脇に退いてしょぼくしていたら、後続でやってきた同い年の女子高生もまったく同じようにバイクですってんころりんとこけまして。

カバンはすっ飛ぶ、スカートはめくれる、パンツは丸出しで私のほうに滑ってきたのです。

意外とケガもしないし、擦り傷もないものなんです。凍結道路というのは、自然の優しさが隠れている。

40年たってもパンツだけ、くつきりとう覚えています。

何事もなく良かったです。

---

2013年2月17日（日曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 花の雨お百度石をよごしけり 飴山實

---

花の雨お百度石をよごしけり 飴山實

井伏鱒二が「サヨナラだけの人生」を花にたむけて詠んだ句も春を味わうにふさわしい句であるが、飴山實のこの句も真似のできない視線があります。

お百度を踏むというときというのは、どんな問題にせよ、様々な対策が講じられ細かいところまで考えに考えつくされた後に、頼るところはこしかないという気持ちで決心するものではなかろうか、と推察すると、そのお百度石に花びらが舞い落ちることも、さらに非情の雨が降り注ぐことも、何とも言い難く辛いものであったことだろうと思う。

しかし、十七音でさりと切り捨ててしまった句をよく読むと、こちらの気持ちはもしかして考え過ぎの域にあって、花が散ってもはや新しいステップを踏み出している姿を描かねばならなかったのだろうか、とも思えてくる。

はてさて、もう少し考えてみることにする。

(書き掛け)

---

2013年2月24日(日曜日) [【随想帖Ⅰ】](#)

---



## あの夜は垂氷の道を手をひかれ 砂女

---

### あの夜は垂氷の道を手をひかれ 砂女

言葉は自由に旅をすることができる。

垂氷などもう30年以上もじっと見つめたことなどないのだが、子どもの頃、近所のどこぞで悪さをして遊んでいるときに、氷であるとか霜柱であるとかを見つけたときの感動を思い出す。

そんな出来事があの夜に起こっていたのだろう。あの夜とは計り知れぬほどに悲しいものなのか、逃げようもなく恐ろしいものであったのか。母の手を引かれ、どこかに逃げる夜道であったのかもしれない。

そんなドラマさえ今どきの人には想像もできず面白みもない物語にしかならないのに、冷たく吹きすさぶ風が滴る鼻水をも凍らせるほどの夜に、大きな瞳だけがギラギラと輝き暗い夜道を見つめている。

目が光っているのだ。その眼差しが浮かんでくる。

---

2013年3月 1日（金曜日）【随想帖 I】

---

## うそ

---

決して決してばれない嘘をひとつつく あたしのためにあなたのために 砂女

（決してばれない嘘とは真実のことではなかろうか）  
と砂女さんは最後に書いている。

ウソはバレてこそウソの甲斐がある。  
バレて欲しいなと思いながら嘘をつく。  
バレも許される嘘をつく。

嘘をついている瞳をじっと見つめてくれているその人の顔を睨み返して、この人私のことどこまで好きなのかしらと、空想する。



---

2013年3月 2日（土曜日）【随想帖 1】

---

## 官女ひとり帰らぬままに雛しまふ 砂女

---

官女ひとり帰らぬままに雛しまふ 砂女

([雨降茫々日々記 909](#)から)

を読みながら

\*\*

私は俳句やブンガクのことをきちんと理解してやっている訳ではありませんので、  
宦女と聞いてもさほどピンと来るものがなかったのですが、

母が私の上に子をもうけて、それが姉であったことを幾度も話してくれることを思い浮かべました。

女の子は1年ほど生きていましたが、病で亡くなりました。

私が生まれて5年後に弟が生まれますが、その間にも子どもを一人流したという話を何かのときにぼそっとしたことがありました。

男の子か女の子であったかは話しませんでした。今になっても自分に女の子がなかったことを寂しそうにするのを見ると、流れた子はもしや…と思うこともあります。

おひな様を飾ることのできなかった母は、80歳をもうとうに越えるのですが、おひなさんの季節になると、やはり寂しそうです。

女三姉妹が長生きしているから、まあ幸せかな。

おひな様ということで勝手を書いてしまいました。

失礼しました。

---

2013年3月18日（月曜日）【[随想帖 1](#)】

---

## いさぎよく

---

「夜になっての雨できっと散り始める。」そんな風に[30日のブログ](#)を終わっている砂女さんの凜とした姿を、お目にかかったことがないのだが想像してみたりする。

このなかの一句に「書ききれず出せない手紙残る雪」というのがあり、いかにも私もこういうのが好きなのだと思いつつ、感想など言葉にできずに夜が更けた。

日が明けて、昨日見た満開の桜を思い出し、今度あの花たちに会いにいくときは少しではあろうが散り初めているだろうと思うと、「夜になっての雨できっと散り始める」と、砂女さんがこう書いたところに「桜よ散らないでおくれ」という心が、「どうぞ散っておしまい」へと潔く変化する微動が隠されている……のではないかと気付いた。

先輩に軽々しく言うことではないが、「書ききれず」にも現れるささやかな無念を残しながらも、潔く散りたい。

---

2013年3月31日（日曜日）[【随想帖Ⅰ】](#)

---

## 時計

---

部屋の大きな時計が1時間遅れている。  
まるで誰かが悪戯をしたようにきっちり1時間遅れて素知らぬふりをして動いている。

そこで、時間とは一体なんだろうと考えることになる。

\*\*

私が子どものころは、今でいう居間にあたる部屋の柱にはいつも振り子が揺れている大きな時計があった。

その時計はネジ巻き式の時計で、父が毎日夕飯を食べ終わったところか朝ごはんを食べ終わったところにネジを巻いていた。

おそらく1日1回程度、ネジを巻いたのだと思う。踏み台にのぼって巻くので、子どもの私には手の届かないものだった。

そう。あのころには、手の届かないものがたくさんあって、子どもはそれをいつか大人になったら…と思い見つめていたのだ。時計もそのひとつだったのだろう。

時計は、小学生のころに乾電池式になった。けれども、時計には振り子があった。

\*\*

そういえば、母は腕時計というものをしないので、オモテの庭や畑に出かけていったときでも、正確な時刻を知りながら仕事をしているわけではないのだということを、時間というもの考えたときにふと気付いた。

時刻を知るということは、一体どこまで必要なことなのだろうか。

人間は、太陽が昇って明るくなったら動き出し、暗くなったら家のなかに戻ってくる。電気がなければ、ささやかな蠟燭などの明かりで必要なことをこなし、あとは眠る。

技術の進化でというか、文明の進化で暮らしが便利になるのは良いことであるものの、そのシーズにより時計のネジを電池に変化させていったわけだが、ネジはいつまでも巻き続けていたほうが人類のためになったのではないか、と思うことがある。

今はほとんどすべてのものが時計の刻む時間の上で動いている。

そのおかげでテレビが録画できる。やがて、遠方から電話をかけてビデオに喋りかけてやれば、ビデオ機器がその言葉を理解して自動で録画をする時代が来るのだろう。



昔、学生時代に思い描いた人工知能というものは、イメージ通りではないものの、今の世の中に広がりつつある。

だが、そういうものに支配されるのがどうしても嫌で、人間が考えだしたマネー社会が好きになれず、海へ山へと移動する人が少なからずいることに、安心感を持つ一方で、そういう人たちにとっては生き抜きにくい社会なのだとも思う。

普段からテレビは見ないし、ひと月の半分は時間などどうでもいい暮らしをしているので、私も母のように時計は持ち歩いていないし、部屋の時計が1時間狂っていても困ることはない。

狂った時刻の時計は、誰も直そうとせず動き続けている。

それでいいのだ。

バカボンのパパもそう言ってくれるような気がする。

---

2013年4月 7日（日曜日）【随想帖 1】

---

## おゆうはん（豆ごはん）

---

27日。

私の部屋からホトギスの鳴き声が聞こえた夕暮れ時。  
今年の初鳴きかもしれない。

おゆうはんは  
今年二度目の豆ごはん。

ツマは豆ごはんが好きで  
18歳の卒業式の前日に逝った母を想いながら  
毎年このごはんを炊く。

三十数年以上も昔のことを手繰り寄せるために  
豆の実をむいて米を研ぐ。  
そしてごはんを食べるながら母を思い出す。

豆は、家でもらってきたものです。  
この豆を毎年楽しみにして、この季節には豆ごはんを炊きます。

やがて私の母が死んでしまい  
私のツマも老いぼれてしまった頃に  
ムスメはこのごはんをどんなイメージで思い出してくれるのだろうか。



## おかえり

---

ねこさん、ときどき、くまさん TO 砂女

### 醒めないと決めて見る夢夏蜜柑

大学時代に早稲田西門で久しぶりにばったりあって、それが実は大学時代では1回きりだったという飯坂温泉の電器屋の倅ががいる。彼は文学部で柄にもなく演劇などをやっていて、洒落にもならないのに4年も浪人して大学に来て、7年たっても卒業しないで、僕が先に東京を諦めた。「ちょっと旅に出て3ヶ月ほどたつかな」、と飲み屋で友だちを語るのに話していた言葉を思い出す。3ヶ月ほど消えていても探さないでおこうと思っていた。で、もしそのままわからなければ、探せないから悲しんで、消えてしまったのだと思おうと考えていた。近頃、自分が消えたあとの遺文ばかりを書いている。書き終わったら第二の人生を誰かの真似をして始める事ができると夢見ている。兎にも角にも、おかえりなさい。

---

2013年6月 2日（日曜日）【随想帖 I】

---



## 本気でもないのに

---

じゃんけんで負けて螢に生まれたの  
蛇莓いつも葉っぱを見忘れる

池田澄子

\*\*

「負ける」「見忘れる」というふだんの私の弱みを握ったような言葉が俳句には欠かせないのではないかと、時々そう思う。

弱音を吐いたり、言い訳をしたり、静かに考えて自分にいいように納得してみたりして、わたし自身に何かを言い聞かせてここまで生きてきている。

[930](#) 本気でもないのに恋を占って途中で飽きる牡丹のはなびら 砂女

「本気でもないのに」というところが私好みで、俳句(で遊ぶ)人を泣かせてくれる。  
泣かせるものはもちろん他にも数多いのだが、5弁の花びらを可憐に咲かせる初夏の花はも数多いものの、六つの花びらをさも安定させているかのように見せてくれる花は珍しく、他にも名前が浮かんでこなかった。

占いというのは、もう誰にも何にも縋れないときに初めて全身全霊で便りかかるものである。そんなことがあるとすれば生きている間にあと1回だけあるかないか。

「本気でもない恋」は何度落ちるのだろうか。そんなことを考えていた。

---

2013年6月 2日(日曜日)【[随想帖 I](#)】

---

947

コメントのかわりにぎゅっと抱きしめて 髪撫でたくなる君のツイート 砂女

+

砂女さんが途轍もなく若がえって  
柄でもないような(といったらめっちゃめっちゃ失礼なのですが)  
そのような作品を書き残しておられるのを拝見して  
渋々と一日中降り続くという雨の予報を歓迎してもいいほどに気分は爽やかである。

もしも、こんな歌をわたしに向けて詠んでくれるような人がこの世の中にいてくれて、その人に出会うことが叶っていればわたしの人生はまた違ったものになってくれたかもしれない。

+

人生というのは、しかしながら、そのように筋書き変えることはできない。

意志で多少なりとも喜びの方へと導くことはできたとしても、あるいは思わぬ巡り合いがあったとしても、それはやはり運命の筋書きであったのだと思われてしまうのだろう。

わたしたちは、昔から筆で想いを綴り、一晚寝かせて考え、更に投函するまで懷で温めて、散々な迷いを経てから、異空の地へと彷徨わせるべく送り出したのである。

いとも簡単にポチッと電子化されて届いてしまうものとはその重みが随分と違っていた。

そんな重みを届けることが下手くそになってしまった現代人は、人の心を動かす重さのエネルギーを利用できなくなったために、詰まらない(こともある)「婚活」に走ってしまうのかもしれない。

+

「ぎゅっと」抱きしめる無言を、その静けさを、その人は感じることはできたのだろうか。

---

ぼんやりと日のある朝の蝸牛 星野早苗

(稔典さんが26日の今日の一句で)

このところ、まさにこの句のような「ぼんやりと日のある」日が続いている。ただし、蝸牛をあまり見かけない。どこへ消えたのだろう。

と書き出しておられるのを、わたしも「ぼんやりと」読んでいる。

きょうのわたくしの部屋の窓からは横なぐりに雨が降り続き庭の片隅であじさいが嬉しそうに揺れているのが見えている。

◎ 雨降りを鉛筆画にすれば線ばかり

## 逃げる

---

「[逃](#)」がテーマだったそうです。でも、私には洒落たことなど思い浮かばないけど、テーマだけ頂戴します。



人生の節目を少しずつ失いつつある年齢になると、ときどきこのような槍を投げつけられた鋭さのテーマが刺激になってよしい。槍をかわしながら、自分の足跡と行く手とを考える時間を持つことで、戦の力が衰えるのを防げる。

追いかけて死にもの狂いで逃げているわたしが夢に出てきた。夢を見ながらああいつもの夢だと冷静に思考し、逃げ道を瞬時に左右から選択し、魔法のように跳躍する力を得て広い川や高い木を飛び越えてゆく。不思議なことに鈍足であるはずのわたしは駆けるのも速くなっている。

逃げる夢とセットでたびたび見る夢は、迷子になる夢である。卒業のかかっている試験に臨むために久々に登校するのだが、そこには試験場は用意されていないし、連絡掲示板もなくなっている。必死で探しまわるうちに大学の中で迷子になってしまい、泣いているのだ。焦りと大失敗の夢だ。

泣いたり罵されている私をツマは何度も見ている。

どんな苦難に遭おうともヘコタレずに、しかし無理して乗り越えることもせず、恐怖に追われたら逃げ、ときには迷いながら、水に溺れることもなく火に焼かれることもなく、私は生きてきた。

職をなくしても生きてきたから、これからも生きていけるような気がする。

生きていけなくなったらどうするかなどとは考えたことがないのだが、何処かへ冒険に出てゆき、蛇とかトカゲとかに追いかけて回されて逃げ惑いながらも生き延びるのではないか。無限の跳躍力があつたはずなのだが、それが衰えて広い川を飛び越えられなくなったときが夢の終わりだと思っている。

ぱっと、向こうの見えない淵からジャンプしたことがあつた。そこは高い崖だったかもしれない。急降下をするのだが、私には羽根があつて自由に旋回をしたという夢も見つたことがある。今度跳んだときはきっと羽根はないだろうと思う。

そうだ、近々、時間の都合つけてシルバー人材センターに登録しに行こう。

---

2013年6月29日（土曜日）【[随想帖 I](#)】

---

## 温度差のことを考え続けている

---

温度差のことを考え続けている。

昔からの友人がいる。

遠く離れていたときは手紙を書いた。そのうちPCメールになって、近ごろは携帯メールになっている。返事は殆ど来たことがない。

どんどんとボクと彼の距離が遠ざかっているような気がする、10歳あまりからの友だちだからというか、あの頃の損得を超えた人間味のわかる友だちだからこそ、返事が来なくてもオシマイにはならない。

二十歳の頃の友だちがいる。同じようにPCのメールからケータイのメールへと変化している。社会人になる前の青春時代を共に送った友だちだ。

こいつ達とも遠ざかってゆく。

遠ざかってしまっているのかもしれない。彼らには家庭があり身近な社会がある。子育てにも忙しかろう。孫に夢中の人もいる。昔ながらのスタイルを今さら共有することは出来ないし、イデオロギーも変化しているだろう。

これまで誰とも、幸せ感というものについて、さほど語ったことがなかった。それは、夫婦だって同じ事なのだけど、私たち夫婦は98%の不一致の上で2%の接点でこうして毎日を暮らしている。

「豊かさや満足度」のことについてこれまでもここで何度か書いてきたが、そのことにおいて、二人で意見を交わしたり衝突させたことはない。衝突してたがえる事になったとしても喧嘩にはならない。まして、別居にもならなければ離婚にもならない。

様々なものをデジタル的に捉えてフィルタリングして、スレッショールドを決めて分類していったとしても、そのお互いの中に存在する「温度差」が大きなデジジョンとなることがある。

最後はひとりで死ぬ。

その1歩手前は、家族という。

さらにその一歩手前は、日常の傍にいる人という。

心が通じ合えるとか信じられるとか何かを共有できるというような幸せ感をひとまず脇に置いておき、温度差を肌で感じ取ってみる。

あらゆるものが進化する世紀で生きている。

温度差を吸収することの出来ない機構が当たり前になりつつあるから、社会がバランスを失ってゆく。

デジタル化された無数のパラメータの向こうに見えるデジタルフィルタのゴミのようなもの。温度差も高速フーリエ変換する概念、が必要になってくる。

## 稲の花咲いてお父うと睦をゆく

---

7月30日（火）

お米をもらいに家に行ったら、冷蔵庫にスイカがあったので半分に切ってお匙ですくって丸ごといただいた。  
今年、初スイカだった。

子どものころは、一個丸ごと食べたものだが、このごろはそんなこともしなくなった。

畑で収穫するから、お店に並んでいてもどうしても買う気になれない、というのは仕方ないことかな。

母に

「なんばは？」

と聞いたら、

「二三日前に全部食べた」

と言われた。

「今度来るときは、新米やで」

とも言われた。

もっと頻繁に家に顔を出しなさい、

というお叱りのようであった。

」」

」」



」」

」」

稲の花が咲くころに水田では農薬の散布をする。

そんな当たり前のことを、先日近所の田んぼのなかをウォーキングしていて思い出した。

田んぼの匂い。

稲の花の匂い。

農薬の匂い。

日暮れの水田一体には農薬の匂いが立ち込める。今の時代は事情も変化してそんな光景も見かけないし、そんな農薬も使用しなくても済んでいるのかもしれない。

農家の人々がカンカン照りの暑い日に田んぼに出ているのを見ると、働き者だったお父うのことを思い出す。

日が暮れて小屋に帰ってきてからも、器具の手入れや片付けで忙しくしていた。

」」

」」

歩きながら考えた。

ぼんやりと雲など眺めながら歩いていることなど、あの人には想像も出来なかったことだろう。

あの人が苦心して作り上げた田んぼの稲の花が咲いている。あと1ヶ月で収穫だ。食えば他所のコメとは格別に味が違って旨いと誰もが言う。(ビールの銘柄判別よりも簡単にわかるほど)旨いらしい。

農業をしたいと思ったときは手遅れだった。人生で後悔をすることの中ではそれが一番かも知れない。

---

2013年7月30日（火曜日）【[随想帖 1](#)】

---